

拓殖大学大学院 言語教育研究科

言語教育学専攻 博士論文

**認知言語学的アプローチによる接続形式テの中核的意味**

2019年

指導教授：遠藤裕子 教授

鈴木今日子

# 目 次

## 第 1 章 序 論

1.1	研究の動機	1
1.2	研究の目的と意義	1
1.3	研究方法	2
1.4	本論の構成	3

## 第 2 章 統語論からみた接続形式テ

2.1	「テ」の文法的位置づけ	5
2.1.1	接続助詞「テ」	5
2.1.1.1	接続助詞「テ」の定義	5
2.1.1.2	接続助詞「テ」への批判	8
2.1.1.3	接続助詞「テ」が表す意味関係	9
2.1.2	活用形の一部の「テ」	10
2.1.3	「連用形+テ」	14
2.1.4	「テ」の文法位置づけ まとめ	16
2.2	接続形式テの機能	17
2.2.1	従属節形成機能	17
2.2.2	接続機能	18
2.2.3	連用修飾機能	18
2.2.4	構造的並列機能	19
2.2.5	意味的背景形成機能	20
2.2.6	接続形式テの機能 まとめ	24
2.3	テ接続の意味用法	25
2.3.1	修飾関係による意味用法の分類	26
2.3.2	時間関係による意味用法の分類	28
2.3.3	意味関係による意味用法の分類	33
2.3.4	時間関係と意味関係による意味用法の分類	37
2.3.5	修飾関係、時間関係、意味関係による意味用法の分類	39

2.3.6	テ接続の意味用法 まとめ	43
2.4	統語論からみた接続形式テのまとめ	44
第3章 認知言語学的アプローチによるテ接続文の中核的な意味の捉え方		
3.1	接続形式テの文構造における役割	46
3.2	談話としてのテ接続文の整合性	47
3.2.1	「付帯(様態)」関係を表わすテ接続文の整合性	48
3.2.2	「継起」関係を表わすテ接続文の整合性	49
3.2.3	「因果」関係を表わすテ接続文の整合性	49
3.2.4	「並列」関係を表わすテ接続文の整合性	51
3.2.5	談話としてのテ接続文の整合性 まとめ	53
3.3	テ接続文における事象関係の捉え方	54
3.3.1	認知言語学の考え方	54
3.3.2	図と地からみたテ接続文の事象関係の捉え方	55
3.3.2.1	「継起」関係を表すテ接続文の図と地の区分	57
3.3.2.2	「因果」関係を表すテ接続文の図と地の区分	60
3.3.2.3	「付帯(様態)」関係を表すテ接続文の図と地の区分	62
3.3.2.4	「並列」関係を表すテ接続文の図と地の区分	65
3.3.3	テ接続文における事象関係の捉え方 まとめ	69
3.4	認知言語学的アプローチによるテ接続文の中核的な意味の構築	70
3.4.1	テ接続文の事象間の時間関係の捉え方	70
3.4.1.1	認知文法におけるテンスとモダリティ	70
3.4.1.2	認知文法におけるアスペクトの把握	71
3.4.2	認知文法からみたテ接続文の重層的意味構築	75
3.4.2.1	「付帯(様態)」関係の意味構築	75
3.4.2.2	「並列」関係の意味構築	76
3.4.2.3	「継起」関係の意味構築	77
3.4.2.4	「因果」関係の意味構築	78
3.4.2.5	認知文法からみたテ接続文の重層的意味構築 まとめ	79

3.4.3	接続形式テの事象認識の歴史的変化	80
3.4.3.1	古典文法「テ」の時間認識	81
3.4.3.2	古典文法の「テ」接続の意味用法	83
3.4.3.3	接続形式テの事象認識の歴史的変化  まとめ	90
3.5	テ接続文の中核的な意味の捉え方	91

## 第4章 小説におけるテ接続文の表現効果

4.1	テ接続文の表現効果 調査の目的	94
4.1.1	テ接続文の表現効果 先行研究	94
4.1.2	小説におけるテ接続文表現効果 調査概要	95
4.2	小説世界のイメージ形成	96
4.2.1	場面・人物の背景イメージ像形成	96
4.2.2	登場人物の心と体の動きのイメージ像形成	100
4.3	登場人物の認識のプロセス	102
4.3.1	知覚	102
4.3.2	視線の移動	104
4.4	テ接続文のレトリックとしての表現効果	105
4.4.1	台詞部分との併用	106
4.4.2	テ節複数回使用	108
4.4.3	連用中止形との併用	109
4.4.4	テ節言いさし文	114
4.4.5	テ接続文への句挿入	117
4.5	小説におけるテ接続文の表現効果まとめ	117

## 第5章 中国語母語話者のテ接続文の意味内容の推測

5.1	語用論的推論	119
5.1.1	会話の協調原理	120
5.1.2	関連性理論	121
5.1.3	認知語用論	122
5.1.4	テ接続文の意味内容の推測	123

5.2.	テ接続文と中国語の文の並列の意味用法の相違	124
5.2.1	中国語の文の並列	125
5.2.2	テ接続文と中国語の文の並列の意味用法の相違	129
5.3	中国語母語話者のテ接続文の意味内容の推測	130
5.3.1	調査概要	130
5.3.2	調査結果	131
5.3.3	分析・考察	132
5.3.3.1	文の並列表現による包括的意味推測	132
5.3.3.2	意味関係の明示化による積極的意味推測	136
5.3.3.3	文と意味の再構築による積極的意味推測	143
5.4	中国語母語話者のテ接続文の意味内容の推測 まとめ	147

## 第6章 中国語母語話者のテ接続文の使用と認識

6.1	日本語学習者のテ接続文の誤用に関する先行研究	149
6.1.1	テ接続文の構造から見た誤用分析	149
6.1.2	日本語学習者の母語との比較から見たテ接続文の誤用分析	150
6.1.3	日本語学習者のテ接続文の誤用に関する先行研究 まとめ	152
6.2	中国語母語話者のテ接続文の使用と認識	152
6.2.1	文接続の符号として使用されるテ	153
6.2.2	テ節の複数回使用	156
6.2.3	テ接続によって表される意味関係	159
6.2.4	テ節による行為の前掲	166
6.3	中国語母語話者のテ接続文の使用と認識	168

## 第7章 テ接続文の中核的意味を取り入れた指導の提案

7.1	日本語学習におけるテ接続文の難しさと従来 of 指導法	170
7.1.1	日本語学習におけるテ接続文の難しさ	170
7.1.2	テ接続文の従来 of 指導法	173
7.1.3	テ接続文の従来 of 指導法の問題点	177
7.1.3.1	テ接続文の学習の難しさに対する従来 of 指導法の問題点	177

7.1.3.2 テ接続文の従来 of 指導法に共通する問題点	180
7.1.4 日本語学習におけるテ接続文の難しさと従来 of 指導法 まとめ	182
7.2 テ接続文の中核的意味を取り入れたテ接続文の指導の提案	182
7.3 今後の課題	184
<b>第8章 結 語</b>	
8.1 本論で明らかにしたかったこと	186
8.2 本論で明らかになったこと	186
8.2.1 統語論からみたテ接続文の捉え方	186
8.2.2 認知言語学的アプローチによる接続形式テの中核的意味	187
8.2.3 テ接続文の表現効果	188
8.2.4 中国語母語話者のテ接続文の意味内容の推測	189
8.2.5 中国語母語話者のテ接続文の使用と認識	189
8.2.6 認知言語学的視点を取り入れたテ接続文の指導の提案	190
8.2.7 まとめ	190
8.3 今後の課題と展望	191
謝辞	193
参考文献	194
出典・資料	198

# 第1章 序 論

## 1.1 研究の動機

本論は、接続助詞「テ」で接続された「テ接続文」の意味の推測がどのようにされるのか、また「テ」の中核的意味を明らかにすることが目的である。

一般に「食べて」の「テ」は、文の成分としては、接続助詞とされている。しかし、「テ」は、ほかの接続助詞「カラ」、「バ」のように、接続の意味関係を表さない。「テ」は文の接続の機能しか持たず、「テ」による接続の意味関係は、受信者の推測にゆだねられている。つまり、非常にあいまいな接続表現である。それにもかかわらず、このテ接続文は、日常的に使用され、使用頻度も大変高い表現である。私たちは、このあいまい表現のテ接続文の意味をどのように受け取っているのだろうか。また、逆に私たちがなぜそのような意味のあいまいな表現を使ってコミュニケーションするのだろうか。

本論では、接続の意味関係を表さないテ接続文が聞き手や読み手にどのように伝わり、どのように意味内容が推測しているのかを明らかにしたい。そして、テ接続文を介したコミュニケーションは、非日本語母語話者や、文化背景などの異なる相手でも、成立しているのかについても検証したい。

## 1.2 研究の目的と意義

本研究の目的は、テ接続文の意味内容の推測がどのようにされるのか、また「テ」の中核的意味を明らかにすることが目的である。

テ接続文の意味用法については、数多くの研究がされてきた。テ接続文の意味用法とは、つまり、受信者が推測可能な意味関係である。従来、接続の意味関係を表さないテ接続文から、受信者が推測できる意味関係は、様々に分析され、テ接続の意味用法として分類されて来た。その意味用法の分類は、意味関係の捉え方により、大きい分類から細かい分類まで、多岐にわたる。

しかし、これまでの研究はテ接続が表す接続の意味関係の分析が中心である。「テ」は接続の意味関係を表さないため、テ接続文の意味内容の推測は、受信者にゆだねられている。受信者が推測した結果が、そのテ推測文を発信者の意図と合致しているかどうかという検証はされてない。いわば、テ接続文の発信者不在の研究である。

また、テ接続が表す接続の意味関係がそれほど多岐にわたるのに、なぜ私たちはコミュ

ニケーションを破たんさせることなく、テ接続文のやりとりが日常的に行えるのだろうか。テ接続文は、やり取りする発信者と受信者双方のコミュニケーションとして捉えることも重要であると考ええる。

一方で、テ接続の意味関係の分析だけでなく、それら複数の意味関係の根底にある接続形式テの中核的な意味も解明されるべきであると考ええる。接続の意味関係の推測の可能性が複数ありながらも、お互いにコミュニケーションが成立するのは、やはり「テ」には何か中核的なものが存在していると考えられる。

本論では、従来のテ接続文の統語論的な研究に加え、テ接続文の受信者と発信者の存在を意識し、テ接続文を介してどのようなコミュニケーションがなされるのかという視点からテ接続文を捉えることで、テ接続文を複合的に捉えることができると考える。

また、日本語教育の立場から、テ接続文の表現効果や、コミュニケーション効果を明らかにすることで、学習者がテ接続文を効果的に発信するとともに、より円滑なコミュニケーションもできるようになることを目指したい。

### 1.3 研究方法

本論では、従来の統語論からの捉え方に加え、語用論、認知言語学（認知語用論）の3つの考え方から、テ接続文を複合的に捉える。

まず、統語論の捉え方から、文法構造や接続の意味関係の分析を行う。従来、統語論の立場からの研究は多くなされているので、本論では、これまでの研究で明らかになったことを概観し、再整理する。

次に、語用論の捉え方から、テ接続文を1つの談話とみなし、発信者と受信者の間でどのようにテ接続文の意味内容が推測され、意味が構築されるか、受信者と発信者のコミュニケーションとしてテ接続文を考察する。

また、認知言語学の「図と地」の捉え方から、接続形式「テ」の中核的な意味を抽出する。

さらに、接続形式テの中核的な意味や、テ接続文の意味内容の捉え方が、テ接続文の表現効果にどのように反映されているか、小説中のテ接続文を例に分析、考察する。

そして、非日本語母語話者がテ接続文の意味内容をどのように推測し、どのように発信しているか、中国母語話者のテ接続文の翻訳文や作文かを分析し、検証する。

最後に、本論で得られた結果を踏まえ、日本語教育におけるテ接続文の具体的な指導方

法を提案する。

## 1.4 本論の構成

テ接続文について、統語論、語用論、認知言語学の考え方から、複合的に捉える。そして、その複合的な捉え方を実際の使用例等で検証し、最後に日本語教育にどのように応用させるか提案する。

本論の各章の構成は以下の通りである。

### 第1章 序論

本研究の動機、目的、意義、方法を明らかにする。

### 第2章 統語論からみた接続形式テ

これまで統語論の立場からの研究で明らかになったことを概観し、接続形式テの文法的な位置づけ、機能、意味用法を整理する。

### 第3章 認知言語学的アプローチによるテ接続文の中核的な意味の捉え方

認知言語学的「図と地」の考え方を踏まえ、認知言語学的アプローチから、テ接続文の意味内容の捉え方、接続形式テの中核的な意味を抽出する。

### 第4章 小説におけるテ接続文の表現効果

テ接続文にはどのような表現効果があるか、小説というテキストの中のテ接続文の使用例から、その表現効果を分析、考察する。

### 第5章 中国語母語話者のテ接続文の意味内容の推測

日本語非母語話者がテ接続文の意味内容をどのように推測しているか、語用論や認知語用論の考え方を参照して考察する。中国語母語話者の学習者のテ接続文の中国語翻訳を分析、考察し、中国語母語話者のテ接続文の受信者としての課題も探る。

### 第6章 中国語母語話者のテ接続文の使用と認識

中国語母語話者のテ接続文の発信者としての課題を、学習者のテ接続文の作文から考察する。中国語の類似表現と比較し、受信者が意味内容を推測しにくい、またはできない場合の原因を明らかにする。

### 第7章 テ接続文の中核的意味を取り入れた指導の提案

本論で明らかになったことを日本語教育に応用し、テ接続文の具体的な指導方法を提案する。

## 第8章 結語

本論で明らかになったことをまとめ、今後の課題と展望を述べる。

## 第2章 統語論からみた接続形式テ

本論の目的は、「朝ごはんを食べて、学校へ行く。」の「食べて」の「テ」の中核的意味を認知言語学的アプローチから明らかにすることである。本章では、まず、「テ」の文法的位置付けを確認したうえで、これまで統語論の立場から捉えられた「テ」の機能、意味用法を確認、整理する。

### 2.1 「テ」の文法的位置づけ

「朝ごはんを食べて、学校へ行く。」の「食べて」の「テ」は、品詞の分類としては一般的に「接続助詞」として扱われている。「テ」の由来は助動詞「ツ」の連用形であるとされ、古くは『万葉集』の時代から、「テ」は元の助動詞や、接続する用言から切り離されて扱われ、明治期に至るまで長く「て・に・を・は」として認識されてきた。明治以降、品詞分類が整理され、現在はいわゆる学校文法においては、「テ」は助詞として扱われ、文法書や辞書などでは一般に「接続助詞」として位置づけされている。

しかしながら、ほかの接続助詞の「から」、「のに」、「ば」などと異なり、「テ」は接続はするものの接続の意味関係は表さないことから、「テ」を接続助詞として認めないという考え方もある。

また、「用言+テ」を一括りにし、文中のテ節の機能から「中止法」や「なかどめ」と呼ぶ場合もある。さらに近年、日本語教育の文法用語として、「テ形」という動詞の活用の一環として広く認知されるようになってきている。

「テ」は、「接続助詞」と扱うべきか、「中止法」か、それとも「テ形」か。「テ」をどのように扱うかによって、呼び方も変わる。本節では、まず、この「テ」の捉え方を概観し、そのうえで、本論では「テ」をどのように文法的に位置づけするか、立場を明らかにしたい。

#### 2.1.1 接続助詞「テ」

##### 2.1.1.1 接続助詞「テ」の定義

いわゆる学校文法など、一般的な日本語文法では「テ」は接続助詞とされている。なぜ「テ」は助詞とみなされるのか。ここで改めて整理しておく。一般的な日本語文法では、品詞を分類する際、まず、自立語か付属語に大別する。その単語自身で意味を表し、単独

で文節を構成できれば、自立語であり、単独では文節を構成できず、自立語に付いて文節を構成すれば、付属語である。そして、付属語は、さらに、助動詞と助詞に大別される。活用があれば助動詞、活用がなければ助詞である。この品詞分類に従えば、「食べて」の「テ」は、付属語で活用がないため、助詞ということになる。

それでは、「接続助詞」の定義とは何か。現在の学校文法の基とされる『中等文法口語』（1947 文部省:70）には、「助詞は、語に附いてその語と他の語との関係を示し、あるいはこれに一定の意味を添える。」とあり、助詞を格助詞、接続助詞、副助詞、終助詞の4種に分類する。このうち接続助詞は「用言や助動詞に附いて、上の語の意味を、接続詞のように、下の用言、または用言に準ずるものに続けるものである。」（同:77-78）とし、例として、「ば、と、ても（でも）、けれど（けれども）、が、のに、ので、から、し、て（で）、ながら、たり（だり）」を挙げている。

なお、この学校文法はいわゆる橋本文法を基にしているとされる。『國語法研究』（橋本1948）<sup>1</sup>では、助詞とは単独で文節を構成できない付属語で、活用がないものを指す。その助詞を①断続の意味のないもの、②続くもの、③切れるものの3種に大別し、さらに①副助詞・準体助詞、②接続助詞・並列助詞・準副体助詞・格助詞・係助詞、③終助詞・間投助詞の9種に細分化している。接続助詞は、用言に接続するものとし、例として、「ば、と、ても、けれども、のに、が、から、ので、し、て」等を挙げている。図（1）に橋本（1948）の助詞の分類と例を挙げる。

橋本の『國語法研究』でも、『中等文法口語』でも、「テ」は接続助詞に分類されているが、助詞の説明はやや異なっている。学校文法の基と言われる『中等文法口語』では、助詞は他の語との関係を示し、接続助詞は「用言や助動詞に附いて、上の語の意味を、接続詞のように、下の用言、または用言に準ずるものに続けるものである。」としている。一方、その学校文法の基とされる橋本文法では、『國語法研究』において、助詞は付属語で活用の無いものとし、接続助詞は「その意味を下に来る用言又は用言に準ずべきものに續けるのであつて、「さうして」「さうだけれども」「それでも」「さすれせば」等の如き接續詞と同様の接續關係を表はす」（p. 63）と説明している。助詞の定義については、『國語法研究』は、文法上の形態に言及しているだけであるのに対し、『中等文法口語』では、文法上の形態的な定義に加え、語と語の関係を示すものであるという助詞の機能についても言及して

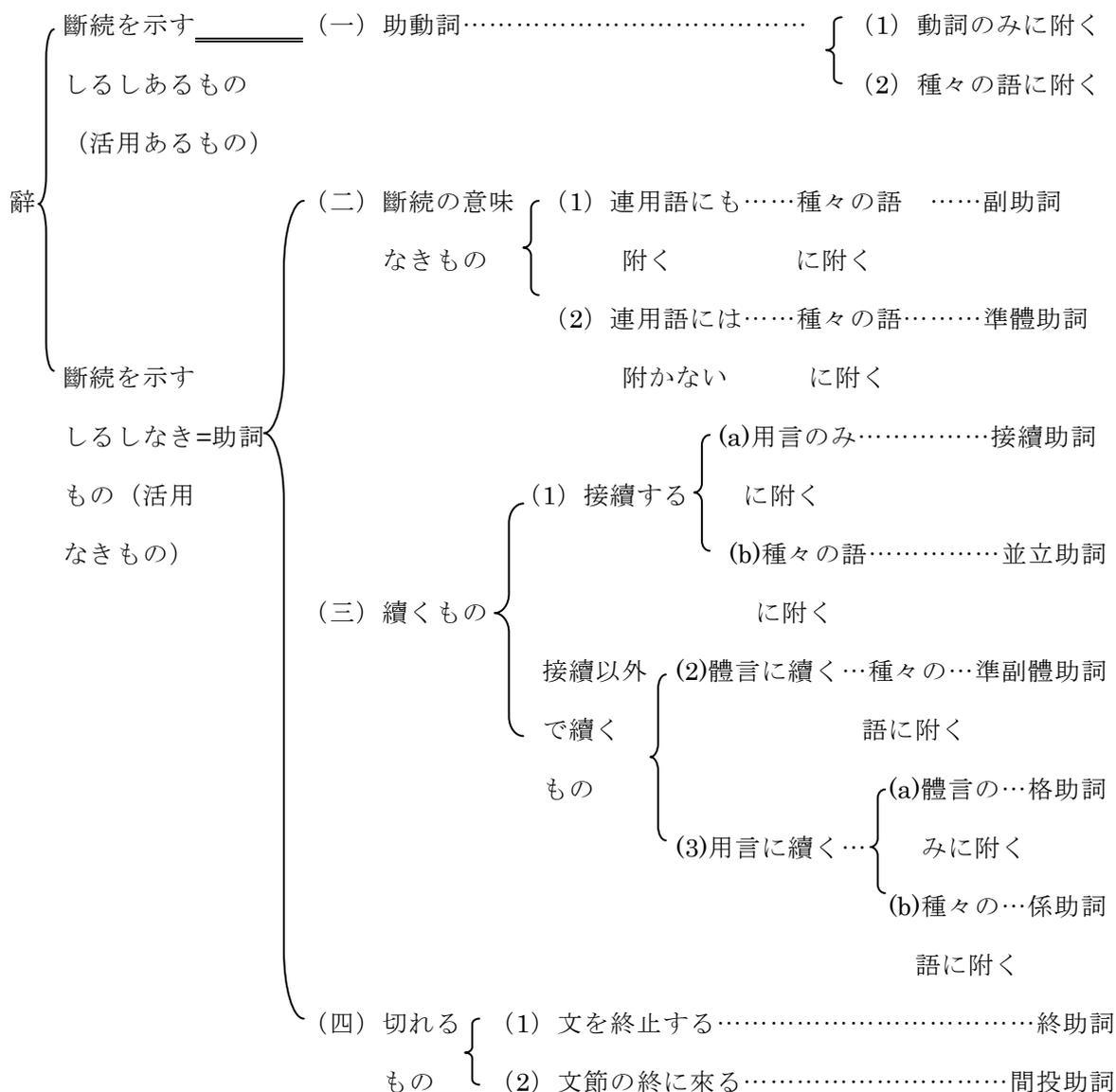
---

<sup>1</sup> 『國語法研究』（1948）は『國語法要説』（1934）の校訂本が底本となっている。

いる。このように助詞の定義にはやや違いが見られるが、接続助詞の説明は両者はほぼ同じである。

(図 1) 助動詞・助詞の分類

(橋本 1948:66-67)



副助詞 : だけ、まで、ばかり、など、ぐらゐ…

準體助詞 : の (私のが、行くのを)、ぞ (誰ぞ、何ぞ)、から (三百斤からの重さ、さうなつたからは、向ふへ着いてからが心配だ)、ほど (三つほどが丁度好い、買つておくほどでもない、心配したほどの事もない、今までほど勉強しない) …

繋ぐ助詞 : ば、と、ても、けれども、のに、が、から、ので、し、て…

並立助詞 : と、や、やら、に、か、なり、だの…

準副體助詞 : の (一寸の間、かねての約束、學校からの歸り道、見ての上、行けとの命令、書くだけの手數)

格助詞 : が、を、へ、と、から、より、で…

係助詞 : は、も、こそ、さへ、でも、なりと、しか、ほか

終助詞 : ぜ、ぞ、とも、て (以上何れも確かめる意味)、な (禁止)、な (「なさい」の義)、わ (さうですわ)、「か」(問ひ)、「や」(「かうや)、よ、い (さうだい、さうかい ) …

間投助詞 : ね、な、さ…

### 2.1.1.2 接続助詞「テ」への批判

付属語で活用のないものを「助詞」と定義するならば、確かに「テ」は単独では文節にはなり得ず、また、活用もしない。したがって、「テ」は助詞と捉えることができる。そして、テは後続の語句に続き、前後の句を接続することから、「接続助詞」という文法的位置づけは妥当であると言える。しかしながら、「テ」を助詞とする考え方には、批判もある。問題となるのは、「テ」は接続の意味関係を明示的に表すかどうかという点である。

時枝 (1950) は「テ」を接続助詞としながらも、「テ」が接続を表しているわけではなく、用言の連用形が接続を表しているのであり、「テ」は接続の意味を明瞭にするために添えられているにすぎないと述べている。

池尾 (1964) は、「用言の活用形 (連用形) + テ」の「テ」は、ある状態・動作・作用を客観的に叙述している未完結の形式であるにすぎないとし、文中における他の語句との関係にみられる接続機能としては、ほかのいわゆる接続助詞のような明確な特色をもっていないと述べる。

益岡 (2013) は、古代語であれば「テ」を独立の語とみることは1つの選択肢になり得るが、音韻変化を経た現代語の場合は、「テ」を動詞の部分から切り離して独立の語と見るのは適切でないと述べている。

上記のような「テ」を接続助詞として扱うことへの批判は、文の成分としての機能と意味が一致しないことが問題となる。つまり、「テ」は、前後の句を接続する機能は持つが、ほかの接続助詞のように接続された前後句の意味関係を明示的に表さないために、「接続助詞」という位置づけは適当ではないということである。

### 2.1.1.3 接続助詞「テ」が表す意味関係

「テ」を接続助詞と扱うことへの批判は、「テ」がほかの接続助詞と異なり、接続の意味関係を表さないために、「接続助詞」とはみなせないことが主な理由である。「テ」はほかの接続助詞とどのように違うのだろうか。ここで、ほかの接続助詞と「テ」を比較してみる。

『日本語文法辞典』（秋本 2001）では、接続助詞の定義と各接続助詞の意味を図にまとめて掲載している。『日本語文法辞典』では、接続助詞を次のように定義している。「活用語の基本形・過去形（ナ形容詞およびダの場合は連体形）に後接して連用的な従属節を形成する助詞。当該の節で表された内容をほかの節の内容と関係づける働きをする。」

『日本語文法辞典』の接続助詞の分類と例の表を下に引用する（図 2）。

（図 2）接続助詞の分類

『日本語文法辞典』（秋本 2001:388）

[A] 条件接続	(1) 順態接続（順接）	確定条件	から・ので
	(2) 逆態接続（逆接）	確定条件	けれど・けれども
		仮定条件	ても・でも
	(3) 前提条件	確定条件	と
[B] 列叙接続	逆態接続（逆接）		が・のに・ものの・ながら
	前提接続		が・と・ところが
	並列接続		て・つつ・たり・ながら・なり
	累加		て

この接続助詞の例を見ると、「カラ」、「ケレドモ」等は、その語自身が、接続の意味関係を明確に表しているが、「テ」は並列も累加も、複数の接続の意味関係を表し得ることがわかる。また、「テ」は「暑くて寝られない」、「知っていて言わない」等、上記の例以外に

も、順接、逆接の意味関係を表すこともある。つまり、「テ」自身は接続の意味関係を明示してはいないということである。

「テ」によって接続された文は、「テ」の前後句の意味内容から、「テ」の表す接続の意味関係が決まる。「朝ごはんを食べて、学校へ行く。」の「テ」の前後句の意味関係は継起で、「風邪をひいて、休んだ。」の「テ」の前後句の意味関係は原因・理由になるが、「テ」そのものが前後句の意味関係を表しているのではない。「テ」は単に接続を表しているだけであり、「テ」の前後句の意味関係は文脈によって決まる。「テ」によって接続された文において「テ」が表すとされる意味関係には、一般に次のようなものが挙げられる。なお、「テ」の表す意味関係の分類については、2.3で詳しく述べる。

- (1) 朝ごはんを食べて、学校へ行く。(継起)
- (2) 風邪をひいて、学校を休んだ。(原因・理由)
- (3) 菓を飲んで、病気が悪化した。(逆接)
- (4) ピアノを弾いて、歌った。(様態)
- (5) 兄は子どもが2人いて、大阪に住んでいる。(並列)

(筆者作例)

「テ」は接続を表すが、「テ」の前後句間の接続の意味関係は明示的に表してはいない。この「テ」自身は接続の意味関係を表さないという点は、ほかの接続助詞とは大きく異なる。よって、「テ」は、付属語で、活用を持たないという点と、接続を表すという点においては、接続助詞としての条件を満たしているが、接続された前後句間の意味関係を表す点では、接続助詞の働きを有しているとは言えない。つまり、「テ」は、活用のない付属語としては、助詞に分類できるが、「テ」の前後句間の意味関係を決定づける働きかけは何もしない。単に接続を表す標識でしかないのである。

### 2.1.2 活用形の一部の「テ」

「テ」を用言と切り離して助詞とせず、用言の活用形の一部であるとする考え方もある。主なものとして、山田(1908)、三尾(1942)、三上(1963)、鈴木(1972)、渡辺(1971)、仁田(2014)を以下に挙げる。

### ①複語尾「ツ」の連用形

山田（1908）は、単語を独立観念を表す観念語（副詞、体言、用言）と、表せない関係語（助詞）に分け、関係語、即ち助詞は、観念語に付いて、それらの間の関係を示すものとした。さらに助詞を、格助詞、副助詞、接続助詞、係助詞、終助詞、接続助詞の6つに分類した。接続助詞は、句<sup>2</sup>と句を結び合するものとし、口語の例として「ば、ど、ども、ところが、のに、ものを、も、し、と、から、けれど、けれども」等を挙げた。しかし、「テ」は接続助詞ではなく、いわゆる助動詞を指す複語尾<sup>3</sup>「ツ」の連用形としている。山田（1908）は、いわゆる「てにをは」のうち、「に、を、は」は助詞であるが、活用を有する「テ」は助詞ではなく、複語尾（助動詞を指す）であるとした。

（表1）複語尾「つ」活用

（山田 1908:391）

原 型	未然形	連用形	連體形	已然形	命令形
(行き)つ	て	て	つる	つれ	て(よ)

### ②用言の中止形の語尾

三尾（1942）は、「テ」を接続助詞とはみなさず、用言の中止形の語尾であるとした。三尾は「読み」のようないわゆる連用形を「造語形」と呼び、この「造語形」に「テ」が付いたもの（「読んで」等）を動詞の中止形（第二造語形）とした。

造語形とはいわゆる連用形を指すが、この形で名詞になるほか、複合語や複合動詞などを作ることから、造語形と呼んでいる。また、この造語形の形は、「書言葉」では文を言い切らないで中止する時にも用いることもあるが、「話言葉」ではほとんどないとして、造語形に「テ」がついたものを中止形としている。

（表2）動 詞 活 用

（三尾 1942:54 より一部改）

打消形	造語形	基本形	假定形	命令形	推量形	中止形	過去形
行か＝	行き＝	行く	行けば	行け	行かう	行つて	行つた

<sup>2</sup> 山田（1908）は句とは「意義の終結せる一完體」であり、付属性の句を意味する英語の **clause** とは区別し、句とは文の構成素であり、全ての文は句を以て成るとする。いわゆる単文とは単句文を指し、複文は句の複雑な結合によって成る文を指すと述べる。

<sup>3</sup> 山田（1908）は単語を関係語（てにをはの類）観念語（副詞、体言、用言の類）に大別し、動詞について運用を助けるものを「複語尾」とした。

③中立形（語幹+te）

三上（1963）は、動詞の語幹に「te」がついたものを中立形と呼んだ。中立形は、テンスもムードも示さないとする。

（表 3）活用表

（三上 1963:8）

語 幹	中立形	自立形	条件形	概言形	命令形
Ik	Iki	行ク	行ケバ	行コウ	行ケ
It	Itte ittari	行ッタ	行ッタラ	行ッタロウ	

④なかどめの形（中止形）の語尾

鈴木（1972）は、「テ」は接続助詞ではないとし、「なかどめの形（中止形）」の語尾であるとした。

（表 4）語形変化・活用

（鈴木 1972:508 より一部改）

きもち		と き	(みとめ)	(うちけし)
つたえるきもち	いいきり	すぎさらず	よむ	よまない
		すぎさり	よんだ	よまなかった
	おしはかり	すぎさらず	よんだろう	よまないだろう
		すぎさり	よんだだろう (よんだろう)	よまなかっただろう (よまなかったろう)
さそいかけるきもち			よもう	(よむまい)
命令するきもち			よめ	よむな
なかどめ		第一なかどめ	よみ	よまず (に)
		第二なかどめ	よんで	よまないで
ならべたて			よんだり	よまなかったり
条 件		a.	よむなら	よまないなら
		b.	よんだなら	よまなかったなら
		c.	よんだら	よまなかったら
		d.	よむと	よまないと
		e.	よめば	よまなければ
逆条件		a.	よんでも	よまなくても
		b.	よんだって	よまなかったって

⑤並列形

渡辺（1971）は、言語の内面的意義に託される、文の有機的統一性を形成するための役

割を構文的職能と呼び、構文的職能は、素材展示の職能と文の成分、すなわち、関係構成の職能から成るとした。渡辺は関係構成の職能を、陳述、連用、連体、並列、接続、誘導の6つの職能に分類した。例えば、「読み」、「高く」などは、従来、連用形と呼ばれてきたが、形態ではなく、関係構成によって分類される。

物価は <u>高く</u> はね上がった。	連用の展叙 <sup>4</sup> を託された形態…連用形
物価は <u>高く</u> 、給与は安い現状	並列の展叙を託された形態…並列形
物価は <u>高く</u> て、給与は安い現状	並列の展叙を託された形態…並列形
新聞を <u>読み</u> 、ラジオを聞く。	並列の展叙を託された形態…並列形
新聞を <u>読んで</u> 、ラジオを聞く。	並列の展叙を託された形態…並列形
<u>明らかに</u> お前の手落ちだ。	誘導の展叙を託された形態…誘導形
<u>決して</u> 嘘はつきません。	誘導の展叙を託された形態…誘導形

(表 5) 動詞の活用

(渡辺 1972:376-378 より一部改)

活用形	連体形	連用形	誘導形	接続形	並列形	独立形	陳述形
動 詞	肖 <sup>に</sup> る	肖	肖て	肖れば	肖 肖て	肖る	肖よ
	読む	読み	×	読めば	読み 読んで	読む	読め
否定用言	読まない	読まなく	×	読まな ければ	読まな くて	読まない	×
確認用言	読んだ	×	×	読んだら	読んだり	読んだ	読んだ

### ⑥テ形

仁田 (2014) は、『日本語文法事典』で、「テ形」を活用形の一種としている<sup>5</sup>。また、「テ」は従来「助詞」とされていたとして、「テ」から「テ形」へと文法の位置づけが変化したことを説明している。

<sup>4</sup>渡辺 (1971) の「展叙」とは、叙述の職能の中で特に叙述を展開するための職能を指している。

<sup>5</sup>仁田 (1995) では「～テ」を接続形式の1つとして捉え、シテ形 (式) による接続をシテ形接続と呼んでいる。

テ形とは――活用形の種類。従来は、連用形に助詞「テ」の加わった形（「食べ+テ」）とされていた。第二なかどめ（中止）形と呼ばれることもある。

『日本語文法事典』（仁田 2014:420-421）

### 2.1.3 「連用形+テ」

「テ」を接続助詞とみなすか、用言の活用の一部とみなすかは、形態論的な問題である。一方で、「連用形+テ」を一括りにし、構文の成分として果たす機能の面から、「連用形+テ」をひとかたまりとして捉える考え方もある。このような捉え方では、いわゆる「連用形」と区別し、「第二中止形」、「第二なかどめ」などと呼ぶ。また、「連用形+テ」を複文の従属節を形成する用法や形式と捉える考え方もある。この考え方では「中止法」、「シテ形（式）」、「～テ型」などと呼んでいる。

以下に、「連用形+テ」の構文的機能から捉えた主なものを挙げる。

#### ①中止法

連用形、または連用形に「テ」がついた文節は、文の区切りを表すが、文としてはまだ終結せず、文の途中であることを表している。この連用形、「連用形+テ」を構文における機能を用法として捉え、「中止法」と呼ぶこともある。

大槻（1897）は、いわゆる連用形で言いさす用法を「中止法」と呼んでいる。

中止法。此の法は、文の中間にて、中止し、即ち、其意を、暫し言止（いひさ）し置きて、末にある他の動詞の法に照応して、其法の意に従ふものなり、第五活用を用ゆる。  
（大槻 1897:90-91）

なお、大槻の第五活用とは、いわゆる連用形を指し、さらにこの第五活用（連用形）は助動詞ツの第五活用（連用形）テに連なるとする。

また、いわゆる学校文法の基と言われる『中等文法口語』（文部省 1947）でも、動詞の連用形の文中の働きとして「中止法」を挙げている。

動詞の連用形は、いったん中止して又続ける場合に用いることがある。このような用い方を中止法という。  
（『中等文法口語』文部省 1947:37）

そのほか、池尾（1964）は、「テ」は文中における他の語句との関係にみられる接続機能としては、いわゆる接続助詞のような明確な特色を持っておらず、ある状態・動作・作用を客観的に叙述している未完結の形式であるにすぎないとし、「用言の連用形+テ」を「中止法としての接続形」としている。

## ②第二中止形

上記の「中止法」という名称は、品詞分類ではなく、連用形による表現の方法の名称である。この文中の中止を表すために用いられる用言の連用形を中止形と呼ぶこともある。

高橋（1983）は、連用形に何もつかない形を第一中止形、連用形にテがついた形を第二中止形と呼んでいる。

## ③第二なかどめ

言語研究会・構文論グループ（1989）は、2.1.2 で述べた鈴木（1972）の考えに従い、連用形を「第一なかどめ」、連用形に接続助詞「テ」のついた形を「第二なかどめ」と呼んだ。ただし、鈴木（1972）は、「テ」を接続助詞とは認めず、「テ」を用言の活用の一部として「第二なかどめ」と呼んでいる。

## ④シテ形（式）

仁田（1995）は、「～テ」を接続形式の1つとして捉え、シテ形（式）による接続を、シテ形接続と呼んだ。「シテ形接続」という名称は、「連用形+テ」という一括りの形が、接続の形式であることを表している。なお、2.1.2 で述べたように仁田（2014）は『日本語文法事典』（日本語文法学会）では、「テ」は活用形の種類であるとしている。

## ⑤～テ型

草薙（1985）は、「～テ」を文法形式として捉え、「～テ型」と呼んだ。「～型」は活用を表す「～形」とは異なり、文の機能を表す「～テ型」は、動詞と動詞、節と節を結びつける純粋な文法的機能しかなく、言語外現象の意味は表さないと述べる。また、動詞の「～テ型」は、動詞の連用形だけでなく「テ」までを含めた「用言の連用形+テ」が連用修飾の型であるとする。

## ⑥テ形

益岡（2013）は、連用形中止の構文の接続に用いられる形式を「中立形」と「テ形」に分類する。「中立形」とは、いわゆる連用形を指す。この「中立形」は、2.1.2 で述べた三上（1963）の用語を採っている。採用の理由を、「読み」や「飲み」のような、動詞のいわゆる「連用形」は準語幹的な性質を持ち、その構文的機能が特定の機能に限定されないためとしている。

一方、「テ形」はこの「中立形」に「テ」が付いた形を指すが、「テ」が付加されたことにより、「中立形」にはなかった連用の機能を持ち、機能指定が接続形式に値すると述べる。

なお、益岡は「テ形」が連用の機能を持つことから、従来の伝統的な「連用形」という名称がふさわしいのは、中立形ではなくてテ形のほうであるとも述べている。

### 2.1.4 「テ」の文法的位置づけ まとめ

以上、「テ」の文法的な位置づけについて、「接続助詞」、「活用の一部」、「連用形+テ」の3つの捉え方を概観した。

一般に、「テ」は用言から切り離されて接続助詞に分類される。しかしながら、「テ」は前後の句を接続はするが、ほかの接続助詞のようにどのような接続関係かを明確に表すことはできないため、「テ」を接続助詞とする考え方への批判もある。

一方、「テ」を用言の活用の一部とみなす考えもある。ただし、活用形の一部とみなすという考え方は、「テ」の問題にとどまらず、日本語の文法全体をどう捉えるかという大きな枠組みとも関わっている。

また、「テ」を助詞と捉えるか、用言の活用の一部と捉えるかという、形態論的な問題とは別に、「連用形+テ」を一括りにし、「連用形+テ」の文中における機能から、複文の従属節を成す方法や形式と捉える考え方もある。

「テ」を「接続助詞」とみなすか、「活用の一部」とみなすか、構文上の用法や形式とみなすかは、それぞれの捉え方による。

本論では、前句と後句が本来接続の意味関係を表さない「テ」によって接続されることにより、文全体としてさまざまな意味内容を持つことに注目し、「テ」は単なる接続の標識ではないという仮説に基づき、「テ」が持つ中核的な意味を明らかにすることを目的としている。したがって、用言の付属語という立場に立つ「助詞」や、活用を表す「テ形」とい

う呼称の使用は本論の主旨には合わないと考える。また、「連用形+テ」を一括りにして文中における構文的機能を捉えた「中止形」や「なかどめ」といった呼称も、文全体が表す意味内容を研究対象にする本論にはそぐわないと考える。そこで、本論では「テ」の接続の機能に焦点を当て、「接続形式テ」という語を用いることにする。

## 2.2. 接続形式テの機能

これまで述べてきたように、接続形式テは前後の句を接続するが、テそのものは接続の意味関係は表さない。それでは、接続形式テの機能は何であろうか。以下に先行研究をまとめ、接続形式テの機能については、数多くの先行研究があるが、ここでは大きく以下の5つの観点に沿って先行研究を整理する。

なお、本論では接続形式テの前後の意味内容の関係から文全体で表される意味内容を考え、文におけるテの中核的な意味の抽出を試みる。本論を進める上で簡便に記述するために、接続形式テのついた単独の文節、連文節とともに「テ節」と呼ぶことにする。また、「テ」の前後の節（文節・連文節）について言及する場合は、「～テ」までを「前句」、テ節以降を「後句」と呼ぶこともある。したがって、本論における「句」と「節」という語は、英文法の「句」(phrase)と「節」(clause)とは異なることを一言申し添えておく。

### 【接続形式テの機能】

- (1) 従属節形成機能
- (2) 接続機能
- (3) 連用修飾機能
- (4) 構造的並列機能
- (5) 意味的背景形成機能

### 2.2.1 従属節形成機能

接続形式テは用言についてテ節を形成し、テ節は複文の従属節を形成する。複文において従属節の役割を果たすということは、テ節だけでは文としては完結しないということである。時枝（1950：175）は、これを「陳述の未完結形式が用言の活用形式を借りて具現したもの」と述べ、文中におけるテ節の未完結性に注目している。同様に、三尾（1942）は「中止形はただ、いひ切らずに次の語句へつゞけるものに過ぎないもの」、池尾（1964）

は「ある状態・動作・作用を客観的に叙述している未完結の形式であるにすぎない」と述べる。

また、「中止法」(大槻 1897 ほか)、「中止形」(高橋 1983 ほか)、「なかどめ」(鈴木 1972 ほか) という名称も、テ節は、言い終わらずにいったん中止するという、文における構文上の役割を表している。

高橋 (1983)

ここで「中止形」というのは、いわゆる連用形に「て」のついた形で、「てフォーム」などとよぶひともある。(中略) 中止形の基本的な機能は、一つの文のなかに二つ以上の述語をならべるとき、文末述語でない述語でないことをしめすことである。

言語研究会・構文論グループ (1989)

第二なかどめは、ふたつの動詞によってさしだされる動作・状態の、従属的な関係を表現している。

以上のように、接続形式テは、文全体の構造から眺めると、複文中における従属節を形成する機能を担っていると言える。

### 2.2.2 接続機能

森田 (1981) は、接続形式テそのものの機能について「繋ぎの語」であるとし、文接続の標識であると捉える。また、テ節は「文を完結させず、引き伸ばす」とし、文を完結させないで続けるというテ節の機能についても述べている。

また、倉持 (1971:507) は、『日本文法大辞典』の中で『て』自身は、二つの事例を結びつけて一文とし、相互に関連づける機能しか負っていないとみるべきであり、事柄間の意味づけは事柄自体に内在すると考えるべきである。」と述べている。

森田 (1981)、倉持 (1971) は、「テ」の持つ接続の機能について言及している。接続形式テが前句と後句を接続する機能を果たしていると言える。

### 2.2.3 連用修飾機能

テ節はまた、連用修飾の機能を持つ。以下に、接続形式テの連用修飾の機能に言及して

いる先行研究を挙げる。

草薙（1985）は、2.1.3で述べた通り、「～テ」を文法の型と捉え、動詞のテ型は、動詞と動詞、あるいは節と節とを結びつける純粋な文法機能しかなく、言語外現象の意味は表さないとしたうえで、動詞の「～テ」型は、動詞の連用修飾の型であると述べている。

益岡（2013）は、三上（1963）の述べる中立形に「テ」がついたものをテ形（語幹+te）とし、テ形は後続の述語句に連なるという広義の連用（連用修飾）の機能を持つとする。なお、益岡（2013）は、いわゆる動詞の連用形は、そのままの形で名詞や、複語・派生語の語基となるなど、特定の機能の指定を受けない「無機能指定」であるのに対し、動詞のテ形は、それが表す事態を主節の事態と積極的に関係づける機能、連用の機能を持つとし、テ形こそ「連用形」の名称がふさわしいと述べている。

以上、草薙（1985）、益岡（2013）が述べるように、テ節は連用修飾の機能を持っていると言える。「連用修飾」機能は、文字通り、テ節に後続する用言をどのように修飾するか、文節間の修飾—被修飾の関係に焦点をあてたものである。

#### 2.2.4 構造的並列機能

以上、接続形式テの機能について、文構造と文の構成成分の観点から従属節形成機能、接続機能、連用修飾機能について述べた。次に、「テ」の前後句間の構造関係から捉えた機能について述べる。

渡辺（1971）は、2.1.2でも述べたように、文の有機的統一性を形成する役割を構文的職能と呼び、陳述・連用・連体・並列・接続・誘導の6つに分類した。「並列」は、対等な資格を持つ2つ以上の素材的要素を結合させ、多元的な素材群を結成させる職能であるとする。そして、結合する素材的要素が、1つの事態・事実を表す叙述内容である時は、事態・事実の間に自ら継起という序列が介入し、「新聞を読んで、世論の動向を知る。」は、典型的な並列の表現ではないが、表現は並列の関係を出ておらず、「継起的並列」と呼び、「～テ」の職能は「並列」であると述べている。

大鹿（1986）は、「て」は接続助詞としては、句と句の関係が積極的に表出されていな

いとし、「～して」という用言の連用形として「て」を捉え、接続助詞ではなく、活用形による接続であるとする。そのうえで、2つの事態を並べるだけで、意味的統一の文が成立するのは、2つの事態がもともと統一あるものとして一体的に把握された一なる事態での分節的な事態であるからだとする。つまり、もともと1つであった事態を分節して表現することが句を並べることであり、構造的には、「並列」であるとする。例えば、「老婆は疎らな歯を出して笑った」は「老婆が笑う」という事態の様態的な側面の分析が「疎らな歯を出す」という具体的な事態であり、もともと1つの事態を2つの事態に分節していると考える。また、もともと1つの事態と捉えるためには、主語の同一性が保障されなければならないが、「雨がはげしくて風もつめたい」のような前後句で主語が異なっている場合は、前後句の対立を許す主語があるが、言語化されないことが多いと言う<sup>6</sup>。

渡辺(1971)と大鹿(1986)は、接続形式テの前後句間の構造的関係について述べている。接続形式テによって接続された文は、2つの事態を並べることによって1つの事態を表すとし、前句と後句は構造的に並列関係にあるとする。この構造的並列も接続形式テの機能の1つとして捉えることができる。「テ」が接続の意味関係を表さないことから考えると、「テ」の前句と後句は、構造的には単に並べられただけであると解釈することもできる。

## 2.2.5 意味的背景形成機能

最後に、接続形式テによって結びつけられた、前後句の意味内容の関係について言及した先行研究をまとめる。

松下(1977)は、テは動詞に付いて「方法格」と呼ぶ連用法を示す助辞(助詞)であるとする。テは広義の方法を表し、広義の方法はテの一貫する概念であり、意義であるとしている。例えば「泣いて話す」の「泣いて」は「話す」という動作の方法を表し、「雨が降って花見ができない」の「雨が降って」は、自然による天為の方法を以て、人の花見をできなくしたとする。また、方法格は、事件の経路を表すとし、「泣いて話す」は、「泣いて」

---

<sup>6</sup> 大鹿(1986)は「雨がはげしくて風もつめたい」のような文は、前句・後句の主語が鋭く対立することによって対句関係を確かにするが、その句の対立を許すようなさらに大きな主語を必要とすると述べる。例えば「浩が最初に目にとめたのは厚い石材の上に置いてある甕だった。水が張ってあって、睡蓮が咲いていた」という文は、「甕」という同一の主語をめぐる分節であるとする。

という動作を経由して行われる。そして、この經由する筋道が「方法」であると説明する。

松下は、「て」が「広義の方法」を表すと表現したが、前句の事象が背景化され、後句の事象が前景化されることに触れていると言える。前句と後句の2つの事象の関連性について表している。

渡辺（1971）は、前節 2.2.4 で述べたように、接続形式テの構造的機能は、「並列」であるとしたうえで、テの前句と後句の事象間の意味的關係についても述べている。

渡辺は、「新聞を読んで、世論の動向を知る」のような文は、自ら継起という序列が介入し得ると述べ、このような表現を「継起的並列」と呼ぶ。継起的並列は、先行叙述内容によって示される事態・事実は、後行叙述内容によって示される事態・事実よりも先行して成立し、先行叙述内容は、後行叙述内容の背景として把握される契機が生ずるとする。つまり、先行叙述内容は、後行叙述内容の成立背景として叙述され、後行叙述内容は、先行叙述内容の背景のもとに成立する前景として叙述されるとする。

しかし、渡辺はこの叙述内容の背景・前景について、典型的な並列関係においては、叙述内容は、均衡を保ち、平等であるが、継起的並列関係では、一種不均衡な関係が把握されるとする。この不均衡とは、先行叙述内容が、後行叙述内容がどのように成立するかを限定する要素の位置、連用成分の位置へと後退させることを指している。

大鹿（1986）は、前節 2.2.4 で述べたように、1つの事態を、テ節によって分節するとした。テ節は修飾節であり、テ節である前句が、後句の分析であるとする。しかし、逆もあるとする。

- a. 遊び場のすみには大きな合歓の木があって、うす紅いぼうぼうした花がさいたが
- b. 遊び場のすみの大きな合歓の木にうす紅いぼうぼうした花がさいたが

例文 b のように本来単文であるはずの文の一部を、例文 a はテ節を用いて前句にしている。大鹿は、文中において、有機的に結びつけられているモノとしての対象（合歓の木）は、その存在というコトを当然の前提としながらも、存在するコトを対象としてのモノの背後に隠して、顕在化させないのが一般的であるが、例文 a では、わざわざ顕在化させて、前句に実現していると述べる。つまり、前句について、後句で述べるということである。

大鹿は、テ形接続文の前句と後句の修飾の方向について述べているものと思われるが、テ接続節（前句）の背景化について触れているとも読み取れる。

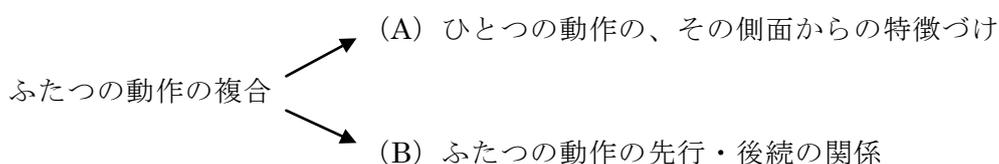
森田（1981）は、「て」に先行する部分（前件）においてまず場面的な状況を作り、後続する部分（後件）は、その状況下において生ずる事柄・事態であるとする。

森田は1つの状況が次の結果を自動的に引き出すという関数関係は、話し手の自由意志の入りこむ余地がないとし、客観的事実で、他力的で、おのずとそうになってしまう、そうせざるを得ないという自然発生的現象としてとらえている。「牛にひかれて善光寺参り」のことわざのように、当人の意志からではなく、他者によっておのずとそうになってしまう受身的状態へと「て」の論理は展開していくと述べている。

高橋（1983）は、「～して」を（第二）中止形と呼び、中止形句節は、文の前に置かれることによって、拡大成分の機能を持つと述べる。例えば、「あめにぬれて、かぜをひいた。」は、先行動作を示す上に、動作の原因という意味をのせており、「カニはハサミが二つあって、一方が他方より大きい。」は、中止形節が前提になっているとする。テ節は、こうした手段、様子、意味などの要素をのせたり、付け加えたりする機能があるとする。

言語研究会・構文論グループ（1989）は、2.1.3 で述べたように「第二なかどめ」は、2つの動詞によってさしだされる動作・状態の従属的な関係を表すとする。そして、2つの動作が1つにまとまって、1つの複合動作を形作ると述べる。そして、2つの動作の複合性は第二なかどめの基本的な意味特徴であり、そこを中心としながら、2つの方向へ分化していくとしている。1つは、動作の側面を捉えながら、この動作のあり方を特徴づけようとする方向で、もう1つは、先行・後続の関係の中にある、2つの動作をさしだそうとする方向であるとする。

（図 3） ふたつの動作の複合 （言語研究会・構文論グループ 1989:16）



また、なかどめによって結ばれた2つの動作は、1つは主要なものであり、もう1つは副次的なものとしてはたらきながら、1つの複合的な動作を形づくり、副次的な動作は主要な動作が成立するための必要条件であるとする。つまり、動作の複合とは、主要な動作と副次的動作の複合であると述べる。

渡邊（1990、1994）は、テ形接続という構文自体が持っている意味と、前件・後件の内容的な関係を区別する必要があるとしたうえで、前件・後件の時間的な関係の軸が問題になると述べる。テ形自体が担っている意味的な機能とは、前件の事象が実現しているという認識に基づいて、後件の事象を語ることであるとする。渡邊は、前件のテ節の動詞を、「超える」のように目標点（ゴール）があるテリック（telic）動詞と、「泳ぐ」のような、目標点（ゴール）を持たないアテリック動詞（atelic）に分けて分析した。

- a. 万年筆を一ダースも買い込んだのだったが、次々と紛失して、もう一本しか残っていない。
- b. パセリをちぎって食べるのは美少女だという気がする。

aの「紛失する」は目標点（ゴール）のあるテリック（telic）の動詞である。前件の事象が目標点を超えると同時に後件の事象が成立し、前件と後件の事象は継起的であるとする。一方、bの「ちぎる」は目標点がないアテリック（atelic）の動詞である。後件の事象は、前件が終了点に達した後ではなく、開始点以降に位置づけられ、前件と後件の事象が重複する同時性があるとする。ただし、アテリックの動詞節でも、視点の位置づけ方によって、同時にも、継起にも読みとれる場合もある。例えば、「ラジオを聞いて勉強する」は、後件の「勉強する」という視点の位置づけを、ラジオを「聞く」開始点以降に位置づければ同時性を持つが、「聞く」終了点に位置づければ、継起的な関係になる。

渡邊は、テリックであれ、アテリックであれ、終了点ではなく、開始点を超えることが、前件の「実現」の条件であり、前件の事象が実現しているという認識に基づいて、後件の事象を語るとしている。

以上、接続形式テによって結びつけられた前後句間の意味内容の関係について、先行研

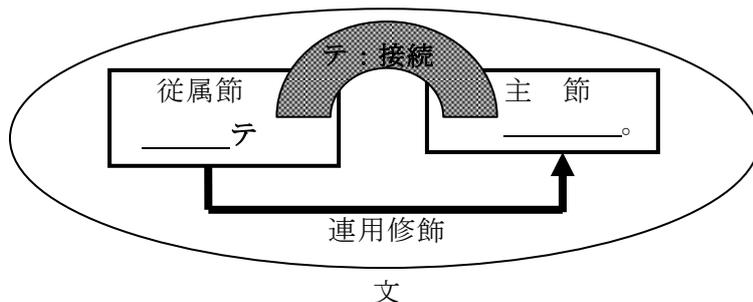
究を挙げた。テ接続文の前後句間の意味内容の関係を表す表現はそれぞれ異なっている。しかし、これらの表現に共通していることは、テ節、すなわち前句は、後句の背景を作るということである。つまり、前句の上に後句が成り立ち、全体で1つの意味内容を形作っている。接続形式テは文全体の意味内容を成り立たせるための背景作りという意味的機能を持っていると言える。

## 2.2.6 接続形式テ まとめ

以上、接続形式テの機能について、従属節形成機能、接続機能、連用修飾機能、構造的並列機能、意味的背景形成機能の5つ観点から先行研究を整理した。従属節形成機能、接続機能、連用修飾機能の3つは文法的機能であり、構造的並列機能と意味的背景形成機能は、テで結ばれた前後句の事象を、構造的関係と意味的關係からみた機能である。

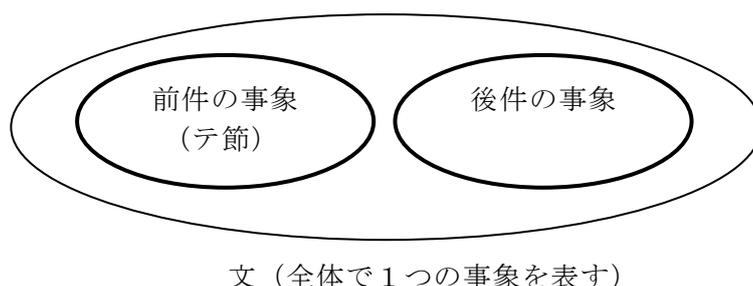
接続形式テの文法的機能を整理すると、まず、複文における従属節を形成する機能を持つ。しかし、テ節では文が完結せず、後続節に接続させる機能を持つ。そして、テ節の文の中における役割は連用修飾であり、連用修飾の機能を持つ。この文節形成、接続、連用修飾は、接続形式テの文法的な機能と言える。これらの文法的な機能を図に表すと以下のようになる。

(図4) 接続形式テの文法的機能：従属節形成機能、接続機能、連用修飾機能

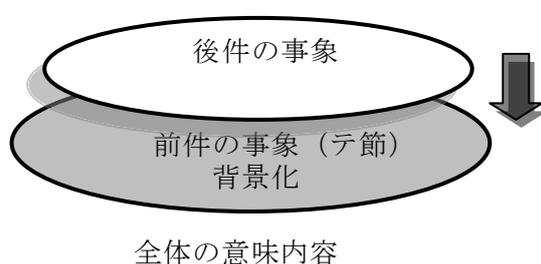


一方、接続形式テによって結びつけられた前後句間の事象関係から考えると、接続形式テの構造的機能は並列であり、意味的機能は文全体の意味内容を成り立たせるための背景作りであるということになる。この構造的機能と意味的機能を図に表すと以下のようになる。

(図 5) 接続形式テの構造的機能：構造的並列機能



(図 6) 接続形式テの意味的機能：背景的意思形成機能



以上、みてきたように、接続形式テは、従属節形成機能、接続機能、連用修飾機能という文法的機能のほか、前後句間の事象の関係からみた構造的並列機能と背景的意思形成機能など、様々な機能を持っている。

### 2.3. テ接続の意味用法

本節では、接続形式テによって表される意味関係を整理する。

これまで述べてきたように、接続形式テは、接続の意味関係は表さない。接続形式テで接続された文（以下、テ接続文）の意味は、接続された前後句の語彙の意味や文脈によって推測される。したがって、テ接続文は個別の意味を有する。しかし、接続形式テによって接続されたことにより、何らかの事象間の接続の意味関係が生まれる。この接続の意味関係は、接続形式テが表すものではなく、テ接続文の受信者である、聞き手または読み手が事象間の接続の意味関係を解釈して判断した結果である。本節では、テ接続からどんな意味関係が解釈できるかを整理する。

従来、テ接続の意味関係の解釈は、テ接続の「意味用法」として研究されてきた。しかしながら、接続形式テは意味を表さないため、「意味用法」という表現は適当ではない。厳密には、「テ接続が表していると解釈できる意味関係」である。しかし、表現が煩雑になる

ため、本節では便宜上「テ接続の意味用法」と呼ぶ。

テ接続の意味用法の分類についてはこれまで数多くの先行研究がある。接続形式テそのものは意味を持たないため、テ接続の意味用法は、テ接続文の意味の推測から帰納的に導き出すことになる。つまり、同じテ接続文でも、人によって意味の受け取り方が異なる場合もあり、意味用法の分類も意味を判断する観点によって変わってくる。よって、意味用法の分類は、研究者の観点によってその分類が異なる。

テ接続の意味用法を決定づける主要な観点として、前後句間の修飾関係、時間関係、意味関係の3つが挙げられる。テ形接続の意味用法の分類は多々あるが、この3つの観定のいずれかに拠って分類されている。逆に言えば、この3つの観定は、テ接続文の受信者である読み手や聞き手が、意味解釈をするのに欠かせない観定ということである。

本節では、このテ接続文の意味解釈の根拠ともなる修飾関係、時間関係、意味関係の3つの観定から、先行研究の意味用法を整理した。次に挙げる意味用法に関する先行研究をこの3つの観定のうち、どの観定を重視しているか、あるいは複合的重視しているかによって、次の5つに分類に整理した。

なお、各意味用法の分類がどの観定を重視しているかという判断は、各意味用法の最初の分類をどの観定で行っているかから筆者が判断した。最初の分類の観定が、その分類が何を重視してなされているかを表すと考えたからである。

#### 【テ接続の意味用法分類の観定】

- (1) 修飾関係
- (2) 時間関係
- (3) 意味関係
- (4) 時間関係、意味関係
- (5) 修飾関係、時間関係、意味関係

### 2.3.1 修飾関係による意味用法の分類

三尾（1942）は修飾関係を重視して、テ接続の意味用法を分類した。

三尾は、テ接続の意味用法を①「単なる先行」、②「因由、手段」、③「矛盾」、④「単なる並立」の4つに分類した。

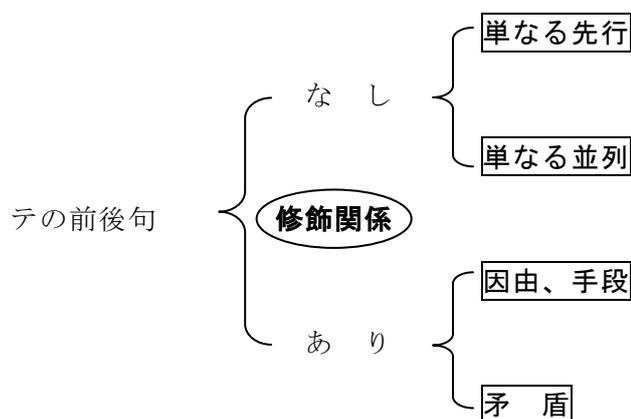
まず、接続形式テの前後句が、修飾・被修飾の関係にあるかどうかで意味用法を分類す

る。修飾関係にあるものは、さらに②「因由・手段」と③「矛盾」に分類される。一方、前後句に修飾関係がないものは、①「単なる先行」と④「単なる並立」に分類される。ただし、修飾関係の有無は中止形そのものが本来持っている性質ではなく、ほかの語との組合せから偶然にでてくる差異であるとし、型分けからはみだすものやあいまいなものもあるとする。三尾（1942）のテ形接続の用法の分類を図6に表してみる。

(図7) 三尾（1942）の意味用法と分類の観点

※ ○内の分類の観点は筆者の判断を表す。□は意味用法を表す。

※ 文例は三尾（1942）から抜粋。下線は筆者による。



《文 例》

①単なる先行

お茶を飲んだら、お花と奥へ行つて、三十分ばかり遊んで、それから寝るんだぞ。

(小山内薫『三人と三人』)

②因由、手段

[因由] 私は先頃あの戯曲を讀んで、非常に動かされたのだ。(山本有三『津村教授』)

[手段] それぢやおまへは自分を捨て、と他を救ふということをしないのか。

(山本有三『津村教授』)

③矛盾

頼みにいつて、頼まないでかへつてきた。

(谷崎潤一郎『春の海邊』)

④単なる並立

僕たちはすっかり疲れて、腹もへつた。

(小山内薫『三人と三人』)

### 2.3.2 時間関係による意味用法の分類

森田（1981）、仁田（1995）、益岡（2013）、三原（2015）は、テ接続の前後句の時間関係を重視して意味用法を分類した。

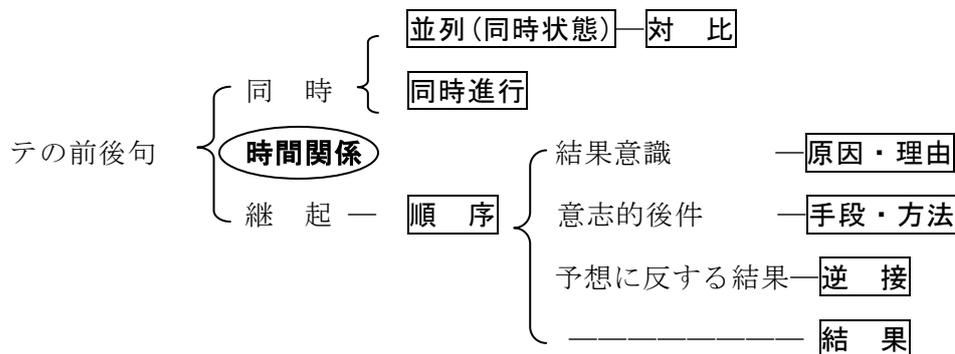
森田（1981）は、前後句の時間関係から意味用法を分類する。同時であれば、「並列（同時状態）」、「同時進行」で、継起であれば「順序」である。森田の分類は、前後句の時間関係を重視している。テ節に名詞、形容詞、形容動詞がくる場合は、時間的に並行しており、同時状態であるとし、前後句間の意味関係よりも、時間関係を重視している。

時間関係で分類した後の下位分類は「意識」による。「順序」は、結果が生じたという意識が強調されれば、「原因・理由」に分類される。また、「原因・理由」は、後句が意志的になると「手段・方法」になるとする。例えば、「注射を打ってもらって治った」は、時間的關係だけみれば「順序」であるが、結果を意識すれば、「原因・理由」である。さらに、「注射を打ってもらって治した」のように後句が意志的であれば、「手段・方法」になる。以下に、森田（1981）の意味用法の分類を図に表してみる。

（図 8）森田（1981）の意味用法と分類の観点

※ ○ 内の分類の観点は筆者の判断を表す。□ は意味用法を表す。

※ 文例は森田（1981）から抜粋。下線は筆者による。



《文例》

#### ① 並列

同時状態（名、形、形動） 彼女は背が高くて、目が丸くて、髪が長いんだ

継起的行為（動） 今日は(私は)銀行へ行って、郵便局へ行って、デパート

	へも行こう
②対比	南の国は暑くて、北の国は涼しい
③同時進行	腕を組んで話す
④順序	学校へ行って、先生に会った 日本へ来て三年になる
⑤原因・理由	花瓶が棚から落ちて割れた
⑥手段・方法	大いにがんばって、仕事を全部すませた
⑦逆接	毎日徹夜して病気になるなんて、スーパーマンだね
⑧結果	
仮定の結果（一般論）	梅雨があけて夏
既定の結果（具体的事実）	歩いて十五分ぐらいかかります

仁田(1995)は、複文の主節と従属節という関係からテ接続の意味用法を捉えているが、意味用法の分類には前後句の時間的關係も重視している。仁田は、前後句の時間關係が先後關係にあるものを「継起」、同時であるものを「付帯状態」と「並列」に分類する。「継起」はさらに、「時間的継起」と「起因的継起」に分類し、接続形式テの意味用法は「三類四種」であるとする。また、「付帯状態」は、テ節が主節の事象の実現のされ方を限定・修飾するもの、「並列」は、前後句の事象が意味的に等しく共存共立するものであるとし、前後句の意味關係から分類をしている。

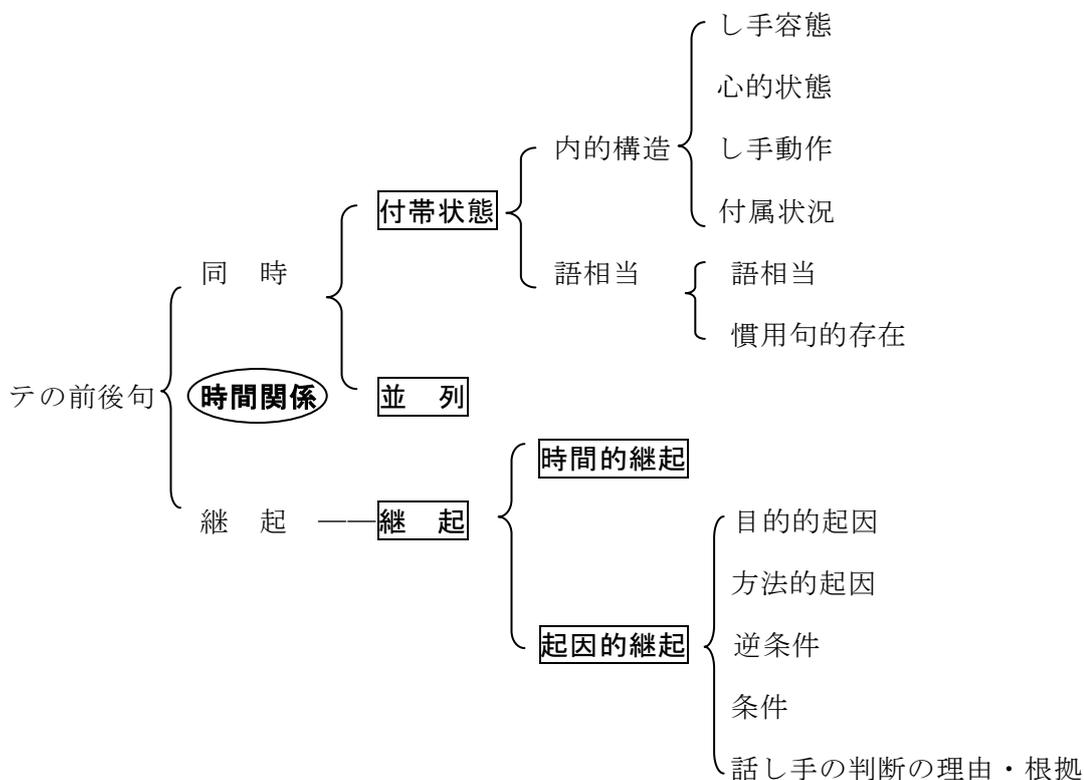
なお、「時間的継起」と「起因的継起」は連続しており、「時間的継起」と「並列」、「並列」と「付帯状態」の異なりは截然していない場合もあると述べる。

以下に、仁田(1995)の意味用法の分類を図に表してみる。

(図 9) 仁田 (1995) の意味用法と分類の観点

※ ○ 内の分類の観点は筆者の判断を表す。□ は意味用法を表す。

※ 文例は仁田 (1995) から抜粋。下線は筆者による。



《文例》

①付帯状態

瘦せた男は腰を浮かしてドアを見つめていた。 (筒井康隆「その情報は暗号」)

何百歳かもしれないほどの高齢の、物凄い顔をした不思議な老婆が、～、黒いマントを羽織ってじっと、こちらを見つめておったではありませんか。

(高木彬光「妖婦の宿」)

②継起

時間的継起

手紙は、いかにも無造作にそこに捨ておかれた形だった。何気なくとりあげてひらいた。 (瀬戸内晴美「夏の終わり」)

起因的継起

倉庫番が、背の高い男につつかれて喚いた。 (佐木隆三「ジャンケンポン協定」)



タクシーに乗って駅まで行った。(様態+手段・方法)

駅前に白いビルがあって、そのビルの1階に銀行がある。(並列)

(益岡 (2013) の例文は日本語記述文法研究会編 (2008) から引用)

三原 (2015) は、仁田 (1995) の分類を踏まえたうえで、仁田の「付帯状態」、「継起」(「時間的継起」・「起因的継起」)、「並列」の3類4種を、「付帯」、「継起」、「並列」の3種に収束した。しかし、三原は、「付帯」と「並列」の時間関係は厳密には「同時」ではないとする。「付帯」は、テ節の事態が主節事態直前に起こり、その後、両事態が時間的に同時並存すると話者が認識するもの、「並列」は、テ節の事態を先に認識した上で、テ節の事態と主節事態が共存共立すると話者が認識するものとする。

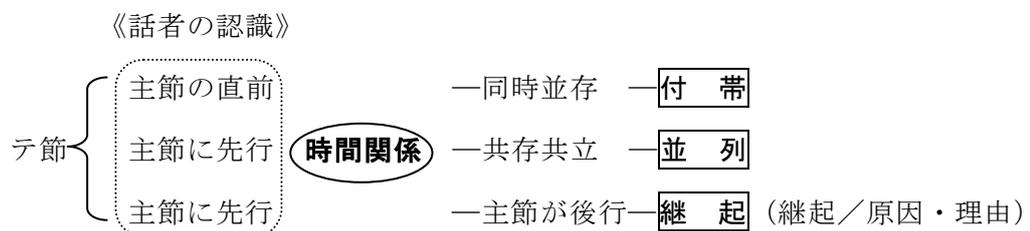
また、仁田 (1995) は、「継起」を「時間的継起」と「起因的継起」に下位分類したが、三原 (2015) は、テ節が継起か、原因・理由かは一律には決められず、時間的先後関係こそが重要であるとし、「時間的継起」も「起因的継起」もまとめて「継起」とした。

三原は、接続形式テの前後句の時間関係を重視しているが、実際の事象の時間ではなく、話者の認識による時間感覚で捉えた。そのため、「並列」も真の「並列」は存在しないとし、テを取る前句は、話者が「先に」認識した状態を表すことを示唆していると述べる。

以下に、三原 (2015) の意味用法の分類を図に表してみる。

(図 11) 三原 (2015) の意味用法と分類の観点

※ ○ 内の分類の観点は筆者の判断を表す。□ は意味用法を表す。



以上、接続形式テの前後句の時間関係を重視して意味用法を分類したものをまとめた。これらの分類は無論、修飾関係、意味関係の観点が入っていないわけではない。むしろ、テ節が複文の従属節である以上、何らかの修飾関係はあることは自明のこととして、そのうえで、前後句間の時間関係を重視して意味用法を分類していると言える。しかし、「座

って話をした」のような文を、文構造を重視して副詞的用法と捉えるか、2つの事象の時間的關係を重視して同時状態を表すと捉えるかでは接続形式テの見方は大きく異なる。

### 2.3.3 意味関係による意味用法の分類

次は、意味関係を重視したテ形接続の意味用法の分類を挙げる。言語学研究会・構文論グループ（1989）は意味関係を重視して意味用法の分類を行った。

言語学研究会・構文論グループ（1989）は、「継起」と「同時」という時間関係によってのみ接続形式テの意味用法を捉える見方を批判した。時間関係だけでは、2つの動作間の関係のし方を全て捉えたことにはならず、また、時間関係が認められない場合もあると述べる。そして、2つの動作・状態の時間関係だけでなく、それを組み込んでいる構造的な結びつきとして捉えなおす必要があると主張している。

2.2.5でも述べたように言語研究会・構文論グループは、接続形式テで繋がれた2つの動作が1つにまとまって、1つの「複合動作」を形作ると述べる。

まず、接続形式テによって繋がれた2つの動作が、複合しているか否かによって意味関係を分類する。しかし、2つの動作が複合していない場合も、先後関係のほかに何らかの意味関係がつきまとっているとする。また、複合性に欠ける場合でも、ある動作が別の動作に先行・後続しなければならない必然性があり、ひとまとまり性を保っているとする。

以下に、言語研究会・構文論グループ（1989）の意味用法の分類を図に表してみる。

(図 12) 言語研究会・構文論グループ (1989) の意味用法と分類の観点

※ ○ 内の分類の観点は筆者の判断を表す。

※ 文例は言語研究会・構文論グループ (1989) から抜粋。下線は筆者による。

u003c/div>

```

    graph LR
      Root(意味関係) --- B1(2つの動作が複合する)
      Root --- B2(2つの動作が複合しない)
      
      B1 --- C1(主・副動作の複合)
      B1 --- C2(ふるまい状態)
      B1 --- C3(動作の特徴づけ)
      B1 --- C4(動作の意義づけ)
      
      B2 --- D1(同一し手)
      B2 --- D2(異なるし手)
      
      C1 --- E1(継起)
      C1 --- E2(同時)
      
      C2 --- F1(ふるまい状態の中の進行)
      C2 --- F2(ふるまい状態を伴う動作の進行)
      
      C3 --- G1(あり方・様態)
      C3 --- G2(心理的状态)
      C3 --- G3(心理的活動)
      
      D1 --- H1(対句)
      D1 --- H2(先行・後続)
      D1 --- H3(同時)
      D1 --- H4(継続する動作・状態)
      
      D2 --- I1(全体・部分)
      D2 --- I2(1つの空間に同時に存在する2つの現象)
      D2 --- I3(継起)
      D2 --- I4(時間=状況)
      D2 --- I5(物=空間)
      
      H2 --- J1(場面的な条件づけ)
      H2 --- J2(動作の動機づけ)
      H2 --- J3(原因・結果)
      H2 --- J4(方法)
      H2 --- J5(うらめ条件)
      
      I3 --- K1(原因・結果)
      I3 --- K2(心理状態)
      
      I4 --- L1(時間=状況)
      I5 --- L2(物=空間)
  
```

《文例》

① 2つの動作が複合している場合

1) 主要な動作と副次的な動作との複合

a) 継起的な関係 前もって必要な動作を差し出す

新子はべつに空腹も感じなかったが、その温かいものを自分も分かちたい気持ちで、

34

干した川魚をクシからぬいて、ムシャムシャたべはじめた。(青い山脈)

b) 同時的な関係 同伴する、副次的な動作を差し出す。

その時、お種は指をおって、心当たりの娘をかぞえてみた。年ごろになる子はおおぜいあっても、いざ町からもらうとなると、適当な候補者はみあたらなかった。

(家上)

2) 主要な動作とし手の《ふるまい状態》との複合

a) 《ふるまい状態》の中でし手の動作が進行する 姿勢、服装

若い女が、ぽつんと一人ですわって、紅茶をのんでいた。(点と線)

b) 主要な動作が《ふるまい状態》を伴う

土間に入っていくと、上がりかまち框のところかまちに好太郎さんが腕組みをして、うつむいていた。(黒い雨)

3) 主要な動作の特徴づけ

a) 動作のあり方、様態を特徴づける。

六郎が自転車にのって、ひっかえしてきた。(青い山脈)

b) 動作のし手の心理的な状態とらえて特徴づける

「それは五千羽でしょう——」と、富永はまじめくさって、こたえた。(青い山脈)

c) 同伴する表情や身振りをさしだして心理的な活動を特徴づける。

私は目をとじて、その情景を想像する。(点と線)

4) 具体的な動作をさしだして主要な動作がその動作を意義づける。

雄鶏の憎らしい表情をみると、里子は小屋の金網をぎしぎしゆすぶって、雄鶏をおどかした。(めし)

② 2つの動作が複合していない場合

1) 2つの動作のし手が同じ場合

・ 対句的

黒い夕立は私の知覚をはぐらかすように、さっときて、さっとさった。(黒い雨)

・ 先行・後続関係 (場面的な条件づけ、動作の動機づけ、原因・結果、方法、うらめ条件)

夕飯は簡単にお茶漬けですまして、「被爆日記」の続きを清書した。(黒い雨)

主人は思案にくれて、易断の本などをだしてきたが、ただ頁をばらばらめくるだ

け。 (黒い雨)

たった一人の尋常二年の男の子が、今朝の爆撃できゃたつからおちて、しんでしまったという。 (黒い雨)

「自分でいって、わすれるやつがあるか」

と、主任はこえをたてずに笑った。 (点と線)

・同時進行 2つの《ふるまい状態》

ライ子さんはリュックサックを背負い、モンペに白シャツをきて、赤十字腕章をつけていた。 (黒い雨)

・継続する動作・状態 《状況》

保子も手を拭いて、茶の間へはいると、立ったまま房子をながめていて、

「よくまあ、相原さんは、大晦日の夜に帰せたもんですね。」といった。

(山の音)

2) 2つの動作のし手が異なる場合

・全体・部分、側面 / 部分・部分

岸本がはじめて園子と所帯を持った頃からある、記念の八角形の古い掛け時計も同じ位置にかかって、真鍮の振り子が同じようにうごいていた。 (新生)

・一つの空間に同時に存在する二つの現象

海は青々とないで、かもめの群が赤子のような鳴声をあげながら、波間をとびめぐっていた。 (青い山脈)

・継起、原因・結果、心理状態

ひろい台所のほうから、明日の食糧の支度でもしているらしい、変にざわついた物音がきこえてきて、将棋に身がはいらなかった。 (青い山脈)

・《時間＝状況》自然・社会の出来事の到来

秋口になって、夏の疲れがでたのか、信吾は帰りの電車で居眠りをすることがあった。 (山の音)

・《物＝空間》物や建物の存在

車がいつもの踏み切りを越えて鎮守の杉林の横までくると、目の前に明かりのでた家が一軒あって、島村はほっとしたが、それは小料理やの菊村で、門口に芸者が三四人立ち話していた。 (雪国)

#### 2.3.4 時間関係と意味関係による意味用法の分類

次に、時間関係と意味関係の2つの観点によるテ接続の意味用法の分類を挙げる。

吉永(2012)は、テ形は連用形とは異なる活用形であるとし、時間関係に論理関係を加えて、テ接続の意味用法の分類を整理した。吉永は、テ形の文法的機能を、接続機能、述語形成機能、副詞的機能、文末機能(いわゆる「言いさし文」とした。また、接続形式テの意味用法については、仁田(1995)ほかの先行研究から、「付帯」、「継起」、「因果」、「並列」の4種が最も普遍的であるとしたうえで、その4種の用法は最終的に「並立タイプ」と「先後タイプ」に二分できるとした。「付帯」「並列」は「並立タイプ」、「継起」「因果」は「先後タイプ」に分類される。この2つの分類の観点は、時間関係と論理関係である。

「並列」は、複数の事態を生じた時間に関係なく列挙したものであり、論理的「並立タイプ」であるとする<sup>7</sup>。また、「付帯」は、テ節事態が僅かに先行しているが、「事態の並立」を表す時間的「並立タイプ」であるとする。

「継起」は明確な「事態の先後」を表す時間的「先後タイプ」とする。「因果」は、事態の時間的・論理的に「先後」であり、論理的「先後タイプ」であるとする<sup>8</sup>。なお、先後タイプは時間的・論理的な先後関係を前提として意味解釈され、並立タイプはテ節事態の認知後、テの時間的緊密性によって後続節が論理的に列挙される。どちらもテには何らかの時間的性質が現れているとしている。

以上のように吉永は、時間関係の観点に、論理関係の観点を加えてテ接続の意味用法の分類・整理を行った。これまでの多くの先行研究では、時間関係から「並立」、「並列」などの意味用法分類が行われてきたが、吉永は「並立」関係にある事態の関係が、統一テーマによって論理的に繋がっているとし、時間関係が同時であるという分類のし方ではなく、論理関係という観点で分類している。

吉永は、並立タイプと先後タイプのイメージ図を次のように表した。

---

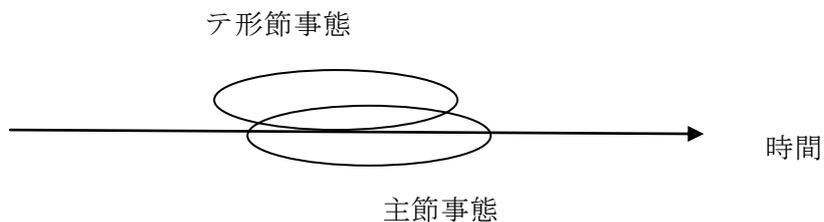
<sup>7</sup> 「並列」の2つの事象は並存し、関係は希薄であっても、全く無関係ではなく、論理的な統一テーマ内で事象が繋がっていると述べる。また、テ節事態の認知後、テの時間的緊密性によって後続節が論理的に列挙されており、時間的性質も現れているとしている。

<sup>8</sup> 「因果」は事態の重なりという点は、継起と異なるとしている。また、先に原因事態があり、後に結果事態があるという点でも、「並立」とは異なるとする。

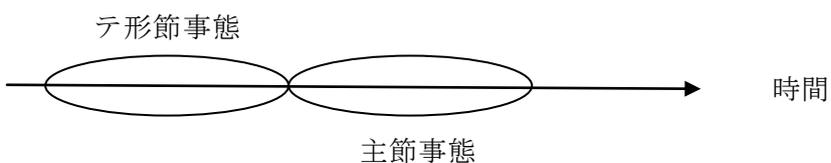
(図 13) 並立タイプと先後タイプのイメージ図

(吉永 2012:96)

【並立タイプ】



【先後タイプ】(因果では主節事態が重なる場合もある)

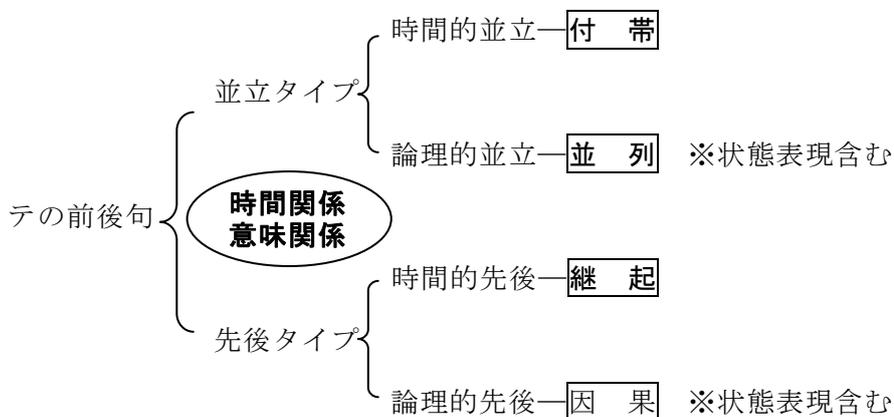


以下に、吉永 (2012) の意味用法の分類を図に表してみる。

(図 14) 吉永 (2012) の意味用法と分類の観点

※ ○内の分類の観点は筆者の判断を表す。□は意味用法を表す。

※文例は吉永 (2012) から抜粋。下線は筆者による。



《文例》

- ①付帯 太郎は頬杖をついて本を読んでいた。
- ②継起 ジャガイモの皮を剥いて柔らかくなるまで茹でます。
- ③並列 遠足で三年生は奈良に行つて、五年生は京都に行った。
- ④因果 長時間正座して、足が痺れてしまった。

### 2.3.5 修飾関係、時間関係、意味関係による意味用法の分類

最後に、修飾関係、時間関係、意味関係の3つの観点からテ形接続を分類した池尾(1964)、遠藤(1982)、原沢(2000)の意味用法の分類を挙げる。

池尾(1964)はテ接続の意味用法を5つに分類した。まず、時間関係と修飾関係のそれぞれの有無によって分け、さらに、時間関係も修飾関係もないものは、文の成分として対等な関係にあるものとして、「対比・並列・列叙」に分類した。文の成分として対等な関係にあるものとは、意味的に対等な関係にあるものとみなすことができるだろう。

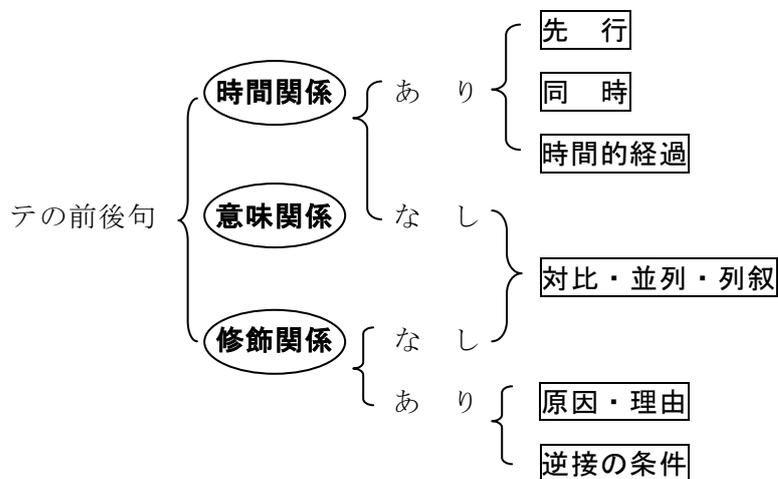
また、時間関係があるものは、さらに「先行」、「同時」、「時間的経過」の3つに分類し、修飾関係があるものは「原因・理由」と「逆接の条件」に分類した。

以下に、池尾(1964)の意味用法の分類を図に表してみる。

(図15) 池尾(1964)の意味用法と分類の観点

※ ○内の分類の観点は筆者の判断を表す。□は意味用法を表す。

※ 文例は池尾(1964)から抜粋。下線は筆者による。



《文例》

①動作の単なる先行を表す場合

この道を突き当たって、右へ曲って右へ折れて、まっすぐ行ってください。

②同時に動作・作用が行われるまたは起こる場合

本を読んでいてねむってしまった。

敷居をまたごうとしてつまずいた。

③動作・作用の時間的経過を表す場合

お母さんが亡くなって何年になりますか。

④下にくる語句を修飾し、条件を示す場合

a. かるく、原因・理由を表す。

八時間も歩いて足に豆ができてしまった。

b. 逆接の条件「のに」の意を表す。

知っていて話してくれない。

⑤単なる対比・並列・列叙を表す場合

夏はあつくて、冬は寒い。

中中、つやがあつて立派ですな。

うれしくてうれしくて涙が出てしまった。

遠藤（1982）も、テ接続の前後節の修飾関係、時間関係、意味関係から意味用法を8つに分類した。遠藤はまず、(1) 副詞的役割を果すもの、(2) 時間的論理的推移を表すもの、(3) 文法的にも意味的にもほぼ同じ重みを持っているものの3つに分類する。そして(1)はさらに、手段・方法、様態、同時進行に下位分類され、(2)は継起的関係と因果関係に、(3)は並列・累加、並列・対比、余韻型に下位分類される<sup>9</sup>。

遠藤の分類は、池尾（1964）の分類と修飾関係、時間関係という分類の観点は同じであるが、何を修飾関係と時間関係に捉えるかという下位分類は異なっている。遠藤は「同時進行」を「副詞的役割」に分類し、時間関係の分類である「時間的論理的推移」とは別にしているが、池尾は「同時進行」を時間関係があるものとして分類する。また、遠藤は、「因果関係」を時間関係の「時間的論理的関係推移」に分類するが、池尾は、「原因・理由」を時間関係ではなく、修飾関係に分類する。

以下に、遠藤（1982）の意味用法の分類を図に表してみる。

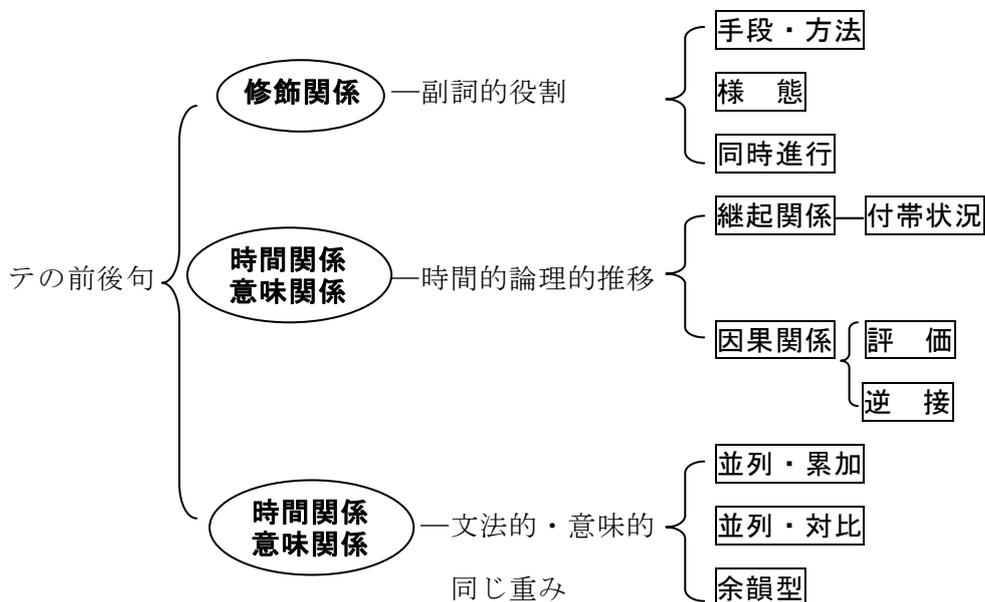
---

<sup>9</sup>遠藤（1982）は、話し言葉の場合は、卓立、休止などのイントネーションもテ接続文の意味の解釈に影響すると述べている。

(図 16) 遠藤 (1982) の意味用法と分類の観点

※ ○ 内の分類の観点は筆者の判断を表す。□ は意味用法を表す。

※ 文例は遠藤 (1982) から抜粋。下線は筆者による。



《文例》

- ①手段・方法 都電に乗って行こう。
- ②様態 落ち着いて話し合おう。
- ③同時進行 オートバイが大きな音をたてて走り抜けた。
- ④継起関係 母は買物から帰って夕食の支度を始めた。
- ④'付帯状況 (偶発的) 建物を出ようとして、友達に会った。
- ⑤因果関係 雨が降って、運動会が延期になった。
- ⑤'評価 (「から」や「ので」に言い換えられない) 思い切って言って、よかった。
- ⑤'逆接 五年間も東京に住んでいて、まだ新宿に行ったこともない。
- ⑥並列・累加 あの店じゃ、飲めて歌えて踊れる。
- ⑦並列・対比 あなたはここにいて、山田さんが行きなさい。
- ⑧余韻型 (文脈依存度が高く意味を特定できないもの) 梅が咲いて、春が来た。

原沢 (2000) はまず、副詞的修飾関係にあるもの、継起的時間関係にあるもの、意味的に並列なもの大きく3つに分類した。原沢も前述の遠藤 (1982) 同様、「副詞的用法」を修飾関係と捉えて分類している。しかし、「原因・理由」も並立的用法と継起的用法のそ

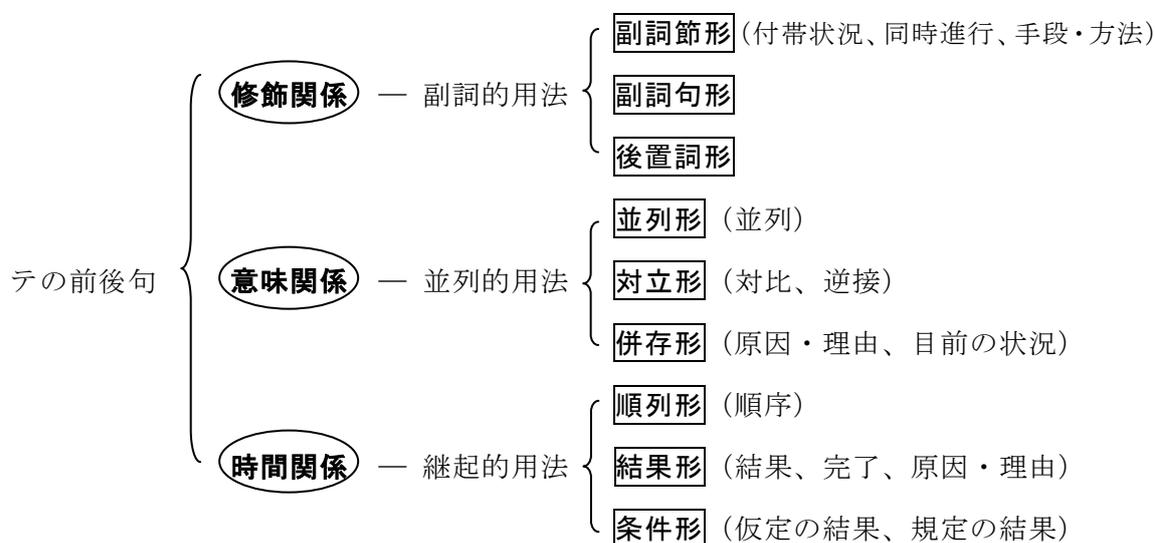
れぞれに分類されている。「事情がありまして、キャンセルしたいんです。」は節句に時間的なずれがないとして、継起的用法（結果形）の「原因・理由」とは区別して、並列的用法（併存形）の「原因・理由」に分類している。

以下に、原沢（2000）の意味用法の分類を図に表してみる。

(図 17) 原沢（2000）の意味用法と分類の観点

※ ○ 内の分類の観点は筆者の判断を表す。□ は意味用法を表す。

※ 文例は原沢（2000）から抜粋。下線は筆者による。



《文 例》

①副詞的用法

副詞節形（付帯状況、同時進行、手段・方法）

なんとなく煙をあげてすこしずつ燃えていくもぐさを見ていると、心が安らぐところがあるのです。  
（「生きるヒント4」五木寛之）

副詞句形

清美は、その白い封筒を、振つて見せた。  
（「花嫁の時間割」赤川次郎）

後置詞形（～として、～に限って、～へ向かって等）

他人からひどい目に遇わされた人に限って、他人をいじめて喜ぶものである。  
（「大統領のクリスマスツリー」鷲沢萌）

②並列的用法

並列形（並列）

家族もいて、子供もいて、そこで一生を終えるであろう、そういう農夫があるとき突然、不思議な病気にかかってしまうという話です。

(「生きるヒント4」五木寛之)

対立形（対比、逆接）

確かに、隣室の女性が、雨宮の部屋で刺殺されて、雨宮が姿をくらませば、犯人かと疑われても仕方ないだろう。

併存形（原因・理由、目前の状況）

事情がありまして、キャンセルしたいんです。 (「花嫁の時間割」赤川次郎)

トイレの横に棚があつて、新刊の雑誌十数冊と、単行本、文庫本、辞書などが積みあげてあります。 (「生きるヒント4」五木寛之)

### ③ 継起的用法

順列形（順序）

まず撃つて、倒れた人から金を奪って逃げるといっているので、やりきれません。

(「生きるヒント4」五木寛之)

結果形（結果・完了、原因・理由）

雨宮は、幸枝との間をぶちこわされて、頭に来ていた。

(「花嫁の時間割」赤川次郎)

条件形（仮定の結果、規定の結果）

どう見たって、忙しいわけではない。現に、今だって、亜由美が何回もチャイムをならして、やっと出てきたのだが、トロンとした目で「今まで居眠りしていた」と言わんばかり。TVはつけっ放し。 (「花嫁の時間割」赤川次郎)

#### 2.3.6 テ接続の意味用法 まとめ

以上、テ接続の意味用法について主な先行研究を分類の観点から概観した。これまでみてきたように、テ接続の意味用法の分類は観点によって変わる。接続形式テは特定の意味を持たないため、前後句の意味関係は文脈から推測される。そのため、客観的な意味用法から主観的な意味用法まで、テ接続の意味用法の分類の幅は広がる。意味用法の幅の広さは、すなわち、テ接続文の意味内容の推測の幅を表しているとも言える。

本節では、修飾関係、時間関係、意味関係の3つの観点からテ接続の意味用法の分類を眺めてみた。この3つの観点は、重要度の違いはあれ、どの先行研究のどの意味用法にも

入っている。そして、この3つの観点は、別々ではなく、互いに関わり合っている。つまり、この3つの観点は、テ接続の意味用法を捉えるうえで、基本的かつ、複合的な観点であると言える。

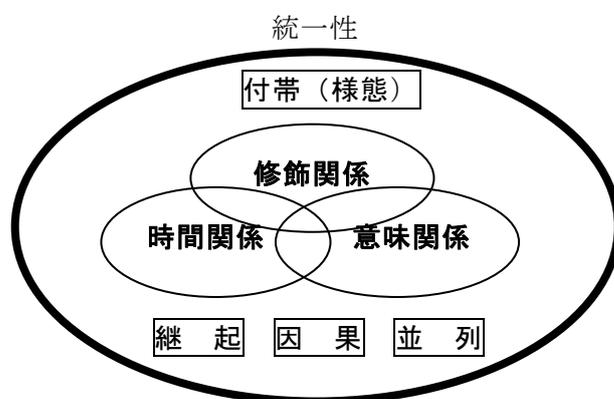
そして、修飾関係、時間関係、意味関係の関わり方によって、テ接続の意味用法は細分化され、意味用法の分類は多岐にわたる。しかし、テ接続の最も基本的な用法は、結局「並列」、「継起」、「因果」、「付帯（様態）」の4つに集約できる。この4つは、用語の差異はあれど、本節で挙げた先行研究の意味用法の分類に入っており、基本的な用法と言える。

また、この基本的な4つの意味用法は、截然と分かれているわけではない。重なり合い、互いに意味用法を包括している。テ接続の意味用法を判断する者、すなわち対象となるテ接続文の聞き手や読み手が、修飾関係、時間関係、意味関係のどれを重視するかによって、意味用法の判断は変わるのである。

そして、それらの包括された複数の意味用法は、テ接続文を貫く統一テーマによって、文全体の意味的な整合性を保っている。

テ接続の意味用法と観点の相関性を図に表すと、以下のようになる。

(図 18) テ接続の意味用法と観点の相関性



## 2.4 統語論からみた接続形式テのまとめ

本章では、接続形式テの文法的な位置づけ、機能、意味用法を概観した。本章で確認したことを以下にまとめる。

まず、「テ」は、一般に接続助詞とされているが、「テ」自体は接続の意味関係を表さないことを確認した。「テ」は文中における役割の捉え方によって文法的な位置づけも異なるが、本論では、「テ」によって接続された文全体の意味内容を扱うことから、「接続形式テ」

という表現を使用する。

次に、接続形式テの機能を確認した。接続形式テは、従属節形成、接続、連用修飾という文法的な機能のほか、構造的に前後句間の並列関係を表す機能、文の意味的背景を形成する機能など複数の機能があることを確認した。

最後に、テ接続の意味用法を整理した。テ接続の前後句間の意味関係は前後句間を貫く統一テーマの下、修飾関係、時間関係、意味関係の観点から総合的に判断されること、基本的な意味用法として「並列」、「継起」、「因果」、「付帯（様態）」の4つが抽出されることがわかった。また、これらの用法は、連続しており、包括的に意味を表していることも確認した。

以上、接続形式テの文法的位置づけ、機能、意味用法を確認した。その結果、接続形式テは、「接続はするが、接続の意味関係は表さない」ということを確認した。

テ接続の意味関係は、聞き手や読み手の推測に任せられている。しかも、解釈可能な意味関係は多岐にわたり複数ある。それにもかかわらず、その接続の単純さからか、日常生活において非常に使用頻度の高い表現である。わたしたちは、このように構造は単純だが、接続の意味関係がはっきりしないテ接続文のやりとりをどのように行っているのだろうか。どのように意味内容の推測をしてコミュニケーションをしているのだろうか。接続形式テには、文の接続機能だけでなく、もっと中核的な意味があるのではないだろうか。本論では、本章で確認した統語論的な捉え方を踏まえた上で、次章以降さらに接続形式テの本質に迫り、その中核的な意味を抽出したい。

### 第3章 認知言語学的アプローチによるテ接続文の中核的な意味の捉え方

第2章では、接続形式テの文法的位置づけ、機能、意味用法について概観した。接続形式テの機能は文の接続のみであり、テ自身は接続の意味関係を表さない。テ接続文の意味内容の推測は語彙と文脈に依存している。そして、テ接続の意味関係は、修飾関係、時間関係、意味関係の観点から総合的に判断される。しかし、テ接続文の受信者によって、どの観点を重視するかは異なるために、テ接続の意味関係の解釈には幅があり、テ接続によって表せる意味関係は多岐にわたる。テ接続文は、日常生活において使用頻度の高い表現である。私たちはなぜこのように接続の意味関係がはっきりしない表現にもかかわらずやりとりができるのだろうか。

本章では、テ接続文の受信者がどのように意味内容の推測を行っているのか、認知言語学的アプローチによって接続形式テの中核的な意味を明らかにするとともに、テ接続文の意味内容の捉え方を明らかにする。

#### 3.1 接続形式テの文構造における役割

接続形式テの中核的な意味を考える前に、接続形式テの文法構造における役割をもう一度確認しておく。

接続形式テは、複文の従属節を形成する。接続形式テによって、2つ以上の文が接続し、1つの完結した文を作る。例えば、「朝ごはんを食べて学校へ行く。」という文は、「朝ごはんを食べる。」と「学校へ行く。」という2つの文が接続して1つの文が完成している。しかし、「朝ごはんを食べる学校へ行く。」のように、単に完結した文を2つ並べただけでは、日本語の文としては文法的に成立しない。接続形式テによって接続されてはじめて日本語の文として成立するのである。接続形式テは、複数の文を接続して、文を構造的に整える働きを持っているのである。



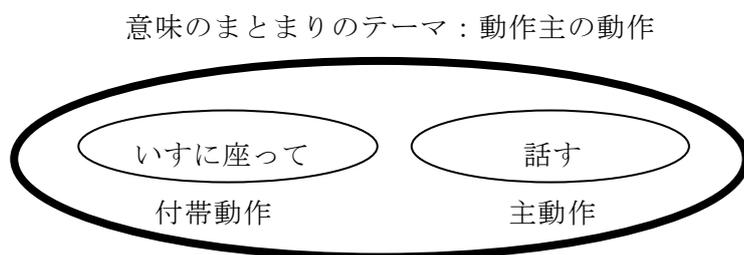
の意味関係を表さない。したがって、接続形式テによって接続された文の意味内容は読み手あるいは聞き手である受信者が推測する必要がある。いわば、テ接続文は1つの文（sentence）であると同時に、1つの談話（discourse）<sup>1</sup>とすることもできる。テ接続文を1つの談話として考えると、意味のまとまり性とは、整合性（coherence）と言い換えることができる。

亀山（1999）は、整合性（coherence）とは、常識、推論、連想など、非言語的な要素も含めて談話の意味的なつながりの良し悪しを指すと述べる。また、亀山は、ある談話を理解するとき、その談話の整合性が強ければ強いほど、話者の意図した意味に決まるまでの推論量が少ないとも述べている。

本節ではテ接続文の談話としての整合性を保つ要素は何であるか、以下に意味用法別にみていく。

### 3.2.1 「付帯（様態）」関係を表すテ接続文の整合性

まず、「付帯（様態）」の意味を表す文を考察する。「付帯（様態）」の意味関係を表すとされるテ接続文の多くは、「いすに座って話す。」「ドレスを着て踊る。」のように、同一動作主の主動作（「話す」、「踊る」）と、それに付帯する動作（「座る」、「着る」）を表している。動作主の動作（主動作）と、その動作を支える側面的動作（付帯動作）という関係である。前後節ともに、動作主の動作を表している。つまり、主動作と付帯動作の複合によって、動作主の動作全体を表すという意味のまとまりのテーマを持ち、整合性を保っていると言える。



(図2) 「付帯（様態）」関係を表すテ接続文の整合性

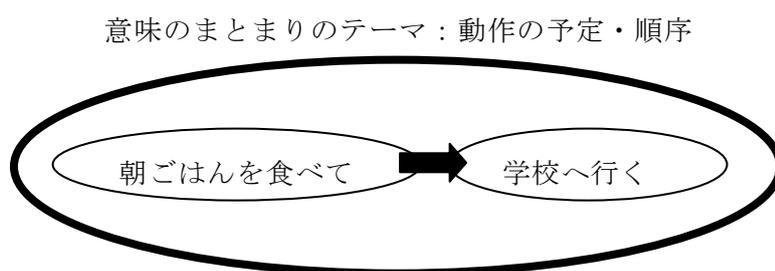
<sup>1</sup> McHoul(1998:226)は談話（discourse）とは単一の文より大きな文を越えたレベルで生じる連結された話しことばあるいは書きことばを指すと述べる。統語論でいう文（sentence）とは一致しない部分もあるが、本論ではテ接続文は文と文がテによって接続していると考え、テ接続文を1つの「談話」とみなす。

### 3.2.2 「継起」関係を表すテ接続文の整合性

次に、「継起」の意味関係を表すテ接続文の意味まとまりのテーマを考える。「継起」の意味関係を表すということは、接続形式テによって接続された事象が時間的な先後関係にあるということである。時間の流れに沿った事象の発生という意味のまとまりを持っている。

しかし、「継起」の意味のまとまりのテーマは、時間の先後関係だけではない。例えば、「朝ごはんを食べて、学校へ行く。」は、自然に受け取れるが、「朝ごはんを食べて、ロボット開発をする。」という文は、意味的にやや不自然さを感じる。それは、「朝ごはんを食べて、学校へ行く。」は、「朝ごはんを食べる」と「学校へ行く」の事象間の関係を自然に読み取ることができ、テーマはスケジュールだと容易に理解できる。一方、「朝ごはんを食べて、ロボット開発をする」は、発信者はスケジュールについて述べているのかもしれないが、受信者がその関連づけを自然に受け取るためには、その発話の背景などが必要となる。「継起」の意味関係を表すテ形接続文は、事象発生の先後関係だけでなく、その事象間を関連づけるテーマが必要である。

- (2) a. 朝ごはんを食べて、学校へ行く。
- b. 朝ごはんを食べて、ロボット開発をする。



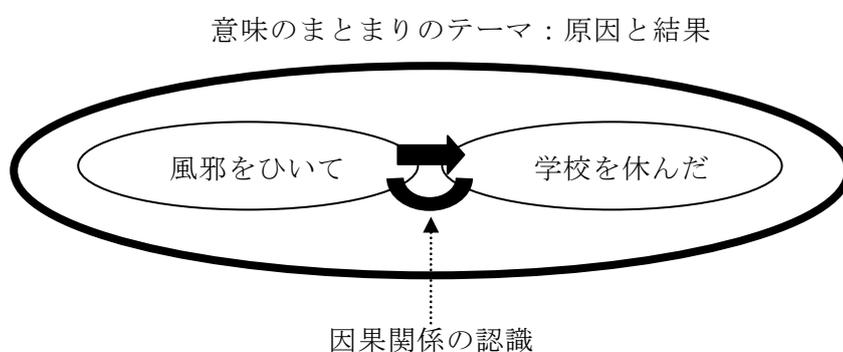
(図3) 「継起」関係を表すテ接続文の整合性

### 3.2.3 「因果」関係を表すテ接続文の整合性

「因果」の意味関係を表すテ接続文の意味のまとまりについて考察する。

「因果」の意味関係の解釈は、接続形式テの前後節の事象が、時間的に先後関係にあることが前提である。よって、「因果」も「継起」同様、基本的に時間の意味のまとまりを持

つ。そのうえで、受信者が事象間の関係を「原因—結果」の関係であると認識した場合に「因果」の意味関係を表すと判断する。例えば、「風邪をひいて、学校を休んだ。」は、「風邪をひいた」と「学校を休んだ」の事象間には、まず、事象が生起する先後関係という時間の意味のまとまりがある。そして、「風邪をひいた」という事象が、「学校を休んだ」という事象を引き起こしたという「原因—結果」の関係であると認識すれば、「因果」の意味関係を表していると解釈する。つまり、「継起」関係と同じく、時間の意味のまとまりを持つが、テーマは「原因—結果」である。しかし、時間の関係は客観的な情報であるが、「原因—結果」というテーマの読みとりは、受信者に委ねられている。受信者によっては事象間に特に「原因—結果」を読み取らない場合もある。



(図4) 「因果」関係を表すテ形接続文の整合性

また、因果関係の認識は、受信者の一般常識や、経験、文化的背景によるところが大きい。「薬を飲んで、病気が治った。」のような文は、受信者は因果関係を容易に認識できるであろう。一方、「薬を飲んで、病気が悪化した。」は、因果関係を認識すれば、「逆接」の意味解釈になるが、因果関係を認識しなければ、事象の生起順に並べた「継起」関係の意味解釈となる。薬は本来、病気を治すためのものであるということが受信者の背景知識として働けば、「薬を飲んだのに、病気が悪化した。」という逆接の意味に解釈できる。また、薬は本来病気を治すためのものであるが、必ずしも薬は病気を治すとは限らないという受信者の経験や知識も働いている。もしそれがなければ、この文は意味的には成立しない文となってしまうだろう。

テ接続文の因果関係の認識には、受信者の文化的背景も影響する。例えば、「雨が降って、ピクニックが中止になった。」という文は、受信者が日本居住者ならば、前後節の因果関係を認識することは容易であろう。しかし、「雨が降って、ピクニックに行った。」という文

は、一般的な日本の気候の知識などから接続の意味関係を解釈して、意味的に成立しないと考える受信者も多いであろう。しかし、非常に暑い気候地域の受信者であれば、この文は因果の意味関係を表していると解釈する場合もある。非常に暑い地域では、雨が降ると涼しくなるため、雨が降るとピクニックへ行くのは自然な行動だからである。

対象のテ接続文が「因果」関係を表していると解釈するどうかは、受信者が前後節の事象の因果関係を認識するかどうかによる。そして、その因果関係の読みとりは、受信者の経験・知識・文化背景などに影響される。

- (3) a. 風邪をひいて、学校を休んだ。
- b. 薬を飲んで、病気が悪化した。
- c. 雨が降って、ピクニックに行った。

### 3.2.4 「並列」関係を表すテ接続文の整合性

最後に、「並列」の意味関係を表すテ接続文の意味のまとまりを考える。

言語学研究会・構文論グループ(1989)は、接続形式テで繋がれた2つの動作が1つにまとまって、1つの「複合動作」を形作るとする。しかし、複合性に欠ける場合でも、ある動作が別の動作に先行・後続しなければならない必然性があり、ひとまとまり性を保っているとする。

また、吉永(2012)は、「並立」は、複数の事象を生じた時間に関係なく列挙したものであるとする。しかし、2つの事象は並存し、関係は希薄であっても、全く無関係ではなく、論理的な統一テーマ内で事象が繋がれていると述べる。

「並列」の意味を表すテ接続文は、前後節の主語が同じ場合と異なる場合がある。動作主が同じ場合は、「付帯(様態)」と同様に動作主について別の側面を述べており、動作主が統一テーマである。例えば、「兄は子どもが2人いて、大阪に住んでいる。」の意味のまとまりのテーマは、前後節共通の動作主である「兄」である。

「付帯(様態)」の場合は、同一動作主の動作とその動作の様態という緊密性の高い関係から、「付帯(様態)」のように動作—様態のような意味のまとまりのテーマを簡単に読み取ることができるが、「並列」は同一動作主であっても、それだけでは事象間の意味のまとまりを表すテーマを容易に読み取ることができない場合もある。

例えば「兄は子どもが2人いて、子どものころは昆虫採集が趣味だった。」という文は、

「子どもが2人いる」こと（現在の家族構成）と「子どものころは昆虫採集が趣味だった」（過去の趣味）という兄に属する2つの事象を並べているが、この2つの事象がどういう関係で繋がっているのか、意味のまとまりのテーマを見つけることは難しい。しかし、「兄は子どもが2人いて、昆虫採集が趣味だ。」という文の場合は、2つの事象は、いずれも現在の兄の属性について述べており、「現在の兄の家族構成と趣味」という「現在の兄の個人的な情報」というテーマを容易に見つけることができるであろう。

つまり、同一主語の事象を単に並べただけでは、意味的にはテ接続文は成立せず、事象間の意味のまとまりのテーマが必要なのである。

- (4) a. 兄は子どもが2人いて、大阪に住んでいる。  
b. 兄は子どもが2人いて、子どものころは昆虫採集が趣味だった。  
c. 兄は子どもが2人いて、昆虫採集が趣味だ。

一方、前後節の動作主が異なる場合は、それぞれの動作主の事象が、接続形式テによって接続され、並べられている。例えば、「兄は大阪に住んでいて、弟は東京に住んでいる。」という文は、2つの事象を表しているが、「兄弟」や「兄弟の居住地」などの意味のまとまりのテーマを持っている。

しかし、「兄は大阪に住んでいて、弟はピアノを弾いている。」というような文の場合は、「兄弟」というテーマで事象を並べていても、意味的にテ形接続文は成立しない。「大阪に住む」ことと、「ピアノを弾くこと」の関連づけを読み取ることができないからである。

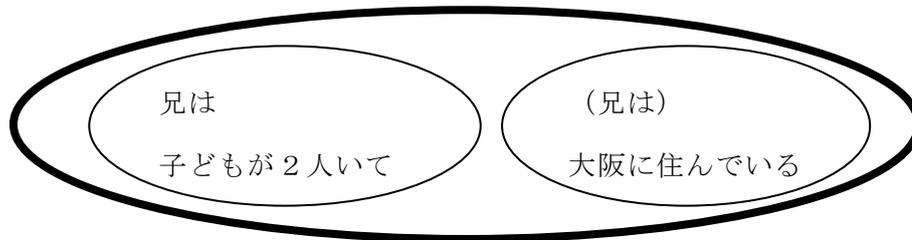
また、「兄は大阪に住んでいて、花子は東京に住んでいる。」のように、「居住地」というテーマで事象を並べていても、動作主である「兄」と「花子」の関係がわからない場合も、やはり意味的にテ形接続文は成立しない。

つまり、動作主が異なる「並列」の意味関係を表すには、前後節の動作主の関係を表すテーマと、動作主同士の事象を関連づけるテーマの、二重の意味のまとまりのテーマが必要なのである。そして、この二重の意味のまとまりのテーマによって、「並列」の意味関係を表すテ接続文の整合性が保たれるのである。

- (5) a. 兄は大阪に住んでいて、弟は東京に住んでいる。  
 ?b. 兄は大阪に住んでいて、弟はピアノを弾いている。  
 ?c. 兄は大阪に住んでいて、花子は東京に住んでいる。

《同一動作主の場合》

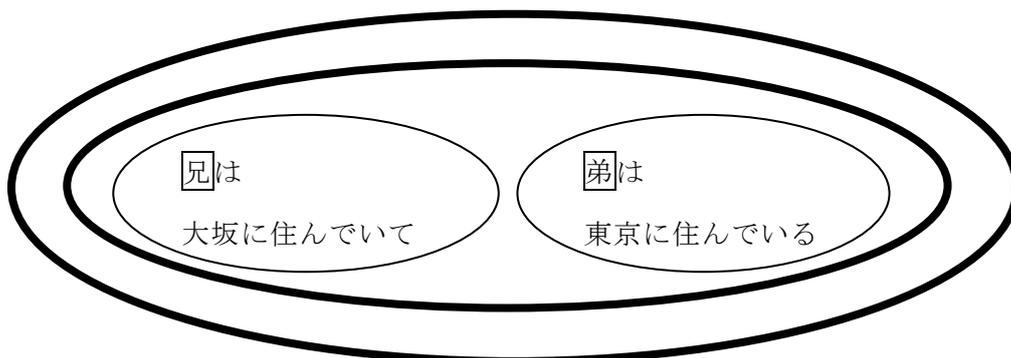
事象間の意味のまとまりのテーマ



(図5) 「並列」関係（同一動作主）のを表すテ接続文の整合性

《異なる動作主の場合》

動作主間の関係のテーマ・事象間の意味まとまりのテーマ

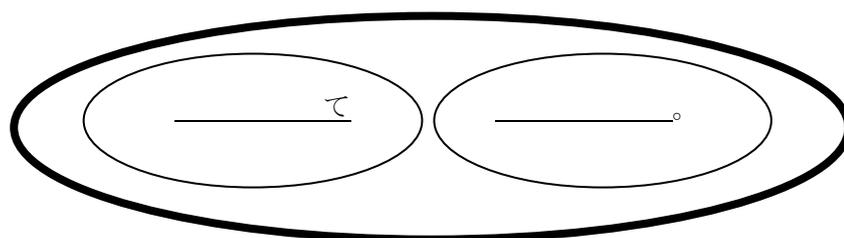


(図6) 「並列」（異なる動作主）を表すテ接続文の整合性

### 3.2.5 談話としてのテ接続文の整合性 まとめ

本節では、テ接続文には、接続された事象の意味のまとまりのテーマが存在することを確認した。意味のまとまりのテーマは、テ接続文が意味的に成立するための条件であり、談話としての整合性を保持する。意味のまとまりのテーマとは、つまり、事象間の関連づけである。その関連づけは、発信者の個人的な情報知識、経験、文化的背景などによってなされる。

意味のまとまりのテーマ



(図 7) 談話としてのテ接続文の整合性

### 3.3 テ接続文における事象関係の捉え方

ここまで、接続形式テは文を構造的に整えること、テ接続文の談話としての整合性は事象と事象を関連づける意味のまとまりのテーマによって保持されていることを確認した。次に本節では、テ接続文の複数の事象関係は、どのように捉えられているか、テ接続文の事象間の意味構築について認知言語学の「図と地」の考え方から考察する。

#### 3.3.1 認知言語学の考え方

まず、認知言語学の考え方を簡単に概観しておく。大堀（2002）は認知言語学（cognitive linguistics）とは「われわれが言語によって現実を理解し、行動する仕組みを明らかにする試み」であると説明する。山梨（2000）は、「認知言語学は、言語現象だけでなく言葉とその背後に存在する認知主体との関係を考慮に入れていくという点では、主体性（主観性）を重視する言語学のアプローチであると言える。」としながらも、決して主観主義のアプローチではなく、「主観性にかかわる言葉の世界と知のメカニズムを科学的に分析し、その諸相を厳密に体系的に研究していくという前提にたっている」と述べる。それまでの構造言語学や生成文法などのアプローチでは、言葉の背後に存在する主体の問題は捨象されてきた。それに対し、認知言語学のアプローチは、その主体を重視する。認知言語学のアプローチでは、分析の対象としての言語表現は、文法のどのレベルの言語形式であれ、言葉の背後に存在する主体の認知プロセスのダイナミックな発現の結果として規定される。

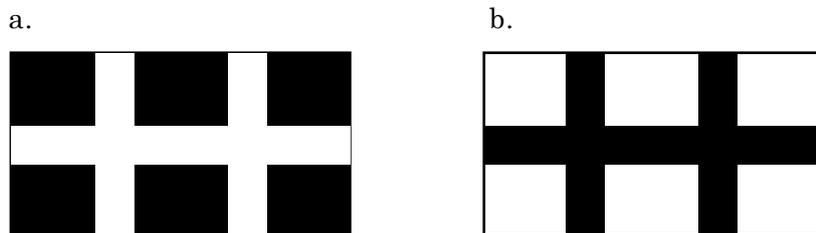
認知言語学の特徴として、認知プロセスの重視、非還元主義、背景知識の重視などが挙げられる。認知言語学では、生成文法のように言語能力が他の認知能力から自律しているとは考えない。言語活動は、知覚、イメージ形成、推論など一般的な認知能力に支えられていると考える。

非還元主義とは、全体は部分の総和以上であるとするゲシュタルト (Gestalt) <sup>2</sup> 的な考え方を指し、認知言語学では、この考え方をとっている。

また、認知言語学では、語の意味は「辞書的意味」だけではなく、社会に慣習化している語用論的意味や外的世界に対する背景知識などを広く取り込んだ「百科事典的意味」も含むと考える。

### 3.3.2 図と地からみたテ接続文の事象関係の捉え方

認知言語学では、対象の捉え方として、ある対象を「図」として認識し、他方をそれに伴う背景、「地」とする捉え方がある。わたしたちが対象を知覚する場合、その対象の際立ちの高い部分に焦点をあてて知覚する。この知覚される際立ちの高い部分を「図 (figure)」(前景)、その背景となる部分を「地 (ground)」<sup>3</sup> とみる。例えば、図 8 のように、同じ図形でも、黒と白の部分は視点の投影のしかたによって、交互にどちらにも浮き立って、また背景化して見える。この「浮き立つ」部分が、「図」である。白い部分が浮き立って見えれば、白い部分が「図 (前景)」、黒い部分が「地 (背景)」であり、逆に黒い部分が浮き立って見えれば、黒い部分が「図 (前景)」、白い部分が「地 (背景)」となる。



(図 8) 図と地 (山梨 2000:19)

この図 - 地 (前景 - 背景) の捉え方は、言語表現の認知にも関わっている。例えば、新情報を構成する部分は図、旧情報を構成する部分は地と捉えることができる。山梨 (2004) は、言語表現の認知的側面の違いについて、次のようにまとめている。

A. 新情報を構成する部分は図、旧情報を構成する部分は地

<sup>2</sup> ゲシュタルト (Gestalt) はドイツ語で「形」の意。ドイツの心理学者であるウェルトハイマーやケーラー、コフカ、レビンらが提唱したゲシュタルト心理学では、ゲシュタルトは全体が部分の総和からは単純に予測できない有機的な構成体として規定される。

<sup>3</sup> 山梨 (2000) は、「一般に、ある対象を把握していく場合、その対象の際立った部分に焦点をあてながら認知していく。」述べる。

- B. 断定されている部分は図、前提とされている部分は地
- C. ある存在の位置付けにかかわる場所ないし空間は地、そこに位置付けられる存在は図
- D. 移動する存在は図、その背景になる部分は地
- E. 省略されている部分は地、記号化されている部分は図

ただし、山梨（2004:100）は、図と地の区分は上記に限られているわけではなく絶対的なものではないとする。図と地の区分は、その言語表現の使用される文脈や状況との関連で相対的に決められると述べる。

また、Talmy（1978）によれば、従属節で述べられている事態は、主節で述べる事態にとって〈叙述の土台〉というべき機能を果たしているという。Talmy は、主節と従属節の関係が、図と地の関係になっていることを明らかにした。

しかし、山梨（2004:100）も述べるように、この主節 - 図、従属節 - 地の区分は、絶対的なものではない。樋口・大橋（2004:102）は、次の例を挙げて、「玄関のベルが鳴った」ことと、「時計が 10 時を打った」ことは、本質的に一方に際立ちがあると言った要因はないため、図と地の選択は話し手が現実をどのように認知したかによると述べる。

- (6) a. When the doorbell rang the clock struck ten.  
(玄関のベルが鳴ったとき時計が 10 時を打った。)
- b. When the clock struck the ten the doorbell rang.  
(時計が 10 時を打ったとき玄関のベルが鳴った。)

また、山梨（2004）は、事象が生起する順序、ないしは、行為のなされる順序に従って言語されている場合は、先行する文は、後続の文に比べて相対的に背景化されていると述べる。

- (7) a. 雨降って、地固まる.
- b. 来た！見た！勝った！
- c. I came, I saw, I conquered.

理由文の場合、理由は結果や帰結に時間的に先行するため、理由節が状況設定を行う地、主節が図になるとされる。しかし、樋口・大橋（2004:102）はこの理由文について、図と地の対応が逆転する場合もあるとする。下記の例のように、since 節は聞き手が了解ずみの事柄を表すために、相対的に主節の際立ちが高くなるが、試合が中止になった理由が話題になっている場合には、主節が地、理由節が図となり、図 - 地の対応が逆転する。したがって、図と地の分担には、このように何が話題になっているかという談話的な要因も関与すると述べる。

(8) a. Since it rained they canceled the match.      理由節：地、主節：図

(雨が降ったので試合は中止になった。)

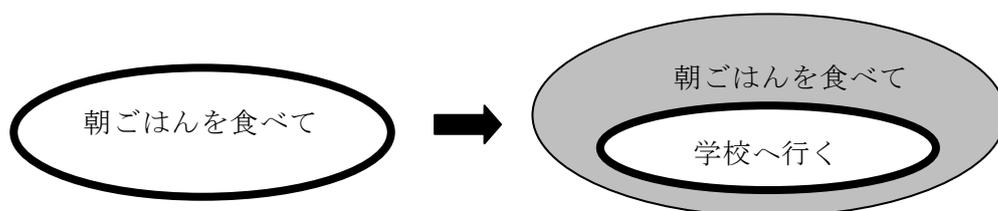
b. They canceled the match because it rained.      理由節：図、主節：地

(試合が中止になったのは雨が降ったからだ。)

以下、「継起」「因果」「付帯（様態）」「並列」の意味関係を表すテ接続文を、図と地によって区分をして、テ形接続文の意味の捉え方を考察する。

### 3.3.2.1 「継起」関係を表すテ接続文の図と地の区分

まず、「継起」の意味関係を表すテ接続文について、図と地の捉え方をみる。事象の生起する順に言語化されている文は、先行する文は、後続の文に比べて相対的に背景化されているとされる。例えば、「朝ごはんを食べて、学校へ行く。」は、先行する事象の「朝ごはんを食べる」は背景化されて地となり、背景化によって、後行の「学校へ行く」という事象が際立ち、前景化される。「継起」の意味関係を表すテ接続文の図と地の区分を図9に表す。なお、太線は「図」（際立ちの高さ）を表している。



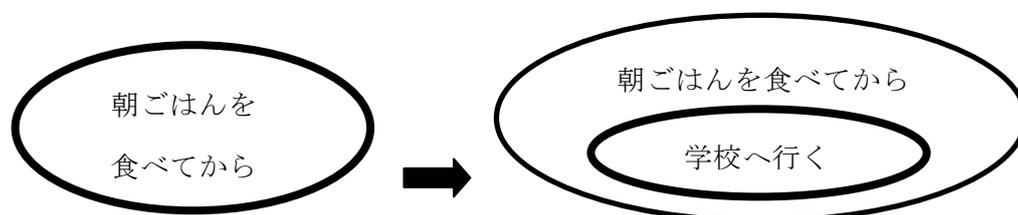
(図9) 「継起」関係を表すテ接続文の図と地

事象の発生順序にしたがって、事象を並べる「継起」関係を表す文は、新しい事象が言

語化される度に、先に述べられた事象は旧情報として背景化される。

ここで、テ接続文の特性を明らかにするために、継起関係を明示的に表す「カラ」の文と比較してみる。例えば、「朝ごはんを食べてから、学校へ行く。」という文は、テ接続文と同じく「継起」の意味関係を表す複文である。「カラ」の文も、事象の生起順に並べられており、旧情報を表す従属節のカラ節は背景化され、新情報を表す主節は図とみることができる。しかし、テ形接続文と比べると、その図と地の際立ちの度合いは異なる。

- (9) a. 朝ごはんを食べて、学校へ行く。  
b. 朝ごはんを食べてから、学校へ行く。



(図 10) 「継起」関係を表すカラ接続文の図と地

「テ」も「カラ」もともに、動作の順序を表すが、先行事象と後行事象の関係は、際立ちの度合いが違うと言える。

山梨 (2004:167) は、問題の事象が生起する順序に従って言語化されている場合、先行する文は、後続の文に比べて相対的に背景化されているとする。先行する行為が、後続する行為の成立のための前提条件として相対的に背景化されるために、口語表現では、接続詞が省略されることもあるが、それは、後続の行為の成立のための前提条件として、あまりにも自明であるために相対的に背景化されるのが自然であるためであると述べる。

- (10) a. Come and see me.  
b. Come see me.

また、山梨 (2004) は、「Come see me.」は、先行節－後行節が等位接続<sup>4</sup>の関係にあるとは言えず、全体で1つの行為として機能していると解釈するのが自然であるとも述べて

<sup>4</sup> 「等位接続」とは語や文や節が文法上対等関係にあることを指す。

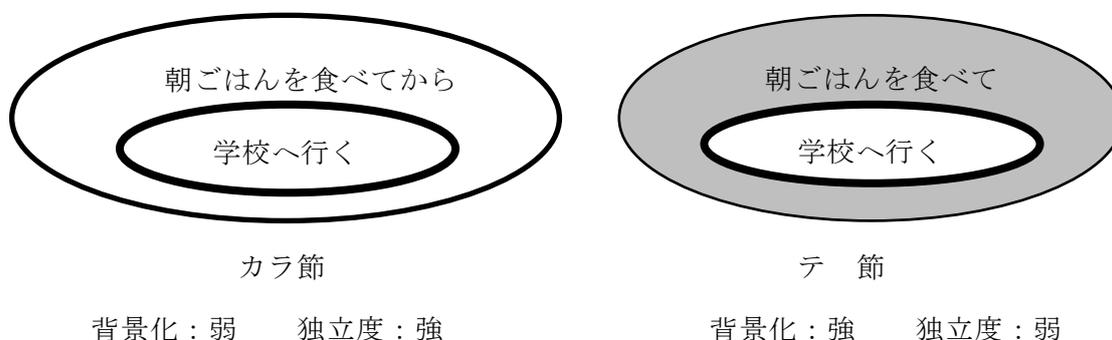
いる。

自明であることは背景化されるということは、テ接続文にも言える。下の例のように、先行する事象が、後行事象の前提条件である場合は、「テ」で表現するのが自然である。起点を焦点化したり、前提条件を強調したりする場合は、「カラ」で表現する必要がある。「テ」では、焦点化することができない<sup>5</sup>。

- (11) a. 朝起きて、顔を洗う。  
b. 朝起きてから、顔を洗う。

- (12) a. 手紙に切手を貼って、ポストに投函する  
b. 手紙に切手を貼ってから、ポストに投函する。

「カラ」接続文と比較すると、「継起」関係を表すテ接続文は、先行事象が背景化されて地となり、後行事象が図となるが、背景化の度合いは強いということが言える。一方、カラ節は、カラによって先後関係が焦点化されるために、前件のカラ節の事象が地となり背景化しても、その背景化の度合いはテ節に比べて弱い。このように、テとカラは、ともに「継起」関係を表していても、先行事象の背景化の度合いは異なる。先行事象の背景化の度合いは、先行事象と後行事象との関係の強さの度合いとも関係している。先行事象の背景化が弱い場合は、先行事象と後行事象の独立度も強くなる。逆に、先行事象の背景化が強い場合は、先行事象と後行事象の独立度は弱まり、2つの事象が一体化して1つの事象に近づく。

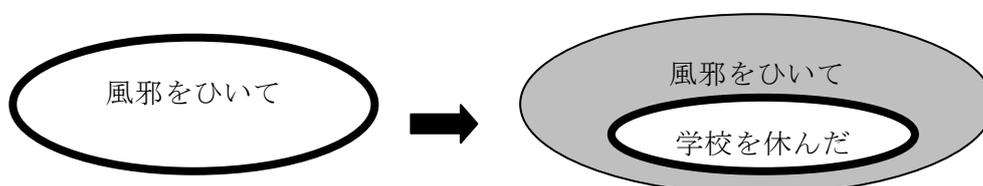


(図 11) 「継起」関係を表すカラ接続文とテ接続文の図と地

<sup>5</sup>前提条件が焦点化されると、図と地は逆になる。

### 3.3.2.2 「因果」関係を表すテ接続文の図と地の区分

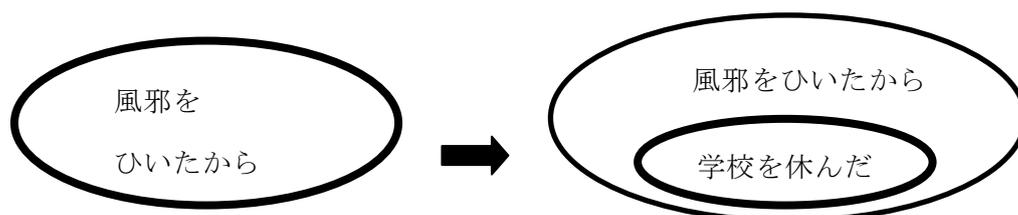
「因果」の意味関係を表すテ接続文を図と地で区分するとどうなるであろうか。「因果」関係を表すテ接続文は、「継起」関係を表すテ接続文の前後事象の関係が論理的に因果関係にあると読み手や聞き手が認識した場合、「因果」の関係を表すと解釈される。したがって、「因果」関係を表すテ接続文も、基本的に「継起」関係の上に成り立っている。例えば、「風邪をひいて、学校を休んだ。」の「風邪をひいた」と「学校を休んだ」は、事象の発生順に並んでいる。「継起」関係同様、先行事象の「風邪をひいた」は背景化されて地となり、後行事象の「学校を休んだ」は前景化されて図となる。



(図 12) 「因果」関係を表すテ接続文の図と地

また、「カラ」は「原因・理由」も明示的に表すことができる。「継起」関係同様、カラ節と比較して、「因果」関係を表すテ節の事象関係の捉え方の特徴を考えてみる。

「風邪をひいたから、学校を休んだ。」の「カラ」は、起点の「カラ」同様、焦点化されるために、テ節に比して、カラ節は背景化の度合いは弱い。



(図 13) 「因果」関係を表すカラ接続文の図と地

背景化の弱さは、つまり、独立度の強さを表す。カラ接続文は、テ接続文に比して、先行事象（原因・理由）と後行事象（結果）の事象関係は独立度が強い。背景化の度合いが強いテ接続文は、先行事象と後行事象の関係は独立度が弱く、文全体で1つの事態を表している。

ここで、「風邪をひいて、学校を休んだ。」と「風邪をひいたから、学校を休んだ。」とい

う文が発せられる現実世界の場面について考えてみたい。発生した出来事を述べるだけなら、「昨日、風邪をひいて休んだ。」のほうが自然な表現であろう。風邪をひいて学校を休むことは、日常生活の中でよくあることであり、「風邪をひく」ことと「学校を休む」ことの因果関係は、自明である。特に理由を強調する必要がなく、理由は背景化されている。一方、「昨日風邪をひいたから、学校を休んだ。」は、発信者に何か特に理由を強調しなければならない必要があるのではないかと推測してしまう。

- (14) a. 昨日風邪をひいて、学校を休んだ。
- b. 昨日風邪をひいたから、学校を休んだ。

しかし、理由と結果の因果関係があまり一般的とは言えない場合は、「カラ」で理由を強調させる必要がある。

- (15) a. 昨日雨が降って、学校を休んだ。
- b. 昨日雨が降ったから、学校を休んだ。

自明のことは背景化が強まる傾向がある。自明の事象を強調されると、受信者はかえって、別の意図を読み取ろうとする。この理由の背景化は、コミュニケーションにおいては、テによって理由を背景化し、因果関係を強調させないことで、自明の因果関係であることを表すことができる。例えば、「用事があって、早退します。」も、「用事があるから、早退します。」も、用事があることと早退することの因果関係を表している。テ節は背景化されるために、早退するという結果は際立つが、理由の背景化の度合いも強いために、因果関係は薄れている。しかし、テ節は背景としては機能しており、早退するという結果の事象を支え、理由はあえて説明する必要のない自明の因果関係であり、よって早退することは自然な行為であるという発信者の意図も相手に与えられる。

一方、カラ節は、その自明であるはずの因果関係を焦点化して、あえて強調しなければならない理由があるのではないかと、相手に余計な推測をさせてしまうこともあるだろう。場面によるが、学校や職場の早退の許可が必要な場合、この文の発信者と受信者は、許可をもらう者と与える者の関係にある。カラ節は、結果より理由を焦点化させ、許可を与える者（聞き手）に話し手が理由を特に強調しなければならない意図を推測させてしまうこ

ともある。場合によっては、その理由を焦点化される意図は早退の正当性の主張ととられる可能性もある。

- (16) a. 用事があって、早退します。
- b. 用事があるから、早退します。

カラ節を使用して、理由を焦点化して正当性を主張するか、テ節によって理由を焦点化せず、背景化を強めて原因と結果の因果関係は自明であることを述べるかは、発話の文脈や文化的背景などによるが、原因 - 結果を表すテとカラの違いは、原因・理由を背景化するか、焦点化するか、の違いなのである。

また、背景化の強さは、「継起」の意味関係を表すテ接続文同様、原因・理由の事象と結果の事象との一体化でもある。この一体化をならしめるのは、因果関係の自明性である。例えば、「風邪をひいて学校を休んだ」、「用事があって早退します。」は、因果関係の自明性が高く、受信者も負担なく容易に意味関係が推測できる。一方、「雨が降って学校を休んだ。」は、受信者が意味関係を推測するには、その発話の背景を想像するという負担がかかってしまう。

### 3.3.2.3 「付帯（様態）」関係を表すテ接続文の図と地の区分

では、「継起」関係や「因果」関係のように時間的に先後関係にない「付帯（様態）」関係を表すテ接続文はどのように図と地として捉えることができるだろうか。

例えば、「いすに座って話す」という文の一般的なイメージは、動作主が座った状態で話している状態であろう。動作主が座った結果が継続した状態で、同一動作主が話している状態であり、座った状態と話す状態が同時に進行している。しかし、現実には、対象が座りながら話し始めても、話している途中で座っても、現実の動作の先後関係には関わりはない。図と地という関係で捉えるならば、際立ちは主節の「話す」事象にあり、従属節の「座っている」という事象は付帯付的な事象で、際立ちは低くなる。従属節は、動作主の動作全体の一部しか表せず、背景化して地となる。

また、「ドレスを着て踊る」という文も同様である。「ドレスを着ている」事象と「踊る」事象は、現実には、「ドレスを着る」事象が先でなければ、意味的に成立しない。しかし、図と地の区分で捉えれば、どちらの事象に際立ちがあるかが問題であり、一般に主節のほ

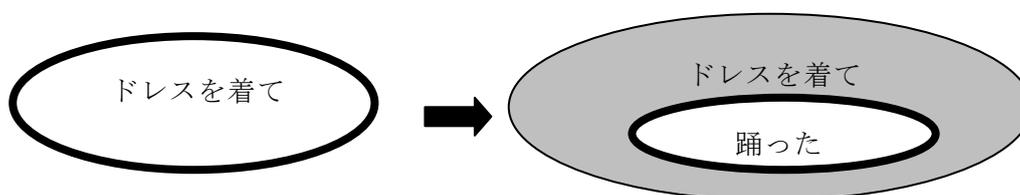
うが際立ちが高い<sup>6</sup>。ただし、文脈によっては、従属節ほうが際立つこともありうる。

(17) a. これまで授業中は決して座ることのなかったA先生が足にけがをした。

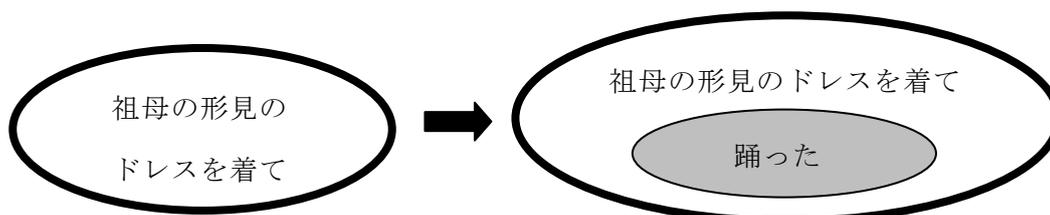
今日、A先生は、いすに座って話した。

b. 祖母の形見のドレスを着て踊った。

樋口・大橋（2004）も述べているように、テ形接続文の主節と従属節の関係は、必ずしも図と地ではなく文脈による。



(図 14) 「付帯（様態）」関係を表すテ形接続文 主節：図 従属節：地



(図 15) 「付帯（様態）」関係を表すテ形接続文 主節：地 従属節：図

しかし、主節と従属節のどちらの際立ちが高いかは、文脈によって異なるが、事象間の一体感は同じである。テの一体感を考えるために、ナガラ節と比較してみる。ナガラは、同時進行を表すが、テと交換可能な場合もある。

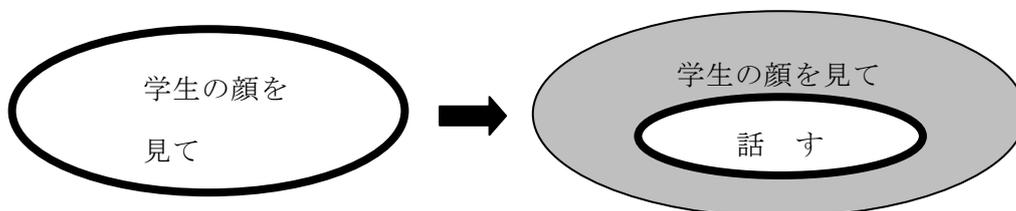
(18) a. 学生の顔を見て話す。

b. 学生の顔を見ながら話す。

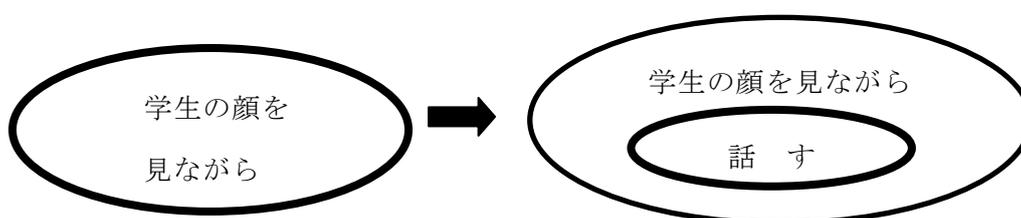
主節 - 図、従属節 - 地と考えるならば、テ節もナガラ節も背景化される。しかし、その

<sup>6</sup> Talmy (1978) は従属節で述べられている事態は、主節で述べる事態にとっての〈叙述の土台〉ともいふべき機能を果たしていると述べる。

背景化の度合いは異なっている。「ナガラ」は同時進行を表すため、「テ」ほど前件の事象は背景化されない。事象関係も独立度が強い。一方、「テ」は背景化の度合いが強く、事象の独立度は弱い。



(図 16) 「付帯 (様態)」 関係を表すテ接続文の図と地



(図 17) 同時進行を表すナガラ接続文の図と地

同様の例として、「ラジオを聞きながら日本語を勉強する。」という文の「ラジオを聞きながら」は、「ラジオを聞く」という事象の独立度が強く、ラジオの放送内容と日本語の勉強とは必ずしも関係はない。一方、「ラジオを聞いて日本語を勉強する。」の「ラジオを聞いて」は、テ節が日本語の勉強の手段・方法を表していると意味関係を推測することもできる。テは受信者にそう推測させるほど前後節の密接な関係を表しているのである。テは受信者にそのような事象間の関係性を推測させる力を持っている。

- (19) a. ラジオを聞いて日本語を勉強する。  
b. ラジオを聞きながら日本語を勉強する。

また、「歩きながら話す。」は日本語の文として意味的に成り立つが、「歩いて話す。」は意味的に成立しない。「歩く」という動作は、事象の独立性が強く、際立ちも高い。そのため、背景化しにくく、テ節を作ることができない。先の「座って話す」のような付帯状況を表す事象との違いである。

- (20) ? a. 歩いて話す。  
b. 歩きながら話す。

その他、以下のような例は、テとナガラの言い換えは可能であるが、事象間の関係は異なっている。テ節はナガラ節よりも強く背景化し、事象はより密接に結びついているのである。

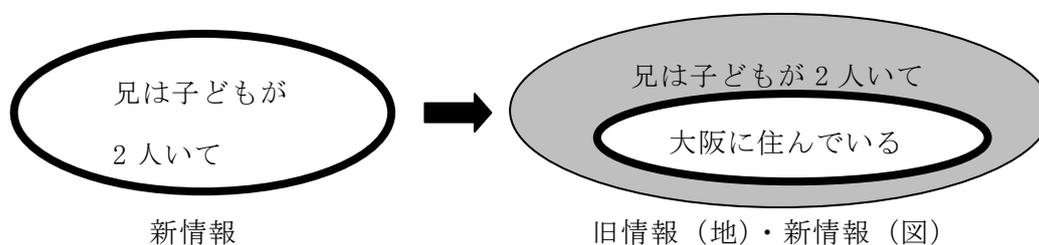
- (21) a. 図をかいて説明する。  
b. 図をかきながら説明する。

ナガラは同時進行、共存動作を表すとされる。しかし、テは事象の時間の同時性ではなく、テ節の事象の背景化によって、図になる主節の事象との一体化を表しているのである。

### 3.3.2.4 「並列」関係を表すテ接続文の図と地の区分

「並列」関係を表すテ接続文は、事象間に時間の先後関係はなく、事象は同時共存している。したがって、先行事象が背景化されて地となり、後行事象が図となるという、図 - 地の捉え方をあてはめることはできない。また、テで接続された前後の事象は、意味的に等しく、入れ替え可能である。どちらの事象がより際立って図となり、背景化して地となるか、区分することはできない。

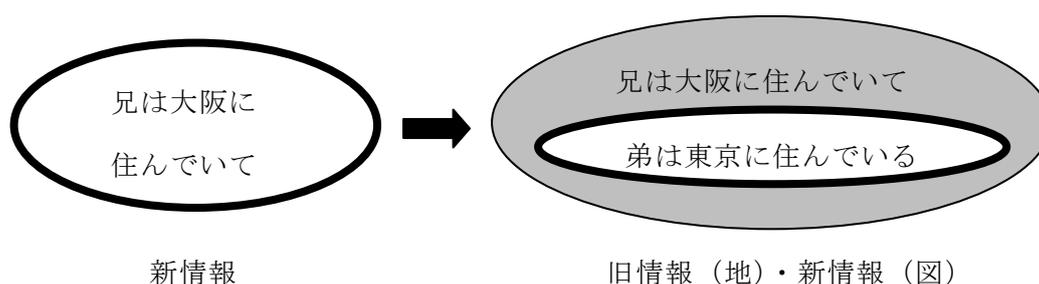
しかし、山梨(1995)の「新情報を構成する部分は図、旧情報を構成する部分は地」<sup>7</sup>という捉え方はできる。例えば、「兄は子どもが2人いて、大阪に住んでいる。」という文は、前節の「兄は子どもが2人いて」に続き、「大阪に住んでいる」という後続の文が発せられると、発話の順に従属節のテ節の事象は、旧情報となり、背景化され、後続の「大阪に住んでいる」は、新情報として際立ち、図となる。



(図 18) 「並列」関係を表すテ形接続文の図と地 (同一主語)

<sup>7</sup> 一般に英語の情報構造は旧情報から新情報へと並べられるとされている。日本語は英語に比べ語順が比較的自由であるが、本論では発話の時間的経過に沿って、先に述べた情報が旧情報となることから、テ接続文の前件の事象を旧情報、後件の事象を新情報と考える。

「並列」関係を表すテ形接続文は、事象の生起順ではなく、発話者の発話順に沿って、先に述べられたテ節の事象が旧情報として背景化され地となり、後続節の事象が新情報として際立ち、図となる。この旧情報＝地、新情報＝図という捉え方は、事象の動作主が異なる場合も同様である。例えば、「兄は大阪に住んでいて、弟は東京に住んでいる。」という文も、発信者の発話順に、「兄は大阪に住んでいて」が旧情報として背景化し、「弟は東京に住んでいる」は新情報として際立ち、図となる。



(図 19) 「並列」関係を表すテ接続文の図と地 (異主語)

「並列」の意味関係を表すテ接続文は、テの前後節は意味的に等位であり、入れ替えても意味内容は変わらない。しかし、2つの事象を同時に述べることは不可能であるから、発話者は、頭に浮かんだ順、認識した順に述べる。

- (22) a. 兄は子どもが2人いて、大阪に住んでいる。  
 b. 兄は大阪に住んでいて、子供が2人いる。
- (23) a. 兄は大阪に住んでいて 弟は東京に住んでいる。  
 b. 弟は東京に住んでいて、兄は大阪に住んでいる。

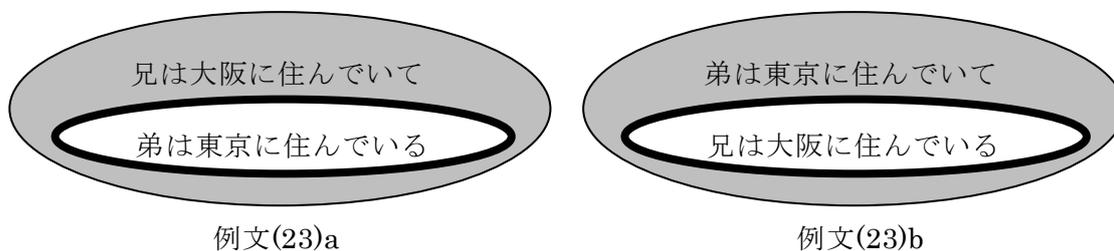
発信者が認識した順に述べるならば、発話者の意識としては、先に述べた事象のほうが、際立ちが高いとも言える。しかし、受信者には、先に述べられたことは背景化してしまうので、後に述べた事象 (新情報) のほうが際立ちが高くなる。「並列」関係を表すテ形接続文は、このように発信者と受信者では、際立つと認識する事象は異なってしまう。以下のような例文では、発信者はしたいことを意識に浮かんだ順に述べている。発信者が最もしたいこと、「温泉に入る」ことが先に意識に浮かんで発話しているが、受信者には発話の時

間の経過に沿って、先に述べられたことは背景化されて旧情報となり、際立ちは低くなっていく。そして、事象を入れ替えても全体の情報量の総和は変わらないが、発信者と受信者の認識は同じではなくなってしまう。

(24) 日本に行ったら、温泉に入って、富士山を見て、寿司を食べたい。

このように、「並列」関係を表すテ接続文は、事象と事象が意味的に等しい関係にあっても、現実世界では発話者の認識の順に発話されるが、受信者には発話順に先行事象は旧情報となり、背景化されていく。よって、事象間の意味的な関係は等しくとも、何を先に述べるかによって、発話者の認識と受信者のテ接続文全体の意味内容の捉え方には、認識の違いが生まれるのである。

- (23) a. 兄は大阪に住んでいて、弟は東京に住んでいる。  
 b. 弟は東京に住んでいて、兄は大阪に住んでいる。



(図 20) 「並列」関係を表すテ接続文の受信者の意味内容の捉え方

(表 1) 「並列」関係を表すテ接続文 発信者と受信者の認識と意味内容の捉え方

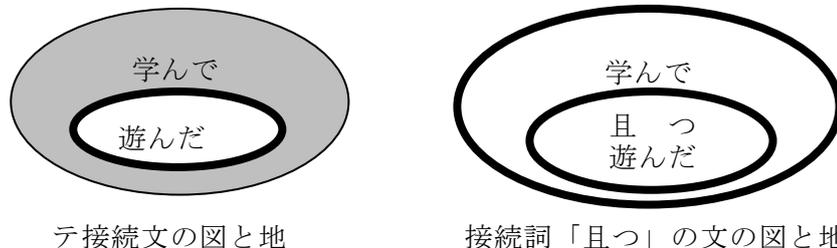
	兄は大阪に住んでいて 弟は東京に住んでいる。	弟は東京に住んでいて 兄は大阪に住んでいる。
発信者：認識順	兄 ⇒ 弟	弟 ⇒ 兄
受信者：発話順	兄：地（背景化） 弟：図	弟：地（背景化） 兄：図

「並列」関係を表すテ接続文は、発話時間の経過によって、前件の事象は背景化されて地となり、後件の事象は図になる。それでは、背景化の度合いはどうであろうか。「並列」

関係を表す接続表現「且つ」と比較して考えてみる。なお、「且つ」は、連用形（中止形）と共起することが多いが、テとの比較のため、テ節の文と比較する。

- (25) a. 大学時代は、大いに学んで、大いに遊んだ。  
b. 大学時代は、大いに学んで、且つ、大いに遊んだ。

テ接続文も、「且つ」も発話の経過にしたがって、ともに前件は旧情報となり背景化される。「且つ」は接続詞であり、前節の独立度は構文的に強い。そして、「且つ」は事象の並列を明示的に表すために、前件の事象が背景化してもなお、後件の事象とともに前件の事象を際立たせている。いわば、「且つ」によって、前件の事象は背景化が弱められる。



(図 21) 「並列」関係を表すテ接続文と「且つ」接続文の図と地

一方、テ接続文は、「且つ」に比して、テ節の事象の独立度は強くなく、背景化の度合いはより強い。次の例文を比較してみると、「且つ」の文は、やや不自然に感じられる。

- (26) a. 兄は子どもが 2 人いて、大阪に住んでいる。  
b. 兄は子どもが 2 人いて、且つ、大阪に住んでいる。

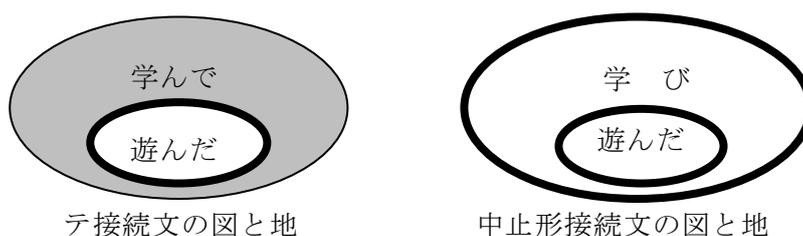
「且つ」の文は、テ節の文に比べると、前件の事象と後件の事象が際立ち、共に並び立っている。つまり、「且つ」の文の前件の事象は、背景化の度合いが弱いと言える。そして、テ節の文に比して、前件と後件の一体感がない。しかし、例えば、大阪在住の子育て中の親を対象にした調査をしたいなどというような場合は、「且つ」の文は、兄がその対象者の 2 つの条件に合致していることを表す文として、不自然ではない。この場合、「大阪在住」、「子どもがいる」という条件を両方際立たせる必要があり、むしろ、背景化によって前件の際立ちが弱くなることを避けなければならない。

以上、テ節の事象の背景化の度合いを、接続詞「且つ」の文との比較によって考察した。「且つ」は、前件の背景化を阻み、後件の事象とともに際立たせて2つの事象を共に焦点化させる。それに対して、テは、他の接続の意味関係を表す文同様、前件の事象を強く背景化し、後件の事象と一体化するのである。

また、中止形（連用形）と比較しても、テの背景化の強さがわかる。以下のテ節と中止形の例文を比較してみる。

- (27) a. 大学時代は、大いに学んで、大いに遊んだ。  
b. 大学時代は、大いに学び、大いに遊んだ。

中止形の前節は、テ節に比べて独立性が強く、背景化の度合いは弱い。一方、テ節は、中止節に比べ、前節のテ節の事象は強く背景化し、中止形の文の前節ほど際立たない。



(図 22) テ接続文と中止形接続文の図と地

以上、「並列」関係を表すテ接続文は、その他の「継起」、「因果」、「付帯（様態）」の接続関係を表すテ接続文同様、テ節の事象は背景化される。そして、その背景化の度合いは、同様に「並列」関係を表す「且つ」や中止形の文に比べると強い。したがって、「並列」関係を表すテ接続文は、並列される事象と事象の関係は、意味的には同等であるが、その事象の際立ち方は同じではなく、前節の事象が強く背景化されて、後節の事象が際立つという地と図の関係にあると言える。

### 3.3.3 テ接続文における事象関係の捉え方 まとめ

以上、テ接続文の事象間の関係の捉え方について、認知言語学の図と地の区分という捉え方から、接続の意味関係別に「継起」、「因果」、「付帯（様態）」、「並列」を表す文についてそれぞれ考察した。その結果、テ接続文は、どの意味関係を表す文も、前節にあたるテ

節の事象は背景化して地となり、後続節の事象は際立って図になることがわかった。さらに、類似表現との比較から、テ節の事象はその背景化の度合いが強いということもわかった。

強く背景化するとは、つまり、前節であるテ節の事象を際立たせず、後節の事象と一体化し、前後の事象を1つの事象として捉えるということである。しかし、1つの事象といっても、テ節の事象は背景として機能しており、前後節の事象の関係は、あくまで図と地の関係であり、前節のテ節の事象の上に、後続節の事象が成り立つという意味的な構造関係になっている。



(図 23) 図と地からみたテ接続文の事象関係の意味的構造

### 3.4 認知言語学的アプローチによるテ接続文の中核的な意味の構築

これまで、3.1でテ接続文は、接続形式テによって構造的に1つの文として整えられること、3.2で接続形式テによって接続された事象は、意味的なまとまりによって談話として整合性を保つこと、3.3で事象間の関係は、図と地の関係にあり、前件のテ節の事象は強く背景化し、一体化して1つの像を作ることをみてきた。3.1で述べたように、テ接続文の複数の事象は、一体化して1つの像を作る。この1つの像を作るのに、事象と事象の時間関係は大きな役割を果す。テ接続文の「継起」、「因果」、「付帯(様態)」、「並列」という接続の意味関係の捉え方は時間関係に拠るところが大きい。

本節では、テ接続文の時間関係の事象の捉え方を認知言語学の視点から考え、テ接続文の意味内容の構築に、時間関係がどのように関わっているかをみていく。

#### 3.4.1 テ接続文の事象間の時間関係の捉え方

テ接続の表す接続の意味関係は、一般に事象間の時間関係によって、先後関係であれば「継起」、同時あるいは、共時であれば、「付帯(様態)」、時間関係がなければ、「並列」と解釈される。しかし、この時間関係とは、事象の生起時間であろうか、それとも、発話者の認識した時間を指しているのだろうか。以下、認知文法の時間関係の捉え方から考える。

### 3.4.1.1 認知文法におけるテンスとモダリティ

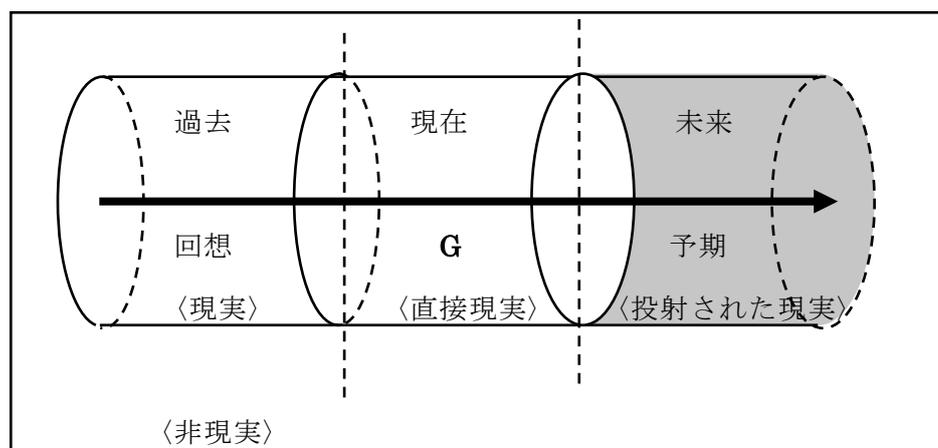
岡（2013）は、認知文法では、事態の生起時間ではなく、発話者の事態の捉え方によってテンスを規定すると説明する。

以下に、岡（2013:42-46）の認知文法の時制の捉え方の説明の一部を引用する。

Langacker(1991.Ch6)の基本的認知モデル（basic epistemic model）では、概念化者（発話者）が現実（reality）として承認している領域と、そうでない領域＝非現実（irreality）を分ける。そして、概念化者を直接取り巻く、概念化者が直接知覚する領域が直接現実（immediate reality）であるとする。また、基本的認知モデルは、直接は「過去・現在・未来」といった時間とは関係していないが、時間線モデル（time line model）によって、「過去・現在・未来」が導入される。「現在」は直接現実の領域とそこにあるグラウンド（G：発話者の今・ここ）を包括している一定の幅のある領域である。

直接現実の領域は知覚可能な領域であり、ここでモノや事態を「現認」する。これがテンス的には「現在」、アスペクト的には「継続」（未完了）となり、現代日本語ではテイル形で表される。現実領域にある事態は「回想」の作用によってテンス的に「過去」の事態と把握される。非現実の領域は非存在、否定、仮想世界などである。

基本的認知モデルの原点は、発話者の存在である。発話者の回想、現認、予期などの捉え方によって、テンスとモダリティを規定していく。

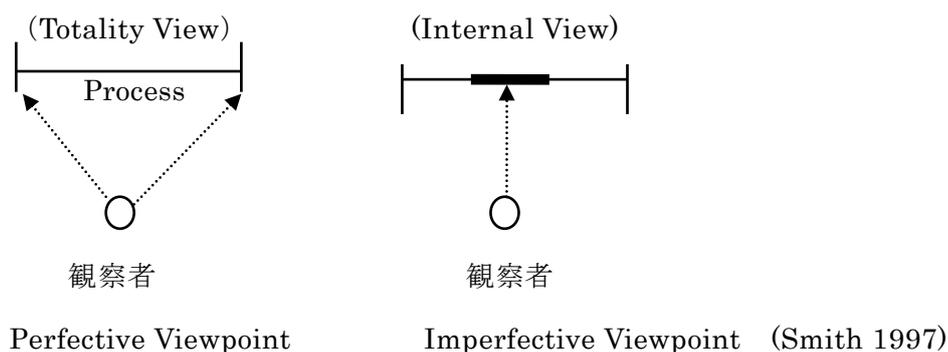


(図 24) 時間把握の基本的認知モデル（岡 2013:43）を簡略化

### 3.4.1.2 認知文法におけるアスペクトの把握

また、岡（2013:42-46）は、認知文法におけるアスペクトの把握を以下のように説明する。以下にその説明の一部を引用する。

Comrie(1976)は、アスペクトを **Perfective**（完結相）と **Imperfective**（不完結相）に規定した。**Perfective** とは「アスペクトは場面の時間的構成を捉える様々な仕方である」とし、「完成相は場面の終わりの部分をそのほかの部分よりも特に強調することなく、むしろ場面のあらゆる部分を単一の全体としてさしだす」とする。一方、「不完結相はある場面を内部から眺めて、その内的な時間構造をはっきり述べることである」とする。Comrie は、完結相はひとまとまり性 (*totality*) の観点から、不完結相は「状況の内部の視点」から捉えている。



(図 25) Perfective（完結相）と Imperfective（不完結相）（岡 2013:45）

工藤（1995）は、「運動（動作、変化）の成立＝開始限界から終了限界までを全一的にとらえる」〈ひとまとまり性〉と「開始の時間的限界か終了の時間的限界のどちらかのみをとらえる」〈限界達成性〉から、「スル（シタ）」と「シテイル（シテイタ）」のアスペクトの意味を述べている。

この工藤（1995）の〈ひとまとまり性〉は、Comrie（1976）に通じている。工藤は以下の例を挙げて説明している。

(28) 昨日、妹がつくってくれというのでピンポンの台を作ったよ（その妹）

(29) 小母ちゃんが来ていて荷物を作っていた（あすなる物語）

工藤は「作った」のようなスル形式は、動作が始まってから終わるまで全体を〈ひとまり性〉においてとらえているのに対し、「作っていた」のようなシテイル形式（能動）は、開始限界、終了限界を無視して、時間的に限界づけずに〈動作の継続性〉をとらえていると述べる。話者がどこに焦点をあてているか、工藤（1995）の〈ひとまり性〉と〈動作の継続性〉は、Comrie(1976)の **Totality View** と **Internal View** にあてはまる。工藤は、動詞を主体動作・客体変化動詞、主体変化動詞、主体動作動詞に分類し、それぞれ「スル」と「シテイル」のアスペクトの意味について述べている。

Comrie（1976）の **Perfective**（完結相）と **Imperfective**（不完結相）の対立は、発話者の観点（**view point**）に基づいている。

一方、Langacker（1991）の認知文法では、プロセスの変化を含む完了プロセス（**perfective process**）と変化を認識できない未完了プロセス（**imperfective process**）に分けて考える。完了プロセス（**perfective process**）は、「葉っぱが地上に落ちた」のように時間の流れにおいて変化が認識される事態であり、変化を認識できない未完了プロセス（**imperfective process**）は、「花瓶がテーブルの上にある」のように時間が流れても変化はない事態である。Comrie に代表される一般的なアスペクト論では、動詞自体が持つ意味や、文型（スル・テイル等）の文法形式が、**Perfective**（完結相）であるか、**Imperfective**（不完結相）であるかを担うが、認知文法では、動詞句が完了プロセス（**perfective process**）であるか未完了プロセス（**imperfective process**）であるかを担う。

例えば、Comrie（1976）は、**perfective / imperfective** の区別を、単純形（**simple form**）／進行形（**progressive form**）という形の対照によって例示している。

- (30) a. He *read* a book.           (彼は（一冊の）本を読んだ。)  
      b. He *was reading* a book.   (彼は（一冊の）本を読んでいた。)

(30)a の「1冊の本を読む」行為は、「始まって終わるひとまとまりが意識でき完結的である」という意味で、**perfective**（完結相）であるとし、(30)b は、動作がその進行の途中の時点から表現されていて、動作が未完結で継続中の場合が、**imperfective**（不完結相）であるとする。

しかし、樋口（2004）は、この対照が見て取れるのは、これらが過去形だからであり、次のような現在形の場合は、ひとまとまりの動作というよりは、習慣であり、完結的とは

言えないと述べる。そして、習慣は、継続中の事態であり、*imperfective*（不完結相）であると述べ、単純形=*perfective* という対応は成り立たないとする。

- (31) a. He *reads* a book every day. (彼は毎日 (一冊の) 本を読む。)  
b. He *is reading* a book. (彼は(一冊の) 本を読んでいる。)

また、Langacker (1991:201-207) は、進行形は *perfective* な事態を-ing 形で包み込んで時間的要素を写像したものに *be* 動詞を加えた、*be+V-ing* という形で「V の表す事態の途中としての (internal) *imperfective* (未完結) な事態」を表すものと説明する。つまり、*reading* には、*read a book* という 1 回の完結的動作を-ing の形によって包み込んでおり、*read* と同じく、*perfective* (完結) であると考えられる。

樋口 (2004) は、認知文法では、*imperfective* (未完結) な事態とは、気づいたときにはすでにその状態に入っていて終りも意識されない「イメージの射程内に変化を意識しないもの」であり、*perfective* (完結) な事態とは、イメージの射程内に変化が認識できるものであると説明する。例えば、*read* は動作の途中の状態や習慣を表し、その状態の終わりは描写イメージに含まれないため、*imperfective* (未完結) な事態とされる。一方、*He is sleeping* (彼は眠っている) や、*He slept well* (彼はよく眠った) の *sleep* は、通常眠りに落ちて目覚める区切りが意識される動作として理解されているので、*perfective* (完結) であるとする。*perfective/imperfective* の解釈は、客観的な事態に境界があるか否かというより、話し手が描写の認知対象として、変化を意識するか否かであるということである。

また、樋口は動詞だけの典型的なイメージでは、*perfective* か、*imperfective* か解釈できず、文中の他の要素との相互作用によって解釈が決まる場合があると述べる。

- (32) a. This road *winds* through the mountains. (この山道はまがりくねっている。)  
b. This road *is winding* through the mountains.  
(この山道はまがりくねっている。)

(32)a の *wind* は、イメージ自体には時間の経過に伴う変化はなく、*imperfective* であるが、(32)b の *wind* には、車を走らせたりしながら刻々変化する *perfective* な情景がイメー

ジされるところ。

Comrie (1976) の完結相／不完結相の対立は、発話者の観点 (Viewpoint) に基づいており、Langacker (1991) の完了／未完了プロセスの対立は、プロセスに内在する時間的な有界性 (temporal boundedness) による対立である。Smith(1997)は、この観点アスペクトと状況アスペクトは、二重性をなすものであると述べる。

以上、認知文法におけるテンス、モダリティ、アスペクトの捉え方についてまとめた。認知文法の捉え方の基本は、事態そのものを辞書的な意味や、事態そのものの発生時間など客観的に捉えるのではなく、話者がその事態をどう捉えるか「話者の認識」である。次節では、この話者の認識という視点から、接続形式テの中核的意味を捉えてみる。

### 3.4.2 認知文法からみたテ接続文の重層的意味構築

従来、接続形式テによって表される接続の意味関係は、接続された事象間の関係から「継起」、「因果」、「付帯 (様態)」、「並列」に分類されてきた。これらの接続の意味関係の分類は、語彙的意味による分類である。本節では、語彙ではなく、それらの分類に根底にある、接続形式テの中核的な意味を探る。語彙的意味による接続の意味関係の分類は、事象間の意味的な関係を捉えてはいるが、それらの複数の事象が、最終的な全体像としてのどのような意味内容を構築するのかまでは捉えていない。本節では、認知言語学の図と地の捉え方を踏まえ、テ接続文がどのような全体像を構築するのかをみていく。

#### 3.4.2.1 「付帯 (様態)」関係の意味構築

前節では、接続形式テで接続された前後の事象が、地と図の関係にあり、テ節の事象は強く背景化されることをみた。テ節の事象は強く背景化されるが、消えることはなく、その背景化によって地となり、後件の事象が図として成り立つ、いわば、共存関係にある。後件の事象を成り立たせるための下地を作っているともいえる。

このことは「付帯 (様態)」関係を表すテ接続文に最もよく表れている。

(33) ドレスを着て 踊る。

「ドレスを着て」は、3.3.2 で述べた通り、主体動作の一部を表しており、「着る」とい

う事象と「踊る」という事象は、生起した時間に沿って並べられてはいるが、読み手あるいは聞き手である受信者はそれぞれの事象の生起時間を意識してはおらず、イメージとしては、写真のように固定された1つの像である。接続形式「テ」は、事象を重ねて、1つの像を作る働きをしている。事象間の時間関係からみれば、「同時／共時」であると言えるが、受信者の認識という視点から見れば、それぞれの事象の生起時間を意識してはいないであろう。次のような例は、時間が認識されていないことがより明確である。

(34) 先生は いすに座って 話した。

先生は大学の講義などで最初から最後まで座っていたのかもしれないし、実際には途中、立つこともあったのかもしれないが、受信者の捉えたイメージは、「座って話す」という1つの像である。事象間の時間関係を意識せず、また、「座る」と「話す」を2つの事象を別々に捉えているのでもなく、受信者捉えているイメージは、あくまで1つの像である。

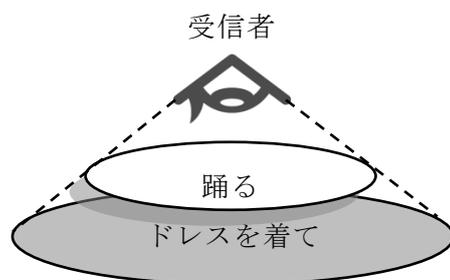
また、前節で、発話者は認識の順に話すと言った。「付帯（様態）」関係を表すテ接続文をみると、服装、姿勢、表情など、部分から先に述べるのがわかる。

(33) ドレスを着て 踊る。

(35) 座って 話す。

(36) 笑って 話す。

時間を意識しないのであれば、主体の主動作を先に述べることもできてもよさそうだが、服装、姿勢、表情などは、先に述べることで、地として背景化する。先行するテ節は、1つの像の背景を作り上げるための、下地作りの役割を担っていると言える。



(図 26) 「付帯（様態）」関係を表すテ接続文の像の形成

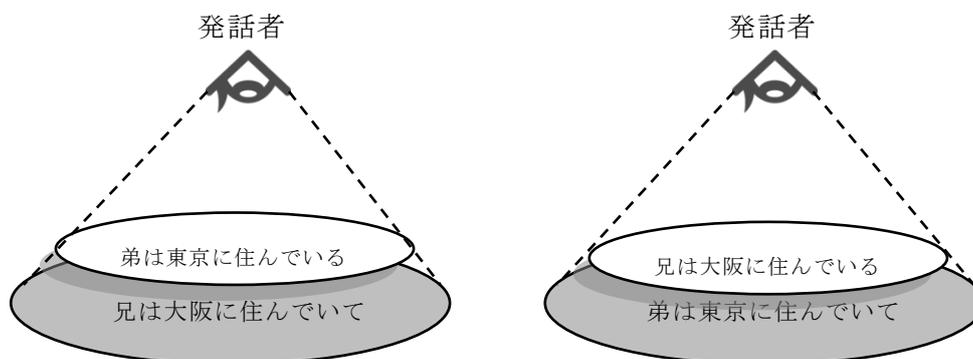
### 3.4.2.2 「並列」関係の意味構築

「並列」関係を表すテ接続文は、事態関係が共存関係にあり、事象の生起時間には関わりが無い。2つの事象は意味的に対等であり、前後の事象を入れ替えても情報量の総和量は変わらないとされる。

3.3.2でも述べたように、「並列」関係を表すテ接続文は、事象の生起時間に関わりがないため、発話者の認識の順に述べられる。一方で、「付帯(様態)」関係同様、先に述べられる前件のテ節の事象は背景化して地となり、同時に図となった後件の事象は図となって、1つの像を作る。

「並列」関係を表すテ接続文の前後の事象を入れ替えても、情報量の総和は変わらないが、作り上げる像は異なる。例えば、以下の例文(23)のaとbの文の情報量の総和は同じであるが、図と地の区分を表すと、図と地が反転し、作り上げられる像は異なる。作り上げられた像の図と地の異なりは、発話者の認識の違いを表す。文全体の情報量は同じでも、発話者の認識は同じではない。

- (23) a. 兄は大阪に住んでいて 弟は東京に住んでいる。  
b. 弟は東京に住んでいて、兄は大阪に住んでいる。



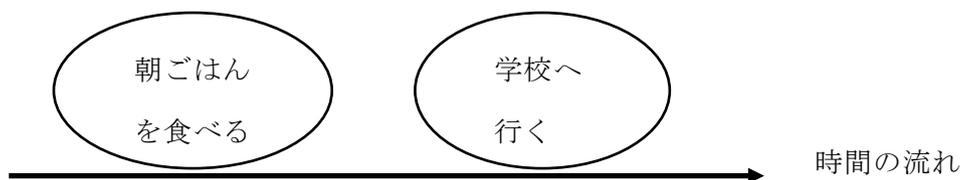
(図 27) 「並列」関係を表すテ接続文の発話者の認識

### 3.4.2.3 「継起」関係の意味構築

「継起」関係を表すテ接続文は、事象間の時間関係を強く意識して捉えている。それではこの「継起」関係のテ接続文から、どんな1つの像を形作るのでしょうか。

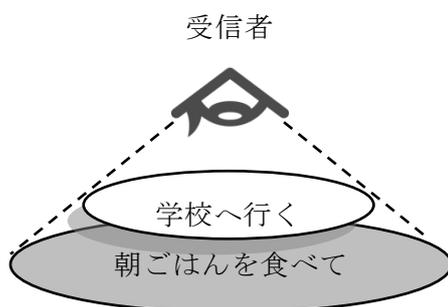
(37) 朝ごはんを食べて、学校へ行く。

例文(37)は事象の生起順序に沿えば、「朝ごはんを食べる」と「学校へ行く」は時間軸に沿って、横並びである。



(図 28) 「継起」関係を表すテ接続文の事象の生起順序

「継起」関係を表すテ接続文も、3.3.2 で述べたように、先行するテ節の事象は背景化されて地となり、後件の事象は図となって、1つの像を作る。



(図 29) 「継起」関係を表すテ接続文の像の形成

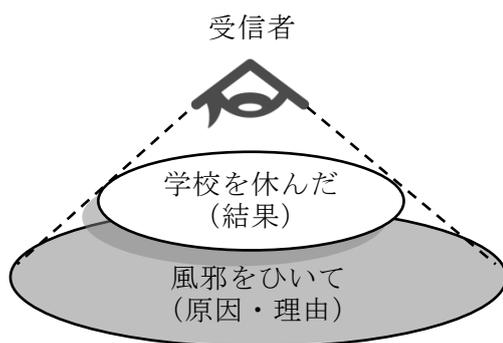
テ節の事象は背景化しても、消えるわけではない。後件の事象を受けとめるための下地として機能している。2つの事象は重なって、1つの像を作る。事象の生起時間に沿えば、事象は時間軸に沿って横並びになるが、文全体の像の形成は、縦に重層的に積み重ねられるのである。

#### 3.4.2.4 「因果」関係の意味構築

「因果」関係を表すテ接続文も「継起」関係と同様である。これまで述べてきたように、「因果」関係を表すテ接続文も事象間の時間関係は「継起」である。そのうえで、読み手

または聞き手である受信者がその事象間に「因果」関係を認識すれば「因果」関係を解釈できるという、受信者の認識次第の意味関係である。したがって、「因果」関係を表すとされるテ接続文も基本的には、「継起」関係を表している。

(38) 風邪をひいて 学校を休んだ。

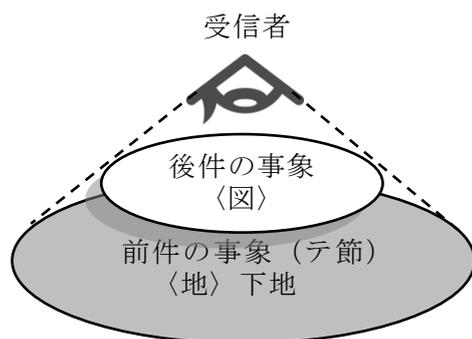


(図 30) 「因果」関係を表すテ接続文の像の形成

「風邪をひいて学校を休んだ。」も「継起」関係のテ接続文同様、時間的事象関係は時間軸に沿って横並びである。しかし、図と地の関係から見ると、原因・理由を表す前件のテ節の事象は背景化されて地となり、結果を表す後件の事象は図となり、1つの像を作る。ただし、図と地の関係に、原因—結果の関係を読み取るかどうかは、受信者の認識による。

#### 3.4.2.5 認知文法からみたテ接続文の重層的意味構築 まとめ

以上、テ接続文の先行するテ節の事象が背景化されて地となり、その上に後件の事象が図となって重ねられ、1つの像を作ることを述べた。この「像」とはつまり、テ接続文が最終的に構築する全体像、意味内容を指す。テ節は、全体像構築のための下地を作り、その上に後件の事象を重ねて、1つの全体像、意味を構築するのである。テ接続文の意味内容は、重層構造をなしていると言える。



(図 31) テ接続文の意味構築

### 3.4.3 接続形式テの事象認識の歴史的变化

前節では、テ接続文の意味は、前件のテ節の事象を背景化して「下地」を作り、その上に、後件の事象を重ねて、1つの全体像の作ることによって構築されることを述べた。このテ接続文全体像の意味構築は、事象間の生起時間の関係という捉え方を外して、全体の意味像の捉え方を示すものである。しかしながら、全体像を捉えるにも、事象の時間的關係は存在しており、時間をどう捉えるかは、テ接続文の意味構築には重要な要素である。本節では、認知文法の視点から事象認識の時間的な捉え方を考える。

山梨(1995)は、言語主体が外部世界を認識し、その対象を記号化する際の傾向の1つとして「事象の生起の順序関係を反映する傾向」を挙げている。テ接続文もこの傾向が認められる。しかし、厳密に言えば、事象の生起の順序ではなく、言語主体である発話者の認識の順である。前節でも触れたように、認知文法では、事象の生起時間ではなく、発話者の事象の捉え方によってテンスを規定する。

テンス(時制)はもともと、インド・ヨーロッパ語などの文法カテゴリーだと言われている。日本語は時制がない、あいまいだと言われる<sup>8</sup>。テ接続文の事象は、どのように時間的に捉えられているだろうか。本節では、接続形式テの時間認識の歴史的变化から「テ」の時間認識の本質的な捉え方を探る。

<sup>8</sup>『岩波古典辞典』(1974 大野晋ほか)には、古代の日本人にとって、「未来」は話し手の漠とした予想・推測そのもの、「過去」は話し手の記憶の有無、あるいは記憶の喚起そのものであり、ヨーロッパ語で示される時の把握の仕方とは根本的に相違があると述べられている。

### 3.4.3.1 古典文法「テ」の時間認識

接続形式「テ」は、元々は、助動詞「ツ」の連用形「テ」から独立したものと言われている<sup>9</sup>。古くは奈良時代の文献にも使用が認められる。助動詞「ツ」は、完了の助動詞とも言われるが、厳密には、開始されたある動作が持続・進行の段階を経て、完了している時に、「～てしまった」の意味で使われる。したがって、過去・現在・未来という時制に関係なく、過去、現在、未来の動作についても述べることができたとされる。この「ツ」が時制と関係がないことは、「ツ」が未来を表すということに最も顕著に表れている。「ツ」で未来を表す例文(41)「門よくさしてよ。雨もぞ降る」を見ると、「門よくさしてよ」は、「門を閉める」という動作を完了させることを命じているのであり、実際には動作は完了していない。また、例文(42)の「黄葉を取りてむ」も、未来において「黄葉を取る」ことを実現させる意志を表しているのであり、「取る」動作は発話の時点では完了していない。よって、助動詞「ツ」は、本質的には、動作、作用、状態などの実現が確かなことであることを確認、確述する意味を表すと言われる。

なお、以下の古典の文例文及び現代語訳は『新編日本古典文学全集』（小学館）による。ただし、例文(50)の出典は『日本古典文学大系』（岩波書店）、現代語訳は『古典基礎辞典』（角川学芸出版）によった。下線は筆者によるもの。

#### 【過去】

- (39) 剣大刀身に取り添ふと夢に見つ何の兆<sup>さか</sup>そも君に逢はむ為 (万葉集)  
(剣大刀を肌身に添え持ったと夢に見ました 何の前触れでしょう ええあなたに逢いたいためなのです)

#### 【現在】

- (40) 年ごろの忍びがたき世のうさを過ぐしはべりつるに、かくおぼえぬ道に誘<sup>いざな</sup>はれて、遙かにまかりあくがること (源氏物語)  
(長年の堪えがたい浮世の苦勞をなめてまいりましたのに、こうして思いがけない旅に誘われて、遠い国までさまよって行くことになりました)

---

<sup>9</sup> 『岩波古典辞典』（1974 大野晋ほか）「つ」は「棄（う）つ」からの転成という説もある。物を意志的に眼前にほうり出してしまう意の「棄つ」のはじめの母音を脱落した「つ」は、作為的・人為的な動作を示す動詞や、使役の助動詞「す」「さす」の下について、すでに動作をしてしまったという完了の意を示すとされる。

## 【未 来】

- (41) 門よくさしてよ。雨もぞ降る (徒然草)  
(門をよく閉めてしまいなさいよ。雨がふるかもしれない。)
- (42) このしぐれいたくなふりそ我妹子にみせむがために黄葉取りてむ (万葉集)  
(このしぐれよ ひどくは降るな 愛妻に見せるため紅葉を折り取ってやろう)

古典文法の「テ」はこの話者の「実現の確認」を表す助動詞「ツ」が転化して成立したと言われる。一般に古典文法では「テ」は接続助詞とされているが、奈良時代には「テ」は、すでに助動詞「ツ」の連用形「テ」とは異なる使い方がされていた。「テ」は、万葉集にも用例が多く見られるが、佐藤(1969)は、次のような例を挙げて助動詞としての一般の用法からぬけ出ている場合は助詞とみるべき理由があると述べている。

- (43) 木高くて里はあれども (万葉集)  
(こんもりと里は茂っていますが)
- (44) 今日よりは顧みなくて大君の醜のみ楯と出で立つ我は (万葉集)  
(今日からは振り返らずに大君のつたない護衛者として出かけて行くのだおれは)
- (45) 遠くあれば一日一夜も思はずであるらむものと思ほしめすな (万葉集)  
(遠くにいるから一日一夜も思わずにいるだろうなどと思ってくださるな)

佐藤(1969)は、形容詞は本来、形容詞の連用語尾カリ活用に助動詞が接続する。(43)「木高かり+て(助動詞)」となるべきところを、上記の例は「木高く+テ」となっている。よって、「テ」は助動詞本来の用法ではないとされ、この「テ」は助動詞「ツ」の連用形ではないとする。同様に、例文(44)「顧みなくて」も、「顧み(動詞)+なし(形容詞)」とすれば、「テ」もやはり、助動詞「ツ」の連用形ではないと述べる。また、本来、助動詞「ツ」は「ズ」に付くことがないことから、例文(45)は例外であり、助動詞からは離れた「テ」であるとしている。

以上のように、奈良時代には、「テ」は助動詞「ツ」の連用形「テ」とは別のものとして考えられていたようである。そして、元の助動詞としての働きから離れた「テ」は、動詞、形容詞に接続して、現代に至るまで、広く使われている。

### 3.4.3.2 古典文法の「テ」接続の意味用法

古典文法で接続助詞とされる「テ」の意味用法は、現代語の接続形式「テ」の意味用法とほぼ重なる。古典語の「テ」も現代語と同じく、「テ」そのものは、接続の意味関係を表さない。しかし、古典語の「テ」の意味用法の範囲は現代語に比べ広い。古典語の「テ」の意味用法は、おおむね次の6つ、①付帯（様態）、②継起、③因果、④並列、⑤仮定、⑥思考知覚内容が挙げられる。①～④の意味用法は、現代語の「テ」とほぼ同じである。⑤仮定と⑥思考知覚の内容を表す意味用法は、現代語にはない古典文法の「テ」の意味用法である。表2に現代文法と古典文法「テ」の意味用法をまとめる。

(表2) 現代文法と古典文法の「テ」意味用法

現代文法	古典文法	文 例	接続
①付帯 (様態)	①付帯 (様態)	白き衣、山吹などの妻 <sup>な</sup> えたる着 <sup>き</sup> て走り来たる女子 <sup>をむなご</sup> (源氏物語)  (白 <sup>がさね</sup> い下着 <sup>うわぎ</sup> に山吹 襲 <sup>うわぎ</sup> など着 <sup>き</sup> なれた表着 <sup>うわぎ</sup> を着 <sup>き</sup> て、走 <sup>は</sup> って来 <sup>き</sup> た女 <sup>をむなご</sup> の子 <sup>こ</sup> は)  三寸ばかりなる人、いとうつくしう <sup>て</sup> みたり。 (竹取物語)  (三寸ばかりの人が、たいそうかわいらしい姿でそこにいる。)	動詞      形容詞
②継起	②継起	春 <sup>は</sup> 過ぎ <sup>て</sup> 夏 <sup>きた</sup> 来 <sup>ら</sup> し白 <sup>あめ</sup> たへの衣 <sup>あめ</sup> 干 <sup>あめ</sup> したり天 <sup>あめ</sup> の香 <sup>あめ</sup> 具 <sup>あめ</sup> 山 (万葉集)  (春 <sup>は</sup> が過ぎ <sup>て</sup> 夏 <sup>きた</sup> が来 <sup>ら</sup> たらしい 真 <sup>ま</sup> っ白 <sup>しろ</sup> な衣 <sup>あめ</sup> が干 <sup>あめ</sup> してあるあ <sup>あめ</sup> の天 <sup>あめ</sup> の香 <sup>あめ</sup> 具 <sup>あめ</sup> 山 に)	動詞
③因果	③因果	八日。さ <sup>は</sup> る <sup>こと</sup> あり <sup>て</sup> 、なほ同 <sup>な</sup> じと <sup>こ</sup> ろなり。 (土佐日記)  (八日。さ <sup>は</sup> し <sup>さ</sup> わり <sup>が</sup> あ <sup>っ</sup> て、や <sup>は</sup> り同 <sup>な</sup> じ所 <sup>しよ</sup> である。)  手 <sup>て</sup> は、生 <sup>お</sup> ひ先 <sup>ひ</sup> を見 <sup>み</sup> え <sup>て</sup> 、ま <sup>だ</sup> よ <sup>く</sup> も <sup>つ</sup> づ <sup>け</sup> た <sup>ま</sup> は <sup>ぬ</sup> ほ ど <sup>な</sup> り。 (源氏物語)  <sup>て</sup> (筆 <sup>て</sup> 跡 <sup>せき</sup> は、こ <sup>れ</sup> か <sup>ら</sup> 先 <sup>ま</sup> の上 <sup>う</sup> 達 <sup>たつ</sup> が <sup>予</sup> 想 <sup>さう</sup> さ <sup>れ</sup> る <sup>も</sup> の <sup>の</sup> 、続 <sup>つ</sup> け <sup>か</sup> き <sup>は</sup> ま <sup>だ</sup> た ど <sup>た</sup> ど <sup>し</sup> い <sup>お</sup> 年 <sup>ね</sup> ご <sup>ろ</sup> である。)	動詞      形容詞
		都 <sup>みやこ</sup> の <sup>ま</sup> こ <sup>と</sup> う <sup>け</sup> の <sup>み</sup> よ <sup>く</sup> て、 <sup>ま</sup> こ <sup>と</sup> 実 <sup>ま</sup> なし (徒 <sup>ま</sup> こ <sup>と</sup> 然 <sup>こと</sup> 草)	

		(都の人はうけあいばかりはよくて、 <sup>じつ</sup> 実がない)	
④並列	④並列	<sup>いへ</sup> 家見れど家も見かねて <sup>り</sup> みれど里も見かねて怪しみと そこに思はく (万葉集) (家を見ても家も見当たらず里を見ても里も見当たらず不思議なこと だとそこで思ったことには) 今はいと里ばなれ心すごくて、海人の家だにまれにな ど聞きたまへど (源氏物語) (今はまったく人里離れてもの寂しく、漁師の家さえもまれであるな どとお聞きになるけれども、)	動詞          形容詞
—	⑤仮定	<sup>いも</sup> ぬばたまの妹が乾すべくあらなくに我が <sup>ころもで</sup> 衣手を濡れて いかにせむ (万葉集) ((ぬばたまの) 妻が乾してくれるわけでもないのにわたしの袖を濡ら してさてどうしたものか)	動詞
—	⑥思考 知覚 内容	<sup>しなぬ</sup> 越の海の信濃の <sup>ゆ</sup> 浜を <sup>く</sup> 行き暮らし <sup>はるひ</sup> 長き春日も忘れて思へ や (万葉集) (越の海の信濃の浜を一日歩いて余る長い春の日でさえ妻のことを 忘れようか) ほかにはさま変わりて見ゆ (源氏物語) (よそとは様子が違って見える)	動詞

(1) 「付帯 (様態)」 関係を表す意味用法

古典文法の「テ」は、現代文法の「テ」と同じように、①付帯 (様態)、②継起、③因果、④並列の意味用法を持つ。しかし、「付帯 (様態)」の意味用法は、接続する品詞は現代文法と異なる。現代文法では、「付帯 (様態)」の意味を表す文は、動詞しか接続することができない。しかし、古典文法では形容詞にも「テ」が接続し、「付帯 (様態)」の意味を表す。

(46) 三寸ばかりなる人、いとうつくしうて<sup>み</sup>たり。 (竹取物語)

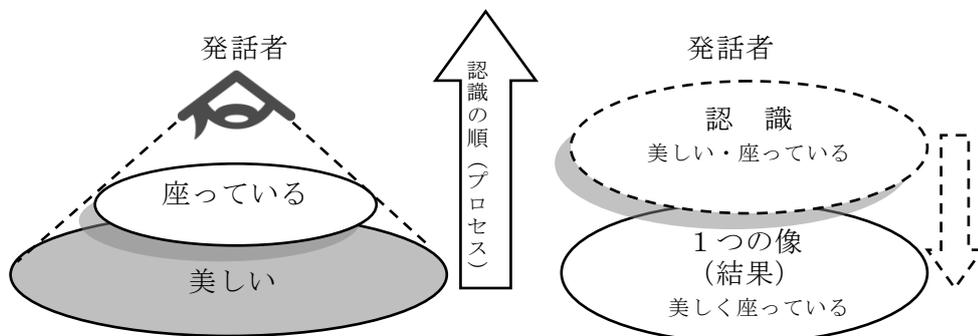
(三寸ばかりの人が、たいそうかわいらしい姿でそこにいる。)

(47) この殿たちの<sup>あにおとと</sup>兄弟の<sup>なか</sup>御仲、年頃の<sup>つかさくらみ</sup>官位の<sup>おと</sup>劣り<sup>まさ</sup>優りのほどに、御仲<sup>あ</sup>悪しくて過ぎ  
させ給ひし間に (大鏡)

(この殿たちのご兄弟の御仲は、長年にわたる官位競争の間に、ご不和の状態になられてお過ごしでいらっしゃいました。)

現代文法では、「美しくて座っている」、「仲悪くて過ごす」のように、形容詞+テで様態を表すことはできない。現代文法で表せば、「美しく座る」、「仲悪く過ごす」のように、形容詞を副詞化して表すことはできる。しかし、「美しくて座る」、「仲悪くて過ごす」とは、話者の事態の認識は同じではないのではないだろうか。古典語の「テ」は、助動詞「ツ」から転成したものとされている。古典語の「ツ」が「実現の確認」を表したならば、「テ」も同じ認識であったのではないだろうか。つまり、「美しうてあたり」は、発話者は、まず「美しい(かわいらしい)」という事実を認識し、それからその対象が「座っていた」と認識したことを表していたと考えられないだろうか。話者の認識の順に事象を述べ、その結果、最終的に「そういう状態で座っている」という像を形を形成するのではないだろうか。いわば、「テ」接続文は発話者の認識のプロセスを表している。

これに対し、現代文法の「美しく(かわいらしく)座っている」のように、「美しい」が「美しく」副詞化して修飾句となると、述語の「座っている」との修飾-被修飾の関係になり、構文的な従属度は強くなり、発話者の認識の順に発話するというより、発話者が既に1つの像として捉えた認識の総合的な結果を頭の中で文法構造を整えてから産出した表現になっている印象を受ける。複数の像を重ねて1つの像を作り上げるのではなく、全体像をカメラで一瞬で切り取ったかのような像の捉え方である。



「うつくしうてあたり (美しくて座っている)」 「美しく座っている」

(図 32) 古典文法「テ」の事象認識のプロセス

このような付帯状況（様態）を表す形容詞の「テ」の意味用法は、時代とともに減っていき<sup>10</sup>、「形容詞 - ク／形容動詞 - ニ」の形で副詞を形成し、動作の状態を表すようになった。そして、同時に古典語「テ」が本質的に持っていた「実現の確認」の意味も薄れた。

## （2）「仮定」関係を表す意味用法

古典文法においても「テ」そのものは、接続の意味関係を表さないため、テ接続文がどのような意味内容を持つかは文脈による。現代語では、テで接続された前後の事象の時間関係が先後関係であれば、「継起」関係に解釈され、さらに、文脈から順接か、逆接かなどの「因果」関係に解釈がなされる。

古典文法では、「継起」関係を表すテ接続文は、「因果」関係だけでなく、「仮定」関係も表すことができる。

(48) ぬばたまの妹<sup>いも</sup>が乾すべくあらくに我が衣手<sup>ころもて</sup>を濡れ<sup>ぬ</sup>ていかにせむ （万葉集）

((ぬばたまの)妻が乾してくれるわけでもないのにわたしの袖を濡らしてさてどうしたものか)

(49) 我さへうち棄<sup>す</sup>てたてまつりて、いかなるさまにはふれたまはむとすらん

(源氏物語)

(このわたしまでが姫君をお見捨て申しあげたなら、これから先落ちぶれてどんな有様になられることか。)

(50) まことに何となされてようござりましょうぞ。 （狂言山本東本「末広がり」）

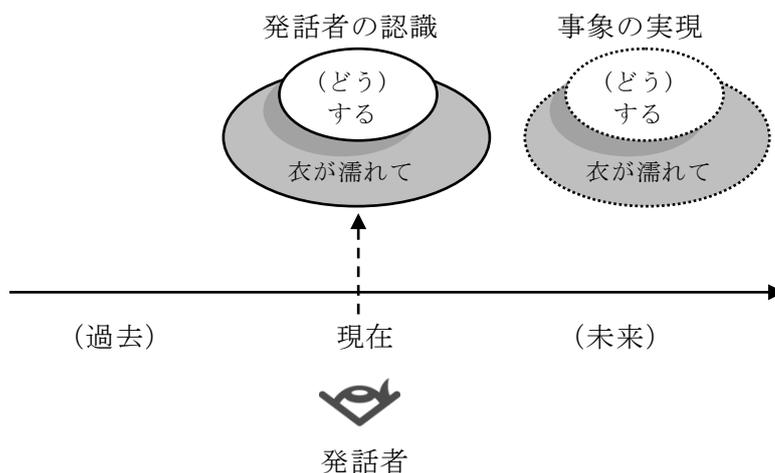
(まことにどうなさるならばよいでしょうか)

古典文法においてこの「仮定」関係を表すテの意味用法は、「因果」関係を表す意味用法のうちの「順接」を表す意味用法に含められることも多い。先に述べたように、古典語の「テ」は、時制に関係なく「実現の確認」を表すため、未来における実現も表すことができる。そして、それは現実には未完の結果であるために、現代文法では、「仮定」を表す

<sup>10</sup>現代では、「お若くていらっしゃる」「元気で過ごす」等の限られた表現として残っている。

ことになる。だが、古典文法では、事象の実現が過去であろうと、未来であろうと、「実現の確認」を表すという認識として、同じカテゴリーなのである。

例文(48)の「わが衣手を濡れていかにせむ」は現代文法では「私の衣が濡れて、どうしよう」のようにテで接続して表現することはできない。「私の衣が濡れたら、どうしよう」のように、未実現の事象の認識を表すには、仮定を表す表現が必要である。しかし、古典文法では、まず、「袖が濡れた」こと認識したことを述べる。実際に濡れるのがいつであるかは関係ない。実際には未実現の事象でも、発話者は実現したと認識し、認識した場合の後件の事象について述べるのである。事象が現実いつ生起するかどうかという時間関係は焦点化されない。事象の生起する時ではなく、発話者がその事象を認識したことが重要なのである。いわば、話者の認識のプロセスを述べているのである。

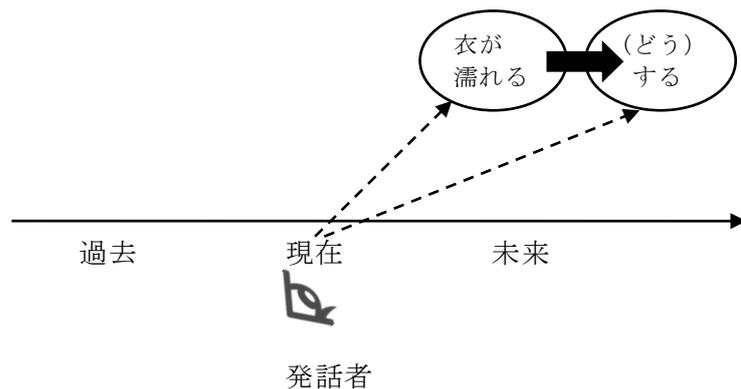


「衣が濡れていかにせむ (衣が濡れてどうしよう)」

(図 33) 古典文法「テ」 発話者の事象実現の認識

また、この時制に関係なく、実現の確認を表す古典文法の「テ」は、「衣手を濡れていかにせ」までを1つの像として捉えていることも意味する。つまり、「衣が濡れたことを確認して(何か)する」ことをひとまとまりの状態、1つの像として捉え、そのひとまとまりの状態を、どうしようと言っているのである。

一方、現代文法の「たら」は、事象が完了する時を未来に設定している。テンスとは切り離すことはできず、時間軸の上に、「衣が濡れる」事象を置き、時間軸に沿ってさらにその先に「どうする」を置く。時間軸に沿って、事象を横に並べ、発話者の視点が時間軸を移動する。



「衣が濡れたら、どうしよう」

(図 34) 現代文法の「假定」の捉え方

古典文法の「テ」が假定も表しえたのは、古典文法の「テ」は時制とは関係がなかったからである。古典文法の「テ」は事象の実現が過去、現在、未来であれ、発話者が発話時点において実現を認識することのみを表す。現代文法では、発話時に確認できない未確定の事象は、テ接続文で表すことはできない。大野（1974）は、古代の日本人の時の概念は主観的で、過去・現在・未来という客観的な区分はなく、未来とは話し手の漠とした予想・推測そのものであり、過去とは話し手の記憶の有無、記憶の喚起そのものであったと述べる。

古典文法の「テ」では表現できた「假定」が現代では表せなくなったということは、日本語の時間の概念に、いつ事象が実現するのかという、「未来」の観念が生まれたとも言えるかもしれない。そして、それは現代文法のテ接続文の使用に際しての制約になっている。

?(51) 明日晴れて、ピクニックに行く。→ 明日晴れたら、ピクニックに行く。

?(52) 薬を飲んで、病気が治る。→ 薬を飲めば、病気が治る。

テ接続文は、因果関係を表そうとする場合、後件に意志表現を述べることはできないとされる。しかし、実は意志表現か否かというよりも、事象の生起時間が関与しているのである。例文(52)の「行く」は意志を表しているが、それはつまり、「行く」事象が未実現であるということである。未実現の事象であるため、実現した「結果」とはなり得ず、因果関係は成立しない。「昨日晴れて、ピクニックに行った。」のように、過去の事象であれば、因果の意味関係を読み取ることができる。

また、例文(51)は後件の「病気が治る」は無意志表現であるが、意味的に文が成立しない。この例文も「薬を飲んで、病気が治った。」のように、「治った」という過去の事象であれば「結果」となり、因果の意味関係を読み取ることができる。しかし、「薬を飲んで、病気が治る」の、「治る」は未実現の事象であるために、「仮定」の事象となり、現代文法ではテで接続できないのである。

このように、現代のテ接続文において話者の事象の実現の認識は非常に重要になったのである。

### (3) 思考知覚の内容を表す意味用法

現代文法では表せない古典文法の「テ」接続文の意味用法がもう一つある。それは、思考知覚の内容を表す意味用法である。古典文法の「テ」には、「思ふ」、「見る」、「聞こゆ」、「覚ゆ」などの感覚動詞と共起して、知覚、思考内容を表す用法がある。

(53) 越の海の<sup>しなぬ</sup>信濃の<sup>ゆき</sup>浜を行き暮らし<sup>はる</sup>長き春日も忘れて思へや (万葉集)

(越の海の信濃の浜を一日歩いて余る長い春の日でさえ妻のことを忘れようか)

(54) ほかにはさま<sup>あ</sup>変わ<sup>り</sup>て見ゆ (源氏物語)

(よそとは様子が違って見える)

(55) <sup>とんあ</sup>頓阿が、「<sup>うすもの</sup>羅は上下はつれ、<sup>らでん</sup>螺鈿の<sup>ぢく</sup>軸は貝落ちて後こそいみじけれ」と申し<sup>はべ</sup>侍りしこそ、心まさりて覚えしか。(徒然草)

(頓阿が「薄い絹の表紙は、上下の部分がほつれ、螺鈿をちりばめた巻物の軸は貝の落ちた後こそがすばらしいのだと思われたことである。)

(56) その声、明王も現じ給ひぬと、御前に<sup>きむら</sup>候ふ人々、身の毛よだちて覚ゆ。

(宇治拾遺物語)

(その声は不動明王も現じられるかと、御前にお仕えする人々は、身の毛がよだつ思いだった。)

古典文法にも現代文法と同じく、助詞「ト」を使用して内容を表す表現もある。しかし、「ト」と「テ」の表す意味は異なっている。「テ」は、単に内容を表す「ト」と異なり、「テ」は話者が事実を確認したという話者の認識を表している。例文(54)の「ほかにはさま変わ

りて見ゆ」は、まず発話者（光源氏）が「ほかとはすっかり変わっている」と確認したという認識を述べたことを述べている。いわば、思考のプロセスをそのまま表現していると言える。これに比べると、「ト」は、現代語で考えると、「すっかり変わっていると見える。」のように、「見える」という認識した結果内容を表してはいるが、「見える」に至る認識のプロセスは表していない。また、現代語では「変わっているように見える」のような修飾句を用いても表現できるが、やはり、認識のプロセスを表すことはできない。

### 3.4.3.3 接続形式テの事象認識の歴史的変化 まとめ

以上、古典文法と現代文法のテ接続文を比較した。古典文法の「テ」接続文は、現代のテ接続文より、表せる接続の意味関係の範囲が広い。古典文法では、形容詞のテ節によって「付帯（様態）」関係も表せるほか、「仮定」、思考知覚内容など、現代文法では表現できないことも表すことが可能であった。この古典文法の「テ」の意味用法の使用範囲の広さは、古典文法における「テ」の意味と時間認識が現代文法とは異なることを示している。

まず、古典文法の「テ」は、元の助動詞とされる「ツ」の「実現の確認」という意味が反映されている。形容詞のテ節によって「付帯（様態）」を表したり、思考知覚内容を表したりすることができるのは、「テ」が発話者の認識を表すためである。

また、この「実現の確認」とは、発話者の認識のプロセスを表している。古典文法では、「テ」によって、発話者の認識を表現していた。「テ」は単なる接続の形式ではなく、発話者の事態の認識を表していたと言える。

そして、「テ」接続文が古典文法では、「仮定」を表せていたということは、「テ」は、時間の概念とは無関係であったことを示している。事象の実現が、過去であれ、現在であれ、未来であれ、時間に関係なく、発話者の認識を表していたということである。

このように、古典文法における「テ」は、時間に関係なく、発話者の認識を表していた。そして、これが「テ」本来の持つ意味であった。この「テ」本来の意味は、現代文法の接続形式テにも備わっていると考えられる。時間を意識するようになった結果、テの意味用法の範囲が狭まり、「仮定」の意味を表せなくなったのかもしれない。

しかし、古典文法において「テ」が発話者が事態の実現を認識したことを示し、「テ」がその話者の認識のプロセスを表すことは、「テ」が本来持つ意味であり、現代文法のテにも受け継がれていると考えられるのではないだろうか。

### 3.5 テ接続文の中核的な意味の捉え方

本章では、まず、3.1で接続形式テは複文の従属節を形成し、文を構造的に整える働きをすることを確認した。次に、3.2でテ接続文を1つの談話とみなし、テ接続文は意味まとまりを持つことで、談話としての整合性を保っていることをみた。3.3では、テ接続文の事象関係の捉え方について、認知言語学の図と地の区分から検証し、前件のテ節の事象は強く背景化して「地」となり、後件の事象は「図」となることを明らかにした。さらに、3.4ではテ接続文の全体的な意味内容はテ節の背景化された事象（地）に後続の事象（図）を重ねることで、全体として1つの像を作りあげてを述べた。

また、接続形式テの元とされる古典文法の「テ」は本来、時制に関わりなく、話者の実現の確認を表していたことから、現代文法のテにもこの意味が本質的に受け継がれているであろうことも推察できた。

本節では、これまで明らかになったことを踏まえ、テ接続文の受信者がどのように意味内容の推測を行っているのか、接続形式テの中核的な意味を明らかにするとともに、テ接続文の意味内容の捉え方を明らかにする。

ヒトは一般に、ことばや文が並んでいると、そのことばや文との意味的なつながりを考える傾向がある。例えば、「くうねるあそぶ。」<sup>11</sup>のように動詞が並んでいるだけで、発話者の意図を読み取ろうとする。単に言葉が並んでいるだけなら、言葉と言葉の間には何のつながりもない可能性もある。しかし、「風が吹いて桶屋が儲かった。」のように、接続形式テで文が接続された場合は、テによって文が整えられている以上、「風が吹く」ことと「桶屋が儲かった」ことの事象間に何らかの意味的なつながりがあるはずであると、受信者である聞き手または読み手は受け取る。

このように、テ接続文はまず、発話者が接続形式テによって接続した事象間に何らかの意味的関連づけをしたことを示している。しかし、テそのものには意味はない。単なる接続形式であり、文構造を整える役割を果たすに過ぎない。よって、テ接続文の受信者は、テ接続文の意味内容を捉えるためには、発話者のテによる意味的関連づけを推測する必要がある。そして、テには、受信者にそうした意味的関連づけの推測を強いる力がある。テは意味的関連づけの推測を受信者に働きかける機能を担っているのである。

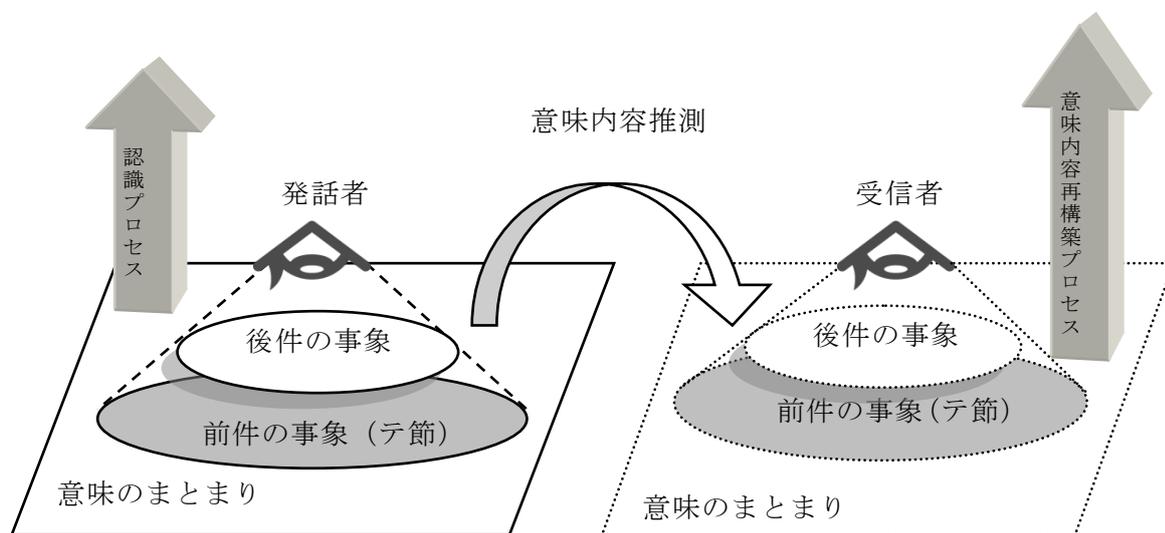
意味的関連づけの推測を強いられたテ接続文の受信者は、テで接続された事象間の関係

---

<sup>11</sup> 1989年日産自動車「セフィーロ」のコピーライターの糸井重里氏作によるCMコピー。

を推測する。事象間の関係には、意味的なまとまり、文としての整合性がなければならない。整合性がなければ、テ接続文は意味的に成立せず、文全体の意味内容の推測は不可能となる。亀山（1999）は、談話の整合性が強ければ強いほど、発話者の意図した意味に決着する推論量が少ないと述べる。整合性の強さとは、発話者とその受信者の間の共有知識や経験である。互いの知識、社会背景や経験が異なれば、発話者とそのテ接続文に整合性を認めても、受信者がその整合性を共有できなければ、意味内容の推測はできない。しかし、共有知識や経験などがあっても、あくまで推測であり、受信者が発話者の意味内容を復元してそのまま受け取ることは不可能である。受信者は受信者の整合性によって、意味内容を再構築するのである。

受信者は、テ接続文の整合性という意味まとまりの枠組みの中で、テ接続文の意味内容を推測し、再構築する。テ接続文は、複数の事象を含む。発話者は、事象を認識した順に述べていく。述べると同時に、テ節の事象は背景化され、後続して述べられる新しい事象が図として際立ってくる。受信者は、受信者の整合性の枠組みの中で、受け取った順に、事象を重ね、1つの像を形作る。こうして、意味まとまりの整合性の上に、事象を重ねて形成された1つの像がテ接続文の意味内容として再構築され、受信者に捉えられるのである。



(図 35) テ接続文の意味内容の再構築のプロセス

また、テ接続文の発話者は認識した順に、接続形式テで文を接続していく。接続形式テは発話者の認識を表し、形成されたテ接続文は発話者の認識のプロセスを表している。受

信者のテ接続文の意味内容の推測は、発話者の認識のプロセスをたどり、意味内容を再構築する行為なのである。しかし、再構築の結果、受信者が捉えた意味内容は、発信者と同じではない。発信者の事象関係の意味的関連づけは、発信者と受信者の背景知識や経験などが全く同じでない以上、受信者は完全に復元することはできない。受信者は、テ接続文の意味内容の推測を発話者から委ねられているが、受信者には推測の自由も許されているのである。

以上、本章では、テ接続文の中核的な意味の捉え方を明らかにした。認知言語学の「図と地」の区分というアプローチにより、テ接続文の意味内容はどのように捉えられるかを考察した。そして、テ接続文の意味を捉えるための接続形式テの役割も明らかになった。接続形式テは文構造を整えるという文法的な働きだけでなく、発話者が事象間に何らかの関連づけをしたことを示すとともに、その関連づけの推測を受信者に強いる力も持つ。そして、テは発話者の認識を表す。この発話者の認識こそが、接続形式テの中核的意味と言えるのではないだろうか。テ接続文の意味内容を捉えるということは、受信者による意味内容の推測であり、それはすなわち、受信者が発話者の認識のプロセスをたどって、意味内容を再構築するという作業なのである。

## 第4章 小説におけるテ接続文の表現効果

第3章では、接続形式テの中核的意味を明らかにし、テ接続文の意味内容を受信者がどのように捉えるかを考察した。本章では、小説というテキスト(text)<sup>1</sup>の中でテ接続文がどのように使われ、どんな表現効果があるか、また、接続形式テの中核的意味がその表現効果に反映されているかどうかを検証する。

### 4.1 テ接続文の表現効果

前章までは文レベルのテ接続文について考察してきた。しかし、現実世界では、複数の文からなるテキストの中でテ接続文が使用されることも多い。本章では、小説におけるテ接続文の表現効果を考察する。

小説は1つの大きなテキストである。小説は作者が作り上げた1つの世界の中で物語が展開する。読者が小説を理解するには、作者と読者の間の共通認識が必要である。よって、作者は読者が小説を理解できるようにその小説世界を描写しなければならない。作者はできるだけその小説世界を読者が再構築できるように手がかりを読者に与え、読者はその手がかりから作者の作り上げた小説世界を再構築する。

小説の世界はいわば小説の「背景」である。事象を背景化する接続形式テは、小説世界の「背景」描写に効果を表すのではないかと推測できる。

また、小説は、ヒトが現実世界では認識できない他人の心理なども表現できるのが特徴である。小説の登場人物の心理は、いわば登場人物の「背景」であり、やはり接続形式テが登場人物の「背景」描写に効果的に使われるのではないだろうか。

本章では小説の中でテ接続文がどのように使用されているかを分析し、テ接続文の表現効果を考察する。

#### 4.1.1 テ接続文の表現効果 先行研究

まず、これまでのテ接続文の表現効果についての先行研究をあげる。しかし、テ接続文の表現効果について言及している先行研究は管見の限り多くはない。

---

<sup>1</sup> テキストはテキストとも呼ぶが、談話分析研究においてはテキストと呼ぶことが多いので、本論でもテキストと呼ぶ。テキストは小説や日記、メモなど書かれた談話を記録したもののほか話言葉を録音したものも含む。

大鹿（1986）は、もともとは1つであった事態をテ節によって分節し、前句にあたるテ節は後句の分析であるとした。しかし、前句（テ節）について後句で述べる場合もあるとする。例えば、「遊び場のすみには大きな合歓の木があつて、うす紅いぼうぼうした花がさいたが」というような文では、一般的に背後に隠すモノ（合歓の木）が存在するコトを前句に顕在化させているとする。これは、テ節は単なる修飾節というだけではない、**テ**接続文の表現効果を述べていると言える。

また、遠藤（1982）は、テ接続文の意味は文脈によって決まるとしながら、「太郎が来て、花子が帰った。」のように、文脈依存度が高く、意味を特定できない「余韻型」の用法があると述べる。この「余韻」も、テ接続文の表現効果の1つと言えるであろう。

森田（1981）は、テ接続文のレトリックとしての特徴を挙げ、テ接続文の表現効果について述べている。森田は、テ接続文は、各叙述ごとに文を切ってもいいところを完結させず、「て」によって叙述を引きのぼし、直列的に複文を構成していくため、情的な表現、幼児的な表現、話しことば的表現となりやすく、「て」によって示される展開は論理性に乏しいとしている。

#### 4.1.2 小説におけるテ接続文表現効果 調査概要

本章では、以下の11編の小説からテ接続文を抜き出し、分析、考察した。なお、文例は小説中の作者または登場人物の語りの部分、いわゆる地の文から抜き出し、会話文中のテ接続文は考察の対象としない。

また、本章では、分析にあたりテ接続文の文例は、「動詞+テ（デ）」、「形容詞・形容動詞+テ（デ）」、「名詞+デ（助動詞）」の文を抜き出した。「名詞+デ」の「デ」は、助動詞の連用形で、用言に付く接続助詞とは文法的な扱いは別である。しかし、体言について従属節を作る構文的機能や、「並列」、「因果」の接続の意味関係を表し、用言につく「テ」と同じ機能を持つことから、本章では広義の接続形式テとみなし<sup>2</sup>、調査に加えた。

---

<sup>2</sup> 助動詞「だ」の連用形「で」は、歴史的には断定の助動詞「なり」の連用形「に」に接続助詞「て」がついた「にて（あり）」が音韻変化したとされる。「月の都の人にて父母あり」のように「状態」を表す。

【小説名】	(書名略称)	【作者】	《初出年》	
「ランチタイム」	(ランチ)	草野たき	2007	
「透き通った一日」	(透き通った)	赤川次郎	2004	
「眠れる森」	(眠れる森)	北村薫	2003	
「福の神」	(福の神)	乃南アサ	2002	
「かえるくん、東京を救う」	(かえる)	村上春樹	1999	
「返事はいらない」	(返事)	宮部みゆき	1994	
「シャレードがいっぱい」	(シャレード)	東野圭吾	1990	
「過去からの声」	(過去)	連城三紀彦	1986	
「マッチ箱の人生」	(マッチ箱)	阿刀田高	1984	
『 <sup>レイン・ツリー</sup> 雨の木』	を聴く女たち	(雨の木)	大江健三郎	1982
「襲われて」	(襲われて)	夏樹静子	1970	

## 4.2 小説世界のイメージ形成

第3章では、接続形式テの中核的意味は、発話者の認識を表すこと、そして、テ接続文はテ節の事象は背景化されて「下地」となり、その上に後続節の事象が重なって1つの像を作ることを述べた。

一方、小説は作者が創作した世界の中で、作者が創作した登場人物が動いてストーリーが展開する。小説の世界は、現実世界に似た疑似世界であることもあるし、現実世界とは大きくかけ離れた世界であることもあるが、いずれにしろ、作者が創り出した世界である。読者はまずその作者が創作した世界のイメージ像を作り、さらにその世界に登場する人物イメージ像を作って小説を理解することができる。

この小説世界のイメージ像を読者が作るのに、テ接続文の像形成という意味構築は効果を発揮する。本節では、小説世界のイメージ形成に必要な要素として、場面・人物の背景イメージと登場人物の体と心の動きのイメージの形成に使われているテ接続文の文例を挙げて分析・考察する。

### 4.2.1 場面・人物の背景イメージ像形成

小説というテキストの内容を理解するには、読者はまず登場人物が動く場面のイメージ

を形成しなければならない。その小説のストーリーが、いつ、どこで、どんな世界で展開するのかを認識しなければ、小説の内容を理解することはできない。いわば、物語の展開する下地となる舞台のイメージ像の形成する必要がある。そして、次にその舞台の上で物語を展開させる登場人物のイメージ形成が必要となる。これらのイメージ形成にテ接続文使用されている例を以下にみていく。

#### (1) 場面背景イメージ像形成

##### 【時間】

(1) 幸代は、手すりの外側に立って、運動場を見下ろした。

ちょうど体育の時間で、運動場にいた子の一人が、幸代に気付いて声を上げた。

たちまち大騒ぎになった。 (透き通った)

(2) 「ごっそさん。また、来るわ」

午後十一時近くになって、池内たちもようやく腰を上げた。帰りしなに急に顔を近づけてきて「またね」と囁かれ、妙子は背中がぞっとするのを感じた。 (福の神)

##### 【空間】

(3) 秋田のド田舎で、やかましいばかりの大家族の家に住んで、おしゃれとはほど遠い友達に囲まれているこんな顔をした自分のすべてを、イヤだと思った。 (ランチ)

文例(1)「ちょうど体育の時間で」、文例(2)「午後十一時近くになって」というテ節の部分は、小説の場面の時間を表している。先述のように、テ節の事象は背景化する。読者は、小説世界の人物が登場する場面をテ節によってイメージ形成する。これらの文例は、テ節の前後の事象間の関係から捉えれば、「並列」または、「継起」を表している。しかし、小説テキストの中では、テ節で場面の時間設定を述べることで、読者が場面をイメージ形成するための下地作りをするという効果も生んでいるのである。

また、テ節は、時間だけでなく空間のイメージも形成する。文例(3)「秋田のド田舎で、やかましいばかりの大家族の家に住んで」はその例である。テ節で空間の場面設定を述べることで、場面のイメージ形成をしている。

また、登場人物自身の移動をテ節によって描写することで、読者に場面の転換を示す場合もある。

- (4) —あなたは人間より樹木が見たいのでしょうか？とドイツ系のアメリカ人女性がいつて、パーティーの人びとで埋まっている客間をつれ出し、広い渡り廊下からポーチを突っきつて、広大な闇の前にみちびいた。笑い声とざわめきをなお背なかにまといつかせて、僕は水の匂いのする暗闇を見つめていた。 (雨の木)

文例(4)では、登場人物がパーティー会場（客間）→渡り廊下→ポーチ→外（に面した場所）へと移動する軌跡を表すとともに場面の転換も表している。

場所だけでなく、テ節で場所の状況を描写し、読者の空間のイメージ像を形成する場合もある。次の文例(5)の「鍵をかけて着替えを始めた」は、単に登場人物が動作を連続して行っていることを表しているだけではない。鍵をかけることによって、その着替える動作を行う空間が単に寝室というだけではなく、それが閉鎖的な空間であるというイメージ像も読者は作るのである。同様に、以下の文例(6)の「明かりがついていて」は、テ節で室内と空間の明るさについて述べることで、読者は場所のイメージをより具体的に作ることができる。また、「明かりがついている」ということは、無人ではなく、その部屋にだれかが存在していることも読者に暗示している。

#### 【空間（状況）】

- (5) 寝室に入ると、鍵をかけて着替えを始めた。 (シャレード)
- (6) ドアを開けると室内には明かりがついていて、奥の机で一人の老人が何やら書きものをしていた。 (シャレード)
- (7) 私のいる三年A組は三十一人で、その内男の子は六人しかいない。 (透き通った)

#### (2) 人物背景イメージ像形成

登場人物のイメージ形成には、登場人物の年齢、経歴などの内面的な背景描写と、視覚的にイメージを作るために、容姿、服装といった外見的な描写が必要である。年齢、経歴、性格、家族、職業など、登場人物の背景イメージ像を読者が作り上げるのにもやはり、テ接続文が使用されている。

#### ①人物背景描写（年齢、経歴、性格、家族、職業）

##### 【年齢】

- (8) 神西涼子先生は、三十代半ばで、とてもさばけた明るい人柄、生徒たちにも人気がある。 (透き通った)

【経歴】

- (9) 彼女がドイツという母国を捨てて (それが東であるか西であるかすらをも、僕は確かめていなかったが)、ハワイに移住した人間であることのみが、僕の知るところであった。 (雨の木)
- (10) 生家は盛岡にあって、東京のN女子大学を卒業している。 (マッチ箱)

【性格】

- (11) 厨房に入ると、マサさんが耳打ちをしてきた。最近使い始めた見習いの板前が、何をするにも覚えが悪くて、懸命に苛立ちを抑えながら、あれこれと指図をし続けているはずなのに、相変わらず客の動きは敏感に観察しているらしい。 (福の神)
- (12) とりわけ自分より三、四歳若い連中は礼儀知らずで、生意気で、いつも先輩たちをおびやかすライバルで、若さの魅力も持っていて、二、三の例外を除けばよい印象を持ちにくい。 (マッチ箱)

【家族】

- (13) 中瀬公次郎の長男で、中瀬興産専務でもある雅之だ。 (シャレード)
- (14) 兄といっても腹ちがいで、話しぶりでは葉次は妾の子のようであった。しかし親たちはみな亡くなっており、彼は兄の家に同居している。彼にとってはただ一人の血縁で、親代わりであるともいっていた。 (襲われて)

【職業】

- (15) 彼女はやはり家政婦をしていて、五歳ぐらいの女の子と二人で暮らしていた。 (シャレード)
- (16) 宗一は、銀行では外務一筋で、ほかの部署にまわされたことがない、という。 (返事)

また、**テ**接続文による登場人物の服装や容姿の描写は、読者が人物の視覚的な映像を作り上げるのに効果がある。

②人物外見描写 (服装・容姿)

### 【服装】

- (17) 彼の格好は、いつも同じだった。渋い色の背広を着て、重そうな革靴を履いている。左手には、弁当箱が入っているらしい小さなバッグをさげて。 (返事)
- (18) 黒のエナメルとたぶんスウェードのコンビネーションで、変わっていると感じたのは、エナメルとスウェードとの縫い合わせの線が、ギザギザで、ちょうど星形のようになっていたことだ。 (襲われて)

### 【容姿】

- (19) にきびだらけでだんごっ鼻で、一重まぶたでうすい唇をした自分の顔が見える。 (ランチ)
- (20) 下から見るからだろうか、脚が長くすらりと伸びて、外国人並みのプロポーションだ。 (シャレード)

## 4.2.2 登場人物の心と体の動きのイメージ像形成

テ接続文による小説の登場人物の身体動作、姿勢、表情等、外見の描写によって、読者に登場人物の体の動きのイメージ像が形成される。また、小説では、本来は認識できない他人の心理や感情等、心の動きもテ接続文によって描かれ、読者に登場人物の内的なイメージ像を形成することも可能である。

### (1) 体の動き（動作、姿勢、表情、音声）

登場人物の動作、姿勢、表情、音声等の描写によって、読者は小説世界の登場人物の動きのイメージ像を作ることができる。

### 【動作】

- (21) そしてわれわれは闇のなかの水の匂いのする樹木に背を向けて、板張りの広いポーチを引きかえしたのであった。 (雨の木)
- (22) 「2月18日の朝の9時15分?」「そうです」、彼女は念のために腕を上げてデジタル時計の日付を確認した。 (かえる)

### 【姿勢】

- (23) 「ヨーロッパに生まれたかったよお」私はそう言うと、お母ちゃんのひざにつつ

ふしてわんわん泣いた。 (ランチ)

- (24) 私は、この手すりのコンクリートの台の部分に足をかけて、手すりの上に伸び上  
るような格好でいた。 (透き通った)

【表情】

- (25) 顔をあげると、夏江と紀子と久美がきよとんとした顔でわたしを見ている。  
(ランチ)

- (26) ものすごい形相で、彼は弥生の首に手を回した。 (シャレード)

【音声】

- (27) 一瞬のあと、「待て——」かすれた声を洩らして、残された男が追った。  
(襲われて)

- (28) すぐに、電気錠ががちりという音をたてて解除される。 (返事)

また、慣用的な動作の描写によって、登場人物の心情を表す場合もある。次の文例(29)「身を乗り出して」は、登場人物の姿勢を明示しているが、登場人物が興味を持っているという心理も推測することができる。同様に、文例(30)の「首をかしげて」という動作は疑う様子、文例(31)の「口を尖らせて」動作は不満の様子を表しており、読者は登場人物の心情を推測できる。動作の描写によって、動作主の興味、疑問、不満等の心情を読者に暗示し、より具体的な登場人物のイメージ像を形成することができるのである。

- (29) 宗一が、ソファからわずかに身を乗り出して、きいた。 (返事)

- (30) 久子はテーブルに頬杖をつき、首をかしげて千賀子を見つめた。 (返事)

- (31) さすがに、言われた子も目をそらし、口を尖らせて黙っている。 (透き通った)

(2) 心の動き

小説では、登場人物の心理や感情等、心の動きも明示的に描写されることも多い。現実世界では、他人の内面の心情を詳細に知ることは難しいが、小説では、登場人物の心情も文字化されて、読者は登場人物の心理状態のイメージを形成することができる。

- (32) そしてふすまが閉められると、私は勇気をだしてまた自分の顔を見た。(ランチ)

- (33) 私は何だか気になって——それと、「自分の死体」と一緒にいるのも気詰りで

——その後について行った。

(透き通った)

### 4.3 登場人物の認識のプロセス

前節では、小説の登場人物の体と心の動きがテ節で描写されることにより、読者の登場人物のイメージ像が形成されることを述べた。前節で述べたテ節による体と心の描写は明示的であり、具体的なイメージ像を容易に形成することができる。身体動作の描写によって読者は登場人物の具体的な動きを脳裏に浮かべることができるし、心の動きの描写も明示的で、読者は登場人物の心情を作者の意図通り読み取ることができる。

小説では、さらにテ節によって登場人物の認識のプロセスも描写される場合がある。読者は登場人物の認識のプロセスをたどることで、登場人物の心情をより丁寧に理解できるようになる。本節では、小説の登場人物の認識のプロセスについてみていく。

#### 4.3.1 知覚

小説には登場人物が知覚したことも描写される。「見る」、「聞く」といった知覚を表す動作は、登場人物の動作であるが、視覚的に動きのイメージ像を形成することは難しい。「見る」、「聞く」という動作は、ヒトの内的な知覚を表す表現である。また、「思い出す」「気づく」等も、ヒトの内的な知覚を表す。小説では、これらの登場人物の内的な知覚をテ節で述べることにより、登場人物の認識のプロセスを表している。

##### 【視覚】

(34) ——屋上へまたやって来た私は、倉田幸代が手すりにもたれて立っているのを見てホッとした。 (透き通った)

(35) 千賀子は出かけるところで、正面玄関のオートロックのドアの内側から開けようとしていたのだが、ドアの向こう側に人がいるのを見つけて、足をとめた。

(返事)

##### 【聴覚】

(36) やがて足音が聞こえて、清美が戻ってきた。(シャレード)

(37) 片桐は名前を呼ばれてようやく我に返った。(かえる)

(38) そのとき、「——お邪魔かな」と、声<sup>が</sup>して、二人はハッと離れた。(透き通った)

##### 【知覚】

(39) 「そういえばこの社長は中瀬弘恵さんだったよね」弥生が思い出していった。

(シャレード)

(40) ちょうど体育の時間で、運動場にいた子の一人が、幸代に気付いて声を上げた。

(透き通った)

上記の文例の「見て」、「聞こえて」のような登場人物の知覚を表すテ接続文は、接続の意味関係としては、「継起」、または、「因果」を読み取ることもできる。しかし、登場人物の知覚の描写は、登場人物の認識のプロセスも表している。3章で、接続形式テは、発話者の認識を表し、受信者は発話者の認識のプロセスをたどって、テ接続文の意味内容を再構築することを述べた。現実世界では、外部世界をどのように認識するかは、知覚主体にしかわからない。しかし、小説の世界では、作者が登場人物の知覚を掌握している。いわば作者は小説の世界においては全知全能である。登場人物の認識を全て表現することが可能なのである。

「見て」「聞こえて」のように視聴覚を表すテ節は、登場人物の認識のプロセスも表している。読者は登場人物の認識のプロセスをたどって、登場人物の内面的なイメージ像を形成する。登場人物の知覚を疑似体験しているとも言える。こうして、読者は、その小説世界の登場人物の知覚を疑似体験し、登場人物になりきることができるのである。

また、「聞いて」、「見て」等の視聴覚を表すテ節は、後続節の事象が起こる契機となる認識を暗示的に表現している。一方、「思い出して」「気づいて」のような内的知覚は、現実世界では知覚主体しか知り得ない内面的な認識であり、小説世界において登場人物の認識を把握できる作者にのみ可能な表現である。作者は登場人物の内的知覚を明示することによって、読者は登場人物の内面をのぞくことが可能になり、登場人物のイメージ形成もより具体的にできるようになる。しかし、小説の作者は登場人物の認識を把握はしているが、その認識を読者に明示するか、暗示するかは作者のレトリックの技巧に関わるであろう。

以上、小説に登場する人物の体と心の動き及び知覚をテ接続文が表現している文例を挙げて考察した。これらのテ接続文は、接続の意味関係から考えれば、「並列」、「付帯(様態)」、「継起」、「因果」のいずれかの意味関係が考えられる。しかし、小説というテキストの中での表現効果というから考えると、背景化してイメージ像を形成する接続形式テは、登場人物の体や心の動きのイメージ形成をするのに効果を発揮していると言えるであろう。

### 4.3.2 視線の移動

知覚主体の視線の移動は知覚認識のプロセスを表す。視線は知覚主体が何を認識しているかを表し、小説においては、知覚主体である登場人物の視線の移動は、登場人物の認識のプロセスを表す。読者は、登場人物の認識のプロセスを追うことで、あたかも読者自身が登場人物になったかのように小説の世界に入ることができる。

山梨（1995:205）は、移動と空間描写にかかわる言語表現として、次の3種をあげている。

- A. 外部世界の知覚される対象の移動
- B. 外部世界を知覚する主体の視線の移動
- C. 外部世界を知覚していく主体自身の移動

これを小説の描写に照らせば、Aは登場人物自身が移動を反映した「進む」、「曲がる」などの表現、Bは「向こうの」、「前の」など登場人物や語り手の視線の動きの表現、Cは知覚主体自身、つまり「私」自身の移動の反映した表現ということになる。

次の文例(41)は、小説の登場人物が部屋の中のモノに次々と視線を移動させていること表している。ヨーロッパのインテリアに強い憧れを持つ登場人物が、自分の住む和室を見回している場面である。登場人物が視覚的に捉えたものを叙述していくことで、読者は登場人物の視線をたどることができる。

(41) そして、自分の部屋に飛び込むと、よれよれと床に座り込んだ。

カラフルなカーテンを見て、白いベッドリネンを見る。だけど癒されない。

突然、びゅっびゅっと涙があふれた。

顔をあげると、木目調の天井が見えてますます私を泣かせた。 (ランチ)

山梨（2015:125）は、情景描写には主体のズームインの認知プロセスが関わっているとする。ズームインとは、カメラの撮影で焦点距離を変えて被写体を大きく写したり、小さく写したりするように、対象を知覚することを指す。そして、ズームインには、基本的に対象の全体から細部に向けて認知のスコップを絞り込んで知覚していくズームインの認知プロセスと、対象の細部から全体に向けて認知のスコップを拡大して知覚していくズームアウトの認知プロセスがあるとする。

以下の文例(42) (43)は、ズームインの例である。「見る」のような登場人物の視覚動作を

表す動詞使用するのではなく、まず全体を描写してから、その部分へと読者の視線を誘導する。テ節の全体描写は、情景の背景であり、後節で焦点化される事象のイメージ像を捉えるために必要な描写である。

- (42) 地上三十階建ての高層マンションで、一階にはホテル顔負けのロビーがある。  
(シャレード)
- (43) その書店には素敵な本がたくさんあって、なかでも私を釘付けにしたのがパリと  
ロンドンと北欧の人たちの日常生活を紹介した写真集だった。(ランチ)

また、次の文例(44)(45)のようにまずテ節で全体にあたる容器の存在を述べてから、その中身について焦点化して描写する場合もある。

- (44) 私が彼のために用意した湯呑み茶碗は、テーブルの上であって、半分ほどお茶が残  
っていた。(襲われて)
- (45) 孝典が倒れていたそばにはコーヒーカップが転がっていて、コーヒーがこぼれて  
いた。(シャレード)

次の文例(46)は、読者の視線を細部から外へと向けるズームアウトの例である。

- (46) 二時すぎに犯人は、近くの電話ボックスから宝石販売を偽って山藤家に電話を入れると、受話器を外したままにして、山藤家の低い垣根をのりこえて一彦を連れ去り、  
おそらくは近くに駐めてあった車でも使って逃走したと考えられた。(過去)

文例(46)は登場人物の誘拐犯の行動を時系列に警察の立場から描写している。犯人の行動を継起的に並べるだけでなく、電話ボックスの受話器→垣根→屋内→屋外へ犯人が犯行現場から遠ざかる犯人の移動も表している。このズームアウトは小説の語り手である警察官の認識のプロセスも表しており、読者もともにこの警官の認識のプロセスを追うのである。

#### 4.4 テ接続文のレトリックとしての表現効果

前節では、読者が作者の創作した小説世界や、登場人物のイメージ像を作り上げるのに

テ接続文が効果を表している文例を見た。本節では、テ節の位置や複数回使用、テ節と他の表現形式との併用など、テ接続文のレトリックとしての表現効果をみていく。

#### 4.4.1 台詞部分との併用

小説には、登場人物の台詞部分と、台詞以外の地の文（語りの文）がある。無論、このどちらか一方だけで書かれる小説もあるが、本節では、この台詞部分と地の文（語りの文）を接続形式テでつなぐ表現を取り上げて考察する。台詞部分と併用されるテ節は、次の3つのタイプに大別できる。①台詞を述べる人物の動作を背景として述べる場合（～て、「 」と言った。）、②登場人物の動作の先触れとして台詞を述べる場合（「 」と～て、～。）、③台詞部分にテ節が差し挟まれ、主節がない場合（～て、「 」）、の3つである。この3つのタイプを以下にみていく。

- ① ～て、「 」と言った。
- ② 「 」と～て、～。
- ③ ～て、「 」(主節なし)

①～て、「 」～と言った。

登場人物の発話直前の動作や様子をテ節によって表現する。読者はテ節の後に発話が続くかどうかは予測できないが、接続形式テは文がそこで完結せず次へつながるという構文的機能の特性から、テ節に続いてどんな事態が展開するか期待する。また、このテ接続文は、結果的に登場人物の発話がどのような状態で行われたかという場面の背景イメージも形成している。

(47) 弥生は自分の腕時計をちらりと見て、「五時二十三分です」と言った。

(シャレード)

(48) 葉次はそれには答えず、向こう側の壁を向いて、「ともちゃん」と少しはにかんだ声で言った。

(襲われて)

② 「 」と～て、～。

①とは逆に、登場人物の発話内容がテ節で先に提示される場合もある。この場合も接続形式テは文がそこで完結せず次へつなげるという構文的機能の特性からその発話に続

いて、どんな動作行為がなされるか、読者にストーリーの展開を期待させる効果がある。

(49) 「あなたは人間より樹木が見たいのでしょうか？」とドイツ系のアメリカ人女性が  
いって、パーティーの人びとで埋まっている客間をつれ出し、広い渡り廊下から  
ポーチを突っきって、広大な闇の前にみちびいた。 (雨の木)

(50) 客はジン・トニックを半分ほど飲み干してから、  
「ああ、疲れた」  
と呟いて、ソファの背に体を預け、目を閉じた。 (マッチ箱)

③ ～て、「 」(主節なし)

小説では、テ節に続いて台詞が書かれてはいるが、そのテ節を受ける「言う」、「聞く」などの主節がない場合もある。脚本のト書きのように発話者の動作や態度を補足説明し、登場人物のイメージ像を作る役割を果たしている。

(51) 「一杯だけ飲めるかな」  
「いいわよ、どうぞ。一杯と言わずどんどん飲んでくださいな」  
客はコートも脱がずに遠慮がちに腰をおろしたが、  
「駄目よ、コートを脱いで」  
と、むりやりママに脱がせられた。  
「お飲み物は？」  
「ジン・トニック。ママもなにか飲んで」  
「じゃあ、いただきわ。小森さんにジン・トニック。私は薄い水割り」  
チーフに注文を伝えてから振り向いて、  
「今日はどうした風の吹きまわし？」  
「友だちのそこへ。この近くのマンションにいるんだ。急用があつて。そのついでにちょっと。」  
「ご挨拶ね。奈緒子に会いたくなくなって、くらい言ったらどうなの」  
「じゃあ、奈緒子に会いたくなくて来た」  
「馬鹿」  
たった一人の客でも酒場は酒場らしい雰囲気になるものだ。 (マッチ箱)

(52) 警官はつぎにベッドの方へ顔を向けた。質問はやはり名前や職業からはじめられた。「木原葉次、二十六。タクシーの運転手です」と彼は少し吃りながら答えた。手術後の上に、警官の質問に答えるという緊張のせい、口をきくのがひどく大儀らしく見えた。警官の方はまるでそんなことは付度しない様子で、  
「タクシーの運転手さんがまたどうしてお宮の中を歩いていたりしたんですか」  
「いえ、その……すみません、実は小用を足し終わって、それで振り返ったら、誰かが襲い掛かろうとしていたもので…」  
「フン、それで」  
「夢中で後ろから組みついて……」  
「相手はすぐナイフを出した——？」  
「少しやりあってからです」  
「どんなふうにして刺されたんです？」  
「その、よくわからないうちに、あっと思ったら刺されたみたいで……」  
「相手は電車通りの方向へ逃げたんですね」  
「ええ」  
「どんな男でした？」  
「それが、よく憶えてないんです」  
木原葉次はまるで面目なさそうに目を伏せた。 (襲われて)

#### 4.4.2 テ節複数回使用

小説に表れるテ接続文の中には、1文中にテ節が複数回現れる文がある。テ節の複数回使用により、繰り返し動作を表したり、イメージ像を重ねて1つの像を形成したりする。

以下の文例(53)は、テ節によって繰り返し動作を表している。

(53) 起きて、会社に行く。働いて、昼休みがあつて、また働いて、一人きりのマンションの部屋へ帰る。買い物をして食事を作り、食器を洗い、ゴミを出す。 (返事)

「起きる」・「働く」、「昼休みがある」・「働く」・「帰る」、「買い物をする」・「食事を作る」という日常のスケジュールをテ節で接続することで、連続動作が動作のまとまりを作って

いる。それぞれの事象は単文レベルでは継起的に連続しているが、小説テキストという談話レベルでは、テ節によって1つの大きな動作のまとまりを作り、文脈的にはそれらが繰り返し行われることも表している。

次の文例(54)は、テ節の複数回使用によって、登場人物のイメージ像を重層的に作り上げている。

(54) 目を閉じていると、大人になった自分がパリで暮らしている姿が目に浮かぶ。

かわいいアパルトマンに住んで、もちろんフランス語はペラペラで、おしゃれな友達がたくさんいて、週末はマルシェに出かけるのだ。そして、そこで買った新鮮な食材で料理をして、友達を招いてちょっとしたパーティーをしたりする。

(ランチ)

登場人物が未来の自分像を思い描いている場面だが、読者には居住先や状況のイメージ像がテ節によって次々と重なり、1つの重層的なイメージ像を作り上げている。この文例も接続形式テは単文レベルでは並列の意味関係を表すに過ぎないが、談話レベルでは、イメージ像を重ねて大きな1つのイメージ像を作りあげる効果がある。

#### 4.4.3 連用中止節との併用

小説では、1文中に連用中止節とテ節を併用する文も多くみられる。

益岡(2013)は、いわゆる連用中止形を「中立形」と呼び、中立形接続は単純列挙(並列)の表示を基本とし、場合によって連用関係の一部(継起/因果)の意味を含意すると述べる。一方、テ形接続は、「並列・継起・論理(広義因果)・様態」の意味を包括的に表すと述べている。中立形接続とテ形接続の棲み分けについては、継起/因果の領域ではテ形接続が優先され、反対に、並列の領域では中立形接続が優先されるとしている。

奥田(1990)は、連用中止形を「第一なかどめ」、テ形を「第二なかどめ」と呼び、第一なかどめと第二なかどめが共存する場合のうち主に次の3種の場合を考察した。奥田(1990)の分類を以下に簡単にまとめる。なお、ここでは簡潔に記すため、「第一なかどめ」を「～シ」、「第二なかどめ」を「～テ」、定形動詞を「スル」と表記を変えている。

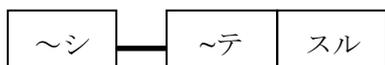
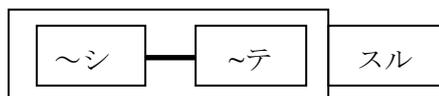
(図1) 第一なかどめと第二なかどめの共存 (奥田(1990)より一部改)

① 《第一なかどめ》 + 《第二なかどめ》 + 《定形動詞》

※ — : 並列関係を表す    

--	--

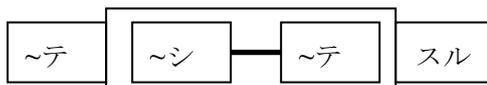
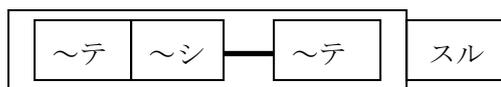
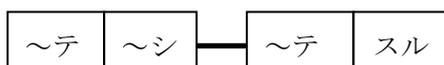
 : 従属的關係を表す



② 《第二なかどめ》 + 《第一なかどめ》 + 《定形動詞》



③ 《第二なかどめ》 + 《第一なかどめ》 + 《第二なかどめ》 + 《定形動詞》



また、奥田(1990)は、第一なかどめ(連用中止形)は2つの動作のあいだの並列的な関係を表し、第二なかどめ(テ形)は従属的な関係を表すとしている。

複文においてテ節と連用中止節の大きな違いは、節間の従属度である。テ節のほうが連用中止節より従属度が高いために、文脈によってはテ節は修飾節になることが可能であり、意味的には「付帯(様態)」を表すことができる。一方、連用中止節は従属度が低く、節の独立度が高いために、構文的には修飾節を作ることはいできない。

1文中にテ節と連用中止節を併用する場合、テ節が修飾節になり得るという構文的特徴が、意味内容の捉え方に影響する。例えば、「ハイヒールをはく」、「ドレスを着る」、「踊る」という、3つの動作をテ、または連用中止形で接続して1文を作る場合、以下のような4つのパターンが可能である。

①ハイヒールをはいて ドレスを着て 踊った。

②ハイヒールをはき ドレスを着て 踊った。

③ハイヒールをはいて ドレスを着 踊った。

④ハイヒールをはき ドレスを着 踊った。

それぞれの接続パターンにおいて、3つの動作の意味的關係は並立關係または継起關係と受け取ることが可能である。しかし、テ節は修飾節になり得るため、どこまでを修飾節と捉えるか、どこを修飾するかは、受信者の受け取り方に拠る。テ節のみで接続した①は「ハイヒールをはいてドレスを着て」を1つの修飾部とみなすこともできるし、「ドレスを着て」の部分のみを「踊る」の修飾節とみなすことも可能である。また、②のように連用中止節+テ節の文も同様に、「ハイヒールをはきドレスを着て」も、「ドレスを着て」も修飾部とみなすことができる。しかし、③のようにテ節が連用中止節に先行する場合は、連用中止節が修飾節にならないために、「ハイヒールをはいて」は「ドレスを着」の修飾節とみなせても、後続の「踊った」を修飾できない。

以上は、テ節と連用中止節の構文上の特徴である。小説のようなテキストにおいては、文脈によって読者の受け取り方も変わる。このような構文上の特徴を踏まえたうえで、小説におけるテ節と連用中止節の併用文の表現効果について考察する。本節では、テ節と連用中止節の併用文を、①テ節+連用中止節の文と、②連用中止節+テ節の2パターンに分けてみていく。

#### ①テ節+連用中止節

テ節と連用中止節が1文中に併用される場合、上述のようにテ節は修飾節になることができるため、テ節は後続の連用中止節で表される動作を修飾することができる。例えば、以下の文例(46)では、先行するテ節「垣根をのりこえて」は、後続の連用中止節「連れ去り」の修飾節とみなすことができ、節間の意味關係を「付帯(様態)」と捉えることができる。一方、連用中止節はテ節に比して従属度が低く修飾節にはなり得ず、節で述べられる事象の独立度が高い。そのため、意味的には継起關係、または並列關係と捉えられる。

(46) 二時すぎに犯人は、近くの電話ボックスから宝石販売を偽って山藤家に電話を入れると、受話器を外したままにして、山藤家の低い垣根をのりこえて一彦を連れ

去り、おそらくは近くに駐めてあった車でも使って逃走したと考えられた。

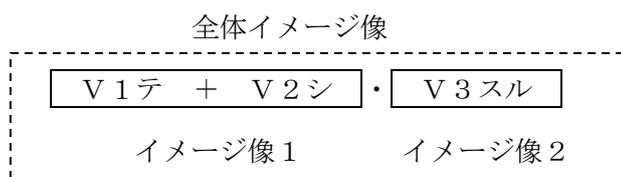
(過去)

- (55) かれは五年前まで、裏日本の地方都市でベトナム戦争からの脱走兵を援護する仕事をしていた。そのうちかれが CIA のスパイだという噂を仲間うちでたてられているのを知って、ひそかに東京へ逃れ、そのままアメリカへ戻った。(雨の木)

イメージ形成という点からみると、テ節はイメージを重ねて1つの像を作る。それに対して、連用中止節は、節の独立性が高いために、イメージ像を重ねることができない。そのため、イメージ像としては、連用中止節までで1つの像を作り、次の動作の像と並立する。簡単に図に表すと、以下のようになる。

(図 2) テ節+連用中止節 イメージ像形成

[V1 - テ、V-2 シ、V3 スル。]



## ②連用中止節+テ節

次に、テ節と連用中止節が1文の中で併用され、連用中止節が先行する場合をみる。連用中止節はテ節に比して構文的に独立性が高いため、テ節のように、事象のイメージが重なって1つの像を形成するのではなく、独立した事象が次々に生起していく印象を与える。次のような文例では、登場人物が次々に行動を起こす描写に連用中止節が使用されているが、テ節に比して個々の事象が独立し、並立しているように感じられる。

- (56) 朝八時に起き、濃いコーヒーを二杯飲み、小型のボストンバッグに衣類やかつら、必要なもの一切を詰めて、千賀子は出発した。今度は警官にも会わなかった。
- そのまま、都心のビジネスホテルにチェックインする。部屋で着替え、かつらをつけ、化粧も濃くしサングラスをかけ、バッグに宗一のつくった偽造カードと使用する CD 機のリスト、携帯用テープレコーダーとテープを入れて、外に出る。

(返事)

- (57) 大きい掌が、口を塞いだ。同時に、紙袋をさげていた左手首が荒々しく掴まれた。  
私の身体は後ろへ引っぱられ、弓なりに反って、踵がズルズルと土の上をすべった。息苦しさがいっそう恐怖を煽った。行きが止まりそうな、絶望的な恐怖——。  
(襲われて)

しかし、文例 (56) をみると、は文末の「出発する」、「出る」という最後の動作の前にテ節を使用することで、それまでに述べられた一連の動作が緩く繋がって、1つの修飾部とみなすことを可能にし、出発までの一連の準備という意味的なまとまりを作っている。

テ節による意味的なまとめ効果を、連用中止節のみの文、テ節+連用中止の文と比較してみる。

- (58) 記憶の中の事件が目の前で進行して行く事件と入れまざり、重なりあい、交錯し、  
僕を苛むのです。 (過去)
- (58)´ 記憶の中の事件が目の前で進行して行く事件と入れまざり、重なりあい、交錯して、  
僕を苛むのです。
- (58)″ 記憶の中の事件が目の前で進行して行く事件と入れまざって、重なりあって、交錯し、  
僕を苛むのです。

(58)´ のように、連続する連用中止節の最後にテ節を入れると、それまでの動作が意味的にまとまる。テ節は、修飾節になり得るため、連用中止節にテ節が続くと、読者はテ節を受ける主節の登場を予期する。そのため、連用中止節に続くテ節は、意味のまとまり、区切りを読者に感じさせるのであろう。

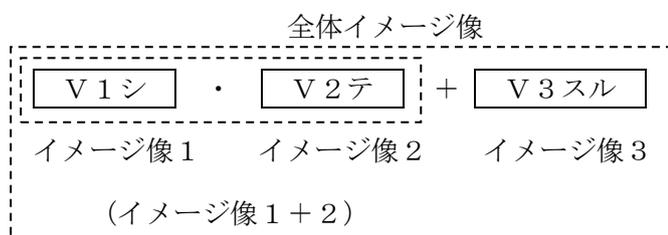
また、逆に(58)″のように、連続するテ節の最後に連用中止節を入れても、それまでの動作がまとまり、意味的な区切りになる。この場合も、読者は修飾節であるテ節を受ける主節を予期しながら読み進めるが、連用中止節の登場により、従属度の強さから、構文上の区切りとともに意味的な区切りも感じるのであろう。

このように、文脈にもよるが、動作が並列関係にある場合は、意味的なまとまりを作るという点では、テ節と連用中止節は、互いに役割を補完していると言える。

連用中止節+テ節の文のイメージ像形成を図にまとめると、次のようになる。

(図 3) 連用中止節+テ節 イメージ像形成

[V1 - シ、V-2 テ、V3 スル。]



#### 4.4.4 テ節言いさし文

次に、テ節の言いさし文の表現効果について述べる。白川（1991）、仁田（2008）は、形式上、主節を伴わずに従属節のみで表現される文を「言いさし文」と呼んでいる。

会話における言いさし文について、佐久間ら（1997）は、主節部分など省かれたものは受け手によって復元されるが、話し手と聞き手が融合しつつ1つの発言を作り上げたり、ことばの意味内容がふくらみを持ったり、効果的に印象づけられるとする。

白川（1991）は、唯一的な主節の復元はできず、言いさし文は言いたいことを言い終わっている完全な文であるとし、話者の幅のある混沌とした感情を暗示し、余情をもたせるとする。

荻原（2008）は、言語的に完全な文の形に復元できないとし、発話解釈は発話意図そのものを解釈することであり、発話以上の内容についての心的表象を表すとする。

原沢（1998、2000）は、テ形で終わる会話文について、依頼・願望文、条件付け省略、倒置、問いかけの4つの用法があると述べる。

小説等の地の文におけるテ節の言いさし文の表現効果については、管見の限り先行研究は見当たらなかった。また、筆者が小説の地の文を調べた限りでも、テ節で言いさしている文は会話文に比べて文例は少ない。小説の地の文（語りの文）における使用例は、登場人物の独白部分への使用と前文への後付けに大別できる。以下にその2つの場合の使用例をみていく。

##### (1) 登場人物の心中の独白におけるテ節言いさし文

(59) 女がマニキュアの爪先で、それをつまんで灰皿の中に捨てた。喫い口に染みたほの

かな紅色は灰皿の掃除をするときなどによく見るものだ。

——このごろ女の人のタバコ喫<sup>〇</sup>みもすっかり増えてしまって——

と、ぼんやり思った。 (マッチ箱)

(60) ——大丈夫なのかしらね、あんな安請け合いみたいなことばかり言って。

話の内容がわかっているわけではない。だがこれまでだって妙子は、調子ばかり良い男がつまづく姿を散々見ているし、池内にはそういう危なっかしさが常に付きまとっていると思う。 (福の神)

(61) 布田には、テレビ界の浮き沈みの中で生きてきた男独特の、得体の知れないところがあって、彼とこの女なら似合いの組合せと言えないこともない。彼の仕事も昼夜の区別のない世界だから夜明け前のデートもおおいにありうるだろう。

——待って<sup>3</sup>。布ちゃんは肌の白い女が好きだって言ってたけど——

隣席の女は少なくとも色白のほうではない。だが、色白の女が好きだからと言って、かならずしもいつも色の白い女となれるわけでもあるまい。(マッチ箱)

上記のテ節の挿入の文例は登場人物の独白部分に使用されている。登場人物の心の中の発話であり、1文中に挿入されているが、挿入部分だけをみれば、会話の中のテ節の言いさし表現と同じである。原沢(1998、2000)の、条件付け省略、倒置、依頼・願望文の用法に相当する。心の中の動きは本来、他人にはわからないものであるが、小説では登場人物の心中の発話を描写することによって、読者は登場人物になりきったり、実際に聞いたかのように感じられる。

## (2) 後付けのテ節言いさし文

以下の文例は、テ節の言いさし文がテキストの中に挿入されている。テ節を受ける主節はないが、文脈から意味内容は推測できる。そして、テ節の内容は前文の内容を補足している。この文例の主節を補うことは可能であるが、主節を補うと、語句が重複したり、従属節が長くなったりし、かえって読みにくくなるであろう。テ節の言いさし文は、意味内容推測を読者に委ねるというテ節の特性を生かし、読者がテンポよく読み進められるという効果を生んでいる。

<sup>3</sup> 「待って」の「て」は終助詞とされるが、本論では「～てください」「～てくれ」を「テ」で言いさした表現として、分析に含めた。

- (62) そこで自分は、この建物におけるかぎり、ここに隠れ住む者らに、かれらの個々の「位置」を確保しようと、精魂こめて働いたのだ。自分自身のための「位置」としては、建物におけるもっとも低いところに、すなわち地下のガレージに仕事部屋をしつらえて。 (雨の木)
- (63) そしてニューヨーク育ちのかれの、およそ独自の方向づけに洗練と逸脱をかさねる談論のような、かれのいわゆるハイクについて僕の批評を聞こうとする。そこに読まれた、硝子窓につぶれてこびりついた蠅の、羽根越しに雪の絵までを、カフェテリアの紙ナプキンに描いて。つまり俳句の国の小説家の真正な批判を、どうしても聞き出そうとするのであった。 (雨の木)
- (64) というわけで、私はあくまで将来のためにこのカードゲームに参加している。けれど、この子たちと遊んでいるわけじゃない。あくまで、これは将来のためだ。目の前でポテトチップスをバリバリ食べてる久美は、アメリカからデザインを勉強しに来ている学生ということにして (久美にダイエットという文字はない)。刈り上げにしている紀子は、私が通っているお気に入りのカフェでウェイターをしている男の子ということにして (紀子には女の子らしいという文字はない)。おしゃべりな夏江は、有名なブティックで働く陽気なイタリア人ということにして (夏江には思い悩むという文字はない)。そう思えば、花札で遊ぶのもまあ、悪くないということになる。 (ランチ)

次の文例は上記の文例に比べて前文が短く、文の形としてはテ節と主節の倒置と考えることもできる。しかし、テ節は意味的には後付けであり、前文の内容を後続のテ節が補足している。また、主節を明示しないことにより、読者に余韻を感じさせる効果もある。

- (65) 千賀子は階段をおり、マンションに向かって歩きだした。コートの襟元をかきあわせ、肩からバッグをさげ、靴のかかとをうつろに鳴らして。 (返事)
- (66) 彼の格好は、いつも同じだった。渋い色の背広を着て、重そうな革靴を履いている。左手には、弁当箱が入っているらしい小さなバッグをさげて。 (返事)

#### 4.4.5 テ接続文への句挿入

テ節は文の句切れを表している。小説では、その文の句切れとなるテ節の後ろに句が挿入される場合がある。テ節の後に、( ) や、——等の記号を使用して、テ節の意味内容を補足する。

- (67) 彼女がドイツという母国を捨てて(それが東であるか西であるかすらをも、僕は確かめていなかったが)、ハワイに移住した人間であることのみが、僕の知るところであった。 (雨の木)
- (68) 隣の女は、むしろ流行のドレスなどを巧みに着こなすような様子で——事実、その時着ているスーツも、白地に黒縞くろじまのなかなかシックなものだったが、——和服によるしい面差し、体つきではない。 (マッチ箱)
- (69) 私は、何だか一人になりたくなくて——というのも変だけど——階段を上って行った。 (透き通った)

( ) や——の記号表示により、読者にはそれが挿入部分であることがわかる。テ節の意味的なまとまりを作って、文中でいったん区切れるという特性を生かした表現手法である。テ節の内容を挿入部が補足している。意味的にいったん区切れるが、後続の挿入部の内容は前掲のテ節の内容と関連しているため、意味的には自然にテ節の主節へとつながっていく。テ節が意味的にいったん区切れはするものの、続いているという特性をも生かしている。

#### 4.5 小説におけるテ接続文の表現効果 まとめ

以上、本章では小説の地の文(語りの文)における、テ接続文の表現効果について分析、考察を行った。テ接続文の表現効果を以下にまとめる。

小説で描かれる世界は作者が創作した虚構の世界である。読者はまず小説世界の舞台となる時空間のイメージ像を作り、その舞台に登場する人物のイメージ像を作る。さらに、登場人物の体の動きと心の動きのイメージ像を作る。このように、小説を読むということは、読者が作者の創作した世界と人物をイメージ化して再構築する作業であると言える。

前章で述べたように、テ接続文の意味内容は、複数の事象を重ね、1つの像を作り出すことによって捉えられる。小説の中でもテ接続文は読者が小説世界や登場人物のイメージ像

を作るのにその効果を発揮していることが本章で明らかになった。そして、その登場人物の体や心の動きのイメージ像形成にもテ接続文は同様の効果を発揮していることもわかった。

また、接続形式テの中核的意味は発話者の認識を示すことである。小説の作者は登場人物が知覚したことを接続形式テによって表し、読者も登場人物の認識のプロセスを追って小説世界や人物のイメージ像を形成する。

このように小説世界や登場人物のイメージ像形成において、テ接続文の像形成という意味構築が効果を発揮している。

また、接続形式テの文が完結せず次へつながるという構文的機能は、読者に期待感を持たせたり、ストーリー展開の予兆を感じさせたりするという表現効果を生む。

そのほか、テ節の文中への挿入や言いさし等の表現は、小説においては余韻をもたらしたり、前文の意味内容を補足したり、テンポよく読みやすくするなどさまざまな表現効果を生む。これらの効果も、接続形式テの構文的機能や中核的意味、テ接続文の意味構築の特徴によるものである。

これらの表現効果は、単一のテ接続文だけでもたらされるものではない。小説という大きなテキストの文脈の中でもたらされる。テ接続文は読者による意味内容の推測が基本であるが、小説においては、その推測の手がかりは小説テキスト全体にある。小説の作者が作者の創造した小説世界をどう読者にイメージ像を作らせ、再構築させるかが重要である。テ接続文は、小説世界のイメージ像を時には明示的に、時には暗示的に読者に形成させることができる表現である。テ接続文を効果的に使いこなすことは、文章表現の技術の1つであると言えるであろう。

## 第5章 中国語母語話者のテ接続文の意味内容の推測

第3章では、テ接続文の意味内容の捉え方、接続形式テの中核的意味を明らかにした。接続形式テは発話者の認識を表し、テ接続文の受信者は発話者の認識のプロセスをたどって、意味内容を再構築する。

しかし、テ接続文の意味内容の推測は受信者依存であるため、発話者の発話意図と受信者が推測した意味内容は、必ずしも同じではない。意味内容の推測は受信者にゆだねられている以上、受信者は自由な意味内容の推測が許されてはいるが、はたして、受信者は発話者の意図を推測できているのだろうか。また、テ接続文の意味内容の推測には、受信者の経験や知識、文化背景なども関わる。個人差もあるが、受信者が日本語を母語としない場合はどうであろうか。

本章では、中国語母語話者の日本語学習者が、テ接続文の意味内容の推測をどのように行っているか、テ接続文の中国語翻訳文から分析、考察する。

### 5.1 語用論的推論

接続形式テは意味関係を表さない。テ接続文の意味内容の推測は受信者にゆだねられている。3.2でも述べたように、テ接続文は形としては単一の文であるが、複数の文からなる1つの談話 (discourse) と考えることができる。談話としてテ接続文の意味内容の推測を考える時、語用論の推論の考え方は有用であると考えられる。以下に、まず語用論の基本的な推論の考え方について概観する。

語用論は20世紀半ば、言語哲学において「日常言語」の研究として進展した。それまでの言語研究はソシュールの言うラング (langue)、言語規則等が研究の中心であったが、語用論では言語使用者を重視し、実際に使用されるパロール (parole)、個人の発話行為を研究対象にしている。なお、語用論では談話が研究対象であるが、談話とは話し手と聞き手の間で交わされるやりとりを指し、音声言語によるやりとりも文字言語によるやりとりも研究対象となる。

以下に、語用論の基礎概念とされる Grice (1975) の「会話の協調原理」 (conversational cooperative Principle) と、それをさらに発展させた Sperber & Wilson (1995) の関連性理論を概観する。

### 5.1.1 会話の協調原理

「会話の協調原理」(conversational cooperative Principle)は、1960年代に言語学者の Grice によって提唱された。

Grice は会話参加者は会話をする際、会話が潤滑に進むようにお互いに協力し合うことが暗黙のルールであると考えた。それが以下に示す「会話の協調原理」である。

#### 【会話の協調原理】

あなたの発話を、その時点で、あなたが参加している会話の受容済みの目的や方向性に求められるものにしてください。

Make your conversational contribution such as is required, at the stage at which it occurs, by the accepted purpose or direction of the talk exchange in which you are engaged.

Grice は、さらにこの「会話の協調の原理」を4つの原則(maxim)を分けて規定する。

#### 【4つの原則】

##### (1) 量の原則 (Maxims of Quantity)

「必要な量の情報の情報を発話に盛り込め」

Make your contribution as informative as is required.

「必要以上の情報を発話に盛り込むな」

Make your contribution as informative as is required.

##### (2) 質の原則 (Maxims of Quality)

「間違っていると思うことを言うな」

Do not say what you believe to be false.

「十分な証拠のないことを言うな」

Do not say that for which you lack adequate evidence.

##### (3) 関係性の原則 (Maxims of Relation)

「関係・重要性のあることを話せ」 Be relevant.

##### (4) 様態の原則 (Maxims of Manner)

「曖昧な表現は避けよ」 A void obscurity.

「解釈が分かれるような言い方はするな」 A void ambiguity.

「簡潔に話せ」 Be brief .( avoid unnecessary prolixity )

「順序良く話せ」 Be orderly.

Grice の「会話の協調原理」は、必ず守らなければならないということではない。実際の会話ではこの原則は破られることも多いが、それで会話が破たんするとは限らない。「会話の協調原理」は話し手と聞き手が適切なコミュニケーションをするための規範を示している。この規範をテ接続文に照らして言えば、接続形式テは接続の意味関係を特定しないという点で、曖昧な表現であり、解釈は固定せず、「様態の原則」を破っていると言える。

### 5.1.2 関連性理論

次に、Grice の「会話の協調原則」を展開させた Sperber & Wilson (1995) の「関連性理論」(Relevance Theory) を概観する。

#### 【関連性理論】(Relevance Theory)

関連性第1原則：

人の認知は(一般的)傾向として関連性が最大になるように調整されている。

Human cognition tends to be geared to the maximizations.

関連性第2原則：

すべての意図明示的伝達行為は、それ自体(聞き手にとっての)最適な関連性を見込みを伝達する。

Every act of ostensive communication creates a presumption of its own optimal relevance.

第1原則は、ヒトはできるだけ効率よく情報を処理できるようにできていて、その情報がその人にとっての関連性が多いほど、処理労力は少なくて済むことを説明している。

第2原則は、発話は基本的に明示的伝達であり、いかなる発話もそれ自体が聞き手にとって最適な関連性を有しているということを述べている。つまり、ヒトと明示的な発話が元々有している原則、認知力と聞き手への最適な関連性が元々備わっていることを述べるものである。

関連性理論は意図明示的コミュニケーションを前提としている。関連性理論は発話の意味を「表意」(explicature)と「推意」(implicature)に区別する。表意は論理形式によ

って言語的符号化されていて明示的であるが、推意は非明示的で文脈によって伝達されるとする。関連性理論の発話解釈は、関連性理論に基づいたコード解釈と演繹的推論の相互作用によるものとされる。発話のコード解読によって引き出した論理形式に推論を加えて表意を算定し、さらに既存の想定を前提とした推論を加えて、推意を算定する。この表意に推意を加えたものが発話解釈であるとする。

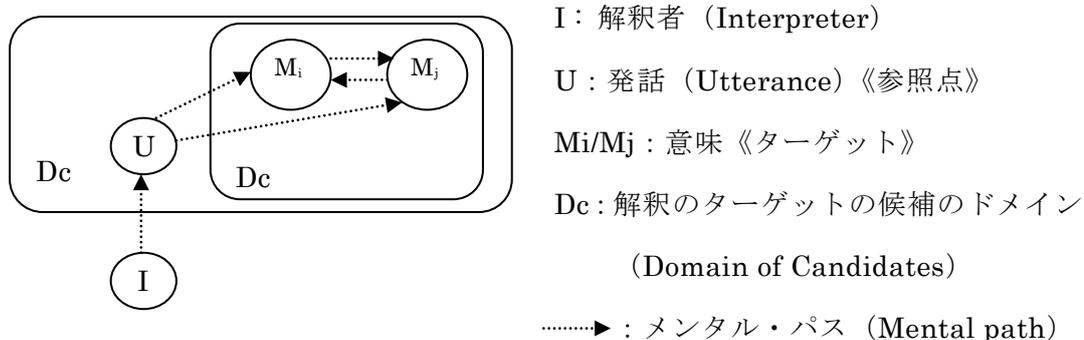
関連性理論は、推論の演算によって、受信者にとって最適な関連性が達成されるように発話解釈がなされるとする。しかし、テ接続文は非明示的であり、発話者自身に明示的に伝える意図があまりないのではないかと思われる。テ接続文は複数の接続の意味関係を包括的に含んでいることが特徴であり、発話者は包括的な意味関係を提示し、受信者もどの意味関係が「最適」か、計算によって選択するのではなく、包括的に解釈するのではないだろうか。

### 5.1.3 認知語用論

語用論は、上記の Grice や Sperber & Wilson らの言語哲学の流れを汲んで展開した研究方向とは別に、認知言語学の一部門としても展開してきた。どちらも発話解釈に推論や解釈者の知識を重要視する点は共通しているが、認知言語学は、関連性理論で述べられるような効率と労力の経済性による基づくコミュニケーション観や認知の計算等の計算主義とは一線を画している。なお、この研究方向は、「語用論」とは区別して「認知語用論」と呼ぶこともある。

山梨 (2000) は、言葉の背後に存在する主体の認知力の観点からの発話解釈の具体的なプロセスの規定を試み、「参照点起動の推論モデル」を提案した。

(図1) 【参照点起動の推論モデル】 (山梨 2000:114)



「参照点起動の推論モデル」は、問題の発話が文字通りの意味で一義的に解釈されるの

ではなく、複数の意味が相互にせめぎ合いながら解釈される状況を示している。発話 (U) から  $M_i$  が解釈のターゲットとして起動された場合、 $M_i$  の意味が次の意味となり、この意味を手がかりにして次のターゲットの意味である  $M_j$  が起動される。また、逆に、同じ発話 (U) から  $M_j$  が解釈のターゲットとして起動された場合、 $M_j$  の意味が次の参照点となり、この意味を手がかりにして次のターゲットの意味である  $M_i$  が起動される。ただし、問題の発話の意味がこれらの2つの解釈のいずれかに解釈されるのではなく、この両者の解釈が同時にインターアクトし、せめぎ合いながらゆらいでいる状況を示している。山梨 (2004) は、日常言語の伝達のプロセスは、話し手が発する言語表現とその発話文脈における非言語的な手がかりを聞き手が参照しながら、その背後の意味を主観的に汲み取っていくダイナミックなプロセスであると述べる。

また、山梨 (2004) は、日常の表現は省略に満ちており、伝えたい意味のすべてを十全な形では表現しておらず、日常言語の伝達は話し手と聞き手の背景的な知識を前提として生きた文脈の中で行われ、意味の解釈は聞き手側の解釈にゆだねられるとするが、必ずしも話し手が意図した意味が正確に聞き手によって復元される保証はないと述べる。

テ接続文は接続形式が明示的な意味を持たないために、意味内容の推測は受信者にゆだねられている。また、接続の意味関係を1つに確定せず、複数の意味関係を包括的に表す。この「参照点起動の推論モデル」の意味解釈の考え方は、テ接続文の意味内容の推測にも応用できるのではないだろうか。

#### 5.1.4 テ接続文の意味内容の推測

テ接続文の意味内容の推測はどのようになされるのだろうか。以下に、テ接続文の意味内容の推測に言及している先行研究を挙げる。

草薙 (1985) は、「～テ」型は言語外現象の意味を限定しないため、文中の他の情報を手がかりにして意味を限定していると述べている。草薙は以下のような例を挙げ、2つの出来事として表現するのと、前者が後者の理由だとすることの判断は受信者にゆだねられたことであり、受信者がその意味を選択しているとする。

(1) 遅く帰って、しかられた。 (遅く帰ったので、しかられた。)

遅く帰って、しかられなかった。(遅く帰ったのに、しかられなかった。)

長辻（2010）は、関連性理論の観点からシテ形にコード化される意味について述べている。長辻は、シテ形は推論の方向性に指示を与える「手続き的情報」であり、その手続き的な情報をコード化しているとする。そのシテ形の手続き情報には先行情報から後続情報への順序性が含まれており、その順序性が解釈を一定の範囲に限定すると述べる。しかし、解釈は唯一ではなく、解釈が一般化することによって多様な解釈が伝達されるとする。

甲田（2001）は、テ形のように聞き手に解釈の余地を残す、幅を持った関係を担う表現は、聞き手（読み手）は「話者が述べたこと」よりも情報量を付加して理解しており、「話者によって言われたこと」と「伝達され聞き手が受け取る意味」の間にはギャップがあると述べる。また、文脈に整合性をつけながら理解していく過程の解明のためには、聞き手に「実際に伝達される」意味について考えておく必要があるとも述べている。

松浦（1996）は、日本語母語話者と日本語学習者の予測能力を明らかにするために、テレビニュース文を「～テ、」まで聞かせて、後続部分を予測させるという調査を行った。その結果、テ接続文の後件予測には、前件の意味内容を理解していること、前件の主語の有無、先行文脈、意志的か無意志的か等の言語知識に関する条件と、そのニュースに関連するスキーマや、どのようなニュースが報道されるか知っているなどの言語外知識の条件を満たす必要があると報告している。このテ接続文の後件の予測条件は、テ接続文の意味内容の推測の際の手がかりとも言えるだろう。

以上のテ接続文の意味推測の先行研究をまとめると、テ接続文の意味内容の推測は、まず、受信者にゆだねられており、受信者は自由に意味内容を推測したり、情報を付加したりことが許されている。また、意味内容の決定の選択権も受信者にある。そして、受信者は文脈、語彙の意味、関連知識等を手がかりにして、意味内容の推測を行う。

一方で、発話者は、受信者の推測と発話意図が必ずしも一致せず、ずれが生じることも認識しておかなければならない。

## 5.2 テ接続文と中国語の文の並列の意味用法の相違

本章では、中国人母語話者がどのようにテ接続文の意味内容の推測を行っているかを分析、考察する。日本語非母語話者の場合、母語との比較もテ接続文の意味内容の推測に影響を与えるのではないかと推測される。本節では、まずテ接続文に類似している中国語の文の並列表現の文法的特徴について概観しておく。中国語の文の並列と日本語のテ接続文を比較してその相違を踏まえ、次節で中国語母語話者のテ接続文の意味推測を考察する上

の参考としたい。

### 5.2.1 中国語の文の並列

中国語は日本語と異なり、語形変化がない。また、接続詞などの接続表現を用いずに文を接続することができる。文を並べるだけで複文が完成するという特徴を持つ言語である。以下に、日本語のテ接続文に相当する中国語の文の並列の意味用法を概観する。

#### (1) 文の並列

大河内(1986)は、中国語の特性として「接続」を挙げ、「中国語の接続とは並んでいればおのずとつながっている。そのつながりがどこで切れ、またそれらがどのような関係で論理を構成していくかについては本来十分に語られない言語である。」と述べている。大河内は以下のような例を挙げ、中国語の文の切れ目のあいまいさを説明する。読点で区切られた中国語の文は1文であるが、終止形が文末を表す日本語では4つの文となる。なお、この中国語の例文(2)aは、読点を句点に置き換えて例文(2)bのように4文とすることも可能である。

(2) a. 这儿有，给你，好，都给你吧。

b. 这儿有。给你。好。都给你吧。

(ここにあるよ。君にあげるよ。いいよ。みんな君にあげるよ。)

大河内(1986)より

また、中国語は接続関係を明示する形式がなくても文を続けていくことが可能であるために、どこに読点を付けるかによって、文意が変わる場合もある。

(3) 这是办公室不是饭厅

a. 这是办公室，不是饭厅。(ここは事務室で食堂ではありません。)

b. 这是办公室？不，是饭厅。(ここは事務室？いや、食堂だ。)

大河内(1986)より

#### (2) 連動文

中国語は、動作が行われる順に文を並べて文を作ることが可能である。このような動作を順に連ねた文を連動文と言う。例えば、「私は本屋に行って、本を買う。」は「我去书店买书。」となる。日本語のテ接続文はこれまで述べてきた通り、接続形式テによって接続を表し、文を作る。中国語は動詞の語形変化はないため、「我去书店买书。」は、接続形式を用いずに、「我去书店」（私は本屋へ行く）と「(我) 买书」（本を買う）という2つの文を並べて文を作っている。

以下に、簡単に中国語の連動文の意味用法をまとめる。

### 【中国語の連動文の意味用法】

#### ①前後して起こる動作を表す

我买瓶汽水喝。 (私はサイダーを1本買って飲みます。)

#### ②動作行為の目的を表す

我去机场接朋友。 (私は空港に友人を迎えに行きます。)  
[直訳：私は空港に行って友達を迎える。]

#### ③動作行為の手段・方式を表す

我骑自行车上班。 (私は自転車に乗って出勤します。)

※我走着去上班。 (私は歩いて出勤します。)

我站着工作。 (私は立って仕事をする)

我们把白菜炒了吃了吧。 (白菜を炒めて食べてしまおう)

持続を表す「着」や完了を表す「了」などの助詞が必要となる場合もある。

#### ④後ろの動詞句が前の動詞句を修飾する

我没有钱买手机。 (私は携帯電話を買うお金が無い)

[直訳：私はお金がない、携帯電話を買う]

以上、中国語の連動文の意味用法を見ると、テ接続文と単純に比較はできないが、テ接続文の「継起」、「付帯（様態）」関係を表す意味用法と重なるところがあることがわかる。

なお、中国語の連動文は、原則として動作が行われる順に並べるため、「他天天念书、看电视。」（彼は毎日本を読んでテレビを見る。）のような文は、テ接続文では、「本を読む」と「テレビを見る」は並列関係にあり、入れ替えても全体の意味は変わらないが、中国語の連動文は入れ替えると意味が変わる。

- (4) a. 他开门出去了。 (彼はドアを開けて出て行った)  
b. 他出去开门了。 (彼は出て行ってドアを開けた)

つまり、中国語の連動文は基本的に「継起」の意味関係を表しており、「並列」の意味関係を表すことはできないのである。

### (3) 複文

中国語では、接続形式を用いずに文を接続し、複文<sup>1</sup>を作ることができる。例えば、「我是大学生」(私は大学生です。)と「我弟弟是高中生。」(弟は高校生です。)という2つの独立した単文を並べることで、1つの複文を作る。これは、テ接続文の意味用法のうちの「並列」に相当する。

- (5) 我是大学生，我弟弟是高中生。 (私は大学生で、弟は高校生だ)

中国語の複文には、関連詞のあるものとなないものがある。関連詞とは、複文の構成要素になっている単文を結びつける機能を持つ接続形式のことである。例えば、「昨日は天気が悪かったので、私たちは万里の長城にいかなかった。」という文は、中国語では以下のように表現できる。(6)aのように「因为…所以～」(…なので～)という因果関係を明示する関連詞、すなわち接続形式を用いて表すこともできるが、(6)bのようにその接続形式を用いなくても表現できる。

- (6) a. 因为昨天天气不好，所以我们没去长城。

- b. 昨天天气不好，我们没去长城。

(昨日は天気が悪かったので、私たちは長城にいかなかった)

井上 (2003) より

大河内 (1967、1986) は、このような接続形式を用いない中国語の複文の文句の接続関係を因果関係、転折関係、条件関係、譲歩関係の4つに意味分類している。

---

<sup>1</sup> 井上優 (2003) は中国語の複句は日本語の複文とは異なると述べている。

因果	…したので…	她已经作了明星，我们不容易接近了。 (彼女は映画スターになったのだから、私たちはなかなか近よりがたいわね)
条件	…するなら、…	她作明星，我们不容易接近了。 (彼女が映画スターになるなら、私たちはなかなか近よりがたいわね)
転折	…したけれども…	他存那么多钱，舍不得买双袜子。 (彼はあんなにお金をためているのだが、一足の靴下を買おうとしない。)
譲歩	…たとえ…しても…	存多少钱，他舍不得买双袜子。 (たとえどれほどお金をためようとも、彼は一足の靴下を買おうとしない)

大河内(1986より)

大河内は、このような文の意味の読み取りは、前後句の論理関係が順接か逆接か、前句の内容が未然か已然か、2項によって決まると述べる。

(表1) 中国語の複文の文句の接続関係 (大河内 1986:74)

		前句の内容		
		未 然	已 然	
		(不確定表現)	(確定表現)	
論 理	{	順 接	条件の文	因果の文
		逆 接	譲歩の文	転折の文

大河内(1967、1986)の中国語の複文とテ接続文の意味用法を比較すると、テ接続文「因果」の意味用法には、順接と逆接があり、これが大河内に述べる「因果」、「転折」に当たる。しかし、「条件」、「譲歩」に当たる意味用法はテ接続文にはない。すなわち、中国語の複文には前句は未然の事柄(不確定表現)を使用できるが、日本語のテ接続文には使用で

きない。言い換えれば、テ接続文には「仮定条件」の意味用法はない。

この「仮定条件」の意味用法については、第3章でも触れたように、古典文法のテ接続文では「仮定」も表していた。日本人の時間概念が現代とは異なっていたことを伺わせるものであるが、中国語では文を並列させるだけで、未来の未確定の事柄も受信者に推測させられるということは、文の並列の意味関係の読み取りの許容範囲は、本来もっと広いということを示唆していると言えるかもしれない。

### 5.2.2 テ接続文と中国語の文の並列の意味用法の相違

以上みてきたように、中国語では接続形式を用いずに文を並列させて、連動文や複文を作ることができる。これらの文は、構造的には日本語のテ接続文と似ているが、文の接続によって表せる意味関係には違いがあることがわかった。中国語の文の並列とテ接続文の意味用法を比較して簡単に以下にまとめる。

(表 2) 中国語の文の並列とテ接続文の意味用法

中国語 文の並列 意味用法		日本語 テ接続文 意味用法
連動文	継起	継起
	様態	様態
複文 (接続形式なし)	並列	並列
	因果	因果
	仮定条件 (譲歩・条件)	—

中国語の文の並列はテ接続文は構造的にも似ており、日本語のテ接続文が表せる意味用法は全て表すことができる。この類似性から、中国語母語話者にとってテ接続文の意味内容の推測は容易でないかと仮説をたてることができる。この仮説については次節で検証する。

### 5.3 中国語母語話者のテ接続文の意味推測

前節で、テ接続文と中国語の文の並列の類似点を明らかにし、中国語母語話者はテ接続文の意味内容を推測しやすいのではないかという仮説を立てた。本節では、テ接続文の中国人母語話者の中国語翻訳文を分析し、実際に中国語母語話者がどのようにテ接続文の意味内容を推測しているか考察する。

#### 5.3.1 調査概要

##### 【調査目的】

非日本語母語話者である中国語母語話者がどのようにテ接続文の意味内容を推測しているかを明らかにする。

##### 【調査方法】

中国の大学で日本語専攻している中国語母語話者（17名）にテ接続文を中国語に翻訳してもらい、その中国語翻訳文を分析、考察した。なお、翻訳は直訳ではなく、中国語として自然だと思う文に翻訳するように依頼した。

テ接続文は、調査に参加した学習者の使用教材から抜粋した。調査参加者は、テ接続文の基本的な意味用法「並列」、「付帯（様態）」、「継起」、「因果」は学習済みである。翻訳を依頼したテ接続文は、基本的に教科書でこれらの意味用法の説明の際に例として提示されている文である。

テ接続文の中国語翻訳文の表現や語句から、翻訳者が各テ接続文の意味関係をどう推測したかを分析、考察した。

##### 【調査対象者】

中国の大学で日本語を専攻する学生 17名

※うち1名は日本語非専攻だが、日本語能力は日本語専攻学生と同等レベル。

日本語学習歴：1年半（日本語学習時間 約600時間）

日本語レベル：初中級

母語：中国語

※母語が朝鮮語の調査対象者もいるが、中国語による教育を受けている。

日本語学習環境：中国の大学で日本語を専攻。日本長期滞在経験なし。

教授言語は基本的に中国語。中国語解説付きの日本語教材を使用。

### 【調査したテ接続文】

調査対象者に翻訳を依頼したテ接続文例は以下の 7 文である。これらの文は学習者の使用教材『総合日語 I, II』（北京大学出版社）から粹抜した。

※1 [ ] 内は筆者の推測した接続の意味関係を示す。

ただし、調査対象者には筆者の推測した接続の意味関係は伝えていない。

※2 文例⑦は調査の際、推測の手がかりとして、テ接続文の前文も提示した。

①高橋さんは高校の後輩で、今、京華大学の語学研修生です。[並列]

②父は会社員で、母は医者です。[並列]

③王さんは頭がよくて、日本語も上手です。[並列]

④女性が男性の格好をして、踊りを踊りました。[様態]

⑤朝、7時に起きて、予習をして、大学に行きます。[継起]

⑥いい成績がとれてうれしいです。[因果]

⑦母の影響で京劇が好きになりました。

母は芝居や音楽が好きで、わたしも小さいときにいろいろなものを見にいきました。

[並列/因果]

なお、調査したテ接続文は「動詞+テ（デ）」、「形容詞/形容動詞+テ（デ）」、「名詞+デ」である。調査例文「①高橋さんは高校の後輩で、今、京華大学の語学研修生です。」の「高校の先輩で」のような「名詞+デ（助動詞「ダ」の連用形）」も、本論では「用言+テ」と同様に従属節を形成し、文脈によって「並列」や「因果」の接続の関係を表すことから、本論の接続形式「テ」の範疇にあるとみなす。

### 5.3.2 調査結果

調査結果を以下の表 3 にまとめる。表 3 の縦軸は、筆者が推測した接続の意味関係を示す。横軸は、調査対象者の中国語翻訳の表現方法である。中国語翻訳の表現方法は、次の 3 つに大別した。i) 文の並列、ii) 接続の意味関係を明示する語句の挿入、iii) 文構造・意味の再構築の 3 種である。

調査の結果、中国語母語話者の学習者は、「継起」の意味関係を表すテ接続文以外は、文を並列させて中国語で表現することがわかった。中国語の文の並列という表現からは、テ接続文と同じく、接続の意味関係を明確化させずにそのまま受け取っていることが推察

される。

一方、「継起」の意味関係を表すテ接続文は、中国語では文の並列で表さず、何らかの「継起」の意味関係を明示的に表す語句を入れて翻訳していた。このことは、中国語母語話者は、「継起」の意味関係を表すテ接続文は積極的に解釈する必要性があることを示唆している。

また、「並列」、「付帯（様態）」、「因果」の意味関係を表すテ接続文にも、文の並列表現ではなく、それらの意味関係を明示的に表す語句を挿入して、接続の意味関係を明示化して中国語に翻訳する例が見られた。これらの意味関係を明示化した翻訳例から、受信者が積極的にテ接続文の意味内容を推測していることがわかる。

さらに、テ接続文には含まれていない情報を付加したり、テ接続文の文構造を再構築して意味内容を捉え直したりしている翻訳例もみられた。これらも受信者がテ接続文の意味内容を積極的に推測していることの表れと言えるだろう。

(表 3) 中国語母語話者のテ接続文の中国語翻訳表現

文例	接続の意味関係	テ接続文		受信者の中国語翻訳表現 (人)					
		テ節品詞	前後句主語	文並列表現	明示的表現の挿入				文・意味再構築
					並列	様態	継起	因果	
①	並列	名詞	同一	14	0	0	0	0	3
②		名詞	異	17	0	0	0	0	0
③		形用詞	同一	9	8	0	0	0	0
④	様態	動詞	同一	10	0	3	0	0	3
⑤	継起	動詞	同一	0	0	0	17	0	0
⑥	因果	動詞	同一	8	0	0	4	3	2
⑦	並列/因果	形容動詞	異	6	0	0	0	10	1

※文例⑤の無回答（1名）

※接続の意味関係は筆者の推測による。

### 5.3.3 分析・考察

#### 5.3.3.1 文の並列表現による包括的意味推測

「継起」を除く、「並列」、「付帯（様態）」、「因果」の意味関係を表すテ接続文は、中国語で文を並列して表現した翻訳例が多くみられた。以下、接続の意味関係別にみていく。

(1) 「並列」関係を表す文の並列表現

テ接続文の文例①～③は、いずれも「並列」の意味関係を表すと推測できるテ接続文である。文例①と②はテ節が名詞節で、前後節の主語が同一主語、異主語の違いはあるが、どちらも中国語の文の並列表現を用いて翻訳された例が多かった。

文例①（名詞節・同一主語）は、調査対象者 17 人中 14 人、文例②は 17 人中 17 人全員が中国語の文の並列表現を用いて翻訳していた。中国語翻訳文の読点「,」の前後は中国語では単文として成立する（同一主語の文例①は主語が省略されている場合もある）。テ接続文の「テ」を読点「,」に置き換えて表現したとも言える。この中国語の文構造とテ接続文は文と文節の違いはあるが、よく似ている。中国語母語話者の学習者は、テ接続文をそのまま中国語に直訳したとみられる。

文例① 高橋さんは高校の後輩で、今、京華大学の語学研修生です。

[1] 高橋是高中时的师妹,现在是京华大学语言学的研究生。〈同様翻訳文 14 名〉

文例② 父は会社員で、母は医者です。

[2] 我爸爸是公司职员,妈妈是医生。〈同様翻訳文 17 名〉

一方、文例③も「並列」の意味関係を表すテ接続文だが、文例①②と異なり、テ節が形容詞節で、前後節の主語は同一である。文例③も以下のように中国語の文の並列によって表現できるが、文の並列表現を用いて翻訳したのは調査対象者 17 人中 9 人であった。同じく「並列」の意味関係を表すテ接続文の文例①②（名詞節）に比べ、文の並列表現を使用した割合は少ない。残りの 8 例は、単なる文の並列表現ではなく、「並列」や「添加」の意味関係を明示的に表す語句を挿入し、接続の意味関係を明確化していた。つまり、テ接続文の文構造に似た文の並列表現を用いるか、接続の意味関係を強調して表現するかに二分されたと言える。この表現方法の違いは、受信者の推測への意識の表れでもある。文の並列表現は、テ接続文同様、前後文の接続の意味関係は明示しておらず、読点「,」によって文が接続されているだけである。接続の意味関係の推測は受信者にゆだねられている。よって、中国語の文の並列表現を用いて翻訳した受信者は、テ接続文の接続の意味関係を明確化せず、テ接続文をそのままを受け取ったと言える。

なお、文例③には、添加の意味を表す助詞「も」があり、その中国語訳に相当する「也」を使用した翻訳例[4]は日本語文の直訳とみなし、「添加」の意味を明示化した語句を挿入した翻訳文例とは区別した。

文例③ 王さんは頭がよくて、日本語も上手です。

[3] 小王很聪明，日语很好。 〈同様翻訳文 4名〉

(王さんは頭がよくて、日本語が上手です。)

[4] 小王很聪明，日语也很好。 〈同様翻訳文 5名〉

(王さんは頭がよくて、日本語も上手です。)

## (2) 「様態」 関係を表す文の並列表現

テ接続文の文例④は「様態」の意味関係を表していると推測できる。調査対象者 17 のうち、10 名が中国語の文の並列表現を使って翻訳した (無回答 1 名)。

翻訳例[5]は1文であるが、前半の[女性装扮成男性的样子] (女性は男性の格好をする) と後半の [(女性) 跳舞] ((女性は) 踊りを踊る※主語は省略) は、それぞれ文にもなる。つまり、文を並べて表現しており、テ接続文と構造的にはよく似ている。テ接続文を直訳した表現とも言える。

なお、残り 6 例は、「様態」関係を明示化する語句を挿入したり、前件と後件が共時動作であることを強調したりして、「様態」の意味関係を明示化している。

「様態」の意味関係を表すテ接続文も「並列」関係同様、中国語母語話者の受信者はテ接続文そのまま受け取っている。中国語母語話者はあえて積極的に接続の意味関係を推測をする必要がないとも言える。

文例 ④ 女性が男性の格好をして、踊りを踊りました。

[5] 女性装扮成男性的样子跳舞。 〈同様翻訳文 10名〉

## (3) 「因果」 関係を表す文の並列表現

テ接続文の文例⑥は「因果」の意味関係を表していると推測できる。文例⑥を文の並列表現を用いて翻訳したのは、調査対象者 17 名のうち 8 名であった。

翻訳例[6]、[7]はいずれも文を並列して表現している。翻訳例[6]、[7] の前半「取得好成绩」 (いい成績を取る) と後半「很高兴」 (うれしい) はそれぞれ文になる。なお、読点「，」の有無は文全体の意味には影響しない。

中国語にも因果関係を明示的に表す形式は数多くあるが、特に因果関係を強調する必要

がない場合は、日常会話ではあえてあまり使用しないとも言われる。その明示的な形式のない表現が文の並列表現である。中国語母語話者にとって、文の並列表現は使用頻度の高い表現であり、それによく似たテ接続文も、因果関係を表す語句がなくても、自然に理解できる表現形式なのであろう。実際、調査対象者 17 名のうち「因果」の意味関係を明示する語句を挿入して、積極的に「因果」の意味関係を推測していたのは 4 人であった。

文例⑥ いい成績がとれてうれしいです。

[6] 取得好成绩很高兴。 〈同様翻訳文 4 名〉

[7] 能取得好成绩，我很高兴。 〈同様翻訳文 4 名〉

上記の「因果」関係を表すテ接続文の文例⑥は、「因果」の意味関係を明示的に表現する翻訳例よりも、文の並列による表現をする人が多かったが、文例⑦は、逆に因果関係を明示する翻訳例の方が多かった。

テ接続文の文例⑦は、前後節の主語が異なり、形容動詞節の文である。この文は、「因果」とも「並列」とも意味関係を推測することが可能である。前文の「母の影響で京劇が好きになりました。」も含めて意味内容を推測すれば、「因果」関係に傾くが、主語が異なるうえに、前節は形容動詞が状態性を表し、後節も子供の時の習慣という状態性を表しており、前後の事象は共時的である。「並列」と「因果」の意味関係を包括的に含む文例と言えるだろう。

文例⑦ 母の影響で京劇が好きになりました。

母は芝居や音楽が好きで、わたしも小さいときにいろいろなものを見にいきました。

調査対象者の翻訳例を見ると、17 名中文の並列表現で翻訳した人は 6 名、「因果」の意味関係を明示する形式を用いて翻訳した人は 10 名であった。

中国語の文の並列表現も「並列」と「因果」の意味関係を表せるため、文の並列表現を使用した翻訳例も、テ接続文同様、「並列」と「因果」の意味関係を包括的に表していると言える。中国語母語話者は、テ接続文が持つ包括的な意味関係を、意味を特定することなく、そのまま自然に捉えることができると言える。

[8] 母亲很喜欢戏剧和音乐，我在小的时候也去看了很多东。 〈同様翻訳文 6 名〉

以上、テ接続文の中国語翻訳文のうち、中国語の文の並列を用いて翻訳した例をみた。「並列」、「様態」、「因果」の意味関係を表すテ接続文は、いずれも中国語では文の並列表現で表せることがわかった。テ接続文と中国語の文並列の文構造が似ていることの表れとも言える。

中国語の文の並列表現からは、積極的にテ接続文の意味関係の推測をしなくても、母語の文の並列表現に照らして意味関係を推測ができると思われる。また、テ接続文同様、意味を1つに特定せず、包括的に意味関係を推測しているであろうことも推察できる。テ接続文は元々複数の意味関係が截然と分かれておらず、包括的に意味関係を表す。意味関係を特定できない場合もあるが、中国語母語話者にとって特定できないことは意味関係の推測の障害とならず、中国語の文並列表現と同様に、包括的な意味関係をそのまま受けとることができるのであろう。

なお、テ接続文の意味用法のうち、「継起」の意味関係を表すテ接続文だけは、中国語の文の並列表現を用いて翻訳した例が1例も見られなかった。

### 5.3.3.2 意味関係の明示化による積極的意味推測

前節では、「並列」、「様態」、「因果」の意味関係を表すテ接続文を、中国語では文の並列表現を用いて表すことができ、中国語母語話者はテ形接続文を積極的に意味推測しなくても、母語に照らして意味推測をし、かつ、包括的に意味推測しているであろうことを観察した。

しかし、一方で、中国語の翻訳文に接続の意味関係を明示的に表す語句や形式を中国語翻訳文に入れ、テ接続文の意味関係を積極的に推測している例も見られた。本節では、積極的意味推測の例を分析、考察する。

#### (1) 「並列」の意味関係の明示化

「並列」の意味関係を表すテ接続文の文例①～③の中国翻訳例は、前節で述べたように、文の並列によって表現される例が多かった。しかし、文例③の同一主語・形容詞節のテ接続文は、調査対象者 17 名中 9 名は文の並列表現を使用した、半数の残り 8 名

は、「添加」の意味を表す形式を挿入して、積極的に意味関係を推測した。

以下の中国語の翻訳例[9]～[12]は、文構造は基本的に文の並列である。しかし、「添加」や「累加」の意味を表す形式が挿入され、接続の意味関係が明示されている。翻訳例[9]～[12]の文に挿入されている「而且」、「既」、「不仅」、「又～又～」は、いずれも「それに」、「それだけでなく」等、添加の意味を明示的に表す形式である。また、前節にこのような形式が入ると、後節と意味的に呼応関係が生まれるため、文句間の接続関係も強くなる。

テ接続文の文例③には、添加の意味を表す助詞「も」が元々入っているが、これらの中国語の翻訳例は、さらに「添加」や「累加」の意味を明示化する形式を挿入して意味強調して表現している。受信者がテ接続文の意味関係を積極的に解釈したことの表れと言える。

なお、文例③の助詞「も」を中国語で「也」と直訳した文例は、文並列の表現に入れた。

文例③ 王さんは頭がよくて、日本語も上手です。

[9] 小王很聪明，而且日语也很好。

(王さんは頭がよくて、それに日本語も上手だ)

[10] 小王既聪明，日语也好。

(王さんは頭がよいだけでなく、日本語も上手だ)

[11] 王这个人不仅脑子聪明，日语也很棒。

(王さんは頭がよいだけでなく、日本語も上手だ) <同様翻訳文2名>

[12] 小王又聪明，日语又好。

(王さんは頭がよいだけでなく、日本語も上手だ) <同様翻訳文4名>

## (2) 「様態」の意味関係の明示化

「様態」の意味関係を表すテ接続文の文例④も、前節で16名中(無回答1名)10名が文の並列表現で翻訳したことを述べた。「様態」の意味関係を明示化して表現したのは3名だった。

次の翻訳例[13]、[14]も基本的には文の並列表現である。しかし、「着」は付帯状況を表し、「以」は手段用法を表す。これらの形式は、動作主の着衣の状態を明示的に表し、テ接

続文の「様態」の意味関係を強調している。そして、この意味関係の明示化は受信者がテ接続文を積極的に意味推測したことの表れである。

文例④ 女性が男性の格好をして、踊りを踊りました。

[13] 女人穿着男人的衣服跳舞。 〈同様翻訳文2名〉

(女性が男性の服を着て踊った)

[14] 女性以男性那样的姿态跳了舞。

(女性が男性のような姿で踊った)

### (3) 「継起」の意味関係の明示化

文例⑤のテ接続文は「継起」の意味関係を表しているとは推測できる。中国語では、文を発生順に並べて「継起」の意味を表すことが可能である。しかし、テ接続文が表す基本的な4つの意味関係である「並列」、「様態」、「継起」、「因果」のうち、中国語の文の並列表現が唯一用いられなかったのが「継起」の意味関係を表すテ接続文であった。

中国語母語話者によれば、3文節以上の文の場合は、継起関係を表す語句が入らないと、文として落ち着かないという感覚を持っているということである。したがって、文例⑤「朝、7時に起きて、予習をして、大学に行きます。」のような3文節以上のテ接続文は、中国語では3つ以上の文を単に並列させると不自然になるため、「継起」の意味を表す形式を入れる必要がある。実際、文例⑤の中国語翻訳文は、調査対象者17名全員が「継起」関係を明示的に表す形式を挿入していた。つまり、中国語母語話者は、3文節以上の「継起」の意味関係を表すテ接続文を積極的に意味推測する必要があるということである。以下、中国語母語話者がどのように積極的に意味推測をしたかをみていく。

中国語には「継起」関係を表す形式が多くあるが、調査した翻訳文例に使用されていたのは、「然后」、「之后」、「后」（それから）や、「先～后～」、「先～再～」（まず～それから～）であった。これらの表現は、いずれも「継起」関係を明示的に表すが、受信者が3つの動作の関係をどう捉えるかによって、形式の選び方が異なる。テ接続文では、3つの動作の関係は対等である。しかし、中国語で「継起」を表す形式を選ぶ際には、3つの動作をどこで区切るかが重要になる。動作のまとまりの区切り方は3つのタイプに大別できる。i) 動作の時間関係が対等、ii) 最初の動作が起点、iii) 2番目の動作が起点、この3タイプである。以下、タイプ別にみていく。

文例⑤ 朝、7時に起きて、予習をして、大学に行きます。

i) 動作の時間関係が対等  /  /

「起きる」、「予習する」、「大学へ行く」の3つの動作が、接続詞「然后」（それから）や副詞「再」（それから）によって接続されており、3つの動作は時間的に対等である。3つの事象が、順に行われることを表している。

3つの動作間の関係は3タイプの中では、最もテ接続文に近いように思うが、このタイプの翻訳文を表したのは調査対象者17名中2名だけであった。

[15] 我早上7点起床，然后预习，然后去上学。

[16] 早上7点起床，然后预习，再去上学。

[15・16] (7時に起きて、それから予習して、それから大学に行く。)

ii) 最初の動作が起点  /

最初の動作「起きる」でまず区切り、「予習する」と「大学へ行く」を「先」・「然后」（先に・その後）の先後関係を表す語句で接続し、連続動作のまとまりを作っている。動作の起点は、「起きた」後であり、「起きる」動作の後、「予習する・学校へ行く」という動作のまとまりが続くことを表している。

また、タイプ i と iii は「～の後」という意味を表す形式だけであるのに対し、ii は「先に～」という意味を表す形式を使用している。単に順序を表すのではなく、「予習すること」は、学校へ行くための準備であり、やるべきことであるという、受信者の「予習すること」と「学校へ行くこと」の意味的な関連性も翻訳文に反映されているのかもしれない。

[17] 早上7点起床之后，先学习了会然后去学校。

(7時に起きた後、先に予習してから学校へ行く)

[18] 早上7点起床，先预习 再去上学。

(7時に起きて、先に予習してから学校へ行く)

iii) 2番目の動作が起点 V1 · V2 / V3

2番目の動作の「予習する」の後に、「之后」(～の後)が挿入されており、「予習」した後、「大学へ行く」の先後関係を表している。翻訳例[19]～[21]は、最初の動作の「起きる」の後は、読点「,」しか挿入されておらず、「起きる」と「予習する」の間には時間関係を明示する表現はない。従って、「起きる」と「予習する」は連続した動作のまとまりと捉えることができる。つまり、「起きて予習した」後、「大学へ行く」という動作のまとまりを表している。

調査対象者17名のうち、13名がこのタイプの時間のまとまりで翻訳しており、最も多かった。調査対象者が全員大学生であるため、自身の生活習慣が反映されたのかもしれない。

また、翻訳例[21]、[22]は、「预习完之后」(予習が終わってから)、「预习了一会儿」(しばらく予習してから)のように、動作の完了や、量的な時間を表す語句も挿入されている。これらは、元のテ接続文例⑤には表されておらず、受信者による情報の付加と言える。

[19] 早上7点起, 预习, 然后去大学上课。 〈同様翻訳文6名〉

(7時に起きて、予習して、それから大学へ行く)

[20] 早上7点起床, 预习之后 去上学。 〈同様翻訳文4名〉

(7時に置きて、予習した後、大学へ行く。)

[21] 早晨7点起床, 预习完之后 就去大学上课。 〈同様翻訳文2名〉

(朝、7時に起きて、予習が終わった後、それから大学へ行く。)

[22] 早上[我]7点床后预习了一会儿, 就去大学了。

(7時に起きてからしばらく予習して、それから大学へ行く)

以上、3文節以上の「継起」の意味関係を表すテ接続文について、中国語母語話者がどのように積極的に意味関係を推測し、明示化したか、3つの動作の時間的まとまりから分析、考察した。その結果、3つの動作間の時間的まとまりの捉え方によって、「継起」関係の明示の仕方が異なることがわかった。また、その時間的まとまりの捉え方は、受信者の価値観や、生活習慣が反映されている可能性もある。さらに、情報の付加も行われていることも明らかになった。

3文節以上の「継起」の意味を表すテ接続文は、ほかの「並列」、「様態」、「因果」の意味関係を表すテ接続文と異なり、単に文を並列させることはできない。そこに、中国語母語話者は積極的に意味関係を推測する必要性が生じ、その結果として、積極的な意味推測が行われたと言える。

#### (4) 「因果」の意味関係の明示化

「因果」の意味関係を表すテ接続文の文例⑥は、調査対象者 17 名中 8 名が文の並列表現を用いて翻訳した。残りの 9 名のうち 7 名は「因果」や「継起」の意味関係を明示する語句の挿入や、文構造の再構築などして、積極的に意味推測を行っていた。

以下に、「因果」関係を明示した翻訳例と「継起」関係を明示した翻訳例を挙げる。

翻訳例[23]、[24]は、「因果」の意味関係を明示的に表す「因为～所以」、「由于」(~だから)が挿入されており、因果関係を明示的に表している。しかし、このように「因果」の意味関係を積極的に推測して表現したのは 17 名中 3 名であり、少数派である。前節でも述べたように、中国の話言葉では、特に因果関係を強調する必要がない場合は、明示的な形式を使用しないのが一般的である。文例⑥のようなテ接続文は、内容は日常的であり、受信者は明示的な表現で因果関係を強調することに不自然さを感じたのかもしれない。

文例⑥ いい成績がとれてうれしいです。

[23] 因为取得了好成绩所以高。 〈同様翻訳文 2 名〉

[24] 由于取得了好成绩，我非常开心。

[23・24] (いい成績が取れたから、うれしいです。)

次に挙げる翻訳例[25]は、「継起」の意味関係を表す形式を挿入して明示的に表した翻訳例である。この翻訳例も基本的な文構造は文の並列である。しかし、「了」(した)の挿入があるため、単なる文の並列とは区別した。「了」は動作の完了や状態の変化を表す。前節で挙げた翻訳例[6]「取得好成绩很高兴。」は「了」が挿入されておらず、「了」は成文化するのに必ずしも必要ではない。しかし、「了」をあえて挿入した受信者は、前節の事象の完了を意識したと思われる。

テ接続文の「因果」の意味関係が推測できる条件は、前件と後件が「継起」関係にあることが前提である。その前提から言えば、翻訳例[26]は、単なる文並列の翻訳例[6]に比べ、

より積極的に時間の前後関係の意味推測をしたと言えるのではないだろうか。

[25] 取得了好成绩很高兴。

〈同様訳文 4名〉

(いい成績を取れたので、うれしいです。)

次に、もう1つ「因果」を表すテ接続文の文例⑦の積極的な意味推測を考察する。文例⑦は前節でも述べたように、「並列」と「因果」の意味関係を包括的に含んでいると思われる。しかしながら、調査対象者の訳文からは、中国語でも同じように包括的に意味表現できる文の並列による表現ではなく、「因果」の意味関係を積極的に推測した文例が多くみられた。調査対象者 17名のうち半数以上の10名が「因果」の意味関係を明示して訳文をしたのである。

訳文例[26]、[27]、[28]には、因果関係を明示的に表す「因为～所以」、「由于～因此」(～だから～それで)、「就」(それで)が使われており、受信者が積極的に「因果」の意味関係を推測したことがわかる。しかし、意味関係を特定化したことで、文例⑦が包括的に表していた「並列」の意味関係は捨象されたとも言える。積極的に意味関係を推測することは、一方でテ接続文が持つ包括的な意味関係をそのまま受信することはできないということである。しかし、テ接続文の意味推測は受信者にゆだねられおり、包括されている意味関係の中から意味を選択することもまた許されているのである。

文例⑦ 母の影響で京劇が好きになりました。

母は芝居や音楽が好きで、わたしも小さいときにいろいろなものを見に行きました。

[26] 因为妈妈非常喜欢戏剧和音乐，所以我小时候也去看了很多。 〈同様訳文 7名〉

[27] 由于妈妈喜欢京剧和音乐，因此，我也在小时候经常去看京剧。 〈同様訳文 2名〉

[26・27] (母は芝居や音楽が好きだったので、それで、私も小さい時にいろいろなものを見に行きました。)

[28] 妈妈喜欢看剧和音乐，我也从小就开始看很多剧。

(母は芝居や音楽好きで、それで私も小さい頃からいろいろなものを見始めました。)

以上、中国語母語話者のテ接続文の翻訳文から、受信者が積極的に意味推測して、意味関係を明示する語句を入れたり、意味を付加したりする例を分析、考察した。また、その表現には、受信者の意識や生活習慣も反映されており、意味推測のプロセスも垣間見ることができた。

また、一方で、受信者の積極的な意味推測は、テ接続文が持つ包括的に表している意味関係を捨象することでもある。しかし、包括的に意味関係を捉えるか、積極的に意味推測して意味を選択するか、その選択も受信者にゆだねられているのである。

### 5.3.3.3 文と意味の再構築による積極的な意味推測

前節では、中国語母語話者によるテ接続文の積極的な意味推測を、明示的な語句を挿入した翻訳例から分析、考察を行った。本節では、テ接続文の意味や文構造を再構築した翻訳例から、受信者の積極的な意味推測を考える。

#### (1) 文構造の再構築

テ接続文の文例①は「並列」の意味関係を表す。接続形式テによって文が接続された文構造である。中国語でも文の並列表現によって表すことができる。

しかし、中国語母語話者の翻訳例には、前節を連体修飾節にした翻訳例が見られた。

文例① 高橋さんは高校の後輩で、今、京華大学の語学研修生です。

[29] 高中的后辈高桥现在是京华大学的语言学的研究生。

(高校の後輩の高橋さんは、今、京華大学の語学研修生です。)

[30] 现在在京华大学研究语言的高桥是我高中的后辈。

(今、京華大学の語学研修生の高橋さんは高校の後輩です。)

#### (2) 意味の再構築

語彙の意味内容を再構築した翻訳例も見られた。翻訳例[31]は「高校の後輩」を「同じ高校で、学年が下である」と言い換えて表現している。受け取った意味内容を再構築しているのである。

文例① 高橋さんは高校の後輩で、今、京華大学の語学研修生です

[31] 高橋跟我同一所高中,比我低几届,现在是京华大学的语言学研修生.

(高橋さんは私と同じ高校で、学年が私よりいくつか下で、今、京華大学の語学研修生です。)

### (3) 文構造と意味の再構築

文構造と意味が両方とも再構築された翻訳例も見られた。元のテ接続文の文例⑦は、前件と後件の主語が異なり、「並列」と「因果」の意味を包括的に表しているのだが、主語を「母」に統一し、後件を「私が（芝居を）見に行った」という文から、「(母は)私を連れて見に行った」という文に再構築している。前後節の主語を統一したことにより、意味内容も再構築されている。また、意味内容の再構築によって、受信者の情報の付加も行われている。

文例⑦ 母の影響で京劇が好きになりました。

母は芝居や音楽が好きで、わたしも小さいときにいろいろなものを見にいきました。

[32] 妈妈喜欢戏剧和音乐,在我小的时候就领我去看了很多。

(母は芝居や音楽が好きで、私が小さい時、私を連れていろいろなものを見に行きました。)

### (4) 中国語表現への変換

以下の翻訳例は、テ接続文の意味を中国語表現に置き換えた翻訳文である。文構造や事象の関係の捉え方も、テ接続文とは異なる場合がある。

なお、調査の際、調査対象者には直訳ではなく、中国語として自然な文になるように翻訳するように依頼した。そのため、あえて中国語の表現に転換した可能性もある。

文例④は、「様態」の意味を表すテ接続文である。テ接続文の「様態」の意味関係を推測できる条件は、前件と後件の時間関係が同時であることである。しかし、翻訳例[33]は、前件と後件が並列を表す接続詞「并」（かつ、また）によって、接続されている。この翻訳例からは、日本語と中国語のアスペクトの捉え方の違いが伺える。前節でみたように、中国語では文の並列表現や明示的な語句の挿入によって「様態」関

係を表すことができる。しかし、この中国語の翻訳例は、それらの表現とは異なり、受信者が事象間の関係を意識してテ接続文の事象関係を捉え直し、積極的に意味推測をしたと言うこともできる。

文例④ 女性が男性の格好をして、踊りを踊りました。

[33] 女性假扮成男性并跳了舞。 〈同様翻訳文2名〉

(女性が男性の格好をして、かつ、踊りを踊った。)

また、翻訳例[34]は、前件と後件に動作の進行を表す「(正)在」という語句を入れて動作が同時進行であることを明示している。テ接続文の文例④には「踊る」動作の進行を表す意味はないが、受信者は「男性の格好をする」と「踊りを踊る」という2つの事象が同時に進行していると解釈し、その結果として「様態」の意味関係を推測したのではないだろうか。受信者の「様態」の意味推測のプロセスが伺える翻訳例である。そして、事象のアスペクトの面から意味推測を行おうとする積極的な態度の表れと言えるのではないだろうか。

文例④ 女性が男性の格好をして、踊りを踊りました。

[34] 女性在像男性一样，正在跳舞。

(女性が男性のような様子をしていて、踊りを踊っている)

次は、「因果」の意味を表すテ接続文の翻訳文である。翻訳例[35]、[36]ともに、日本語にはない表現方法であるが、中国語ではよく使用される表現である。翻訳例[35]は、テ接続文の前件と後件の内容を倒置した形となっている。

文例⑥ いい成績がとれてうれしいです。

[35] 我很高兴我能取得很好成绩。

(私はうれしい、いい成績が取れて。)

[36] 取得好成绩让我感到很开心。

(いい成績が取れたことは私をうれしくさせた。)

日本語では会話の中ではあり得る表現だが、記述文としてはあまり一般的ではない。中国語では、感情を先に述べてから、その理由を言うという表現は口語表現としては一般的である。しかし、あえて口語的に順番を入れ替えて翻訳したのは、受信者にとって身近な内容であり、自分ならこう言うと考えたのかもしれない。受信者の心の中まではわからないが、たった1文で表記されているだけのテ接続文から、文脈や受信者の生活の中で使用場面を引き出して、このように翻訳したのだとしたら、積極的な意味推測と言えるのではないだろうか。

また、文例[36]の使役表現は、日本語では表現できないが、これも中国語では一般的な表現である。中国語では慣用的な表現かもしれないが、中国語の非母語話者の筆者には、自分の努力の成果によっていい成績がとれてうれしいというより、自分には何か御すことのできない外的な力によっていい成績がもたらされたような印象を受ける。これも中国語の非母語話者の筆者には感覚はよくわからないが、いずれにしろ受信者がテ接続文の意味関係や文例④の語彙の意味からだけでは呼び出せない感情などを表そうと、積極的に意味推測し、文構造や意味内容を再構築した結果ではないだろうか。

以上、テ接続文の構造や意味を再構築することによって受信者が積極的に意味推測している例をみた。文構造や語彙の意味を再構築するというのは、前節の接続の意味関係の明示化とは違う方向の積極性である。意味関係の明示化は基本的には、テ接続文の意味関係を推測した結果、1つの意味関係を選択した結果の表れである。しかし、本節でみた文構造や意味の再構築は、テ接続文を発話者から引き離して受信者の側に引き寄せ、受信者自身の文脈で意味内容を推測していると言えないのではないだろうか。積極的な意味推測ではあるが、発話者に寄り添って意図を読み取ろうというコミュニケーションの基本的な姿勢にやや欠けているように思える。発話者がなぜテ接続文という文構造の文で表現したのかということも含めて意味推測をすべきではないだろうか。

しかしながら、今回の調査では、テ接続文の文例の具体的な発話者の顔も見えず、前後の文脈もない単文のレベルの翻訳であったため、発信者の存在を意識することはできず、発信者の意図を読み取る必要性もなかった。よって、受信者は発信者から切り離された文として、自分に引き付け、自分の文脈で積極的に意味推測したのかもしれない。

## 5.4 中国語母語話者のテ接続文の意味内容の推測 まとめ

以上、テ接続文の意味内容の推測を中国語母語話者はどのように行っているか、中国語の翻訳文例から分析、考察を行った。結果を以下にまとめる。

- (1) テ接続文は中国語の文の並列表現と構造が似ており、表せる意味用法も似ている。  
そのため、中国語母語話者はテ接続文を中国語の文の並列と同じであると認識し、テ接続文を中国語の文の並列に置き換えて意味推測をしていることがわかった。中国語の文の並列表現に置き換えた場合、テ接続文の持つ包括的な意味は保たれる。よって、意味関係の特定はしない。  
ただし、「継起」の意味を表すテ接続文で、3文節以上のテ接続文の場合は中国語の文の並列に置き換えることはできないため、積極的に意味推測する必要がある。
- (2) 接続の意味関係を明示的に表す語句の挿入や意味を付加するなど、積極的に意味推測もすることがわかった。ただし、テ接続文の包括的な意味関係の保持はできないため、選択した意味関係以外は捨象されてしまう。
- (3) テ接続文の構造や語彙の意味を再構築したり、日本語の表現とは異なる中国語表現に翻訳したりするなど、テ接続文を自分自身に引き付けて自分自身の文脈で積極的に意味推測もすることがわかった。しかし、テ接続文の発話者の意図を読み取ろうという意識は薄い。

以上、調査の結果、中国語母語話者のテ接続文の意味内容の推測のし方を大きく分けると、接続の意味関係を特定しないまま、包括的に捉えるパターンと、接続の意味関係を特定して、積極的に意味内容を推測するパターンの2通りがあることが確認できた。

接続の意味関係を特定しないというパターンは、母語の影響によるものである。テ接続文と中国語の文の並列表現の類似性によるものであり、中国語母語話者は、テ接続文を理解しやすいとも言える。

しかし、本章で述べたように、中国語の文の並列とテ接続文は表せる意味関係は同じではなく、テ接続文では表せない意味関係もある。この点について、中国語母語話者は推測の際も注意する必要があるであろう。

一方、積極的な推測は、テ接続文の意味内容の推測は受信者にゆだねた結果を表すもの

である。また、発話者の発話意図とのずれを示すものでもある。

これは中国語母語話者に限らず、日本語母語話者を含め、テ接続文受信者一般の傾向とも言えるであろう。

つまり、テ接続文の受信者は、母語の影響を受ける一方で、積極的に意味内容を推測しているということである。そして、テ接続文の受信者は、接続の意味関係を特定せず、包括的に意味内容を受け取ることも、積極的に意味内容を推測することも可能であることが明らかになった。

## 第6章 中国語母語話者のテ接続文の使用と認識

第5章では、中国語母語話者がテ接続文の意味内容の推測をどのように行っているかを調査した。その結果、中国語母語話者はテ接続文の意味関係を包括的に捉えたり、積極的に推測したりしていることが明らかになった。

では、中国語母語話者がテ接続文を発信した場合は、受信者にその発信意図が伝わっているであろうか。本章では中国語母語話者がどのようにテ接続文を使用しているか、また、受信者はそのテ接続文の意味内容の推測ができているかどうかを考察する。

### 6.1 日本語学習者のテ接続文の誤用に関する先行研究

まず、「誤用」と判断される日本語学習者のテ接続文について、先行研究から概観する。

日本語学習者のテ接続文の誤用については、これまでも指摘されている。テ接続文の誤用分析に関する研究には、テ接続文の構造から分析をしたものと、学習者の母語との比較から分析しているものがある。

#### 6.1.1 テ接続文の構造から見た誤用分析

吉永（2006）は、テ形接続文の意味用法のうち、「継起」と「因果」の意味用法の誤用は、意味決定の条件が整わないために起こると述べる。「継起」と「因果」の意味用法は、前後節の時間的關係が継起的であることが意味決定の共通する条件である。「継起」用法の意味決定条件は、前後節の主語や意味役割、述語の種類が単純であり、前後関係が純粋な時間の継起であることとする。例えば、「国の食べ物を見つけて、買って、うちに帰って、やっぱり違った。」のような文は、テで接続された複数の事象関係が継起関係で一致していないために誤用となる。

一方、「因果」用法の意味決定条件は、因果性という論理を満足させることが条件であるとする。「お金を落としてレストランに行きませんでした。」のような文は、構造の単純さから継起解釈に引きずられ、因果関係が明確に読み取れず、「因果」の意味用法の文としては誤用と判断される。

吉永（2006）は、テ形接続自体は意味を持たないために、発信者と受信者の解釈のズレが生じた場合、そのテ形接続文は受信者に「誤用」とであると判断されることを指摘している。

### 6.1.2 日本語学習者の母語との比較から見たテ接続文の誤用分析

次に、日本語学習者の母語との比較からテ接続文の誤用分析を行った先行研究をみる。以下に、英語母語話者と中国語母語話者の誤用分析を挙げる。

#### (1) 英語母語話者

池尾(1963)は、「て」の用法は日本語学習者にとって比較的入り易いものであるが、学習初期には「暗くて電気をつけなさい。」のような「から」「ので」の代わりに「て」を使った誤用例が多くみられると指摘している。また、英語母語話者は理由を表す「て」を意識せず、ただ2つの文を接続させるために「て」を使用していると述べる。

また、鈴木(1976)は、「て」そのものにはこれといった意味がないことから、「て」の意味用法である継起、並列、原因・理由、手段・方法は英語では全て **and** で片付けられているとし、学習者は英語では訳しようがないために、「て」を単なる接続形と考え、文脈からだいたいを感じとり、細かい分析はしていないようであると考察している。ただし、継起、並列、手段・方法はそれでよいが、原因・理由を表す「て」には問題があると指摘する。「風邪をひいて、学校を休もう」、「値段が安くて買います。」は言えないなど、単純に接続できない「て」の難しさを述べている。

#### (2) 中国語母語話者

顧(1983)は、中国人学習者によくみられる誤用例として「て」を取り上げ、その原因の1つに中国語の発想法の干渉を挙げている。中国語では、文接続には制約がなく自由に表現できるため、「この報告を聞いて、いい勉強になった」は、中国語では〈听了这个报告，很受教育〉とも、〈听了这个报告以后，很受教育〉とも言えるため、後者の「以后」(それから)を直訳して「この報告を聞いてから、いい勉強になった。」のような誤用例が生まれると述べる。

また、顧(1983)は中国語の発想による「て」と「と」の混同についても指摘している。「ここから500メートルほど行って、右側に体育館がある」という誤用例について、その原因は中国語では、〈从这里走500米左右，右侧就是体育馆。〉のように〈就〉によって前件が後件の条件であることを表すが、学習者がそれを意識しないか、意識していても「て」と「と」の使い分けを知らないためであると推測している。

吉田（1994）は、台湾の日本語学習者のテ接続文の誤用について分析、考察した。台湾の学習者は「て」形を早い時期に学習するために比較的口慣れており、その簡便さ故に接続の方便として安易に用いられる傾向があることを指摘している。ただし、作文における使用状況を調査した結果、「継起」についての誤用は皆無であったと報告している。

誤用例 289 文のうち、最も多かったのは、「て」と「と」（発見）の混同（55 例 19%）であり、以下、「ので」・「から」（理由）との混同（53 例 18.3%）、不要な接続（42 例 14.5 %）などが続くと報告している。

また、吉田（1994）は、原因・理由の誤用例について、台湾在住学習者の母語である中国語の影響について考察している。中国語では「私はあなたにあえてうれしいです。」の「うれしい」という引き起こされた結果の感情を「会えて」という動作の前に述べることができることのために（例：我很高兴偶倒你。《直訳：私はうれしい、あなたに会えて》）、「去年の四月の頃、私はうれしくて、（中略）日本大学生訪華団を接待しました。」のような誤用が現れる場合があると述べる。

また、中国語では「～と言う」「～と考える」「～と感じる」等の引用を「他说～（彼は言う）」「我想～（私は思う）」「我觉得～（私は感じる）」のように、文の冒頭に据えることから、「私は考えて、学生の義務は勉強することです。」のようにテ節を前掲して、誤用になる場合もあると述べている。

塩入（2012）は、『日本語学習者による日本語作文とその母語訳との対訳データベース Ver. 2』（国立国語研究所）から、中国語母語話者の日本語従属節に関する誤用傾向を分析した。その結果、「条件節との選択に関わる誤用」と、「文を終わらせるところを接続することによる誤用」が多かったと報告している。

例えば、「もしある人はたばこを吸いたくて、彼は専門の地方へ行くはずです。」のように、「吸いたかったら／吸いたければ」のような条件節を選択すべきところにて形を使用したり、「赤ちゃんが生まれた後に赤い枕をおばあちゃんからもらって、それは子供が元気に育てられるようにお祈りすると言う意味だ。」のように、日本語では文を終わらせるのが適切なところにて形を使用したりしていると報告している。また、この日本語では文を終わらせるところに、て形を使用している場合は、中国語の対訳では文を終わらせているとも述べている。

### 6.1.3 日本語学習者のテ接続文の誤用先行研究 まとめ

以上の先行研究からテ接続文の誤用分析を整理してみると、まず、テ接続文の意味用法の中でも、「継起」と「因果」の意味用法において、誤用が見られることがわかる。特に、「因果」の意味用法は、「から」・「ので」との使い分けの難しさが指摘されている。本論でも先述したように、「因果」の意味用法は、「継起」の意味用法の延長上にあり、「因果」の意味推測は受信者にゆだねられている。「因果」の意味用法の誤用は、言い換えれば受信者が「因果」の意味関係を推測できなかった結果である。テ接続文では受信者が因果関係を推測できないために、因果関係を明示的に表す「から」・「ので」の言い換えが必要になるということであろう。

また、中国語母語話者に限って言えば、テ接続文の意味用法にはない、仮定条件の意味を表す場合にもテ接続が使われた結果、誤用となる場合あることもわかった。日本語と中国語の関連付けの違いとも言える。第5章で述べたように、中国語の文並列による関連付けが日本語より自由度が高く、意味関係の推測が許される範囲が広いためであると推察できる。

接続形式テは接続の意味関係を表さないため、テ接続文の意味内容の推受信者に委ゆだねられている。そのため、受信者が接続の意味関係を推測できないと「誤用」と判断されるということである。「誤用」とならないために、発信者はどんな場合に受信者が意味関係を推測しにくいかわかっておく必要がある。

単に文を並べて表す文は英語と中国語にもあり、日本語のテ接続文の意味内容の推測も比較的容易なようである。しかし、母語と同じように文を並べたつもりでテで接続して発信すると、日本語では誤用となってしまう場合がある。つまり、文接続の関連付けが日本語とは異なるために誤用となってしまうのである。

## 6.2 中国語母語話者のテ接続文の使用と認識

本節では、中国人母語話者がどのようなテ接続文を産出しているか、作文例から考察する。また、どのような場合に、受信者が接続の意味関係を推測できず、「誤用」なるかについても明らかにする。

以下に、調査の概要と結果をまとめる。

## 調査概要

### 【調査目的】

- ・ 中国人母語話者がどのようなテ接続文を産出しているかを調査する。
- ・ 中国語母語話者のどのようなテ接続文が受信者が意味関係の推測困難となるか明らかにする。

### 【調査方法】

中国語母語話者の産出したテ接続文を分析する。

テ接続文の書き手の中国語訳や書き手へのインタビューから分析する。

### 【調査対象】

中国語母語話者の産出したテ接続文

学習者の背景

- ・ 中国の大学で日本語を専攻
- ・ 日本語学習歴：3 か月～1 年半（日本語学習時間 約 600 時間）
- ・ 日本語レベル：初級～初中級
- ・ 母 語：中国語

## 6.2.1 文接続の符号として使用されるテ

日本語学習の初期段階において、中国語母語話者の学習者は、文末に句点ではなく読点を使用することがある。

- (1) 私の今年の夏休みは楽しかった。大学入試が終わった、だから、休息の時間はとてもおよかった。私と友達たまにかいものに行ったら、いろいろ衣服を買った。衣服はきれいだった、私たちは買い物が好きだった。私も食べた、レストランや喫茶店や出前などは全部おいしかった、でも、母の料理は最おいしかった、最愛だった、幸せだった。

毎日、私はアルバイトに行ったら、家庭教師をした。学生はとても学習が好かなかった、授業は遅くまでだ、大変だった。私もときどき店で物を売った、つまらなくて、ペイはすくなかった。

大学までに、私は家族にペイで礼物を送った、両親と弟は楽しかった。私の夏休みはこれで終わった、充実した生活だ。

作文例(1)は、日本語学習歴3か月程度の学習者の作文である。日本語は、読点の使い方には特に制約はないが、文末に句点「。」を使用することは日本語の文表記の一般的な決まりである。日本語の終止形「～た」は、文末であることを表し、「～た」の後ろに句点を使う。しかし、上に挙げた作文には、終止形の後ろに、句点と読点の両方が使用されている。

実は、この作文の中で句点または読点によって区切られた文は、中国語の文の句切れに相当している。書き手は、中国語の文の並列表現をイメージしているのと推測できる。

この作文の句点と読点の使い分けから、書き手の意味まとまりの認識も読み取ることができる。句点は、文の終わりを形式的に表すだけでなく、談話の意味的なまとまりが終結したことも表している。読点は、文や文節の区切りではなく、書き手の意味的な区切りを表している。つまり、読点は、文の形としては終結していても、書き手の意識の中では、意味的には終結しておらず、継続中であることを表しているのである。

もっとも、日本語も中国語同様、句読点が一般的に使用されるようになったのは、近代以降のことである。日本語の文は元々切れ目が明確ではなかった。日本の古典文学作品には、テ節によって文が次々と接続されるような文は数多く見られる。例えば、次の文は「土佐日記」の一節であるが、1文中に、テ節が4回登場する。

ある人、<sup>ちがた</sup>真の<sup>よとせいつとせ</sup>四年五年果てて、例のことども皆し終へて、<sup>げゆ</sup>解由など取りて、  
住む<sup>たね</sup>館より<sup>い</sup>出でて、船に乗るべきところへわたる。 (土佐日記)

(ある人が国司としての四、五年の任期を終えて、いつものきまりである引き継ぎなどもみなし終え、解由状なども受け取り、住んでいた館から出て、乗船するはずの所へ移る。) (現代語訳 :『日本古典文学全集』小学館)

第3章でも述べたように、古典文法の「テ」は話者の「実現の確認」を表し、現代文法のテとは異なる認識であったと思われる。日本において「文は完結するものである」という認識が確立したのは、西洋文法の影響を受けた山田孝雄の『日本文法論』(1908)以降とも言われる。古来日本語の「テ」は、現代中国語の読点のように、文法的な文節の句切れのみならず、意味的なまとまりや、書き手の意識を表す役割も担っていたのかもしれない。

また、接続詞の発達は、歴史的に遅いとも言われる。本来、ヒトは接続詞や接続表現に頼ることなく、文脈によって接続の意味関係が推測できる能力を備えているとも言えるであろう。

作文例(1)のように文を読点で接続した文は、日本語学習の初期段階でしばしば散見される。日本語の接続表現に習熟していない学習者が、母語である中国語の文の接続方式を日本語の文に転用した作文例と言える。学習段階が進むと、この読点をそのままテ節に置き換える文も見られるようになる。次にその例を挙げる。

#### 【友人の結婚祝いの提案】

(2) 花とか買って、どうですか。

(3) ペアのカップをお祝いにして、どうですか。

文脈にもよるが、この文だけを見ると日本語としてはやや不自然に感じる文である。この場面では「花とか買うのはどうですか」のような文のほうが適切であろう。中国語では「买花怎么样？」(直訳:花を買う、どうか?)と言える。「买花」の文法構造は、「買う(买)+花」という動詞+名詞で、中国語では「花を買う」意味を表す1つの文である。日本語では、形式名詞「の」を付け、名詞化するなどして文の構成要素を作るが、中国語は「花を買う」、「どうですか」と2つの文を並べるだけで文が完成する。この作文例(2)(3)の書き手の話によれば、中国語の「买花怎么样？」を日本語に翻訳したつもりだとのことであった。また、テは文と文を接続させることができるという認識を持っているとも話していた。

このような日本語と中国語の文構造との違いから、中国語母語話者はテを接続の符号と認識している可能性があることが伺える。

以上の例は、単文レベルのテ接続文であるが、談話レベルでも、テ節によって複数の文を接続する例がみられる。

(4) (前略)最後に、姉ちゃんに電話をかけた。姉ちゃんは「何をする前に結果を考えてみて、もしあなたが積極的にクラスメートと接触したら、今の生活が変わるかもしれない、でも、何もしないと、あなたの生活はますます遠くなる」と言った。お姉ちゃんの話は私が積極的にこの輪に入るべきだということをわかって、他の人が私をこの輪に引き込むことを待つのではなくて、そして翌日授業を受けて、私は自発的

に学友達と一緒に座って、聞き取れないところは彼らに聞いて、ゆっくりして、私の生活はもう前のように抑えていないで、私は北京の良いことを発見して、学友と先生たちの良いことを発見して、授業の圧力も動力に変わったようだ。

次の中国語の文(4´)は、上記の作文例(4)のうち、後半の「お姉ちゃんの話は～」以下の文を書き手が中国語訳した文である。

(4´) 姐姐的话让我明白我应该积极的融入这个圈子，而不是等待别人吧我引进这个圈子，所以，第二天上课的时候，我主动和同学们坐到了一起，有听不懂的地方就会问他们，慢慢地，我的生活不再像之前那有那样压抑，我发现了北京的好，也发现了老师和同学们的好，学习的压力也变了动力。

日本語の作文例(4)と中国語の翻訳文(4´)を比較してみると、中国語翻訳文では読点があるところ、つまり、中国語の文の句切れの部分で、日本語の文ではテ節に転換して文を接続していることがわかる。先に挙げた作文例(1)では、中国語の文の句切れに読点が使われていたが、作文例(4)ではそれがそのままテ節に置き換えられているのである。つまり、作文例(4)の書き手は、中国語の文の並列表現の通りに、日本語の文を並べ、その接続をテ節で表したのである。この作文例からも学習者は、テを文接続の符号であると認識していることが伺える。

### 6.2.2 テ節の複数回使用

学習者のテ接続文には、1文中にテ節を複数回使用した例がしばしば見られる。しかし、時に、このようなテ接続文は意味内容がわかりにくくなる時がある。前掲の作文例(4)もそうである。作文例(4)より1文を以下に抜粋する。

(4) (前略) お姉ちゃんの話は私が積極的にこの輪に入るべきだということをわかって、他の人が私をこの輪に引き込むことを待つのではなくて、そして翌日授業を受けて、私は自発的に学友達と一緒に座って、聞き取れないところは彼らに聞いて、ゆっくりして、私の生活はもう前のように抑えていないで、私は北京の良いことを発見して、学友と先生たちの良いことを発見して、授業の圧力も動力に変

わったようだ。

この作文例(4)は、接続の意味関係を、受信者が推測しにくく、意味がわかりにくい。受信者は、それぞれのテ節が意味的にどう関係して、どんな意味的なまとまりを作るか、テ節を受ける主節はどこであるか、また、その主節とどんな意味関係があるか、予測と修正をくり返しながら文の最後まで読み進む。しかし、受信者の推測が破たんすると、推測不可能になり、「わからない」文となる。

作文例(4)の本人翻訳文(4')を、日本語として意味がわかりやすくなるように、再度日本語で表現してみると、以下の文(4'')ようになる。

(4'') 姉の話聞いて私は積極的にこの輪に入るべきであることがわかった。ほかの人が私を輪に引き入れてくれるのを待つべきではない。だから、翌日授業の時、私は自分からクラスメートと一緒に座って、分からないところがあれば彼らに聞いた。少しずつ、私の生活は以前のような抑圧されたものではなくなって、北京のよさを発見して、先生やクラスメートのよさを発見して、勉強のプレッシャーもエネルギーに変わった。(筆者訳)

日本語の文法の制約もあり、中国語の文を忠実に日本語に再生することはできないが、意識的にテ節を多用してみた。学習者の作文例(4)のように、全ての文をテ節で接続することは、文法的には可能であるが、意味を分かりやすくするためには、上記の(4'')のようになるところどころ文を区切る必要があると思われる。文を区切るということは、つまり、テ節に応じる主節を作ることであり、テ節を受ける意味的な帰着点を設けることで、意味推測をしやすくすることができる。テ節と主節が近いと、接続の意味関係の推測が容易になり、また、読み進む途中で、推測の修正をすることもなくなり、読み手の推測の負担は軽減する。

日本語の教科書や教師指導書などでは、学習者のテ節の過剰使用がしばしば指摘されるが、「過剰」とされるのは、受信者に接続の意味関係がわかりにくくなる場合である。テ節の複数回使用は、決して誤用とは言えない。

次の作文例(5)も、テ節が複数回使用されている。テ節の主語を明示したり、位置を変え

たりすれば、意味がわかりやすくなると思われる個所も確かにあるが、談話全体としては、意味がわかりにくいということはないと思われる。つまり、テ節が多用されていても、受信者はテ節で接続された意味関係を推測しやすいということである。

- (5) 今年の六月、鹿児島県からの訪問団を迎えました。話し合う雰囲気はよかったです。団員さんに北京で買い物に行くところを知らせてあげて、奄美の屋久島という自然遺産の観光に誘ってもらいました。訪問団は南京玉すだれと地元の踊りの舞台を立ちましたが、私たちは世界一つだけの花という唄を歌いました。〇〇書店をやるご夫婦はとても喜んで、これは一番好きなスマップの唄ですと、泣いているおばあちゃんが言っていたんです。それに広島と長崎の原爆記念、世界平和の為の反原発運動を紹介してくれて、伝統的なハンカチをお礼に送ってくれて…あの日、バスに乗るまで団員さんと抱いて、手を振って、順風満帆っていう別れを告げました。本当に楽しかったです。

「～してくれて、～してくれて…」というテ節のくり返し表現は、訪問団が自分たちにしてくれた行為のイメージ像を受信者に重ねさせる効果がある。また、この作文はスピーチを想定して書かれているため、テ節で言いさすことによって、聞き手に余韻を感じさせる効果も生み出している。「バスに乗るまで団員さんと抱いて、手を振って～」という部分も、別れを惜しむ場面での一連の行為として像を重ねてイメージできる。

この作文例(5)は、テ節が複数回使用されていても、意味内容が推測がしやすいのは、場面がイメージしやすいからであろう。場面をイメージしやすくするために、時間と場所は重要な要素である。先に挙げた作文例(4)は、《姉の助言—翌日の授業—その後の生活の変化》という長い時間の中での主体の行動変化を時系列に沿ってテ節で接続していたのに対し、この作文例(5)は、交流時間は実際には数時間である。また、その短い時間の中で行われる行動の流れも、受信者の一般的な知識や経験からイメージしやすいのではないだろうか。

以上、中国語母語話者のテ節の複数回使用の作文例を見た。中国語母語話者のテ節の複数回使用は、前節でも述べたように、中国語の文の並列による接続方式の影響を受けていると考えられる。

しかし、テ節の複数回使用が問題となるのは、接続の意味関係が分かりにくくなる場合

である。習者は、母語の類似表現とテ接続文の違いを認識し、受信者が接続の意味関係の推測がしやすくなるよう、表現の調整を行う必要がある。

一方で、第4章でも述べたように、テ節の複数回使用は、レトリックとしての効果を持つ。単なる接続表現ではなく、表現効果についても認識すべきである。

### 6.2.3 テ接続文によって表される意味関係

本節ではテ接続文が表す「継起」、「因果」、「付帯（様態）」、「並列」意味関係別に、作文例を分析、考察する。また、テ接続文では表せない「仮定」の意味用法についても分析、考察する。

#### (1) 「継起」関係を表すテ接続文の使用例

中国語では、動作が行われる順に文を並べて文を作ることが可能である。連動文は、動作の発生順に文を並べることが原則である。また、事象の発生順に語ることは、ヒトの認知のし方の順にも沿っており、テ接続文によって「継起」の意味を表すことは、中国語母語話者にとっても、容易であると思われる。吉田（1994）も、台湾人学習者の作文例には、「継起」を表すテ形接続文の誤用は皆無であったと報告している。

しかし、筆者の調査では、中国語母語話者でも「誤用」と判断される例が散見された。

- (6) まず、新中国[建国]以来一番大きなのは唐山地震だが、二番は新疆地震だ。新疆地震で建物が倒れて、犠牲者が多かった。[李さんたちは]地震の状況について、阪神大震災の例を見て、家具の転倒で犠牲者も多くて、それに火災も被害を大きくした。私たちは地震を真剣に考えるようになるべきだ。日ごろから身を守るように心かけるべきだ。

※[ ]内は筆者が補足加筆

「李さんたちは～大きくした。」という文は、「李さんたち」の行動を時間軸に沿って順に説明している。李さんたちは、「地震の状況について阪神大震災の例を見て」、「家具の転倒で犠牲者が多い」ことと、「火災が被害を大きくした」ことを知ったのである。

発信者は、事態の発生順にテ接続で並べ、「継起」関係を表そうとしたのではないかと推測される。しかし、受信者には、「継起」の意味関係を推測するのはやや困難である。

では、「継起」の意味関係を推測できないのはなぜであろうか。まず、受信者が「見て」

に続くと予測するのは、「見る」という調査発表の関連動作、あるいは、その見た結果報告であろう。しかし、「見て」に続いたのは、結果報告であったが、今度は「見て」を受ける主節に当然あると受信者が予測した「知った、分かった」という表現がなかったために、受信者の予測が裏切られ、結局、テ接続の意味関係は、「継起」でも「因果」でもないことがわかり、受信者は意味推測ができなくなってしまうのである。

この受信者の予測とは、第3章で述べたテ接続文の意味内容のまとめ、整合性である。この整合性に破綻をきたすと、受信者は意味推測できなくなり、文としても誤用と判断されてしまう。

「継起」関係を表すテ形接続文の整合性を保つには、単に時間軸に沿って事象を並べればよいというものではない。「李さんたちは～震災の例を見る」と「家具の転倒で犠牲者も多くて、それに火災も被害を大きくした」という2つの事象の意味的關係を考えた上で、文全体の意味的な整合性を考えて、文を整える必要がある。

次の作文例(7)では、「継起」関係を明確に表すために、「て」ではなく、「てから」使用している。テ接続文の文の意味を明確化するために、明示的な語句の挿入が有効であるという指摘もある。しかし、次の作文例(7)ではむしろテのほうが自然であるように感じられる。

- (7) 異文化理解ができるように必要なことは二つある。まず、他の国の人にステレオタイプを持つべきではない。ステレオタイプというのは、あるグループの人々に対する固定的な印象のことである。ステレオタイプを持っている人はいつも相手のことをまだ詳しく知らないが、相手を簡単に判断する。でもステレオタイプは正しいとは限らないに加えて、グループの中の人々の違いを無視しやすいから、相手の気持ちを理解することの邪魔になる。だから、ステレオタイプを捨てるのは異文化理解の基礎だと思う。

ステレオタイプを捨てるてから、理解し合えるようにちゃんと話し合うのは大事だ。

これについては、先述したように顧(1983)が中国語の影響を指摘している。作文例(7)の発信者も、中国語で「～之后」(その後)と言えるため、それを日本語の「てから」に置き換えたとのことであった。

「この報告を聞いて、いい勉強になった」というテ接続文は、「継起」関係より、「因果」関係を推測するほうが一般的であろう。「因果」関係は、「継起」関係の上に成り立つ論理関係であるが、後件が「いい勉強になった」、「驚いた」、「わかった」などヒトの内面的な状態を表す場合は、受信者は「継起」関係より、原因 - 結果という「因果」関係の推測を優先するのではないだろうか。

また、テ接続文と「～てから」の文を受信者に与える意味とイメージ像という視点から比較してみる。

- (8) a. ステレオタイプを捨ててから理解することが大事だ。  
b. ステレオタイプを捨てて理解することが大事だ。

(8) a の「～てから」の文は、順序性が際立っている。順序に焦点が当たっている。それに対し、(8) b の「～て」は、テによって「ステレオタイプを捨てること」と「理解すること」のイメージが重層的に重なって、1つの像を作っている。このテ形は事象を重ねて1つの像を形成するという働きについては、第3章で述べた通りである。つまり、テ接続文は時間関係のみを表しているのではないため、「～てから」で意味を明確化することは、一方ではこの像を重ねて1つの像を作るというテの働きを失ってしまうのである。

よって、発信者が順序性をより際立たせたいのであれば、「～てから」で接続関係を明示すべきであるが、継起性だけでなく、テ接続による、1つのまとまった全体像を際立たせたいのであれば、意味関係を継起性に特定するような表現は用いないほうがよいということである。意味関係を明示化する利点もあるが、それは、テ接続文の1つの全体像を形成するという中核的意味を含め、包括的な意味関係を表せるというテの特性を失うのである。

## (2) 「因果」関係を表すテ接続文の使用例

以下の作文例は、大学生ではないが、中国人母語話者の作文である。

- (9) 日本の友達に歌を教えてあげたいと思って、華流チームに参加します。  
(10) お金がなくなっちゃって、どうしよう。

文脈から、「因果」関係が推測されるが、文としては「誤用」と判断されるだろう。

「因果」の意味推測は、まず「継起」の意味関係が推測できることが前提である。動詞句の場合は、「継起」関係は自ずと生まれる。しかし、「継起」関係が成り立っていても、受信者は「因果」関係を推測には制約がある。

(11) a. 風邪をひいて、学校を休みました。

?b. 風邪をひいて、学校を休みます。

(11)bは「誤用」と判断されるであろう。「因果」関係を表すテ接続文は、後件に意志を表す句を使用することはできないという制約があるが、(11)aのように意志動詞でも過去形であれば、無意志表現となるため使用できるとされる。

この制約について、テ接続文の事象間の関係から考えてみる。まず、(11)a「風邪をひいて、学校を休みました。」は、前後句の事象は先後関係にあり、「継起」関係が推測できる。

一方、(11)bの「休みます」は動作が未完了であるため、事象間の先後関係は成立せず、自ずと原因—結果という「因果」関係も推測できなくなるのである。そのほか、「因果」関係を表すテ接続文の後件に「たい」「ましょう」などの意志表現が使えないのも、後件の動作が未完了であるために、受信者が「継起」関係、ひいては「因果」関係を推測できないからである。

日本語学習者のテ接続文の「誤用」例として、母語に関わりなくよく取り上げられるのが、「カラ」・「ノデ」との混用である。

上記の(11)b「風邪をひいて、学校を休みます。」のような「誤用」を回避するために、「因果」の意味を明示的に表す「カラ」や「ノデ」を用いたほうがよいと指摘される場合もある。

次の文例(12)はいずれも「因果」関係を表している。意味のわかりやすさから言えば、「カラ」のほうが明示的で、わかりやすい。

(12) a. 今朝、電車が遅れて、遅刻しました。

b. 今朝、電車が遅れたから、遅刻しました。

しかし、場面によっては表現の適切さは異なる。例えば、学生が遅刻の理由を報告する場面では、どちらが適切であろうか。(12)bの「カラ」は遅刻の原因を明示的に表しており、遅刻の原因は電車の遅延であることを際立たせる。

一方、(12)aの「テ」は、「因果」関係が明示化されていないが、事象間に「継起」関係

があることは明白であり、さらに「因果」関係も推測することも論理的に十分可能である。

ただし、接続形式テによって「原因」となる前節の事象は強く背景化され、「カラ」のように際立ってはいない。このようにテとカラは「原因」の際立ち度が異なる。

そして、場面によってこの際立ち度の違いを使い分けることもコミュニケーションには有用ではないだろうか。ただし、このコミュニケーションの適切さも文化的背景によっても異なる。例えば、日本では遅刻した場合、「遅れてすみません」という謝罪の挨拶のみを言い、言い訳しないことがよいとする考え方もあるが、中国では遅れた理由を明確にほうがよいとする考え方もある。

### (3) 「付帯（様態）」関係を表すテ接続文の使用例

中国語では、動詞句を並べて付帯状況を表すことができる。テ接続文と文の構造が似ているため、中国語母語話者は文を産出しやすいと思われる。また、結果状態の持続を表す助詞「着」動詞につけることもあるが、これも「～て」と置き換えることが可能であるためか、「付帯（様態）」を表すテ接続文を作りやすいようである。

「様態」を表すテ接続文の意味推測は、語彙や文脈から比較的わかりやすいと思われるが、中国語の「着」は付帯状況を形式から明示的に表しており、受信者は意味関係を推測をする必要がない。また、日本語では「座った状態で」、「着た姿で」と明示的な語句を挿入することにより付帯状況を際立たせて表現することはできるが、「～て」で表すことが多い。付帯状況を表す中国語の「着」がほぼテにしか対応しないことから、ほかの表現との混同することなく、付帯状況を表すテ接続文を使用できるのであろう。

- |                  |                             |
|------------------|-----------------------------|
| (13) 我骑自行车上班。    | (私は自転車に乗って出勤します。)           |
| (14) 煮鸡肉做汤。      | (鶏肉を煮てスープを作ります。)            |
| (15) 他穿着民族服饰跳着舞。 | (彼は民族衣装を <u>着て</u> 踊っています。) |
| (16) 她坐着看书。      | (彼女は <u>座って</u> 本を読んでいます。)  |
| (17) 他大声地笑着说。    | (彼は大声で <u>笑って</u> 言いました。)   |

なお、中国語母語話者のテ接続文には、スルがつけられない副詞をシテ節にして表す例が見られることがある。テ節で様態を表す用法の転用による文法的な誤用である。

- (18) 不承不承にして、承諾した。
- (19) 学期の前半、私はまだ朝早く寮を去り、のんびりして食堂に行き、十分間で豊かな朝食を楽しみました。

そのほか、否定形の「なくて」と「ないで」の混用もよく見られる誤用である。

- (20) 今度私は恐れなくて、ちゃんとバランスを取って、一生懸命アイススケートを習います。
- (21) 太極拳が好きな高齢者は専門的な先生がいないで、ビデオを見ながら、自分の理解を通して独学している。

これらは語彙や形式による誤用であるが、十分な注意が必要であろう。

#### (4) 「並列」関係を表すテ接続文の使用例

「並列」の意味を表すテ接続文は、ほかの意味用法のテ接続文に比べ、最も文節間の従属度が低く、独立度が高い。これは、中国語の文の並列に構造的に近い。中国語母語話者にとっては「並列」関係を表すテ接続文は産出しやすいのではないかと思われる。

しかし、「並列」関係を受信者に推測させるのはそれほど簡単とは言えないようである。次の作文例(22)は日本人と中国人のステレオタイプをテ接続文で述べているのだが、やや不自然に感じる。事象間の「並列」関係を推測しにくいからである。

- (22) 王さんは空手部のマイクさんに会った。アメリカ人のマイクさんは、日本人ならみんな空手ができると思って、中国人ならみんなカンフーができると思うが、王さんは中国人ならみんなカンフーができるとは限らないと教えた。

「日本人ならみんな空手ができる」ことと、「中国人ならみんなカンフーができる」ことが対比されており、「並列」関係である。しかし、「思う」という動作句で接続したために、動作主である「マイクさん」が「日本人ならみんな空手ができると思う」ことと「中国人ならみんなカンフーができると思う」ことの意味関係が、「並列」か「継起」か、または「思っ

て」が後件を修飾して「様態」を表しているのか、受信者は混乱してしまう。

例えば、「マイクさんは、日本人ならみんな空手ができて、中国人ならみんなカンフーができると思っ

中国語母語話者に産出しやすいと思われる「並列」関係を表すテ接続文であるが、このように、受信者の意味関係の推測が少しでも裏切られると、推測混乱に陥ってしまうのである。発信者は受信者が意味関係の推測がスムーズにできるように、十分な注意を払わなければならないのである。

#### (5) 「仮定」を表すテ接続文の使用例

日本語のテ接続文では、「仮定」の意味を表すことはできない。しかしながら、中国語母語話者のテ接続文には、「仮定」を表そうとして「誤用」と判断される文例が散見される。

(23) 携帯電話のアプリで注文して、30分で出前が届きます。

(24) 日本に行って、私の言語のレベルを高めることができます。

上記の作文例(23)(24)のテ接続文の意味関係は、「継起」、「因果」、「付帯(様態)」、「並列」のどれにも当てはまらない。そのため、受信者は意味関係が推測できず、「誤用」と判断するであろう。そして、これらの文は、「テ」を「ト」や「バ」に置き換えると、「仮定」の意味を表す文として、正用になると思われる。

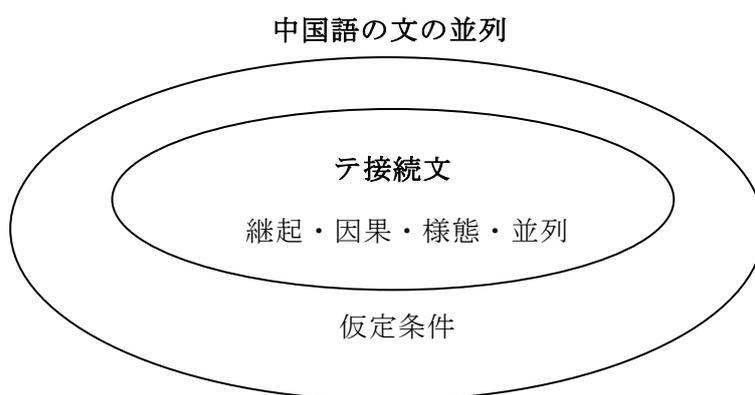
このような中国語母語話者の「テ」と「ト」の混用は、顧(1983)や吉田(1994)にも指摘されている。顧は、「ここから 500 メートルほど行って、右側に体育館がある」のような誤用は、中国語では「从这里走 500 米左右, 右侧就是体育馆。」のように〈就〉が後件の条件であることを表せるためであるとしている。しかし、「就」が条件を表せるならば、日本語では「テ」では「条件」を表せないのだから、テで文を接続しないのではないだろうか。むしろ、中国語の文の並列と日本語のテ接続文がそれぞれ表せる意味関係の範囲の認識の違いが「誤用」の原因であると考えられる。

中国語の文の並列によって「仮定条件」が表せるとはどのようなことか。大河内(1986)は、接続形式を用いない中国語の複文の接続関係を因果関係、転折関係、条件関係、譲歩関係の4つに意味分類し、その意味の読みとりは、前後句の論理関係が順接か逆接か、前句の内容が未然か已然か、この2項によって決まると述べている。日本語のテ接続文がこの中国語文の複文と決定的に異なるのは、テ接続文は前句と後句が「継起」関係にあっても、後句に未然(不確定)の内容を表現することはできないことである。「風邪をひいて、学校を休んだ。」は言えても、「風邪をひいて、学校を休む。」は言えない。同様に、「春に

なって、花が咲いた。」は言えても、「春になって、花が咲く。」も言えない。個別の事柄であれ、一般的な事柄であれ、未然の事柄、未完の事柄を後件に表現することはできない。従って、「仮定条件」はテ形接続文では表せない。

上記のような作文例(23)(24)が「誤用」と判断される原因は、以上のような意味関係の範囲の違いとすることができる。

(図 1) テ接続文と中国語の文の並列の表す意味関係



#### 6.2.4 テ節による行為の前掲

中国語母語話者のテ接続文の使用例には、以下の作文例のように、発信者の行為を前掲に使われていると思われる作文例が見られる。しかし、これらのテ接続文は、受信者には「誤用」と判断されるであろう。なぜなら、受信者には前件と後件の意味関係の推測が困難であるからである。

- (25) このような方法を選んで、実は私の経験と関係があります。
- (26) この言葉は中国語に訳して、すべて「不好意思」という意味だ。
- (27) 昔の旅行を思い出して、多くの時間は友達や家族とおしゃべりをしていて、周りの人やことにあまり気が付かなかったです。

これらの文例は、前件は動詞句であるのに対し、後件は状態を表している。受信者は、「選んで」、「訳して」、「思い出して」テ節を受ける後句の動作性の事態を予測する。しかし、実際には後件は状態性の事態であるために、継起か共時かという時間関係を読み取れない。「継起」関係が読み取れないならば、必然的に「因果」関係も推測できない。また、語彙の意味的にも「並列」関係が推測できない。結果、受信者はこの文から意味関係の推測

ができず、「誤用」であると判断するのである。

吉田（1994）は、中国語では「～と考える」等の引用を「我想～（私は思う）」のように、文の冒頭に据えることから、「私は考えて、学生の義務は勉強することです。」のようにテ節で前掲する「誤用」が見られると報告している。

上記の「誤用」例も、中国語では「回忆从前的旅行，大多数时间都是在与朋友、父母聊天，很少注意周遭的人和事。」（発信者本人による中国語訳。意味：以前の旅行を思い出す、ほとんどの時間は友人や父母とおしゃべりして、周りの人に注意していなかった。（筆者訳））のように、「昔の旅行を思い出して」というテ節の部分は、「回忆从前的旅行」（以前の旅行を思い出す。）という単文を文の冒頭に置いているだけである。恐らく発信者は文を単に「テ」で接続したのであろう。

これらの作文例は、テ接続文としては前後節の意味関係は推測できないが、文脈から発信者のテ節の使用意図は読み取れる。それはこのテ接続文の後件の事象が発生する契機となる行為の前掲である。「原因—結果」の意味関係ではなく、「契機行為—結果の状態」の関係と言える。契機行為とその結果であるから、前後節の意味的關係が全くないわけではない。実際、中国語では意味関係の推測が可能なのである。しかし、テ接続文としては、意味関係の推測はできないのである。

日本語にも「正直言って」、「結果から見て」、「状況から考えて」など、副詞的に使われているものもある。これらは、意見や結果などの前置きとして使用されるが、動詞の本来の意味は失っている。後件の事象との意味的関連付けは弱く、受信者も意味の關係の推測はしないであろう。しかし、日本語の場合は、中国語に比べて、前掲可能なテ節は限られている。中国語と日本語の前掲表現を全て網羅して比較することはここでは避けるが、上記の中国語母語者との作文例からみても、中国語のほうが、日本語より自由に文を前掲できることは明らかである。

また、構造的な違いもある。中国語の場合は、単文として前置きできるが、テ節は文ではなく文節であり、構文上は独立できない。接続の自由度は自ずと異なっているのである。テ接続文と中国語の文の並列は、構造的に似ていることから、表す意味関係も似ているが、根本的に文であるか、節であるかという構文中の役割の違いは、その両者の違いに大きな影響を及ぼすのである。

### 6.3 中国語母語話者のテ接続文の使用と認識 まとめ

本章では中国語母語話者がどのようにテ接続文を使用しているか、また、受信者はそのテ接続文の意味内容の推測ができていのかどうかを考察した。以下に考察結果をまとめる。

まず、テ形接続文と中国語の文の並列と構造的な類似点が、中国語母語話者のテ接続文の使用に大きな影響を及ぼしている。テ接続文は、接続形式テによって文を接続するが、テそのものは接続の意味関係は表さない。前後節の意味関係の推測は受信者にゆだねられている。中国語の文並列は、基本的に単文を並べて文を作ることができる。接続形式を用いずに文を作ることができ、接続の意味関係は受信者の文脈推測にゆだねられている。つまり、両者に共通するのは、接続の意味関係を表す形式を用いずに文を接続している点と、接続の意味関係の推測は受信者にゆだねられているという点である。

まず、構造上の類似点による影響である。中国語は接続形式がないが、読点によって文や意味の区切りを表す。中国語母語話者は、テはその読点に当たると考える。よって、中国語では読点で区切れるところを日本語ではテ節に置き換えて文を続けていく学習者がいる。いわば、テを文接続の符号であると認識しているようである。しかし、文接続の従属度は日本語のほうが中国語より低いために、中国語と同じように複数の文をテ節で接続していくと、日本語母語話者には理解しにくい文となることもある。接続の従属度は、中国語の文の並列と異なり、テ節は従属節であるために、文構造の制約から逃れられないのである。

次に、表す接続の意味関係の範囲の違いである。テ接続文も中国語の文の並列も、接続の意味関係の推測は、受信者にゆだねられている。テ接続文の「誤用」とは、受信者が意味関係の推測が出来ない場合になされる判断である。

テ接続文と中国語の文並列の表す接続の意味関係の範囲は異なっている。中国語のほうが表す意味関係の範囲が広く、日本語のほうが狭い。よって、中国語の文並列では推測可能である意味関係が、テ接続文では推測できない場合がある。その場合、受信者は「誤用」と判断する。中国語の文の並列とテ接続文の表す意味関係の範囲の最も大きな違いは、「仮定条件」である。中国語の文並列では「仮定条件」の推測が許されるが、テ接続文ではできない。中国語母語話者はこの意味関係の範囲の違いに注意する必要がある。

また、テ接続文は、「継起」、「因果」、「付帯（様態）」、「並列」の意味関係の推測が可能であるが、これらの意味関係の推測を受信者に可能にするためには条件があり、中国語の文並列ほど接続は自由ではない。事象間の時間関係や、因果関係の読みとりさせるための

継起関係の保持、事象の動作性と様態性の区別など、受信者が意味推測をスムーズに行えるように、発信者は推測の手がかりを十分に準備する必要がある。これらの制約も、テ接続文と中国語の文の並列は異なり、テ節は従属節であるために、主語や主節などとの調整が必要となるのである。

中国語母語話者のテ接続文の作文例からは、接続形式テへの認識も観察できた。母語の影響は大きく、テを母語の類似表現に置き換えていることが明らかになった。類似性は助けともなるが、違いについても認識する必要がある。特に、テ接続文のように、明示的な意味を持たない表現は、発信者の意図と受信者の推測した意味内容にずれが生じやすい。受信者が意味内容を推測できなければ、発信意図は伝わらず、コミュニケーションが成立しなくなってしまう。テ接続文を発信する際は、受信者が発信意図を推測できるかどうか、文構造、語彙、意味、場面など十分に検討をする必要がある。

## 第7章 テ接続文の中核的意味を取り入れた指導の提案

本章では、日本語教育の立場からテ接続文の具体的な指導方法を提案する。本論では、第3章で接続形式テの中核的な意味を認知言語学的アプローチによって抽出した。そして、第4章ではその中核的な意味という視点からテ接続文の表現効果を検証し、第5章と第6章では、中国語母語話者の日本語学習者のテ接続文の意味内容の推測と使用について観察した。本章では、本論でこれまで明らかになったことを日本語教育における指導に反映させ、テ接続文の中核的意味を取り入れた指導を提案する。

### 7.1 日本語学習におけるテ接続文の難しさと従来 of 指導法

テ接続文の中核的意味を取り入れた指導を提案するにあたり、日本語学習におけるテ接続文の難しさとそれに対する従来 of テ接続文の指導方法を概観する。

#### 7.1.1 日本語学習におけるテ接続文の難しさ

市川ほか（2005）『初級日本語文法と教え方のポイント』は、初級の学習者に日本語を教える教師のための教師用参考書である。この中の「～て」の項目には、指導上の指導の際注意すべき点と、それに対する具体的な指導方法が示されている。以下、説明の一部を抜粋して簡単にまとめる。<sup>1</sup>

『初級日本語文法と教え方のポイント』「～て」（p.373-378）より

##### ●文接続の「～て」の意味用法

2文（2文以上の場合もある）が接続するとき、次のような形をとる。

\_\_\_\_\_て、\_\_\_\_\_

前文

後文

従属節

主節

前文・後文の内容や、述語（動詞・形容詞など）の種類によって意味用法が変わってくる。

1. 動詞の場合      1) 継起    2) 付帯状況    3) 理由    4) 並列

<sup>1</sup> 「～て」を指導項目として挙げ、文接続の意味用法に動詞のほか、形容詞・「名詞+だ」も含めている

## 2. 形容詞の場合 1) 並列 2) 理由

指導上気をつけたほうがいい点

### 1. 動詞の継起について

誤用例 きのは東京へ行って、デパートへ行って、映画を見て、ご飯を食べて、宿舎へ帰りました。

→ きのは東京へ行きました。東京でデパートへ行ってから、映画を見ました。それから、宿舎へ帰りました。

学習者は「～て～て～て」といくつもつなげて文を作ろうとする。しかし、実際の日本語の文では「～て」が三つも四つも並ぶことは少なく、一つか二つの場合が多いようである。「～て」は一つか二つしか使わないよう指導する必要がある。

誤用例 きのは起きて、日本語を勉強して、食べて、寝ました。

→ きのは日本語を勉強しました。そして、ご飯を食べて、寝ました。

生活の活動（日本語を勉強する、食べる）と同列に「起きる」があるので不自然になっている。引き続き起こる事柄として同列に並べるのではなく、もし「起きる」を入れたいのであれば、「起きてから」とすべきである。

### 2. 付帯状況について

学習者は付帯状況の「～て」を「～ながら」と混同しがちである。「テープを聞いて英語の勉強をする」では「～ながら」にも置き換えることができるが、本来は「めがねをかけて運転する」「立って話す」のように、動作が同時に進行するのではなくて「そのような状態・状況で」という意味だということをよく理解させる必要がある。

### 3. 形容詞の並列について

誤用例 このりんごはおいしくて赤くて大きいです。

→このりんごは赤くて大きくておいしいです。

「赤い」「大きい」はりんごの形や形状を表していて、「おいしい」は味についての判断・評価を表す。色や形状などの外観を表すものを先に、最後「おいしい」を持ってくれば文が適切になる。このように「おいしい」のように話し手の判断・評価を表す表現は並列の最後に持ってきたほうがいいと言える。

学習者は「日本語はおもしろいですが、難しいです。」のように対比表現で表すべきところを「日本語はおもしろくて難しいです。」と並列表現で表すことがある。

指導のポイント：

並列を表す「～て」では、動詞、形容詞を無差別に並べるのではなく、同じ種類・グループの語が並べられるように、指導すること。

#### 4. 理由について

誤用例 寒くてヒーターをつけよう。

→寒いからヒーターをつけよう。

誤用例 手紙が来なくて、電話をかけました。

→手紙が来ないので、電話をかけました。

「～て」が理由を表すのか、単なる並列を表すのかは、前文と後文の意味内容によるところが大きい。また、理由を表す場合は、後文に無意志動詞や状態性の動作が来ることが多い。

「仕事が忙しくて、休めません」のような文は「忙しいから休みがとれない」のか、単に「忙しい、そして、休みがとれない状態だ」と言っているのかははっきりしない。並列か理由かはっきり分けられない文は実際には多く現れる。

指導ポイント：

「～て」自体は2文を結合する働きがあるだけで、どのような関係（理由・継起・並列など）を表すかは、前文と後文の意味内容や述語の種類などにかかわってくる。理由をはっきり示したいときは「～て」ではなく「～から」「～ので」「～のために」を使うように言及しておくこと。

「～て」が理由を表すためには、前文・後文が意志か、無意志表現かがかかわってくる。はじめは、前文・後文とも無意志表現（例：難しくて覚えられない）から練習を始めたほうがよい。

上記にまとめた市川ほか（2005）『初級日本語文法と教え方のポイント』は、初級で扱われるテ接続文の意味用法の指導法について学習者の誤用例などを挙げて、具体的な指導方法を提示している。テ接続文の指導のポイントとはつまり、日本語学習におけるテ接続文の学習における難しさとも言える。この本に挙げられているテ接続文の学習の難しさは、

一般的によく指摘される点である。前章で述べた先行研究の学習者のテ接続文の誤用の問題点ともほぼ重なる。

上記の市川ほか（2005）と前章で挙げた学習者の誤用に関する先行研究から、日本語学習におけるテ接続文の難しさを以下にまとめる。

【日本語学習におけるテ接続文の難しさ】

- (1) 接続の意味関係が判別しにくい場合がある
- (2) テ節の複数回使用により意味内容がわかりにくくなる場合がある
- (3) 類似表現、関連表現との混同
- (4) 文の制約の複雑さ
- (5) 学習者の母語の影響による誤用

### 7.1.2 テ接続文の従来 of 指導法

本節では、前節で挙げた日本語学習におけるテ接続文の学習における難しさに対して、従来どのような指導の提案がされてきたかをみていく。

(1) 接続の意味関係が判別しにくい場合の指導案

接続の意味関係の判別がはっきりできない場合、注意点としては挙げられているものの、その理由や学習者はどう捉えるべきかという具体的な指導について述べているものは管見の限り、見当たらなかった。以下に日本語教育の立場から、接続の意味関係が判別しにくいことに言及している参考書や先行研究を挙げる。

市川ほか（2005）では「並列」か「理由」か意味が判然としないテ接続文があると述べている。

鈴木（1976）は、「て」によって結ばれる原因・理由には多分に手段・方法という意味あい、継起的並列といった意味あいが含まれて、区別のつけにくいものが多いと述べる。

吉永（2006）は、「継起」と「因果」の間には中間的な用法があり、それらは互いに

連続し、線状をなしているために意味的に紛らわしいと述べる。例えば、「その映画監督はアカデミー賞を受賞して有名になった。」のような文は、文脈がなければどちらか判断がつかないとする。

## (2) テ節の複数回使用により意味内容がわかりにくくなる場合の指導案

池尾(1963)は、文章が長くなっても、「～て」の前後で、主格の無断交代が行なわれないように、補足語としての主格に注意を払わせる必要があることを指摘している。

市川ほか(2005)は、実際の日本語の文では、「～て」は一つか、二つの場合が多いとし、学習者にも一つか二つしか使わないように指導する必要があると述べている。

吉永(2006)は継起用法の意味決定の条件として、前後節の時間関係が継起的であること、前後節の主語や意味役割、述語の種類などが一致すること、組合せの単純さの3点を挙げる。組合せが複雑な場合は、意味関係を明確化する意味成分の付加が必要であると述べる。例えば、「国の食べ物を見つけて、買って、うちに帰って、やっぱり違った。」は、適切な意味を補う接続成分を付加し、「国の食べ物を見つけたので、買って、うちに帰ったら、やっぱり違っていた。」などとすると具体的な指導例を挙げている。

## (3) 類似表現、関連表現と混同する場合の指導案

### i. ～て／ながら

市川ほか(2005)は、「～ながら」にも置き換えることができる場合もあるが、本来は「めがねをかけて運転する」「立って話す」のように、動作が同時に進行するのではなくて「そのような状態・状況で」という意味だということをよく理解させる必要があると述べる。

### ii. ～て／～てから

市川ほか(2005)は、「きのうは起きて、日本語を勉強して、食べて、寝ました。」のように、並列される事象の種類が異なる場合は、同列にせず、「きのうは日本語を

勉強しました。そして、ご飯を食べて、寝ました。」のようにし、「起きる」を入れたいのであれば、「～てから」を使用し、「起きてから」とするよう指導している。

吉永（2006）は、継起の意味用法の決定条件は、前後節の継起的時間関係、前後節の主語や意味役割、述語の種類などの一致と組合せの単純さであるとし、異主語の場合は、継起関係を補強する「それから」など時副詞を付加が必要であると述べる。例えば、「朝、弟が学校に行って、お姉さんが会社に行って、私大学に行く。」は、「朝、弟が学校に行って、（それから）姉が会社に行って、それから私が大学に行く。」などにするとする。

また、その付加成分は多岐にわたるが、学習者のレベルに合わせて指導する必要があるとも述べる。

### iii. ～て／から・ので

池尾（1963）は「から」（接続助詞）との比較において、中止法としての「～て」の機能を認識させることを指導の注意点として挙げている。

鈴木（1976）は、「て」「から」「ので」を教える場合はその特徴を生かした文例を用意しなければならないと述べる。また、文脈における位置づけ、従属句相互の関係、句切りの大小などにも配慮する必要があるとしている。

吉田（1994）は、「て」によって「原因・理由」を示す際に前項動作・事態の性質に強弱があり、原因性が強ければ「て」を使うことができるとする。しかし、学習者にその強弱の判断を求めるのは無理であるから、作文指導の便宜としては、原因性をはっきりさせたいのなら、制約の少ない「ので」「から」を使わせる方が安全であると述べている。

市川ほか（2005）は、理由をはっきり示したいときは「～て」ではなく「～から」「～ので」「～ために」を使うように言及しておくように指摘している。

吉永（2006）は因果用法の意味決定の条件として、前後節の時間関係が継起的であることと因果性の論理を満足させることを挙げる。しかし、継起解釈に引きずら

れ因果関係の読みが弱い場合は、「可能」、「強調」などの適切な因果要素を付加する必要があるとする。例えば、「お金を落としてレストランに行きませんでした。」→「お金を落としてレストランに行けませんでした。」、「有名な選手が参加して試合は面白い。」→「有名な選手が参加してこそ試合は面白い。」のように、因果要素を付加することにより、因果関係を補強する。

また、時間の逆転が伴う時は「から／ので」を使用する必要があると述べる。例えば、「今晚友達が来て飲み物を買います。」は「今晚友達が来るので飲み物を買（買っておき）ます。」などとする。

#### iv. ～て／と

富田（1991）は「て」を「から・ので」と共に提出せず、「と」と対比させる指導方法を提案している。「と」は「いつもそのようになる」時に、「て」は個別の場合に使用すると指導する方法である。例えば「教室が暗いと、黒板の字が見えません。」は一般的な事柄を表し、「今、この教室は暗くて、黒板の字が見えません。」は個人的な事柄を表す。また、学習者が「て」で原因・理由を表したい場合、「と」に言い換えて一般的な事柄を表せない場合は、「ので」を使わせるように指導する提案もしている。

#### （4）文の制約の複雑さに対する指導案

多くの文法参考書や教師向けの指導書には、「因果」の意味を表すテ接続文の後件には、意志的表現は使用できないという説明がされている。しかし、一般に初級の教科書ではその制約の複雑さを避けて、「～て+感情表現」（例：うれしい、驚く、残念、困る等）」と「～て+V 可能の否定、わからない」（例：高くて買えない）だけを取り上げている。市川ほか（2005）も、「理由」を表すには、前文・後文が意志か、無意志表現かがかかわってくるため、はじめは前文・後文とも無意志表現（例：難しくて覚えられない）から練習を始めたほうがよいと述べている。

#### （5）学習者の母語の影響による誤用に対する指導案（中国語母語話者）

第6章でみたように、顧（1983）、塩入（2012）が中国語母語話者の誤用の特徴として「～て／～てから（継起）」の混同、文の句切れへのテの使用を指摘していたが、それに対する具体的な指導案は述べられていない。

以上、テ接続文の学習上の困難点に対し、従来提案されている指導案をまとめた。テ形接続は一般に初級段階で学習する文法項目である。したがって、上記の指導案はどれも、初級の学習者がわかりやすいように配慮されている。また、日本で指導する場合、学習者の母語がそれぞれ異なることや、教師が日本語で教えることが多いであろうことも想定し、初級の学習者に、日本語でどう説明するかも、指導する際の重要なポイントとなっている。

### 7.1.3 テ接続文の従来指導法の問題点

前節では、テ接続文の学習上の問題点と従来指導法をみた。本節では、従来指導法の問題点を見直し、テ接続文を学習者が効果的に使用できるようにどう指導すべきかを探る。

#### 7.1.3.1 テ接続文の学習の難しさに対する従来指導法の問題点

まず、前節で挙げられた、5つのテ形接続文の学習の難しさに対応する従来指導案について、それぞれ問題点をみていく。

##### (1) 接続の意味関係が判別しにくい場合の指導案の問題点

先述のように、一般にテ接続文の意味内容が判別しにくい場合があるという点については、注意にとどまり、具体的な指導方法は提示されていない。判別がしにくい場合があるのは事実であり、注意は必要であるが、なぜ判別しにくいのか、テ接続の本質についても説明もなされるべきではないだろうか。意味内容の判別は、テ接続文を受信する際の困難点であるが、同時に、学習者が発信する際にも注意をするべき点にもなり得る。

##### (2) テ節の複数回使用により意味内容がわかりにくくなる場合の指導案の問題点

テ節を複数回使用すると、なぜ意味がわかりにくくなるのだろうか。上記の先行研究を整理すると、主に以下の4つの原因が考えられる。なお、文例は筆者の作例である。

###### ①冗漫な文になる

例：昨日、朝6時に起きて、顔を洗って、朝ごはんを食べて、歯を磨いて、着替えて、学校へ行きました。

###### ②事象の関連性がわかりにくく、意味のまとまりがない

例：日本に行って、文学を勉強して、温泉に入って、友達がたくさんできた。

### ③主語の交替

例：誕生日に友達に会って、プレゼントをくれて、うれしかった。

### ④複数の接続の意味用法の混在

例：今朝早くうちを出て、渋滞に巻き込まれて、遅刻した。

①は、意味がわからないわけではないが、テ節の連続使用によって冗長な印象を受ける場合がある。初級の日本語学習者にはよく見られる文で、市川ほか（2005）も指摘している。しかし、本論の第4章で述べたように、場合によってはテ節によって事象を背景化し、それを幾重にも重ねることで重層的なイメージ像を作り出す表現効果をもたらす場合もある。一概に、使用回数を限定すべきとは言えないのではないだろうか。

②の意味まとまりの有無については、第3章で述べたように、テ接続文を意味的に成り立たせるためには、事象間の意味のまとまりが必要である。しかし、意味的に成り立つかどうかは、どんな文脈で使用されるかにもよる。例えば、上記の例「日本に行って、文学を勉強して、温泉に入って、友達がたくさんできた。」は、この1文だけでは、事象間の意味関係にまとまりがないように感じられるが、文脈によっては、自然に感じられる場合もあるであろう。文脈の中でのテ形接続文の指導も重要なポイントであると思われる。

③の主語の交替については、池尾（1963）も指摘するように、主語の統一<sup>2</sup>は、②で挙げた意味のまとまりとともに、テ接続文の整合性を保つためには、重要な役割の1つである。

④の複数の接続の意味用法が混在する問題については、1文中に複数のテ形接続の意味関係が読み取れると、受信者は意味内容の推測に混乱が生じる場合がある。テによって文が接続されている場合、受信者はなんらかの論理的思考に沿って、当然帰着すべき結果を予測しながら読み進む。ところが、予測した結果と実際の文が合わなかった場合、受信者は混乱して意味内容の推測ができなくなってしまう。その場合は、吉永（2006）が述べるように、接続の意味関係を明確にする語句を加える必要があるであろう。

しかし、発信者である学習者が受信者がどこで思考の混乱をきたすのかを理解しなければ

---

<sup>2</sup> 「並列」の意味関係を表すテ形接続文の場合は、主語が異なる場合もある。

ば、適切に語句を付加するのは難しいと思われる<sup>3</sup>。

### (3) 類似表現、関連表現と混同する場合の指導案の問題点

先行研究では、「～て」の類似表現、関連表現として、「ながら」、「～てから」、「から・ので」、「と」が挙げられている。

従来の指導方法は、(2) テ節の複数回使用に対する指導案とやや重なる。「～てから」、「から・ので」の混同に対する指導方法は、テは接続関係が明確に表さないため、意味を明確にする語句を付加したほうがよいという指導である。しかし、一方で意味を明確にしないことによる「テ」の表現効果についても指導すべきではないだろうか。

また、吉永(2006)は時間関係の逆転が伴う場合は、「テ」は「因果」の意味関係を表せないと述べる。この指摘は、テ接続文は基本的に事象の発生順に並べることが前提条件であることを表しており、学習者はこのようなテ接続文の基本的な成立条件をまず理解することが重要である。

「～て／ながら」の混同については、市川ほか(2005)は、「テ」は本来、複数の行為が別々に同時進行するのではなく、「そのような状態・状況で」という意味であると述べる。「テ」が状態・状況という意味を表せるのは、テ節の事象が重なることによって1つの像を作り出すという接続形式テの中核的意味によるものである。学習者はこのテの持つ本質的な意味を理解する必要があるだろう。

なお、「～て／と」については、富田(1991)の案は、学習者が「テ」を「ト」に言い換えて、一般的なことを表せるかどうかの判断ができることが前提となっているが、そもそも学習者がその判断できるかどうかは疑問が残る。

### (4) 文の制約の複雑さに対する指導案の問題点

市川ほか(2005)が指摘するように、前後節ともに無意志表現のような例文から指導するのは初級の学習者にとって、わかりやすいだろう。しかし、その後の学習者の日本語のレベルアップにしたがって、テ接続文の複雑な制約についてフォローアップが必要であろう。

---

<sup>3</sup>吉永(2006)は学習者はどんな場合が推測困難になるか知っておくべきだと述べている。

#### (5) 学習者の母語の影響による誤用に対する指導案の問題点（中国語母語話者）

特定の母語話者を対象としない教材では、学習者の母語全てと日本語を比較対照してテ接続文の指導の注意点を挙げることはできないが、特定の言語の母語話者を想定した教材の場合は、注意を促したり、指導法を提示したりする必要があると考える。また、テ接続文と英語や中国語などの類似表現との違いを教師用指導書や参考書提示するだけでも有効であろう。特に、日本語母語話者が教師の場合、学習者の「誤用」の原因に気づかないことが多いので、指導の手がかりとして助けになるであろうと思われる。

### 7.1.3.2 テ接続文の従来からの指導法に共通する問題点

前節では、テ接続文の学習の難しさに対処する指導案について、それぞれ問題点をまとめた。前節で挙げた指導法は、テ接続文の問題点別の指導法であったが、これらの指導法に共通する問題点もある。本節では、その共通する問題点について2つ挙げる。

#### (1) 意味関係を明示化する語句の付加の問題点

指導法に共通する問題点1つは、テ接続文の接続の意味関係を明確にするために、明示的な語句を付加するという指導法である。

確かに、接続形式テは接続の意味関係を表さないため、意味関係を明示化するためには、明示的な語句を付加するという指導は有効である。しかし、必ずしも明示化する語句を付加することが、意味がわかりやすくなるとは限らない。

甲田・井上（2002）は、因果関係表す接続詞の挿入によって、かえって文の意味内容理解を妨げになる場合もあると述べている。甲田・井上（2002）は、接続詞と因果関係の強さとの関係を調査した。接続詞「そして」、「だから」が入った文と接続詞が入ってない文とその後続文との読解時間を比較した結果、接続詞の入っていない文は、接続詞がある文より読解時間が長かったが、接続詞を比べると、因果関係が強い場合は「だから」を入れても冗長な点から、接続詞の効果は見られず、「そして」を挿入した方が読解時間が短かったと報告している。そして、この結果から、接続詞は必ずしも理解を促進させるだけでなく、前後の文関係を読み取る読み手側の推論を制限することによる干渉も考える必要があると述べている<sup>4</sup>。また、大河内（1986）は、中国語の文の並列によって表せる意味は、

<sup>4</sup> 甲田（2016）はこの実験結果は言語理解のプロセスを演繹的な推論として規定する関連性理論のアプローチの本質的な限界を示しており、精緻化（elaborations）等の人間

論理の必然であり、母語話者はその差を厳密に分けることなく理解を得ているはずであるとする。中国語には、意味関係を明示的に表す「関連語」を用いた表現もあるが、日常生活の会話では関連語のない場合がむしろ普通で、ことさらに論理を追求するときにはその差を意識にのぼせると述べている。

この甲田・井上（2002）、大河内（1986）の指摘は、単に明示的な語句を付加すれば文の意味がわかりやすくなるものではないことを示唆している。指導の際には、十分注意すべき点である。

## （2）教師による「誤用」修正案の問題点

テ接続文の指導法に共通するもう1つの問題点は、教師による一方的な「誤用」の修正である。テ形接続文が「誤用」となるのは、ほとんどは受信者である読み手、あるいは聞き手が、テ接続の意味関係が推測できないかった場合である。

本来、テ接続文は、文と文が接続形式テで接続されている文であり、接続の形が間違っていない限り、形の上では「誤用」とはならない。テ接続文のいわゆる「誤用」とは、文脈など受信者がテ接続文の意味内容を推測するための手がかりが十分に与えられていなかったり、テ節の事象間の関連性など文の整合性が保たれていなかったりすることにより、受信者が意味内容を推測できなかったことを意味する。

学習者の産出したテ接続文を、受信者である教師が意味内容を推測できず「誤用」と判断すると、多くの教師は「修正」指導を行おうとする。しかし、教師の「修正」案は、教師自身の文脈で意味内容を推測し、教師が推測した意味内容になるように、一方的に「修正」してしまうことも多いのではないかと思われる。場合によっては発信者である学習者の意図とはかけ離れた、教師が推測した意味内容を表現するために書き換えてしまう恐れもある。

学習者のテ接続文の意味がわかりにくい場合、明示的な語句を付加したり、文を区切ったりするなど、具体的な指導は確かに有効である。しかし、学習者にテ接続の使用意図を聞いてみると、教師の推測した意味とは違う意図を説明されることがしばしばある。教師は発信者である学習者の意図をよく確認した上で、受信者がなぜ発信者の意図通り、意味内容を推測できないのか、その原因を学習者が認識するように指導することが重要である。

---

の諸能力を等閑視する理論には本質的に問題があると述べている。

#### 7.1.4 日本語学習におけるテ接続文の難しさと従来の指導法 まとめ

以上、日本語学習におけるテ接続文の難しさとそれに対する従来の指導法の問題点について検討した。主な指導法の問題点3つを以下にまとめる。

まず、従来のテ接続文の指導は接続の意味用法の説明が中心であった。しかし、それらの意味用法は截然と分かれているわけではなく、包括的に意味を表していることや、それらの意味用法の根幹にある接続形式テの中核的意味については、ほとんど言及されてこなかった。

また、テ接続と類似表現との比較から、接続の意味関係を明示化する指導はされてきたが、接続の意味関係を明示化しないテ接続文の表現効果についても、ほとんど指導されていない。

そして、初級段階ではテ接続文について、制限された文型は学習するものの、その後、学習段階が進んでもフォローアップされることはあまりない。いわば、テ接続文の習得は学習者任せである。上級レベルの学習者でも、テ接続文の「誤用」はしばしば見られ、必ずしも習得しやすい表現とは言えない。

簡単にまとめると、従来のテ形接続文の指導には次の3つの点が不足している。①接続形式テの本質理解の指導、②テ接続文の表現効果の指導、③学習者のフォローアップ指導である。②テ接続文の表現効果の指導は、①のテ接続文の本質理解の指導と関わっている。また、③の学習者のフォローアップ指導も、①のテ接続文の本質理解の指導と関わっている。テ接続文の本質的な意味を理解せず、単に文型として覚えるだけでは、結局、学習者は限定的なテ接続文しか産出できない。その意味では、③の学習者のフォローアップ指導にも、テ接続文の本質的な意味理解をする必要がある。つまり、この従来のテ接続文の指導に根本的に欠けているのは、テ接続文の本質的理解なのである。

#### 7.2 テ接続文の中核的意味を取り入れたテ接続文の指導の提案

これまでに述べたように、従来、テ接続文の学習上の困難点別に、具体的な指導方法が提案されてきた。しかしながら、テ接続文の本質的な意味の指導は不十分であった。そこで、本節ではこのテ接続文の本質的な意味の指導方法として、本論で明らかにした接続形式テの中核的意味を取り入れた指導を新たに提案する。

テ接続文の本質的な意味理解とは、具体的には以下の点を学習者が理解することである。

### 【テ接続文の本質的な意味理解の指導のポイント】

- (1) 接続形式テは接続の意味関係を包括的に表す
- (2) テ接続文の意味内容の推測は受信者にゆだねられている
- (3) テの事象の背景化による表現効果

この3点について、以下に具体的な指導案を述べる。

#### (1) 接続形式テは接続の意味関係を包括的に表す

テ接続文の本質は、接続形式テそのものは接続関係の意味を表さないということである。テ形接続は、「並列」、「様態」、「継起」、「因果」などの意味関係を表すが、それらの意味関係は、截然と分かれているわけではなく、包括的に表している。よって、テ接続文の接続の意味関係は、本来1つの意味関係だけを特定ものではないということ、学習者はまず認識する必要がある。

#### (2) テ接続文の意味内容の推測は受信者にゆだねられている

次に、テ接続文の意味内容の推測は受信者である聞き手や読み手にゆだねられているということ、学習者は認識しなければならない。テ接続文の意味内容の推測は、受信者にゆだねられている以上、受信者である話し手、聞き手の使用意図が必ずしも正確に受信者に伝わるとは限らない。発信者と受信者の間にテ接続文の使用意図と意味内容の推測のずれが生じることもあることを十分認識する必要がある。

この発信者と受信者のずれを認識した上で、テ接続文の発信者は、受信者が意味内容を推測しやすいように語彙、文脈、整合性など推測の手がかりを十分に提供する必要がある。

そして、先述のようにテ接続文の「誤用」は、受信者が意味内容を推測できない場合である。受信者がなぜ推測ができないのか、この原因を学習者に認識させることが必要である。その原因は、語彙等の意味まとまりなど、文の整合性に問題がある場合、受信者・発信者双方の文化的な背景などが共有できない場合、また、日本語と発信者の母語との違いによる場合もある。例えば、発信者の母語が中国語である場合、第6章でも述べたように、テ接続文の類似表現である中国語の文の並列は、「仮定」の意味関係も表現できるが、テ接続文では「仮定」の意味関係を表すことはできない。このような学習者の母語の類似表現との違いに留意することも重要である。

### (3) テ節の事象の背景化による表現効果

接続形式テが接続の意味関係を表さないということは、テ接続文の本質である。接続の意味関係を明確に表さないことから、受信者には文の意味内容がわかりにくくなる場合もあるが、一方で、意味関係を明確に表さないことの表現効果もある。学習者は、このテ接続文の意味関係を明確化しない表現効果も知った上で、テ接続文を効果的に使用できるようになることを目指すべきである。

テ接続文の表現効果は、テ節の事象の背景化によってもたらされる。第3章でも述べたように、テ節の事象は、認知言語学の「図と地」の区分の「地」となり、強く背景化される。例えば、「因果」関係を表す場合は、このテ節の事象の背景化によって、原因・理由を際立たせない効果を生む。この原因・理由を強く際立たせないことによって、婉曲表現となり、円滑なコミュニケーションを可能にする。

また、テ節の事象は背景化されてイメージを重ね、テ接続文全体で1つの像を作る。これは、第3章で明らかにしたように、接続形式テの中核的意味である。そして、背景化されたテ節の事象は、例えば、依頼などの前置きとなったり、受信者への予測や期待を促したりするといった表現効果を生む。

さらに、テ節を複数回使用することにより、受信者に重層的なイメージ像を描かせる表現効果も生まれる。

以上、接続形式テの中核的意味を取り入れたテ接続文の本質的な意味の指導方法を提案した。無論、従来の指導方法も必要である。従来の指導は、これまでの統語論の研究の成果を踏まえた、具体的で有用な指導である。本章の提案は、その従来の統語論的な視点に、受信者による意味内容の推測という語用論的視点、テ節の事象の背景化、像形成という認知言語学的な視点を加え、テ接続文をより多面的に捉えて指導することで、学習者がテ接続文の意味内容を推測しやすく、かつ、効果的にテ接続文の産出できるようにすることを目指すものである。

## 7.3 今後の課題

本章では、日本語学習におけるテ接続文の難しさとそれに対する従来の指導法を整理し、そこに新たに語用論的視点と認知言語学的視点を取り入れたテ接続文の指導方法を提案し

た。

しかし、まだ課題もある。語用論的視点、認知言語学的視点からの指導は、テ接続文の本質を理解するための指導であるが、さらに具体的な指導が必要である。例えば、テの複数回使用の指導である。テ節の連続によって、受信者のイメージを何重にも重ね、イメージ形成の表現効果を十分に発揮する場合もあれば、連続するテ節の意味関係の推測を受信者ができず、わかりにくい文になる場合もある。いったん途中で文を区切った方が意味がわかりやすくなると思われる場合もあるが、その場合どこで文を区切るとわかりやすくなるか、学習者に指導するのは容易ではない。何か一般化できるような規則があるのか、その解明は今後の課題である。

また、学習者がテ接続文を効果的に産出する上で、連用中止形との併用、使い分けの具体的な指導も必要である。

今後は、本章で提案した指導を日本語教育の現場で実践し、その指導効果を検証ながら、これらの課題についても取り組んでいきたい。

## 第8章 結語

### 8.1 本論で明らかにしたかったこと

本論の目的は、接続形式テの中核的な意味と、テ接続文の意味内容の推測がどのようになされるのかを明らかにすることであった。

接続形式テの構文的な機能は接続のみであり、テ自身は接続の意味関係は表さない。従来、その意味関係について多くの研究がなされ、複数の意味関係が抽出されてきた。しかし、それらの複数の意味関係の根底にある、接続形式テの中核的な意味や、テ接続文の意味内容をどのように捉えるかについては、あまり研究がされてこなかった。

本論では、テ接続文を1つの談話と考え、テ形接続文の発信者と受信者が意味内容のやりとりをどのように行うか、語用論や認知語用論から捉え直した。

本論では従来の統語論の捉え方に、語用論や認知言語学の捉え方を取り入れ、テ接続文を複合的に捉えた。以下、本論で明らかになったことを整理してまとめる。

### 8.2 本論で明らかになったこと

#### 8.2.1 統語論からみたテ接続文の捉え方

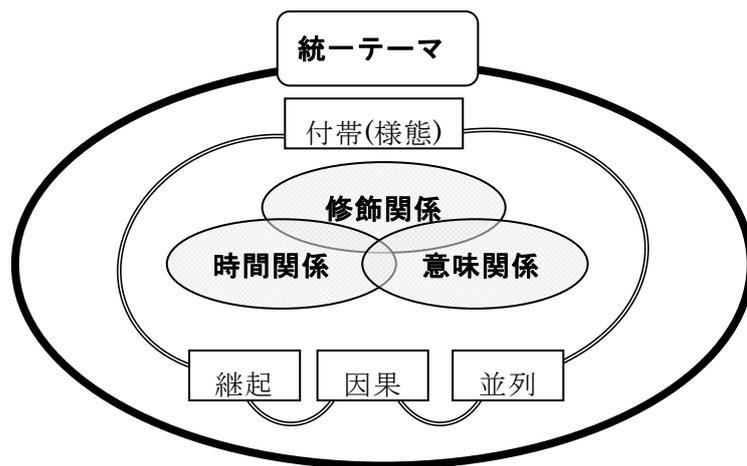
まず、第2章では、これまで統語論の立場からの研究で明らかになったことを概観し、接続形式テの文法的位置づけ、機能、表される意味関係を整理した。

接続形式テは、従属節を作り、後続の文に接続するという文法的な機能を持つ。接続形式テは接続の意味関係は表さず、テ接続の意味関係は、前後節の語彙の意味や文脈によって決まる。

テ形接続の意味関係は、前後節の修飾関係、時間関係、意味関係の3つの観点から総合的に判断される。テ接続の表す意味関係は、細分化されることもあるが、基本的には「並列」、「継起」、「因果」、「付帯（様態）」の4つに集約できる。そして、この4つの意味関係は、截然と分かれているわけではない。互いに連続し、意味関係を包括している。

また、テ接続文は、前後節を貫く統一テーマを有している。テ接続の意味関係は、この統一テーマの下、修飾関係、時間関係、意味関係の3つの観点から総合的に判断される。

以上、第2章では、接続形式テについて、統語論的な捉え方によってこれまで明らかになったことを再整理した。図に表すと、以下の図1のようになる。



(図 1) テ接続の表す意味関係と観点

### 8.2.2 認知言語学的アプローチによる接続形式テの中核的意味

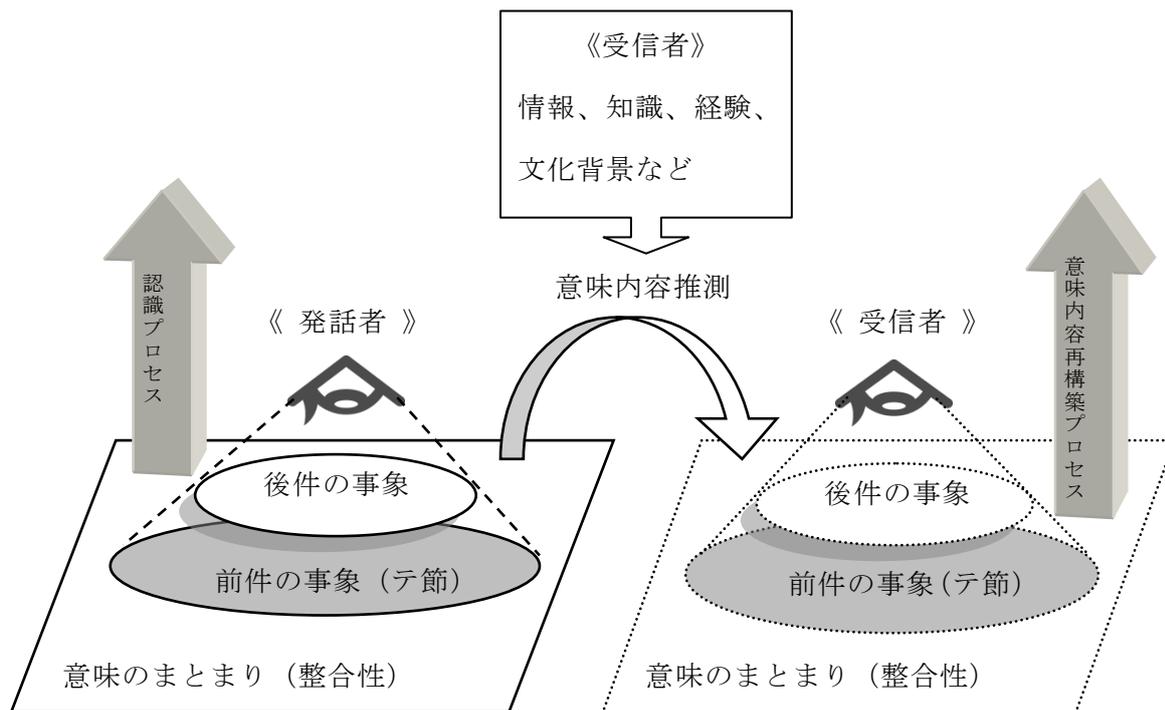
第3章では、認知言語学的アプローチから、接続形式テの中核的な意味とテ接続文の意味内容の捉え方を抽出した。

まず、テ接続文を1つの談話とみなし、テ接続文の談話としての整合性は、各節の事象を関連付ける意味的なまとまりのテーマによって保持されることを明らかにした。

次に、認知言語学の「図と地」という事象の捉え方から、テ接続文の意味内容を受信者がどのように受け取るかを考察した。テ接続文のテ節の事象は強く背景化され、その上に後節の事象が図となって重なり、全体として1つのまとまりのある像を形成することを明らかにした。

さらに、接続形式テの中核的意味は、発信者の認識を表すことであり、受信者は、その発信者の認識のプロセスをたどり、受信者の情報、知識、経験、文化的背景などを手がかりに、テ接続文の意味内容を推測し再構築することも明らかにした。

以上、第3章で明らかになったことを図2に表す。



(図 2) 接続形式テの中核的意味とテ接続文の意味内容の再構築

### 8.2.3 テ接続文の表現効果

第4章では、テ接続文にはどのような表現効果があるか、小説というテキストの中のテ接続文の使用例から、その表現効果を分析、考察した。

小説の世界は作者が創作した虚構の世界である。読者はその虚構の世界をイメージできなければ、小説の内容を理解することはできない。小説を読むということは、受信者である読者が、発信者である作者の意図を推測する行為であると言える。そして、発信者である作者は、読者がその小説世界や、登場人物をイメージできるように表現する責任がある。この発信者と受信者の「発信意図—意味推測」という関係は、テ接続文と同じである。

小説の地の文のテ接続文を分析、考察したその結果、小説の世界や人物のイメージ形成や、登場人物の認識のプロセスの表現にテ接続文が効果を発揮していることが確認できた。また、これらの表現効果は、第3章で明らかにした、発信者の認識を表すという接続形式テの中核的意味や、受信者のテ接続文の意味内容の再構築のプロセスによってもたらされた効果である。

また、テ節を1文中に複数回使用することにより、イメージを二重、三重に重ねる効果が得られることも確認できた。そのほか、テ節の「言い終わらず、続く」という、構文上

の特性を生かして、文中に挿入したり、言いさしたりすることで、期待、予兆、余韻、内容補足、読みやすさなど、様々な表現効果をもたらすことも明らかになった。

#### 8.2.4 中国語母語話者のテ接続文の意味内容の推測

第5章では、日本語非母語話者がテ接続文の意味内容をどのように推測しているか、語用論や認知語用論の考え方を参照して、中国語母語話者の学習者のテ接続文の中国語翻訳から、分析、考察した。

調査の結果、中国語母語話者のテ接続文の意味内容の推測は、積極的にする者と意味を特定しないで包括的な意味推測をする者がいることが観察できた。中国語にはテ接続文と類似した、文の並列表現がある。中国語の文の並列表現は、テ接続文と同じく、並列された文句間の意味関係を表さない。よって、テ接続文を中国語の文の並列表現に置き換えて翻訳した者は、テ接続文の意味関係を特定化せず、テ接続文の包括的意思そのままに受け取っていると思われる。一方、中国語の類似表現があるにもかかわらず、意味を明示する語句を入れて翻訳した者は、テ接続文の意味関係を特定し、積極的な意味推測を行ったと考えられる。

また、中国語にはテ接続文の類似表現があるために、テ接続文の意味推測は中国語母語話者にとって比較的容易であるということがわかった。

しかし、テ接続文の意味を積極的にする場合は、意味を特定化することによって、本来、テ接続文が包括的に持っている複数の意味関係の捨象してしまうことも明らかになった。

#### 8.2.5 中国語母語話者のテ接続文の使用と認識

第6章では、中国語母語話者がどのようなテ接続文を発信しているか、また、その文の意味内容を受信者が推測できているかどうか、学習者の作文例から考察した。

テ接続文の類似表現である中国語の文の並列表現は、テ接続文よりも表せる意味関係の範囲が広く、テ接続文が表せる「並列」、「継起」、「因果」、「付帯（様態）」に加え、「仮定（未確定条件）」も表すことができる。そのため、中国語母語話者が「仮定」の意味関係をテ接続文によって表そうとすると、受信者はその意味関係を推測できないために「誤用」と判断されることがわかった。

また、中国語の文並列は、独立可能な「文」を接続するのに対し、テ接続文は節で接続する。中国語で文を並べる感覚でテ節を並べると、受信者は、従属節のテ節がどこにかか

るのか、主節と従属節の関係が読み取りにくくなる。その結果、意味推測ができなくなり「誤用」と判断されることが明らかになった。

中国語母語話者は、受信者としてはテ接続文の意味内容は推測しやすいが、発信者としてはテ接続文の発信は容易とは言えず、テ接続文と中国語の文並列の違いを認識する必要がある。

#### 8.2.6 認知言語学的視点を取り入れたテ接続文の指導の提案

第7章では、本論で明らかになったことを踏まえ、日本語教育の現場での具体的な指導方法を提案した。

まず、指導に語用論や認知言語学的視点を取り入れ、テ接続文は、発信者と受信者のコミュニケーションであることを認識する必要がある。接続形式テは意味関係を表さないために、接続の意味関係の推測は受信者にゆだねられるという本質を理解する。そのうえで、テ接続文の発信者は、受信者が意味内容を推測しやすいように文脈や、語彙などに配慮する責任があることと、複数の意味関係を包括的に持っているということを認識すべきである。そして、発信者、受信者共に、発信者の発信意図と受信者の推測した意味内容は必ずしも同じにはならないことをあらかじめ認識しておく必要がある。

受信者がテ接続文の意味関係を推測できない場合、「誤用」と判断される。発信者は、受信者がなぜ意味関係を推測できないのか、その原因を認識する必要がある。意味関係が推測できない原因は、発信者と受信者の情報知識や、文化的背景が異なることが原因の場合もあれば、発信者の母語と日本語の意味関係の推測可能範囲の違いが原因であることもある。

また、テ接続文の表現効果についても指導し、学習者が効果的にテ接続文を発信できるように目指すべきである。

#### 8.2.7 まとめ

以上、本論では、統語論、語用論、認知言語学（認知語用論）の立場から、テ接続文を捉えた。本論で見てきたように、それぞれの立場の捉え方は、連続している。統語論の文構造の捉え方を基礎に、接続の意味関係を表さないテ接続文を受信者と発信者がどのようにやりとりをするかという語用論的な視点を加え、さらに、接続形式テは発信者と受信者のどんな認識を表しているか、認知言語学の視点から接続形式テの中核的意味を抽出した。

そして、これらのどの視点もテ接続文を捉えるのに不可欠な視点であることも明らかになった。

また、この複合的な視点は、日本語学習者がテ接続文を受信・発信する際にも非常に有効な視点であることも本論で証明することができた。

本研究であきらかになったことを、図3に簡単に表す。なお、統語論、語用論、認知言語学の領域の分類は学術的な区分ではない。本研究における3領域の関わりを示したものである。大まかで便宜的な区分であるが、本研究において、統語論、語用論、認知言語学の各領域がどのように関わっているかおわかりいただけるだろうと思う。

### 8.3 今後の課題と展望

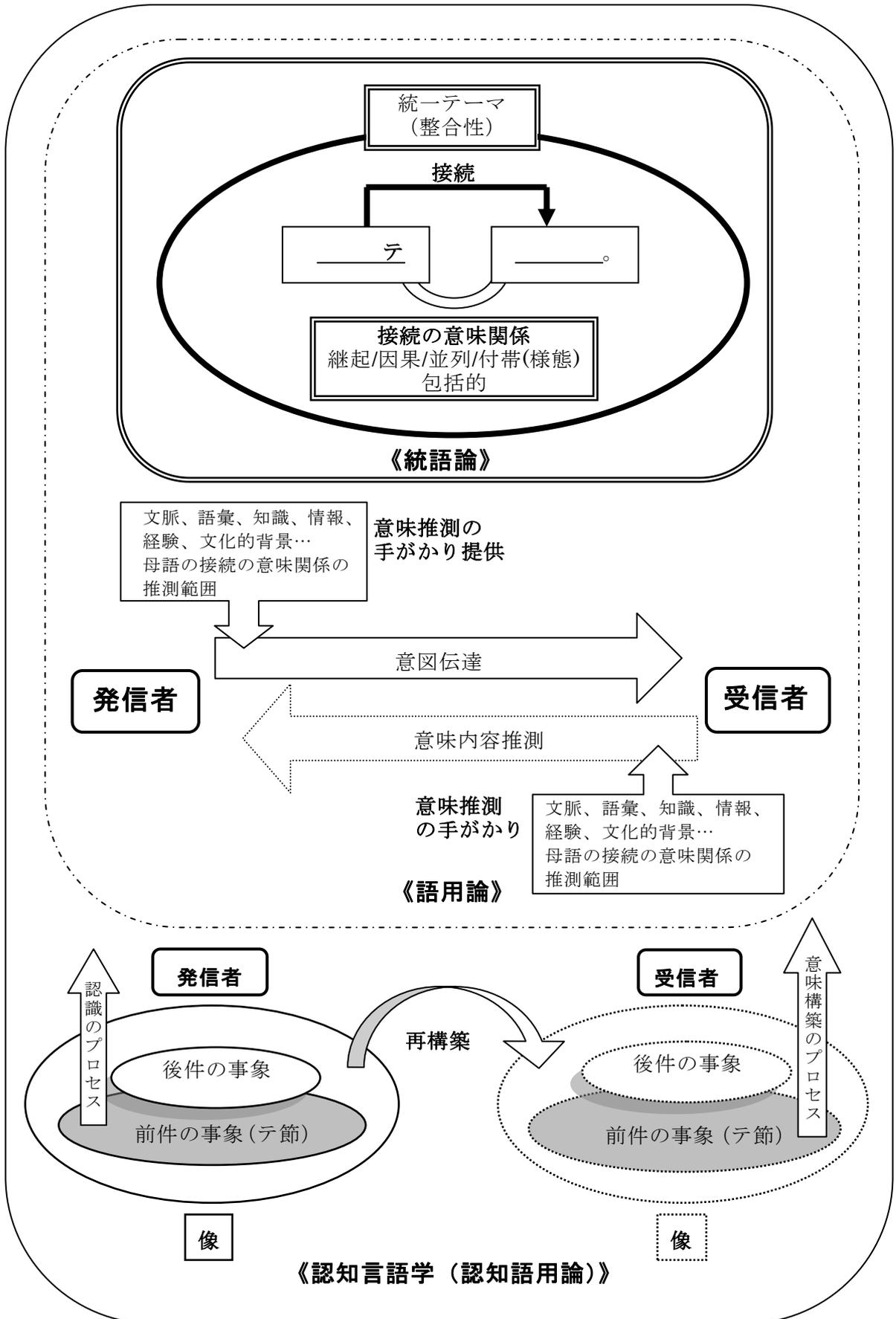
筆者は一日本語教師の立場から、テ接続文の指導法の考案を目的に本研究を行った。従来の統語論的な捉え方では、指導に限界があると感じたことが本研究の動機でもある。

本論では解決の糸口をつかむため、統語論のほか、語用論、認知言語学から広く知見を得ようと試みた。その結果、テ接続文を様々角度から捉えることができた。統語論の文法構造の理解、語用論のコミュニケーションとしての捉え方、そして、ヒトの認知能力に根差した認知言語学の視点、どれも言葉を学んでコミュニケーションをすることを旨とする言語学習者の目的に合致した必要な視点である。これからの日本語教育において、これらの複合的な視点は学習者、教師双方に必要であると考えられる。

現在は、実際に学習者に指導しながら、その効果を検証中である。今後は、さらに指導を続けながら、その効果についても考察を深めていきたい。

また、本研究は視点が広範囲なだけに、今後の課題も多く残されている。例えば、テと連用形を併用する際の制約といった統語論的な問題から、テ節の複数回使用の際の談話の整合性をどう保つか、会話におけるコミュニケーション機能まで、多岐にわたる。しかしながら、これらの課題を解決するためには、広く学際的な視点が必要であると言える。今後は、この複合的な視点を研究に生かし、その成果を日本語教育に反映させていきたい。

(図3) テ接続文の意味内容の捉え方 統語論・語用論・認知言語学



## 謝 辞

接続形式「テ」の研究について修士論文から長きにわたりご指導を賜りました遠藤裕子先生に心より感謝を申し上げます。また、語用論について貴重なご意見をくださった山田政通先生、古典文法について丁寧にご指導くださった阿久津智先生、そのほか、本研究に多くの示唆を与えてくださった拓殖大学の先生方に厚く御礼申し上げます。

そして、中国語文法や中国語母語話者の感覚、中国語母語話者へ指導など、多方面にわたり率直なご意見をくださった中国の日本語教育に携わる先生方、そして、調査に快く協力してくれた中国人民大学の学生の皆さんに心から感謝の意を表したいと思います。

平成 31 年 4 月

鈴木今日子

【参考文献】

- 相原茂 1982「中国語の複句」『講座日本語学 外国語との対象Ⅱ』,240-258.明治書院
- 秋本守英 2001『日本語文法辞典』山口秋穂編「接続助詞」項, 388.明治書院
- 池尾スミ 1963「『～テ』(－te form)について—いわゆる理由を表わす接続形—」日本語教育 3.
- 池尾スミ 1964「テのいろいろ」『講座現代語 6 口語文法の問題点』,324-332.明治書院
- 市川保子ほか 2005『初級日本語文法と教え方のポイント』, 373-378.スリーエーネットワーク
- 井上優 2003「文接続の比較対照—日本語と中国語」『月間言語』第 32 卷第 3 号:54-59.大修館書店
- 遠藤裕子 1982「接続助詞『て』の用法と意味」『音声・言語の研究』2:51-63.東京外国語大学
- 大河内康憲 1967「複句における文句の接続関係」『中国語学』176.1-12.
- 大河内康憲 1986「中国語の文と句の接続」『日本語学』5:67-75 明治書院
- 大鹿薫久 1986「『て』接続考」『叙説』12:219-228 奈良女子大学
- 大槻文彦 1897『広日本文典』,90-91.
- 大野晋 1974『岩波古語辞典机上版』,1439-1440.岩波書店
- 大野晋 2011『古典基礎辞典』 角川学芸出版
- 岡智之 2013『認知歴史言語学』山梨正明ほか編「第 2 章テンス・アスペクトの文法化と類型論—存在と時間の言語範疇化—」,39-75.くろしお出版
- 荻原稚雅子 2008『言いさし発話の解釈理論—「会話目的達成スキーマ」による展開—』春風社
- 奥田靖雄 1990「動詞の第一なかどめと第二なかどめとの共存のばあい」『ことばの科学』4: 159-171.むぎ書房
- 亀山恵 1999「談話分析—整合性と結束性」『岩波講座言語の科学 7 談話と文脈』, 93-121.岩波書店
- 草薙裕 1985「文法形式が担う意味」『朝倉日本語新講座 4 文法と意味Ⅱ』,1-38.朝倉書店
- 工藤真由美 1995『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』ひつじ書房

- 顧海根 1983「中国人学習者によくみられる誤用例—格助詞、係助詞『も』、接続助詞『て』  
などを中心に—」『日本語教育』49:105-11.
- 倉持保男 1971『日本文法大辞典』松村明編「て」項 507. 明治書院
- 言語研究会・構文論グループ 1989「なかどめ——動詞の第二なかどめのばあい——」『こ  
とばの科学2』2: 11-47.むぎ書房
- 甲田直美 2001『談話・テキストの展開のメカニズム』,26-28.風間書房
- 甲田直美・井上毅 2002「連文の理解過程における関連性の強さと接続詞の効果」『日本心  
理学会第66回大会発表論文集』, 817.
- コムリー,B. 1976『アスペクト』(1988) 山田小枝訳 むぎ書房
- 小山哲春・甲田直美・山本雅子 2016『認知語用論』山梨正明・吉村公宏・堀江薫・靱山  
洋介(編)『認知日本語学講座第5巻』くろしお出版
- 佐久間まゆみ・杉戸清樹・半澤幹一 1997『文章・談話のしくみ』おうふう
- 佐藤喜代治 1969『古典語現代語助詞助動詞詳説』松村明「て(で)」項 443-445. 學燈  
社
- 塩入すみ 2012「中国語母語話者による日本語従属節選択の誤用傾向『日本語学習者によ  
る日本語作文とその母語訳との対訳データベース』を用いて」『海外事情研究』39(2):  
21-36.
- 白川博之 1991「『テ形』による言いさし文について」『広島大学日語教育学科紀要』創刊  
号:39-48.
- 鈴木重幸 1972『日本語文法・形態論』むぎ書房
- 鈴木忍 1976「原因・理由を表す助詞の異同」『日本語学校論集』3:43-65.
- 高橋太郎 1983「構造と機能と意味——動詞の中止形(～シテ)とその転成をめぐって—  
—」『日本語学』2:12. 13-21.明治書院
- 時枝誠記 1950『日本文法 口語篇』, 224.岩波書店
- 富田隆行 1991『これだけは知っておきたい日本語教育のための文法の基礎知識とその  
教え方』凡人社
- 長辻幸 2010「シテ形にコード化される手続き的情報」『人間文化研究科年報』25: 93-103.
- 仁田義雄 1995「シテ接続をめぐって」仁田義雄(編)『複文の研究(上)』,87-126. くろ  
しお出版
- 仁田義雄 2008『現代日本語文法6 第11部 複文』くろしお出版

- 仁田義雄 2014『日本語文法事典』日本語文法学会編「テ形」項 420. 大修館書店
- 橋本進吉 1948『國語法研究』岩波書店
- 原沢伊都夫 1998「『て形』について」『富士フェニックス論叢』6: 富士フェニックス短期大学
- 原沢伊都夫 2000「『て』接続形の分類」『富士フェニックス論叢』8: 33-44.富士フェニックス短期大学
- 樋口万里子 2004『認知コミュニケーション論』大堀壽夫編 第3章 55-99. 大修館書店
- 樋口万里子・大橋浩 2004「節を越えて一思考を紡ぐ情報構造」大堀壽夫編『認知コミュニケーション論』,101-136 大修館書店
- ポール・グライス 1989『論理と会話』清塚邦彦訳 勁草書房
- 益岡隆志 2013「中立形接続とテ形接続の分化」,165-179.「補説C日本語動詞の活用・再訪」『日本語構文意味論』,257. くろしお出版
- 松浦恵津子 1996「ニュース文聴解における予測能力—テ形接続を中心とした日本語母語話者と日本語学習者との比較—」『言語文化と日本語教育』12:46-57.
- 松下大三郎 1977『増補校訂標準日本口語法』勉誠社
- 三尾砂 1942『話言葉の文法（言葉遣篇）』くろしお出版
- 三上章 1963『日本語の構文』くろしお出版
- 三原健一 2015『日本語の活用現象』「第5章テ形」77-105.ひつじ書房
- 森田良行 1981『基礎日本語2 角川小辞典 8—意味と使い方』「～て」項 313-318.角川書店
- 文部省 1947『中等口語』,70.文部省
- 山田孝雄 1908『日本文法論』寶文館
- 山田孝雄 1936『日本文法学概論』,901-902. 寶文館
- 山梨正明 1995『認知文法論』ひつじ書房
- 山梨正明 2000『認知言語学原理』くろしお出版
- 山梨正明 2004『ことばの認知空間』開拓社
- 山梨正明 2009『認知構文論—文法のゲシュタルト性』大修館書店
- 山梨正明 2015『修辭的表現論 認知と言葉の技巧』,125.開拓社
- 吉永尚 2006「テ形接続に見られる誤用についての考察」『園田学園女子大学論文集』40: 157-163.

- 吉永尚 2012 「テ形節の意味と統語」『活用論の frontline』三原健一・仁田義雄編 79-111.  
くろしお出版
- 吉田妙子 1994 「台湾人学習者における『て』形接続の誤用分析—『原因・理由』の用法の誤用を焦点として—」日本語教育 84:92-103
- 渡邊文生 1990 「テ形接続の意味と用法」『言語学論叢』9:79-91. 筑波大学
- 渡邊文生 1994 「接続形式『～て』の意味に関する一考察」13-1:17-27. 山形大学
- 渡辺実 1971 『国語構文論』 塙書房
- Grice, Hopper Paul. 1975 “Logic and Conversation,” in Peter Cole, and Jerry Morgan(eds.), *Syntax and Semantics, vol.3: Speech Acts*, 41-58. New York: Academic Press.
- Grice, Hopper Paul. 1979 *Studies in the Way of Words*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Langacker, Ronald. W. 1991 *Foundations of Cognitive Grammar, Vol.2*. Ch6  
Stanford: Stanford University Press.
- Sperber, Dan, and Deirdre Wilson. 1986[1995]. *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford UK/Cambridge USA: Blackwell. [内田聖二ほか（訳）.1999., 『関連性理論—伝達と認知—』第2版 研究社出版]
- Talmy, Leonald. 1978 “Figure and Ground in Complex Sentences,” in Joseph H.Greenberg(ed.), *universals of Human Language 4,Syntax*, 625-649. Stanford: Stanford University Press.

【参考資料】

『新編日本語古典文学全集 竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』小学館（1994）

校注・訳者 片桐洋一 福井貞助 高橋正治 清水好子

『新編日本語古典文学全集 土佐日記 蜻蛉日記』小学館（1995）

校注・訳者 菊地靖彦 木村正中 伊牟田経久

『新編日本語古典文学全集 源氏物語①』小学館（1994）

『新編日本語古典文学全集 源氏物語②』小学館（1995）

『新編日本語古典文学全集 源氏物語⑤』小学館（1997）

校注・訳者 阿部秋生 秋山虔 今井源衛 鈴木日出男

『新編日本語古典文学全集 大鏡』小学館（1996）校注・訳者 橘健二 加藤静子

『新編日本語古典文学全集 方丈記 徒然草 正法眼蔵随聞記 歎異抄』小学館（1995）

校注・訳者 神田秀夫 永積安明 安良岡康作

『新編日本語古典文学全集 宇治拾遺物語』小学館（1996）校注・訳者 小林保治 増古

和子

『日本古典文学大系 狂言集 上』岩波書店（1960）校注者 小山弘志

赤川次郎 「透き通った一日」『七つの危険な真実』新潮文庫 2004

阿刀田高 「マッチ箱の人生」『七つの危険な真実』新潮文庫 2004

大江健三郎「雨の木(レイン・ツリー)』を聴く女たち」『「雨の木(レイン・ツリー)』を聴く女たち』新潮文庫 1986

北村薫 「眠れる森」『七つの危険な真実』新潮文庫 2004

草野たき 「ランチタイム」『ピュアフル・アンソロジー 放課後。』ピュアフル文庫 2007

夏樹静子 「襲われて」『七つの危険な真実』新潮文庫 2004

乃南アサ 「福の神」『七つの危険な真実』新潮文庫 2004

東野圭吾 「シャレードがいっぱい」『あの頃の誰か』光文社文庫 2011

宮部みゆき 「返事はいらぬ」『七つの危険な真実』新潮文庫 2004

村上春樹 「かえるくん、東京を救う」『神の子どもたちはみな踊る』新潮社庫 2002

連城三紀彦 「過去からの声」『七つの危険な真実』新潮文庫 2004

『総合日語Ⅰ（修訂版）』 彭広陸、守屋三千代ほか（北京大学出版社）2009

『総合日語Ⅱ（修訂版）』 彭広陸、守屋三千代ほか（北京大学出版社）2005